

勧誘・依頼に対する断り言語行動の日中対照研究  
——社会人と学生の日常生活会話を中心に

平成 29 年 12 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

王 書睿

第1章 序論.....	8
1.1 研究背景.....	8
1.2 研究の目的及び意義.....	10
1.3 本研究の構成.....	10
第2章 先行研究.....	13
2.1 語用論に関する研究.....	13
2.1.1 オースティンとサールの発話行為理論.....	13
2.1.2 グライスの「協調の原則」(Co-operative Principle).....	14
2.1.3 リーチのポライトネスの原理.....	16
2.1.4 Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論.....	18
2.1.4.1 Brown & Levinson のポライトネス理論の概観.....	18
2.1.4.2 Brown & Levinson のポライトネス理論への批判.....	21
2.1.4.2.1 B&L のポライトネス理論の普遍性を支持する議論.....	21
2.1.4.2.2 B&L のポライトネス理論に対する反論.....	22
2.2 中間言語語用論に関する研究.....	25
2.3 断り言語行動の先行研究の概観.....	26
2.3.1 日本における研究.....	27
2.3.1.1 日本語母語話者を対象とする研究.....	27
2.3.1.1.1 アンケート調査による研究.....	27
2.3.1.1.2 面接調査による研究.....	28
2.3.1.1.3 ロールプレイによる研究.....	29
2.3.1.1.4 ロールプレイ対メールの対照研究.....	30
2.3.1.1.5 まとめ.....	30
2.3.1.2 日本語母語話者と日本語非母語話者を対象とする研究.....	31
2.3.1.2.1 DCT 及びアンケート調査による研究.....	31
2.3.1.2.2 ロールプレイによる研究.....	36
2.3.1.2.3 DCT とロールプレイを同時に用いる研究.....	38
2.3.1.2.4 電話録音による研究.....	39
2.3.1.2.5 まとめ.....	40
2.3.1.3 日本語学習者を対象とする研究.....	40
2.3.2 中国における研究.....	41
2.3.2.1 王愛華 (2001) の研究.....	41
2.3.2.2 唐玲 (2004) の研究.....	42
2.3.2.3 龚萍 (2005、2006) の研究.....	42
2.3.2.4 王静 (2012) の研究.....	43
2.3.2.4 まとめ.....	43

2.3.3	{理由} を中心にする研究.....	44
2.3.3.1	{理由} の言語形式に着目する研究.....	44
2.3.3.2	{理由} の内容に着目する研究.....	45
2.3.3.3	まとめ.....	47
2.3.4	他の研究.....	48
2.3.5	先行研究のまとめ.....	48
2.4	残された課題と本研究の位置付け.....	48
2.4.1	残された課題.....	49
2.4.2	本研究の立場.....	49
第3章	研究方法.....	51
3.1	データ収集方法の比較.....	51
3.2	本研究のデータ収集方法.....	52
3.2.1	データ収集地と期間.....	52
3.2.2	被験者と仕掛け人.....	52
3.2.3	場面の設定.....	54
3.2.3.1	予備調査1.....	55
3.2.3.2	予備調査2.....	56
3.2.4	本調査.....	56
3.2.4.1	ロールプレイによる調査.....	56
3.2.4.2	フォローアップ・インタビュー.....	57
3.2.5	文字起こしの手順.....	57
3.2.6	コーディングの手順.....	59
3.3	分析方法.....	60
3.3.1	会話の構造.....	60
3.3.2	意味公式の分類.....	65
3.3.3	意味公式と断りのストラテジー、FT の関係.....	71
第4章	調査1——社会人対象の勧誘に対する断り言語行動.....	74
4.1	勧誘を断る言語行動の会話構造.....	74
4.1.1	話段ごとの断り言語行動の日中対照.....	74
4.1.1.1	勧誘話段.....	74
4.1.1.1.1	勧誘話段の開始から1回目の断りに至るまでの言語表現の有無.....	75
4.1.1.1.2	勧誘話段における意味公式の使用数.....	75
4.1.1.2	勧誘・断り話段.....	77
4.1.1.2.1	断り発話数.....	77
4.1.1.2.2	1回目の断りににおける意味公式の使用数.....	77

4.1.1.2.3	2 回目の断りににおける意味公式の使用数	79
4.1.1.2.4	3 回目の断りににおける意味公式の使用数	80
4.1.1.3	終了部	81
4.1.1.3.1	終了部における断り手の言語表現の有無について	82
4.1.1.3.2	終了部における意味公式の使用数	82
4.1.1.4	まとめ	83
4.1.2	断りの展開パターンの日中対照	84
4.1.2.1	意味公式のカテゴリーの展開パターン	84
4.1.2.2	各意味公式の展開パターン	87
4.1.3	会話構造による分析のまとめ	95
4.2	意味公式の量的分析	97
4.2.1	意味公式の全体的な使用回数	97
4.2.2	被験者による意味公式の使用平均値の有意差	99
4.2.3	社会的関係が意味公式の使用平均値に与えた影響	100
4.2.4	本節のまとめ	107
4.3	意味公式の内容と表現形式の分析	107
4.3.1	{不可} の内容分析	108
4.3.2	{理由} の内容分析	112
4.3.3	{あいづち} の表現形式の分析	119
4.3.4	{詫び} の表現形式の分析	129
4.3.5	本節のまとめ	132
4.4	本章のまとめ	133
第5章	調査2—社会人対象の依頼に対する断り言語行動	136
5.1	依頼を断る言語行動の会話構造	136
5.1.1	話段ごとの断り言語行動の日中対照	136
5.1.1.1	依頼話段	136
5.1.1.1.1	依頼話段の開始から1回目の断りに至るまでの言語表現の有無	137
5.1.1.1.2	依頼話段における意味公式の使用数	137
5.1.1.2	依頼・断り話段	138
5.1.1.2.1	断り発話数	138
5.1.1.2.2	1 回目の断りににおける意味公式の使用数	139
5.1.1.2.3	2 回目の断りににおける意味公式の使用数	141
5.1.1.2.4	3 回目の断りににおける意味公式の使用数	143
5.1.1.3	終了部	144
5.1.1.3.1	終了部における断り手の言語表現の有無について	144



5.1.1.3.2	終了部における意味公式の使用数	145
5.1.1.4	まとめ	145
5.1.2	断りの展開パターンの日中対照	146
5.1.2.1	意味公式のカテゴリーの展開パターン	147
5.1.2.2	各意味公式の展開パターン	149
5.1.3	会話構造による分析のまとめ	156
5.2	意味公式の量的分析	158
5.2.1	意味公式の全体的な使用回数	158
5.2.2	被験者による意味公式の使用平均値の有意差	159
5.2.3	社会的関係が意味公式の使用平均値に与えた影響	161
5.2.4	本節のまとめ	167
5.3	意味公式の内容と表現形式の分析	168
5.3.1	{不可}の内容分析	168
5.3.2	{理由}の内容分析	172
5.3.3	{あいづち}の表現形式の分析	179
5.3.4	{詫び}の表現形式の分析	185
5.3.5	本節のまとめ	188
5.4	本章のまとめ	189
第6章	調査3—学生対象の勧誘に対する断り言語行動	192
6.1	勧誘を断る言語行動の会話構造	192
6.1.1	話段ごとの断り言語行動の日中対照	192
6.1.1.1	勧誘話段	192
6.1.1.1.1	勧誘話段の開始から1回目の断りに至るまでの言語表現の有無	193
6.1.1.1.2	勧誘話段における意味公式の使用数	193
6.1.1.2	勧誘・断り話段	194
6.1.1.2.1	断り発話数	194
6.1.1.2.2	1回目の断りにおける意味公式の使用数	195
6.1.1.2.3	2回目の断りにおける意味公式の使用数	196
6.1.1.2.4	3回目の断りにおける意味公式の使用数	197
6.1.1.3	終了部	198
6.1.1.3.1	終了部における断り手の言語表現の有無について	199
6.1.1.3.2	終了部における意味公式の使用数	199
6.1.1.4	まとめ	200
6.1.2	断りの展開パターンの日中対照	201
6.1.2.1	意味公式のカテゴリーの展開パターン	201

6.1.2.2	各意味公式の展開パターン	204
6.1.3	会話構造による分析のまとめ	211
6.2	意味公式の量的分析	213
6.2.1	意味公式の全体的な使用回数	213
6.2.2	被験者による意味公式の使用平均値の有意差	215
6.2.3	社会的関係が意味公式の使用平均値に与えた影響	216
6.2.4	本節のまとめ	222
6.3	意味公式の内容と表現形式の分析	222
6.3.1	{不可}の内容分析	223
6.3.2	{理由}の内容分析	225
6.3.3	{あいづち}の表現形式の分析	231
6.3.4	{詫び}の表現形式の分析	234
6.3.5	本節のまとめ	237
6.4	本章のまとめ	238
第7章	調査4—学生対象の依頼に対する断り言語行動	240
7.1	依頼を断る言語行動の会話構造	240
7.1.1	話段ごとの断り言語行動の日中対照	240
7.1.1.1	依頼話段	240
7.1.1.1.1	依頼話段の開始から1回目の断りに至るまでの言語表現の有無	241
7.1.1.1.2	依頼話段における意味公式の使用数	241
7.1.1.2	依頼・断り話段	244
7.1.1.2.1	断り発話数	244
7.1.1.2.2	1回目の断りににおける意味公式の使用数	244
7.1.1.2.3	2回目の断りににおける意味公式の使用数	247
7.1.1.2.4	3回目の断りににおける意味公式の使用数	248
7.1.1.3	終了部	249
7.1.1.3.1	終了部における断り手の言語表現の有無について	249
7.1.1.3.2	終了部における意味公式の使用数	250
7.1.1.4	まとめ	251
7.1.2	断りの展開パターンの日中対照	252
7.1.2.1	意味公式のカテゴリーの展開パターン	252
7.1.2.2	各意味公式の展開パターン	254
7.1.3	会話構造による分析のまとめ	261
7.2	意味公式の量的分析	263
7.2.1	意味公式の全体的な使用回数	263

7.2.2	被験者による意味公式の使用平均値の有意差.....	265
7.2.3	社会的関係が意味公式の使用平均値に与えた影響.....	266
7.2.4	本節のまとめ.....	273
7.3	意味公式の内容と表現形式の分析.....	273
7.3.1	{不可}の内容分析.....	274
7.3.2	{理由}の内容分析.....	278
7.3.3	{あいづち}の表現形式の分析.....	283
7.3.4	本節のまとめ.....	286
7.4	本章のまとめ.....	287
第8章	社会的属性による異同の考察.....	289
8.1	勧誘を断る場面.....	289
8.1.1	会話構造の比較.....	289
8.1.1.1	勧誘話段.....	289
8.1.1.2	勧誘・断り話段.....	290
8.1.1.3	終了部.....	291
8.1.1.4	勧誘に対する断り会話の構造.....	292
8.1.2	意味公式全体の量的分析の比較.....	293
8.1.3	意味公式の内容と表現形式の分析の比較.....	294
8.1.3.1	{不可}の内容分析.....	294
8.1.3.2	{理由}の内容分析.....	295
8.1.3.3	{あいづち}の表現形式の分析.....	296
8.1.3.4	{詫び}の表現形式の分析.....	296
8.2	依頼を断る場面.....	297
8.2.1	会話構造の比較.....	297
8.2.1.1	依頼話段.....	297
8.2.1.2	依頼・断り話段.....	298
8.2.1.3	終了部.....	299
8.2.1.4	依頼に対する断り会話の構造.....	300
8.2.2	全体的に意味公式の量的分析の比較.....	300
8.2.3	意味公式の内容と表現形式の分析の比較.....	302
8.2.3.1	{不可}の内容分析.....	302
8.2.3.2	{理由}の内容分析.....	302
8.2.3.3	{あいづち}の表現形式の分析.....	303
8.3	本章のまとめ及び考察.....	303
第9章	結論と今後の課題.....	305
9.1	結論.....	305

9.1.1 文化的属性による異同.....	305
9.1.2 社会的属性による異同.....	308
9.1.3 本研究の発見.....	309
9.2 今後の課題.....	310
参考文献.....	315
謝辞 .....	321
付録資料.....	322
資料1 予備調査1の調査票.....	322
資料2 本調査のロールプレイカード.....	326

# 第1章 序論

本論は、日本語と中国語における依頼に対する断り言語行動の比較対照を目的とし、ロールプレイの分析を主眼とする研究である。ロールプレイの話者は、日本では東京都、千葉県、茨城県を中心とする関東一円の出身者で日本語（共通語）の話者であり、中国では瀋陽を中心とする中国語（普通語）の話者である（cf. 1.2）。

日常生活で遭遇する断り言語行動は、相手の期待に沿わない発話行為である。Brown & Levinson（cf.2.1.4.1）によれば、対人コミュニケーションにおいて自分と相手のフェイスを同時に脅かし、人間関係を損ねる恐れが高いと考えられる。母語話者にとっても難しいと考えられる断り行動は、外国語で断りを表現しなければならない場合、更にミスコミュニケーションや誤解を招きやすいことが予測される。本研究を行うに当たっての筆者の目的は、日中両言の異文化間の異同と、社会人と学生の間における異同を明らかにしようとする。

本章では、断り言語行動に関する研究の背景、本研究の目的及び研究意義、本論文の構成について述べる。

## 1.1 研究背景

1987年に、Brown & Levinson（1987）は言語の多様性にもかかわらず、対人関係の構築や維持・調節に関わる手段としての「ポライトネス」を提出した。そこから、自分と相手のどの欲求（ポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイス）に配慮するかという問題が生じてくる（滝浦 2008：18－19）。とりわけ、断り行為は、対人関係において、相手の期待や好意に添えない、相手のフェイスを傷つけ、人間関係を損ねる言語行動と見なされている。しかし、その一方で、話し手が断りを言っているのだということを相手に確実に伝えることもまた重要である。関係維持に気を配りすぎるあまり表現があいまいでありすぎたり情報が不足したりすると、意図が十分伝わらなくなる。逆に、意図を確実に伝えることにばかり注意を向けると、相手との関係を損ねてしまう危険性がある。断りは、関係維持と意図の伝達の両方に配慮が求められる言語行動のひとつと言えよう（尾崎 2006：89）。日常生活で、母語話者同士でも「断れない状況」に陥ることもある。そのため、自分のネガティブ・フェイスを守りながら、相手との人間関係を修復するために、意図的にまたは無意識的にさまざまなストラテジー（方略）を用い、断り言語行動を実現することがよく見られる。従って、話し手がどのストラテジーを使うか、ストラテジーに相応しい言語形式と機能の関係、さらに異文化、社会的要因、心理的要因などによる各々のストラテジーを選ぶ理由は何であろうかなどを究明する必要がある。

中間言語においては、学習者の L1 が L2 の習得に与える影響に関する実証的研究も盛んに行われた。とりわけ、L2 の習得を妨げる転移（清水 2009：175）、即ち「マイナス・トランスファー」に注目を集める研究が多く見られた。従って、対照言語学の研究も L1 と L2 の相違点に重点を置くことになった。従来の断り言語行動に関する先行研究においても、異文化間の相違点に注目した実証的研究も、日本語学習者を対象に、「マイナス・トランスファー」に重点をおいた研究も頻繁に行われた。しかし、両言語の相違点を強調しすぎると、L2 に対するステレオタイプが押し付けられることにより、逆に L2 の習得を妨げる壁になり兼ねない。

言語はその社会特有の行動形態や文化・価値観などといった文化的制約とも切り離すことができないので、異文化で適切な発話のスタイルを選択するには、単に言語や習慣に関する知識の習得だけでは不十分である（山口 1997：39）。一方、同じ文化圏においても、年齢、性別、出身、職業などの下位文化による言語行動のスタイルの相違も見られるはずである。換言すれば、目標言語の習得には、文化的レベルの言語行動のスタイルのみならず、社会的レベルの言語行動のスタイルも考慮する必要があると考える。

従来の断り言語行動に関する日中対照研究を振り返ると、敬語体系が発達している日本語にはネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを好むスタイルがよく見られるのに対して、敬語体系が発達していない現代中国語にはポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが好まれるという結論が出ている（文 2007：161—162）。また、断り言語行動においても、日本人は曖昧な表現で相手を配慮しながら、相手に察してもらう行動様式を多く使っている。一方、中国人は直接的表現で相手を断るという行動様式がよく見られると思われる。そして、断り言語行動に見られる対人関係と言語形式選択の関係においても、日本語では「親・疎関係」より「上下関係」が優先されているのに対して、中国語では、何よりも「親・疎関係」を大事にするという結論も出ている（馬場・禹 1994、劉・小野 1996、蒙 2010 等）。しかし、日本の西洋化とバブル経済の崩壊につれて、日本人の行動意識やスタイルも急速に変化してきた。日本国語審議会第 22 期第 1 委員会による、日本の文化で重要な役割を果たしている敬語表現の代わりに、より上位者である「待遇表現」という新たな概念が導入されている（山岡他 2010：142）。ゆえに、時代の変化につれて、断り言語行動に見られる日中両言語も変化していることが予測できる。さらに、変化している言語行動の深層にある両文化、特に対人関係などの変化も伺えると考えられる。いままで、学生を対象とする対照研究がほとんどであり、ほかの集団の言語行動の様式を究明する研究が少ない。さらに社会的属性による断り言語行動の異同を比較する研究は管見の限り見当たらない。

なお、先行研究を概観すると、以前の DCT やアンケート調査法による断り発話を静的に考察する研究が主流を占めているのに対して、当今のロールプレイや電話録音などの自然談話により近いデータに基づいた調査法による断り言語行動を談話レベルにおいて動的に捉える研究に変わりつつあるという変化の流れが伺える。特に断り言語行動の前後に注目し、断り行動の展開パターンや全体的様相を明らかにする研究が少しずつ増えてきた。しかし、

各意味公式<sup>1</sup>やストラテジーの数、順序に集中する形式研究が最も多かったが、異文化間の断り言語行動に見られる意味公式の内容や機能、さらに談話参加者の心理過程を深く探る研究は少ない。

## 1.2 研究の目的及び意義

以上の背景を踏まえて、本研究では、語用論のポライトネス理論を中心に、日中両国の母語話者である大学生と社会人を対象とする断り言語行動の対照研究を行う。日中両言語行動の相違点のみならず、共通に見られる会話のスタイルも探る。異文化間での共通点と相違点を明らかにした上で、社会的属性による異同の考察を行うことにする。そして、先行研究でよく導き出された日本人は曖昧な表現で相手を配慮しながら、相手に察してもらう行動様式を多く使っている一方、中国人は直接的表現で相手を断るという行動様式がよく見られるという結論に若干疑義を呈し、実証的調査により検証したい。

本研究の意義は以下のとおりである。

まず、前述したように、異文化間の相違点のみならず、共通点にも注目する研究結果を目標言語の学習に応用できると、L2の学習も促進できると考える。

次に、学生のみならず、社会人も調査の対象に入れて、同じ文化圏においても社会的属性による断り言語行動の差異も考察できる。

さらに、ロールプレイとフォローアップ・インタビューの調査方法に基づき、より自然な会話に近いデータが入手できるので、断り言語行動における話し手と聞き手の交渉行動を動的レベルで捉えることができる。そして、話し手の心理活動もさぐり出される。

また、日中両国に対するステレオタイプである「間接的表現を好む断り方」と「直接的表現を好む断り方」をそれぞれ検証しながら、両国のコミュニケーション・スタイルをより正確に捉えることができる。

最後に、断り言語行動における意味公式の量的分析のみならず、内容分析及び表現形式の分析により、文化的属性または社会的属性による異同も考察できる。

## 1.3 本研究の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

序章の第1章では、本研究の背景を概観した上で、研究の目的、意義及び内容構成を明確にした。

第2章では、本研究の理論的枠組である語用論、中間言語語用論を外観した。さらに、実証的先行研究をまとめた上で、先行研究で残された問題と研究立場を明確にした。

第3章では、データ収集方法、場面設定の手順、研究対象、文字起こしの手順、コード

イングの手順、分析方法などについて述べた。

第4章では、調査1——日中の母語話者である社会人を対象に、勧誘に対する断り言語行動を考察した結果を述べた上で、分析を行った。

第5章では、調査2——日中の母語話者である社会人を対象に、依頼に対する断り言語行動を考察した結果を述べた上で、分析を行った。

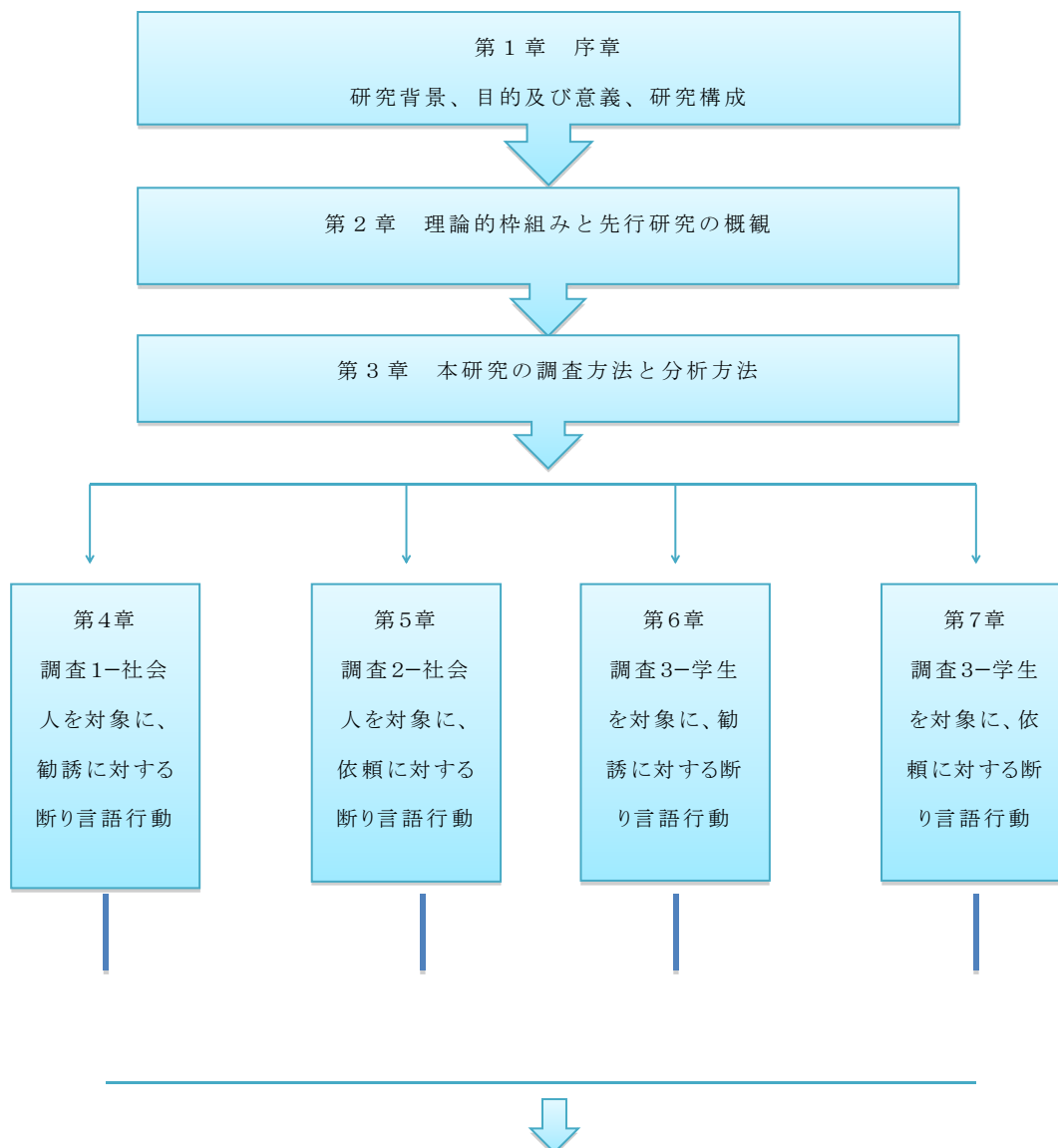
第6章では、調査3——日中の母語話者である大学生を対象に、勧誘に対する断り言語行動を考察した結果を述べた上で、分析を行った。

第7章では、調査4——日中の母語話者である大学生を対象に、依頼に対する断り言語行動を考察した結果を述べた上で、分析を行った。

第8章では、社会人と学生の断り言語行動における異同を考察した。

結論の第9章では、文化的属性と社会的属性による異同をそれぞれまとめ、さらに本研究の発見を明確にした上で、今後の研究課題を論じた。

本研究の全体の構成は以下ようになる





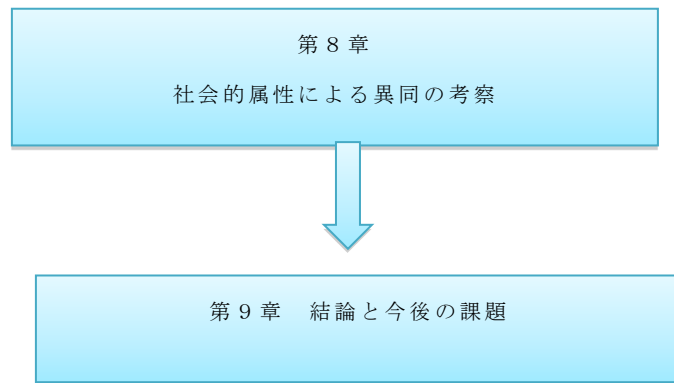


図1-1 本論文の構成

## 第2章 先行研究

本章では、本研究で応用される語用論と中間言語語用論を概観した上で、語用論における Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を中心に以下に言及したいくつかの論文も踏まえたい。また、断り言語行動に関する実証的先行研究及び残された問題をまとめた上で、本研究の立場を明確にしたい。

### 2.1 語用論に関する研究

「語用論」とは「相互交渉における意味」、つまり発話や文脈のみでなく、話し手や聞き手のそれぞれが、意味の生成にどのように寄与しているかということである (Thomas 1995 浅羽訳 1998:26)。本節では、オースティンとサールの発話行為理論、グライスの「協調の原則」(Co-operative Principle)、リーチのポライトネスの原理、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を概観する。

#### 2.1.1 オースティンとサールの発話行為理論

オースティンは、言葉を話すことを行為として観察するという発話行為論の提唱者として名高いが、彼は発話をまず以下の3つのことが同時に行われているという観察を行った。

- |         |                           |                 |
|---------|---------------------------|-----------------|
| ①発話行為   | (locution)                | 実際に口に出されたことば    |
| ②発話内行為  | (illocution) <sup>2</sup> | ことばの背後にある効力即ち意図 |
| ③発話媒介行為 | (perlocution)             | 発話内行為の聞き手への効果   |
- (Austin 坂本 訳 1978:175-176 (1962:101-102) )

例えば、「ここは暑いね」という発話行為によって、実際に言いたかったことが「新鮮な空気がほしい」ということなら、これが発話内行為となり、発話媒介行為は、例えば、誰かが窓を開けることであろう (トマス 田中他訳 1998 (1995): 56)。もう一つの例: 「バカヤロウ」という発話行為は、「罵倒行為」という発話内行為を兼ね、さらに、「相手を怒らせる」という媒介行為も兼ね得る。これが、発話媒介行為である。発話内行為の研究は、発話の文法構造の分析と密接に関係している上、その研究は言語の構造と機能の相関関係の記述となるのである。また、発話内行為は常に話者が意図して行うものであるが、発話媒介行為の場合は話者が意図している場合もあれば、意図していない場合もある。

さらに、アメリカの言語哲学者で、オースティンの弟子であったサールは、オースティ

ンの発話行為論を批判的に継承しながら発話行為論を大きく発展させた。オースティンの発話行為論は明示的遂行文が主たる考察対象となっていたが、サールは遂行動詞を持たない一般的な文であっても、一語文などの特殊な例を除いて、発話内目的、発話内効力をそなえていると主張した。

言語行為論<sup>3</sup>の中で、語用論の対象となる「非字義的言語行為」<sup>4</sup> (non-literal speech act) の代表が「間接的言語行為」(indirect speech act)である(小泉 2001: 96)。間接的言語行為は、非字義的言語行為の一種ではあるが、その特別な場合で、使用の場面が固定しており、慣習的(conventional)に遂行されるという特徴をもつ(p. 97)。通例、間接的言語行為を用いるのは、相手に対して字義通りの言語行為を、直接的に遂行することが憚れる場合が多い。したがって、間接的言語行為には、聞き手の「面子あるいは面目」(face)をできる限りつぶさないようにしたいという話し手の意図が見え隠れする、つまり、社会言語学で言う「丁寧さ」(politeness)の現象と交差するのである(p. 98)。

語用論や社会言語学においては、「丁寧さ」という用語はより広い意味をもっている(小泉 2001: 124)。例えば、a)「さあ入って」とb)「もしよろしければどうぞお入りください」という2つの発話行為を比較すれば、たしかにbのほうが「丁寧」な言い方かもしれないが、それらがいつも相手に気持ちよく思わせる言い方とは限らないということである。もし相手と仲良くしたいと思っている時に、このように言われると相手から距離を置かれて、遠ざけられたという印象をもつかもしい。また、断るという意図が存在する限り、どのような表現を用いても、「丁寧」とは言えないであろう。申し出を断る行為は、そもそも相手の好意に添えないものなので、「丁寧な」語を使っても相手を不快にすることもあろう(p. 125)。したがって、語用論や社会言語学における「丁寧さ」とは単なる表現形式の問題だけではなく、相手に敬意を表すことだけでもなく、相手に対して親愛の情を表したり、仲間である気持ちを高めたり、それを確認するような、相手を「気持ちよく」感じさせるさまざまな方策をも含んでいる。ゆえに、「丁寧さ」の議論には、社会心理学的あるいは社会学的と言えるような側面がある。ことばそのものの問題というより、ことばによって人間はどう対人関係を築こうとしているのかという問いでもある(p. 125-126)。オースティン、サールの議論はそれ以降多くの研究者によって建設的に修正が加えられ、一方ではラポール・マネジメント、他方ではスペルベル等による関連性理論へと発展した。しかし批判はあるにせよ、この二人の研究者が発話行為論の基盤を確立したことに相違はなく、言及に価するものとする。

## 2.1.2 グライスの「協調の原則」(Co-operative Principle)

会話における推意を生み出す基盤として、グライスは以下の「協調の原則」(Cooperative Principle)を立てた(Grice 1975 41-58)。

Make your contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged.

(会話の段階で、あなたが行っているやりとりの共通の目的・方向という点から、要請されるだけの貢献をせよ。)(小泉 2001 : 39)

グライスは、さらにこの原則を「量」、「質」、「関係」、「様態」という4つの下位原則に分類した。

- ①量(Quantity) : (やりとりのその局面での目的に照らして) 必要とされている情報をすべて与えよ。一方、必要以上の情報は与えるな。
- ②質 (Quality) : 真実ではないと思っていることは言うな。または、十分な証拠がないことは言うな。
- ③関係(Relation) : 的外れなことは言うな。
- ④様式(Manners) : 不明確な表現は避けよ。あいまいな言い方は避けよ。簡潔に言え(冗長になるな)。よく整理した話し方をせよ。(トマス 田中他訳 1998 (1995) : 69-70)

トマス (1995) はグライスの理論について次のように問題点を指摘している(トマス 田中他訳 1998 (1995) : 93-94)。

- ①発話は、ときに、複数の可能な解釈を持つことがある。しかるに、話し手が故意に行動指針に従わず、それによってある含意を意図しているのだと、われわれはいかにして知るのだろうか?
- ② われわれは、いかにして、さまざまなタイプの非遵守(例えば違反と遵守不能)を区別することができるのか?
- ③ グライスの提唱する4つの行動指針は質的に異なっているように思われる。このことが何か問題とならないか?
- ④ 時々、行動指針間の重複が生じるように思われるし、行動指針間の区別が困難な場合もある。

トマス (1995) は、グライスが含意を算定するためのメカニズムが存在するに違いないと主張したが、そのメカニズムがどう働くのかは必ずしも明確ではないと、述べている(トマス 田中他訳 1998 (1995) : 93-94)。

しかし、滝浦 (2008 : 23-24) によると、この原則は人々が、会話が円滑に進行しているために、この原則を不可欠な前提として、受け入るという。

しかし筆者は滝浦の考えには多少疑義がある。グライスの関心は論理、あるいは会話における論理にある。人が会話のどのように進めるべきか、という規範的規則を提案しようところみたとは思えない。現実には、この行動指針すべてを守って話すケースもあるではあろうが、もし人々がすべてこのような原則どおりの会話をするとしたら、味気ない世の中になるのではないかと思えてならない。実際の会話は、この行動指針から逸脱する行動が非常に多くある。なぜこうした協調の原則を会話の前提として提出したのか。トマス（1995）によると、グライスが最も関心をもったのは、話し手が、相手を欺いたり誤解させようという意図からではまったくなく、文字どおりの意味とは違った（あるいは、それに何か加わった）意味を相手に探させようとして、あからさまに行動指針から逸脱する場合である。文字どおりの意味に加わることのような意味をグライスは「会話による含意」と呼び、それが生み出されるプロセスを「行動指針の無視」と名付けた（トマス 田中他訳 1998（1995）：71）。言外の言としての推理を取り出すことのできるためである。つまり、グライスは、話者が気づかずにあるいはわざと会話の協調原則から逸脱する発話行為から、発話における文字どおりと異なる言外の意を推理する二次プロセスを導き出すことを目的とする。そして、その発話行為の背後にある心理活動を導き出すことも可能となる。

逆にもし、この原則が完全に守られたなら、すべて直接表現で相手を断るようなコミュニケーションは、会話の「自然さ」から最も遠いところにある。つまり会話の自然さを構成するもう一つの大きな要素である「対人配慮」が欠けているためである。例えば、異性の告白を断る場合、理由として、「君が好きではない」という本音の代わりに、「ごめん、好きな人がいるから」と嘘をついて相手を断る例も質の公理に違反するが、その反面人への配慮がはたらいていると言えるだろう。グライスの理論は語用論における多くの研究の基礎であり続けている。トマス（1995）でも述べたように、グライスの「協調の原則」は言語に対するまったく新しい視点を与えることになった（トマス 田中他訳 1998（1995）：99）。

### 2.1.3 リーチのポライトネスの原理<sup>5</sup>

グライスの協調の原則がコミュニケーションの成立を目的とする原則であったのに対し、リーチ(1983)は、対人関係をよりよいものにしたいという高度な配慮が働いている言語行動の原理について、ポライトネスの原理を提出した。具体的には自己と他者に及ぶ利益・負担などに配慮して行われる言語行動の原理を6項目の原則として立てている。

- ① 気配りの原則 (Tact Maxim) : 他者の負担を最小限にせよ ; 他者の利益を最大限にせよ。
- ② 寛大性の原則 (Generosity Maxim) : 自己の利益を最小限にせよ ; 自己の負担を最大限に

せよ。

- ③ 是認の原則(Approbation Maxim)：他者への非難を最小限にせよ；他者への賞賛を最大限にせよ。
- ④ 謙遜の原則(Modesty Maxim)：自己への賞賛を最小限にせよ；自己への非難を最大限にせよ。
- ⑤ 一致の原則(Agreement Maxim)：自己と他者との意見相違を最小限にせよ；自己と他者との意見一致を最大限にせよ。
- ⑥ 共感の原則(Sympathy Maxim)：自己と他者との反感を最小限にせよ；自己と他者との共感を最大限にせよ（小泉 2001：128）。

ある社会は、ある種の状況においては、協調の原理に従わざるを得ない場合もあるし、別の社会は、ある種の状況においては、ポライトネスの原理が優先される場合もある。リーチは、協調の原則と他者への配慮との衝突を、いかに取り扱うという問題意識に基づき、協調の原則では満足に説明できないような現象を説明するために、それを補って救う原則として、ポライトネスの原理を提案しているのである（p.126）。

小泉（2001）が指摘しているように、リーチのポライトネスの原理には、以下の問題がある。①リーチのポライトネスの原理以外の原則や尺度も含めて考えている様子が伺われ、それらがややアドホックに積み重ねられている問題、つまり普遍性が欠けている問題がある。②上記のポライトネス原理の中で、二つ以上の公理が衝突する場合に、どのような処理がなされるかについても明確な指針が与えられていないように思われる。たとえば、賛辞を受けた時に、日本、中国などの社会においては謙遜の公理が優先されるが、一致の原則に違反する。一方、西洋社会においては、謝辞とともにそれを受け入れることは、謙遜の原則に違反するが、一致の原則に抵触しない（p.133）。③発話内効力があまりにも強く丁寧さと結び付けられすぎると見られる（p.133）。例えば、日本語が上達した学習者が日本語母語話者の勧誘を断る時に、丁寧さを重んじすぎ、日本語母語話者よりも丁寧な表現で断るのは、日本語母語話者に逆に距離が遠くなるという印象を与え兼ねない場合もある。

小泉（2001）が指摘した問題のほかに、リーチのポライトネスの原則が多すぎて、使いにくい面もある。なお、リーチの6つのポライトネスの原則の内、お互いに重なっている原則もある（たとえば、一致の原則と共感の原則という2つの原則が重なっていることもある）。もし筆者がリーチの原則に若干修正を加えるとしたら、原則③と④はともに非難と賞賛の問題であるため、これを一つの原則としてまとめ、⑤と⑥も同様にまとめることができる。

是認と謙遜の原則： 他者には最大限の是認と最小限の非難を、自己には最大限の非難と最小限の是認を。

共感の原則： 自己と他者の共感及び意見の一致を最大限に、意見の相違と反感

を最小限にせよ。

このようにまとめた結果原則の数は4つに減るが、今度は「是認」と「共感」をどのようにに区別するか、通文化的な要素として扱うことが可能かどうか、などの問題が出てくる。以上の問題に基づき、本研究ではリーチのポライトネスの原則は採用を控える。

## 2.1.4 Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論

以下において Brown and Levinson のポライトネス理論を検討するが、まず、二つのことを念頭に置く必要がある。ひとつはポライトネス理論と敬語論は大きく異なるということ、次に「フェイス」と「面子」「顔」も似ているようにみえて、異なる概念であるということである。これについては以下の記述のなかで随時言及していきたい。

### 2.1.4.1 Brown & Levinson のポライトネス理論の概観

断り言語行動に関する研究の中で、ほとんどの研究は Brown & Levinson (以下は B&L と略す) のポライトネス理論に基づき、断り言語行動を分析してきた。B&L (1987) のポライトネス理論は大別しては次の四つの側面から構成されている (B&L1987:61-71 : 宇佐美 2002③:112)。

#### (1) 「フェイス」という鍵概念

B&L (1987) の「フェイス」概念は、社会学者ゴフマン (Goffman 1967) から得たもので、「人間の基本的欲求」として捉えられたものである。人間は同時に 2 種類の基本的欲求を抱いているので、「フェイス」は「ネガティブ・フェイス」と「ポジティブ・フェイス」二つから構成されている (B&L1987:62 田中訳 2011:80)。

ネガティブ・フェイス : すべての「能力ある成人構成員」(competent adult member) が持っている、自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求

ポジティブ・フェイス : すべての構成員が持っている、自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしいという欲求

そのうち、前者は自己決定 (滝浦 2008:17-18)、「独立」(independence) (小泉 2001:134) の欲求であり、後者は他者評価滝浦 (2008:17-18)、「連帯」(solidarity) (小泉 2001:134) の欲求である。さらに、聞き手と話し手によりネガティブ・フェイスとポジティブ・フェイスを4つに分類する。①聞き手のネガティブ・フェイスを脅かす行為: 命令、忠告、強迫など、②聞き手のポジティブ・フェイスを脅かす行為: 不平、非難、反論が挙げられているが、筆者はここに断りも入ると考える。③話し手のネガティブ・フェイスを脅かす

行為：勧誘、依頼、申し出などの受け入れ、謝辞の受け入れ、気のすすまない約束など、  
④話し手のポジティブ・フェイスを脅かす行為：謝罪、ほめことばの受け入れ、告白など  
である（小泉 2001：135）。そして、この二つの欲求は両立しない。どの文化圏においても、  
どの人間においても、他者から遠ざかる場合もあれば、他者に近づく場合もあると考えら  
れる。

## （２）「フェイス侵害行為」(Face Threatening Act: FTA)

本質的にフェイスを脅かす行為もある。このような「フェイスを脅かす行為」  
(face-threatening acts) を FTA と呼ぶ (B&L1987:62)。そして、B&L(1987)は FTA リスク (フ  
ェイスを脅かす度合い) 見積もりの公式も提出した (B&L 1987:76-78 滝浦訳 2008:30)：

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

$W_x$ (weightiness): ある行為  $x$  の相手に対するフェイス・リスク

$D$ (distance): 話し手と聞き手の社会的距離

$P$ (power): 聞き手の話し手に対する力

$S$  (speaker): 話し手

$H$ (hearer): 聞き手

$R_x$ (ranking of imposition): 特定の文化内における行為  $x$  の負荷度

このフェイス・リスク見積もり公式に対して、宇佐美 (2002④:101) は、「ポライトネス」  
を話し手が、聞き手との「社会的距離 (D)」、「力関係 (P)」、「相手にかける負荷度 (R)」  
などの社会的・文化的要因の重みを「総合的に」見積もって、その「度合い」に応じた言  
語行動を選ぶという、ある程度、予測可能で、動的な捉えかたに変化したと評価する。

筆者としては、上記の公式の三つ目の要素である文化差を重要な変数の一つとして注目  
したい。たとえば、旅先で、〇〇を買ってきてくれるよう依頼するような行為は、日本の  
場合では頼みにくい行為だと考えられる。一方、同じ依頼行為は中国の場合ではそれほど  
難しい行為ではないと思う人が多いだろう。さらに、この依頼行為に対する断りの難易度  
も日中文化で異なる。即ち、日本の場合、このような依頼を気軽に断れるのに対して、中  
国の場合、同じ依頼を断りにくい人が多く見られると予測する。(宇佐美 2002④：102 滝  
浦 2008：031)。しかも、同じ文化圏においても、年齢、社会的属性、性別などによる下位  
文化間の相違も存在するであろう。そのため、「相手にかける負荷度 (R)」を算定するには、  
異文化的要素のほかに、話し手の年齢、社会的属性、性別なども考慮に入れなければなら  
ない。

## （３）ストラテジーの選択を決定する情況

B&L(1987)のポライトネス理論において、ポライトネスが表現・伝達される具体的な手  
段のことを、「ストラテジー」と呼ぶ。日本語に訳せば、「方略」ということになる。B&L(1987)  
は、さらに、フェイスを脅かす度合いに応じて5つの主要ストラテジーの選択を決定する



状況を図に表す。

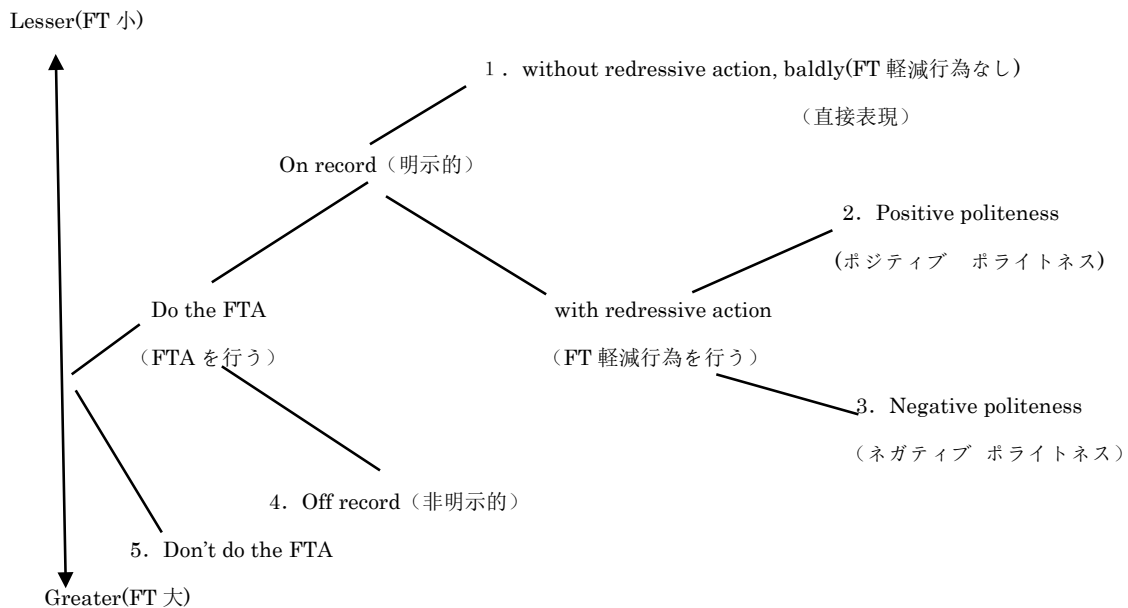


図 2-1 ストラテジーの選択を決定する情況

(B&L 1987 : 60 訳は宇佐美 2002e : 105)

図 2-1 のように、B&L(1987)は、相手のフェイスを脅かす程度に応じて話者が使うストラテジーを五つに分類する。FT が低いほど上の（数字の小さい）方のストラテジーを選択し、逆に FT が高いほど下の（数字の大きい）方を選択するとされる（小泉 2001 : 137）。さらに、FT 軽減行為を行う場合には、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとネガティブ・ポライトネス・ストラテジーがある。

(4) 具体的ポライトネス・ストラテジーの記述

また、B&L(1987)は、順位で中間的なストラテジーに焦点を当て、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを 15 個、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを 10 個、非明示的ストラテジー (Off record) を 15 個挙げている（本稿では省略する。B&L 1987 : 101-227 参照）。従って、断り言語行動の先行研究もポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、非明示的ストラテジー (Off record) に焦点を当て、断り言語行動を考察してきた。ただし、FTA を行わないという選択（即ち、断らないという行為）も、FT 軽減行為を行わないという直接表現も、ストラテジーの枠組みに纏めてきたので、研究の視野に入れるべきだと考えられる。

宇佐美 (2002③) は、B&L のポライトネス理論の (2) から (4) は、すべて (1) の「フェイス」という鍵概念を元に組み立てられているということである。そして、B&L のポラ

イトネス理論を検証するためには、上記の4つの側面すべてを総合的に捉えなければならないと指摘している（宇佐美 2002③：113）。

## 2.1.4.2 Brown & Levinson のポライトネス理論への批判

以上、B&L のポライトネス理論を概観してきた。B&L のモデルは単なる丁寧さの原理というよりも、人間の対人的関わり方に関するより根本的な原理にもとづこうとしている。丁寧さの議論の、より社会（言語学）的な展開と見ることができよう（小泉 2001：137）。また、語用論的ポライトネス理論で、B&L のポライトネス理論は、最も普遍性があると評価しているものとして滝浦（2008）、宇佐美（2002）などが挙げられる。一方、いくつかの問題が残るとも指摘されている。それに関する研究としては、彭（2004）、井出（2006）などが挙げられる。

### 2.1.4.2.1 B&L のポライトネス理論の普遍性を支持する議論

#### （1）滝浦（2008）

滝浦（2008）は人類学・社会学の分野で取り扱っている「フェイス」概念の提出を概観してきた。更に、B&L (1987)のポライトネス理論を、「このような人類学・社会学で展開された人間の社会的ふるまいについての一般理論を背景に成立した、その一特殊形としての言語的ふるまいについての理論」（p.18）として位置付ける。滝浦（2008）は、B&L (1987)が、言語、文化の多様性を認めた上で、「対人関係の構築や維持にかかわる手段はすべてその枠に収まるはずだという“枠組みとしての普遍”を主張する」（p.19）という「普遍性」を高く評価した。即ち、このような「枠組みとしての普遍」の中で、性格の異なる言語間の比較対照を行うことが可能になるわけである。（p.46）。こうした理論の位置づけに基づき、滝浦（2008）は日本語の敬語、呼称、指示詞、終助詞、会話のスタイル・言語行為・文化差を考察してきた。

#### （2）宇佐美（2002）

宇佐美（2002①－⑫）は、B&L のポライトネス理論に対する批判について、批判者側に B&L のポライトネス理論の曲解があったことを考察した上で、この理論の普遍性を高く評価した。B&L のポライトネス理論は言語学の枠組みを超えて、文化人類学、社会学、社会心理学など関連諸領域の研究者の興味をも喚起した理由は以下の二つである。①この理論で取り扱っている「ポライトネス」を、言語形式の意味や機能という観点だけではなく、人間関係、社会・心理的距離、相手にかかる負担の度合いなど、複雑に絡み合う社会的諸要因を考慮にいれ、それらが、総合的に反映された人間の「フェイス処理行動」、即ち、「対人コミュニケーション行動」として、より包括的、かつ、ダイナミックに捉えて、社会科

学の重要テーマの一つとして位置付けられているからである。ゆえに、B&Lのポライトネス理論が主張しているのは、いかなる言語においても、「円滑なコミュニケーション」のためになされる敬語使用も含む、より広い言語行動)の選択のメカニズムが、「普遍的」であるということである(宇佐美 2002③: 108—109、112)。②この理論の斬新な点の一つは、「仲間うちのマーカを使う」ことや、「冗談を言う」ようなことを、「ポジティブ・ポライトネス」とすることによって、なぜ言語形式の丁寧度は高くても不愉快に感じられる言葉遣いがあるのか、また、なぜ既存の社会言語学的規範からはずれている言葉でも、心地よいと感じることもあるのかという「対人コミュニケーション」の観点からの疑問や興味にも答え得る研究に発展したということである。

同時に、B&Lのポライトネス理論における周辺的な問題が残されているとも指摘している。①文レベル、発話行為レベルでのポライトネスを捉えることに留まっている。②「無標ポライトネス」(unmarked politeness)、即ち、「ある言語行動があつて当たり前で、それが欠如して初めてポライトでないと感じられる」(例えば、サービス業界で、丁寧体を使用するのが普通なので、「です」「ます」を使つても、「無標ポライトネス」と言える)ようなポライトネスが、うまく説明できない。③「インポライトネス」を、ポライトネス理論の中で、どのように位置付け、扱うのかが提示されていない。④フェイス侵害度(FT度)の見積もり公式を導入した点は評価できるが、この理論は、話し手に焦点を当てたものになっている(宇佐美 2002⑥: 97)。上記の問題を解決するために、宇佐美は「ディスコース・ポライトネス」<sup>6</sup>という概念を提出し、ポライトネス理論をより普遍的なものへと発展させることを目的とした。

筆者もB&L(1987)を支持するひとりであるが、反論に対する意見とともに次節で総合的考察を行いたい。

## 2.1.4.2.2 B&Lのポライトネス理論に対する反論

B&Lのポライトネス理論に対する反論は、主に2つの観点から議論が展開されてきた。ひとつは非欧米、非アングロサクソンの事例にもとづいた普遍性への問いであり、もうひとつは丁寧さのモデルにおける意図的なストラテジーという側面の偏重に対する疑問であった(小泉 2001: 137)。

### (1) 彭(2004)、山岡他(2010)

B&Lのフェイス・リスク見積もり公式に焦点を当て、批判を行う人もいる。彭(2004)は、フェイス侵害度の三要素で、「社会的距離(D)」、聞き手の話し手に対する「力(P)」という二つの要素が「タテの人間関係」を中心とすることに対して、「ヨコの人間関係」を中心とする「配慮表現」に基づき、日中対照研究を行ってきた。また、彭はB&Lのフェイス・リスク見積もり公式、ストラテジー自身に関して、「露骨な功利主義」、「反道徳」という批判もある(p.59)。

彭（2004）と同様に、山岡他（2010）もポライトネス理論に対して、「配慮表現」を用いて、日本語における固有表現を解釈しようとしている。生田（1997）はリーチや B&L のポライトネス理論を紹介していたとき、「ポライトネスは当事者同士の互いの面子の保持、人間関係の維持を慮って円滑なコミュニケーションを図ろうとする社会的言語行動を指す。その意味では、言葉のポライトネスは『配慮表現』、言語的『配慮行動』などと呼ぶほうが適切かもしれない。」（p.68）と、はじめて「配慮表現」という用語を用いた。山岡他（2010）は「配慮表現」を「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられる言語表現」と定義している（山岡他 p. 143）。

山岡他（2010）は、リーチや B&L のポライトネスが言語行動の選択を巡る方略についての理論であるのに対し、配慮表現は固定された言語行動に対応する表現の選択を巡る理論であり（p.139）、さらに、ポライトネス理論は個別言語を超えた普遍性を有し、わずかに個別言語の背景にある文化的差異を、FTA 度計算式における変数 Rx として位置付けるのみであったが、配慮表現の方は日本語の現象に対する説明から始まった個別言語の問題ということになると（p.141）、西洋で提出されたポライトネスの普遍性と「配慮表現」の個別性を明確に区別している。

さらに、新屋（2003）は、配慮表現の視点から、「縄張り」<sup>7</sup>を言語表現に取り入れた。そして、日本語では「敬語による敬意表現よりも聞き手の縄張り（例えば、聞き手の身上、内面、能力など）を侵害しないことを優先する」と指摘している。一方、藤原他（2009）は、日本語教育では、形式的な丁寧さに重点が置かれ、運用面での指導が不足していると指摘している。そのため、日本語学習者の発話には文法的には正しくても聞き手の私的領域に踏み込み、不快感を与えるものが多い（例えば、先生、コーヒーを飲みたいですか。／先生、定年後はどうするつもりですか）と述べている（p.108 : 85—98 : 89）。この意味では、「縄張り」から見ると、日中両言語の断り言語行動に見られる差異はほとんど「縄張り」という日本文化における固有なものに起因することが伺えるとも言えよう。

## （2）井出（2006）

井出は B&L のポライトネス理論の枠組みでの普遍性に疑問を投げかけた。B&L のポライトネス理論に援用された「フェイス」という鍵概念もよく批判される（Matsumoto 1988、Gu 1990 などが挙げられる）。フェイス概念は、東洋と西洋の間で異なる概念であると指摘した上で、B&L のポライトネス理論の普遍性にも疑問を抱くのは当然のことであると考えられている。井出（p.72-74）は B&L のポライトネス理論に関して「話し手の意思により相手に働きかけて話すものに限られて」ており、さらに「敬語、あいさつ、決まり文句などの形式的言語によるポライトネスの表現は明らかにしていない」と二つの側面から、B&L のポライトネス理論の普遍性に対する疑問を述べている。この二つの欠陥を解決するために、どの文化圏においても、共通しているルールの普遍性に、日本から「わきまえ」<sup>8</sup>の枠組みを加え、二つの枠組みを相補的に研究することが求められるという（p.75—76）。

イデ（Ide, 井出）（1989）は「働きかけ」と「わきまえ」という概念を用いて丁寧さのこ

のふたつの側面を論じている。B&Lの言うような方策的な丁寧さは前者に属し、社会的な慣習に従って丁寧なふるまいをすることは後者に属するとされる。「わきまえ」に従ってふるまうことは、ある状況において社会の慣習に従って自らの立場や役割を言語的、非言語的に示すことである。それに対して「働きかけ」は、話し手がその意図に応じて能動的に選択を行う丁寧さの側面であるが、B&Lのモデルはそれに傾きすぎていると批判する（小泉 2001：138）。

以上、発話行為、協調の原則、ポライトネス理論を概観した。とりわけ、日本におけるB&Lのポライトネス理論に対する批判をまとめてきた。いずれも、B&Lのポライトネス理論の普遍性を全般的に否定するわけではない。とりわけ、滝浦（2008）は西洋と東洋の間で「フェイス」概念が異なることを明らかにした上で、B&Lのポライトネス理論の「枠組みとしての普遍」を主張しているが、これは筆者の知る限り最も客観的な評価である。同時に、滝浦は「普遍性」が認められなければ、各言語の比較対照研究も不可能になると指摘した（滝浦 2008：46）。

「フェイス概念は、東洋と西洋の間で異なる概念である」（井出 2006）という指摘について若干私見を述べたい。フェイスというB&Lが提出した概念と、中国語の面子、日本語の「顔を立てる」「顔が潰れる」などの「顔」という概念は、部分的に重なっているところはあるにせよ、本質的に異質の概念であることを認識する必要がある。異なることは当然であるうえに、同列に並べて比較することに意味がない概念である。B&Lのフェイスはコミュニケーションの際のポライトネスを判断する基準である一方、日本語の「顔を潰す行為」には、たとえばある人が若者を自分の顔である会社に就職させた後でその若者が会社に迷惑をかけ、結果的にその人の顔が潰れたというような場合、コミュニケーションやポライトネスとは関係がない。中国語の面子の場合でも、中国人は謝ると面子が失われるので、余程のことがないと謝らないとよく言われる一方、日本人はいくら誤ってもそれで顔が潰れることはまったくないどころか、「相手の顔を立てて、とりあえず（悪くなくても）謝る」という行為は日常茶飯である。要するにB&Lのフェイスを論じる際に面子や顔を持ち出す、あるいはそれらに引きずられる形で議論するのは得策とは言えない。これはちょうど、普遍的な比較の道具として優れているグライスの格率について、これらが当てはまる度合いが文化によって異なると批判することと軌を一にしている。文化差が見えるような形で尺度が設けられていることが、B&Lのフェイス理論の利用価値の高さである。

また、宇佐美（2002）はB&Lのポライトネス理論のいくつかの周辺的な問題を指摘しているが、「総合的に判断して、現段階の発話行為レベルのポライトネスに関する理論としては最も包括的であり、有効な理論であると評価できる」と客観的に評価している。一方、B&Lのポライトネス理論はもともと円滑な人間関係を解釈する理論であるが、なぜ宇佐美（2002）はB&Lのポライトネス理論に「ディスコース・ポライトネス」を加えるのか。B&Lのポライトネス理論に応じた実証研究で「言語形式の選択」に留まっている考察が圧倒的に多数だからであると考えられる。彭（2004）も井出（2006）も日本語における固有表現（敬

語、あいさつ、決まり文句、緩和表現等)に着目し、西洋の「ポライトネス」と日本の「配慮表現」、「わきまえ」それぞれの相違点を明らかにした。本研究では、敬語体系を有する日本語と敬語体系を有しない現代中国語との対照研究を行うため、普遍性を持っているB&Lのポライトネス理論を理論的な基盤とすると同時に、宇佐美(2002)が指摘した周辺的問題点を解決するために、断り言語行動に見られる話し手と聞き手の相互的交渉を動的に、かつ実証的に考察する。なお、B&L(1987)のポライトネス理論は人間関係を円滑に構築し維持しようとするという観点から考察しているが、従来の断り言語行動に関する実証的研究はほとんど学生を対象としている。まだ社会に出ていない学生は、人間関係を構築し維持しようとするということについて関心が薄いと言える。学生のみを対象とする実証的研究はB&L(1987)のポライトネス理論の普遍性を検証しにくいいため、フェイス・リスク見積もり公式における社会的変数である聞き手との「社会的距離(D)」、「力関係(P)」、「相手にかける負荷度(R)」の他に、話し手の年齢、階層、性別なども変数として、実証的考察を行う研究も必要とする。

## 2.2 中間言語語用論に関する研究

まず、「中間言語」という用語はSelinker(1972)によって提唱された仮説である。第二言語学習者が目標言語を学んでいく過程で発展させた目標言語と異なる体系をもつ個々の学習者に存在している言語体系ということである(Selinker *ibid.* 鈴木 2011:9)。Selinker(*ibid.*)は中間言語の文法はいくつかの規則のまとまり(例えば、母語の規則、目標言語の規則、さらに転移、簡素化、過剰一般化など他の規則を含む)であると捉える(寺田 1993:33)。ゆえに、中間言語は学習者の母語、既習の外国語、学習内容、学習方略、伝達方略、学習者間の個人差などに影響を受けると予測できる。

一方、「語用論」とは「相互交渉における意味」、つまり発話や文脈のみでなく、話し手や聞き手のそれぞれが、意味の生成にどのように寄与しているかということである(Thomas 1995 浅羽訳 1998:26)。

中間言語語用論は「非母語話者が第二言語の語用論的知識の使用と習得の研究」(Kasper 1996:145 清水 2009:90)と定義されている。そして、中間言語語用論は学習者が目標言語でコミュニケーションを図る際に、母語からの語用論の転移、語用論レベルでの過剰一般化、練習の転移、第2言語学習の方略、第2言語コミュニケーション方略に注目する(Selinker 1972 山岡俊比谷他 1997:68)。とりわけ、語用論の転移を中心に考察を行う研究は盛んに行われてきた。ゆえに、Selinker 他(1992)は、語用論の転移に関する定義と分類を次のようにまとめている。

転移(*transfer*)とは、学習者のL1がL2の習得に与える影響である(Selinker 1992 清水 2009:175)。その影響は音韻、形態、統語などの言語知識の転移のみでなく、言語知識をコ

ンテキストでどのように用いるかに関する、L1の規則がL2の言語使用や習得に与える影響も含まれる。言語資源を文脈の中でどのように使うかに関するL1の規則がL2の言語使用や習得に与える影響を語用的転移（プラグマティック・トランスファー／pragmatic transfer）という。つまり、語用論的転移とは、「学習者のL2の語用論的情報の理解、産出、学習に対して、L2以外の言語や文化の語用論的知識が与える影響」（Kasper 1992:207 清水 2009:175）のことである。SLAでは語用論レベルでの転移を考察するプラグマティック・トランスファー(pragmatic transfer)に関心が向けられている。

さらに、プラグマティック・トランスファーは「プラス・トランスファー」と「マイナス・トランスファー」の2つに分かれる。L1とL2が共通しているL2の習得に有益な転移を「プラス・トランスファー」という（例えば、教授から借りた本を返し忘れた場合などにタイ人英語学習者はL1タイ語でもL2アメリカ英語でも「補償の申し出」を頻繁に行ったが、英語母語話者も同様であった（Bergman & Kasper 1993 清水 2009:176)）。一方、L1とL2が異なる規則であり、L2の習得を妨げる転移を「マイナス・トランスファー」という（例えば、中国人日本語学習者が勧誘や依頼を断るとき、「弁明」を多用することは、L1中国語からの影響による起こったトランスファーである（藤森 1995:88)）。

従来の中間言語語用論研究は、「マイナス・トランスファー」にしか関心を向けていなかった。従って、これまでの対照言語学の研究もL1とL2の相違点に重点を置くことになった。それに対して、両言語の相違点を強調しすぎると、L2に対するステレオタイプが押し付けられることにより、逆にL2の習得を妨げる壁になり兼ねない。つまり、「マイナス・トランスファー」のみでなく、「プラス・トランスファー」にも関心を向けることは、むしろL2の習得を促進できると予測する。そして、教えるだけでなく学習する側にもそれを認め、学習者が母語能力を活用して自ら行う対照分析の意義が唱えられるようになる（長友 1993:7）。

以上、中間言語語用論をまとめてきた。次節で概観した断り言語行動の実証的研究の変遷には、1990年代、L1のL2習得への「マイナス・プラグマティック・トランスファー」のみに重点を置き、考察を行う研究から、「トランスファー」の代わりに目標言語学習者の主体性を重んじる研究と、学習者に情報を提示する研究へ進んでいる傾向が見られる。それにも関わらず、L1とL2の間に共通している「プラス・プラグマティック・トランスファー」も教育に生かしていく必要があることを検証する研究は未だに少ない。

## 2.3 断り言語行動の先行研究の概観

ここで取り上げる断り言語行動に関する先行研究は主として、日本における断り言語行動に関する先行研究、中国における断り言語行動に関する先行研究、{理由}<sup>11</sup>を中心にする研究からなっている。

## 2.3.1 日本における研究

日本における断り言語行動の研究に関しては、日本語母語話者を対象とする研究、日本語母語話者と日本語非母語話者を対象とする研究、日本語学習者を対象とするという研究対象の相違による3つのグループの先行研究について述べる。

### 2.3.1.1 日本語母語話者を対象とする研究

調査方法によって、断り言語行動に見られる意味公式も相当に相違、導き出された結論も異なるために、調査方法に基づき、日本語母語話者を対象とする研究を、さらに「アンケート調査による研究」、「面接調査による研究」、「ロールプレイによる研究」「ロールプレイとメールの対照による研究」の4通りに分類して総括する。

#### 2.3.1.1.1 アンケート調査による研究

森山(1990)は、まず予備調査の結果から、方略を①「嫌型」(例えば、いやだという)、②「嘘型」(例えば、都合がつかないという)、③「延期型」(例えば、考えておくと言う)、④「ごまかし型」(例えば、笑ってごまかす)、⑤「その他」という5つに分けて、断る方略の枠組を設定している。それで「学園祭のコンサートに有志として一緒に出演するように頼まれ、物理的・能力的に可能しかし、やりたいという気は全くない」という依頼場面を設定し、被依頼側は相手との関係(上下親・疎に基づき6つの相手を設定している)によってどのような方略で断るか、大学生の男子51人、女子40人を被験者にして、アンケート調査を行った。更に、聞き手の評価の視点から、「自分が頼む場合、相手の『考えておく』、『都合がつかない』という答えを受け止めるかどうかについても、考察している(p.61)。

考察結果として、男女とも、親しい同級生に対しては約七割が率直に嫌だと言う結果が見られた。親しい場合に永続的な関係の維持が重要で、誠実さが優先されるからであると分析している(p.62)。また、親しい教授に対しては、嘘型が多く見られるのに対して、親しくない教授の場合は、親しくない同級生・後輩と同じ結果が得られたので、相手の上下が問題になるのは親しい場合だけであり、親しくなければ、上下関係はあまり関係がないという結論を見出した(p.63)。そして、依頼側が、非依頼側の断りに見られる「考えておく」のような延期型に対する期待度から見ると、「考えておく」型は上下関係に関与する使い分けがあるという結果が見られた。「考えておく」と言うということは、既に相手利益優先の原則を守らないことになってしまうので、目上には不適切な表現と見なされると分析している(p.65)。最後に、二回目に断る場合、男女の差が大きく見られる。即ち、男子では率直に嫌と言うのが増えるのに対して、女子では「都合がつかない」という嘘が増える



という結果も見られた。それは社会的に弱い立場に置かれることが多い女性は、相手の意向よりも自分の意志を優先させることを表示しにくいと言えるのかもしれないと分析している (p. 65)。

森山の研究は、男女・親・疎・上下の社会的変数により生じた異なる断りの方略の比較だけでなく、「なぜ」を問う視点から、即ち断り方略を選択する要因の体系化も目的とする点で意義がある。また、談話参加者である話し手と聞き手双方の心理過程の視点から、発話の意図と、聞き手がその発話をどのように受け入れるのかという点も、後の断りに関する研究にも大きなヒントを与えると思われる。そして、森山は方略を「並列的選択的な関係」と「統合的共起可能的な関係」<sup>9</sup>の2つに分類して、上記の5つの方略のどれを選択するのは、「並列的選択的な関係」と位置付けられている。一方、謝り(詫び)のような方略は、ほかの方略と共に採用されることなので、「統合的共起可能的な関係」と位置付けられている (p. 60)。このような方略の位置付けは談話行為を対象とする日本語教育にも必要だと思われる。しかし、後の研究では、前述のような断り方略の原因、談話参加者の評価、断り方略の位置付けに関して、更に深く考察を行う研究は少ないようである。一方で、依頼場面を1つだけ取り上げ、方略をおおざっぱに5つに分類する方法では、異なる場面で採用されるさまざまな方略を分析できないという問題が多く指摘されている。

### 2.3.1.1.2 面接調査による研究

尾崎(2006)は、「役員を引き受けるよう依頼されて断る」、「訪問販売の人の依頼を断る」、「相手の家で食事を勧められて断る」という三つの断り場面を取り上げ、言語行動における「配慮」という視点から、面接調査の発話データを用い、各場面で典型的に現われ得る詫びの表現・理由説明・断りの述部<sup>10</sup>等が、場面と被験者の属性(性別、年齢層別、地域別)によりどのように異なるのかを分析した (p. 89)。

森山(1990)に比べると、尾崎(2006)は、場面と被験者の属性は豊富になってきたが、被験者の相手との関係(親・疎関係と力関係)は研究の視野に入っていない。そして、森山(1990)と尾崎(2006)のいずれも、場面の設定が相当に単純で、かつ設定基準は明示されていない。もう一つ、断り方略の分類においては、双方ともに大雑把な分類を行うことにした。このような大雑把な分類では、断り言語行動を完全に分析できないという問題が残っている。特に、森山(1990)の研究は、中国の研究に近い、マクロ的研究(chen(1996), 马(2000), 王(2001)などの研究でマクロ的研究の特徴がみられる)である。これを教育に導入する場合、長所と短所の双方がある。例えば、大雑把な方略分類は、学習者の認知過程からみると、言語学習者にとって習得しやすいという長所がある。一方、大雑把な断り方略のみを学習者に提示すると、異文化に対するステレオタイプを学習者に押し付ける危険もある。一方、ほかの日本の研究はミクロ的断り言語行動を考察していくという著しい特徴が見られる。研究の面で、細かく考察していないと、完全性が欠けていることもあ

るが、教育の面で、細かく方略を学習者に提示すれば、逆に混乱を引き起こしやすい場合もある。そのため、教育においては、学習者にマクロとミクロの双方の語用論的知識をもとに意識してもらうことが必要だと考える。

### 2.3.1.1.3 ロールプレイによる研究

横山（1993）は、社会言語学的な視点から、ロールプレイとその後の感想から得られたデータを用い、1）日本語母語話者のアメリカ人日本語学習者に対する断りの発話行為と、日本語母語話者の日本語母語話者に対する断りの発話行為、及び、2）日本語母語話者のアメリカ人日本語学習者に対する断りのうち、英語が話せる日本人と日本語だけしか話せない日本人による断りを比較した（p. 141）。被験者の世代は30代から40代で、ほとんどは会社員や教員で、若干が主婦である。データ収集者は4人で、被験者は4グループで20人ずつ、合計80人である。調査結果として、4グループの中で、日本人への応答と英語も話せる日本人の応答に比べて、アメリカ人に対する応答と日本語しか話せない日本人の応答では、直接的意味公式の使用頻度が高いのに対して、間接的意味公式、付随表現、言いよどみ、緩衝語句、文末表現の使用頻度数が低い傾向が見られる（p. 147-148）。横山（1993）は、このような、日本人同士の断りの応答に多く見られるためらい、文末表現、遠慮を示す副詞、語句などの配慮言語行動がアメリカ人に対する断りの中には少ないのは、被験者の感想にもよく現れているように、「アメリカ人は直接的にものを言うから、アメリカ人と話すときははっきり話さなければならない。」といったステレオタイプによるだろうと述べている（p. 149）。故に、異文化間の誤解をできるだけ少なくするためには社会言語学的知識を教室で意識的に教える必要があると同時に、目標言語行動に対する誤った知識（ステレオタイプ）を直さなければならないと提案している。

横山（1993）の研究は、今まで学習者の目標言語に見られる断り言語行動に関する研究と違って、異なる文化圏に属する、断られる側に対する日本語における断り言語行動の違いから、日本人の異文化圏に対するステレオタイプを明らかにした。そして、ロールプレイに基づき、Beebe 他（1990）の意味公式分類に若干修正を加えた横山（1993）の意味公式分類も後の研究でよく採用されている。しかし、社会的変数である上下・親・疎・男女など、ロールプレイに現れるべきであるパラ言語的表現（例えば、イントネーション、リズム、ポーズなど）、非言語的表現（例えば、ジェスチャーなど）、いずれも分析対象としていない。また、日本語母語話者のアメリカ人に対する断り言語行動に見られる単純化は、日本人のアメリカ人に対するステレオタイプによるものだという結論にも検討の余地があると考えられる。即ち、単純化が生じた原因は必ずしもステレオタイプだけによるものとは限らない。例えば、東洋文化と目立って異なる西洋文化に属するアメリカ人に対して、日本語母語話者はアメリカ人の行動様式に合わせて、断り言語行動を行うが、一方、同じ

東洋文化に属する中国人、タイ人、インドネシア人などに対して、日本語母語話者も異文化圏の行動様式に合わせて、断り言語行動を行うかどうかについて、疑問を抱いている。

藤原（2004）のロールプレイによる結果も筆者の疑問を裏付けるとも言えよう。ちなみに、IJ は母語で話す場合と、日本語で話す場合、断り方を変えているのに対し、JJ の様式は変化していないということである。その理由として藤原（2004）は、JJ 自身が II に対するコミュニケーション様式やステレオタイプの意識を持っておらないという理由のほか、JJ がわざと II のコミュニケーション様式に合わせないという可能性も否定できないと分析する（p. 121）。

#### 2.3.1.1.4 ロールプレイ対メールの対照研究

稲垣（2005）は、対面によるロールプレイと、携帯電話のメール（以下メール）の2つの調査方法で調査を行った。調査対象は大学生7人で、相手との関係を「上・同・下、親・疎、男女」と設定した。状況として、「大学でバーベキューをしたらという提案」（ロールプレイ）と「花束を贈ったらという提案」（メール）を採用した。さらに、調査方法、相手との関係により、断りやすさやうそをつくかどうか、理由の言語形式の違いに集中し分析を行った。結果としては、断りやすさやうそをつくかどうかは、被験者がその相手に対し、気を遣うべき相手であると認識しているかどうかによって決まる。対面でもメールでも断りやすさについてはほぼ同様の傾向が見られた。ただ、メールでは、誤解を生まないような表現を選ぶ傾向がある。また、理由の述べ方（言語形式）も相手との関係によって異なるという結果も見られた（p. 63）。

情報社会の発展につれ、携帯電話のメールやライン（ウィチャット）は、コミュニケーションの重要な道具の一つになってきた。それに相応しく、対面のロールプレイのみならず、メールやライン（ウィチャット）調査方法も、断り言語行動に関する研究において十分に意義があると思われる。ただ、稲垣（2005）の被験者が少なく、状況も「提案」だけ設定し、一般化を導くことは難しいと言えよう。

#### 2.3.1.1.5 まとめ

以上、日本語母語話者のみを対象とする先行研究をまとめてきた。総じて各研究者とも被験者の属性及び相手との関係を細かく設定し、場面、調査方法、被験者の属性及び相手との関係による断り方のバリエーションと要因も深く分析し、断る側と断られる側の心理にも言及しているという特徴が見られる。しかしいずれも、場面の設定基準に関して疑問が生じる。つまり、場面設定が必然的に単純化されているため、研究された特定の場面においては納得のいく結論であっても、これらを敷衍して「日本人は」「中国人は」というよ

うに一般化することは難しいと思われる。最後に、横山（1993）を除き、他の研究は日本語母語話者のみに焦点を当てているため、異文化間の言語行動についての対象研究を行わないかぎり、日本語母語話者の言語行動の特徴を明確に見出し難いという限界があるだろう。

### 2.3.1.2 日本語母語話者と日本語非母語話者を対象とする研究

前節と同様に、調査方法に基づき、日本語母語話者と日本語非母語話者を対象とする研究を、さらに「DCT 及びアンケート調査による研究」、「ロールプレイによる研究」、「DCT(Discourse Completion Test)とロールプレイを同時に用いる研究」、「電話録音による研究」の4つに分類する。

#### 2.3.1.2.1 DCT 及びアンケート調査による研究

従来の断り言語行動に関する研究を振り返ってみると、1990年から2011年にかけて、DCT 及びアンケート調査による日本語母語話者と日本語非母語話者を対象とする対照研究が最も数多く見られる。本研究は、日中両言語の母語話者を対象とする研究なので、まず、DCT 及びアンケート調査による日中断り言語行動に関する先行研究を表 2-1 にまとめる。

表 2-1 日中断り言語行動に関する先行研究のまとめ

研究者及び時間	調査対象	調査方法	場面設定及び社会的変数	分析内容及び分析方法	結論	問題点
1、馬場・禹 1994	日本語母語話者（大学生）15名と（以下 JJ）、中国語母語話者（中	アンケート調査	8つの依頼を断る場面を設定した。	各場面による最初の2番まで現れた2つの意味公式組み合わせ及び各意味公式の出現頻度	共通点： 親しい間柄の場合、主に「願望」、「理由」、「謝罪」、「代案提示」の表現が多く見られる。一方、親しくない場合は、上述した意味公式が少ない。 相違点 親しい間柄の場合、JJ	①「間接的な断り」表現に焦のみ点を当てる、「直接的な断り」表現を詳しく考察していない。 ②被験者数が少ないため、一般化しにくい。

	国人留学生) 10名 (以下 CC)			を対照した。	は相手に察してもらおうとする傾向があるのに対して、CCは相手に共感を示しつつ積極的に働きかけるという熱意を示すことに重点が置かれている。親しくない場合は、JJは丁寧表現を多く用いるのに対し、CCは親しくない目上に対しても、比較的気軽に断っている。	
2、 劉・ 小野 1996	CC(大学生) 92名、 JJ(大学生) 80名	DC T	2つの 依頼を 断る場 面を設定 した。	断り方略 の使用頻 度を分析 した。	断り方略の使用頻度からみると、CCの場合、親しい依頼者に対して弁明先行型が多く、疎の依頼者に対しては詫び先行型を多用。大学教授の依頼に対しては、親・疎に関わらず、詫び先行型が特に多い。JJの場合、会社の親しい同僚を除き、すべて詫び先行型が多い。	ただ断り方略に見られる先行型だけに着目しているのに対して、各意味公式の使用頻度、配列順序などを分析していない。
3、 山口 1997	中国人 留学生 33名、 台湾人 留学生 17名、 日本人 大学院	DC T と イン タ ビ ュ	依頼、 断り、 謝り3 種類の 発話行 為にお ける場 面を各	ストラテ ジーの使 用頻度と 使用順序 を分析し た。	日本人がまず「上下関係」、次に「親・疎関係」、そしてさらに発話行為の目的である事柄の「緊急度・必要性・コスト」が判断基準になると考えられた。一方中国人・台湾	小野・劉(1998)と同じように、異文化コミュニケーション・スタイルを場面をわきまえずに、そのまま学習者に教えていけば、その異文化に

	生 26 名、日 本人社 会人 51 名	一	々設定 した。		人留学生の場合は、ま ず権利・領域に関する 「権限」、次に名誉や 自尊心に関する「威 信」(面子)、そして「親 ・疎関係」、さらに事 柄の「緊急度・必要性・ コスト」がストラテジ ー選択の判断基準に なると考えられた(山 口 1997:38)	対するステレオタ イプを学生に押し 付ける危険もある と考えられる。
4、 李 1999	日本人 (以下 J) 96 名、中 国人 (以下 C) 106 名、韓 国人 (以下 K) 104 名	DC T	勧誘と 依頼を 断る場 面をそ れぞれ 設定。	各意味公 式の使用 頻度、使 用順序、 使用順序 における 各「先行 型」の使 用率及び 発話の長 さを分析 した。	共通点： ① {詫び} {理由} {不 可} が共通して多く用 いられる。②上下、親・ 疎の影響を受け、目上 に対する配慮。 相違点： ①Jの主に用いる三大 意味公式は{詫び}{理 由}{不可}。Cは上記 のパターンに、さらに {代替案} を使用し、 Kは上記のパターン に、さらに{ためらい 表出} を用いる。②J は{詫び} を相当に多 用し、相手に関わらず {理由} を相当に曖昧 に述べている。Cは{理 由} を具体的に伝える。 Jは相手との関係 によって、{理由} の 使い分け。③Jは相手 場面に関わらず「詫び	上下、親・疎の変 数を入れて考察を 行っているが、上 下、親・疎統計分 析を利用していな いので、どちらの ほうが優先的であ るか、まだ明らか にしていない。

					先行型」を圧倒的に多く使用。Cは親友や目下には「詫び先行」型の代わりに、「不可先行型」の多く使用。kは「詫び先行型」、「理由先行型」双方を多用。	
5、 文 2004	CC（大 学生） 77名、 JJ（大 学生） 84名	DC T	依頼、 勧誘、 提案を 断る場 面をそ れぞれ 設定し た。	意味公式 の発現頻 度などを 分析。	共通点 {弁明}{不可}{詫び} を核とした3つの意 味公式は、「基礎的な 意味公式」となってい る。特に{弁明}の9 0%以上の高い発現 頻度。 相違点 ①CCは{弁明}の意味 公式のみに高い発現 頻度。JJは{弁明}の ほかに、{不可}{詫び} にも高い発現頻度。② CCで多用の{代案}や {共感}{次回の約束} {感謝}等の付加的な 意味公式は、JJで低い 使用頻度。③CCで重要 な地位を占める{呼 称}はJJの断り表現 では不使用。	物事の利益・負担 度及び緊急度に関 して、引越しの「依 頼」>送別会への 「誘い」>勉強会 への「提案」とい った順によって弱 くなると述べてい るが、それを証明 できる根拠は明示 されていない。
6、 肖・ 陳 2008	JJ（大 学生、 教職 員）90 名、CC	DC T	2つの 依頼を 断る場 面を設 定し	社会的属 性を社会 的変数と して、意 味公式の	共通点 両言語ともに{弁明} {詫び}{不可}を最 も多く使用。 相違点	社会的属性による 断り方略の特徴を 考察したが、あく までも大学の教員 と学生を対象にし

	(大学生、教職員) 90名		た。	発現頻度から、両言語の依頼に対する断り表現の特徴を明らかにする。	JJの断り表現は主に上記の「三つの基礎的な意味公式」に集中し、CCでは、{代案}「遺憾」{次回の約束}{共感}など、多用の意味公式を使用。社会的属性からみると、CCには、年齢層によって、異なる断り表現の方略を使用する特徴がJJより著しい。	た。
7、 蒙 2010 a	JJ(会社員)49名と CC(会社員)59名	DC T	4つの依頼を断る場面を設定した。	JJとCCの{詫び}、{理由}、{代案}、{呼称}の具体的な例を取り上げ、質的、量的比較、分析している。	①JJは力関係で{詫び}の表現を使い分け、CCは社会的距離で{詫び}の表現を使い分けられる。②JJが用いる{理由}は内容が曖昧であるのに対して、CCの用いる{理由}は具体的で種類が多い。③JJは相手に依頼の主導権を委ねる{代案}を多用し、CCは第三者への依頼を自分のことにするような{代案}が多い。④JJは力関係、社会的距離に関わらず{呼称}を使用せず、CCは会社で相手に対する呼び方が力関係より社会的距離を表す傾向がある。	①JJの断り言語行動に見られる上位3位の{詫び}{理由}{不可}の一つである{不可}は、蒙(2010a)の研究で言及されていない。

上記の日中断り言語行動の先行研究を概観すると、まず共通点を以下にまとめる。①い



いずれも DCT やアンケート調査方法を用い、学生を被験者（山口 1997、蒙 2010a を除き）に、意味公式やストラテジーの出現頻度を中心に、日中対照研究を行ったという共通点が見られる。ただし、そのうち、出現頻度のほかに、意味公式やストラテジーの順序、先行型、発話の長さなどを分析する研究もある。②結論においても、日中両言語ともに { 弁明 } { 詫び } は最も多く使用された。③社会的変数の考察においては、JJ では「上下関係」、CC では「親・疎関係」が最も重要な変数であると述べている研究が多く見られたという共通点も示されている。特に、李（1999）、文（2004）、肖・陳（2008）の研究では、{ 弁明 } { 詫び } { 不可 } は、三つの基礎的な意味公式と位置付けられている。{ 代案 } { 次回の約束 } { 共感 } などの意味公式は「付加的な意味公式」として位置付けられて、CC で使われる多様性が見られる。③各意味公式やストラテジーの使用においては、JJ は「曖昧な理由」を好み、相手との関係に関わらず、{ 詫び } を多用した。一方、CC は「具体的な理由」を好み、親に対して { 詫び } を使用せず、相手に働きかけるようなポジティブ・ストラテジーを用いる傾向がある。ところが、藤原（2004）の DCT とロールプレイを同時に用いる研究によると、JJ はロールプレイにおける「明確な言い訳」の割合が DCT 分析より高くなっているという結果も得られた（藤原 2004：123）。④文（2004）、蒙（2010a）ともに、CC で多く見られる { 呼称 } は JJ で使用されないという結論を得た。

上記の先行研究で、結論はほぼ同じように見えるが、被験者の属性、分析内容、分析方法の違いにより、得られた結果も多少異なる。

日中両言語の母語話者を対象とする断り言語行動の研究のほかに、日本語母語話者とほかの母語話者を対照した研究では、村井（1998）、荒巻（1999）、大倉（2002）、吉井（2009）などが挙げられる。日本人に対する「曖昧である」というステレオタイプは必ずしも真実ではなく、相手との関係、場面などによりステレオタイプと異なる言語行動も見られることが判明した。しかし、いずれも場面設定の基準は明示されていない。また、物事の負担度などを考察対象としていないという問題点が残っている。

### 2.3.1.2.2 ロールプレイによる研究

任（2004）は、「間接的表現を好む日本人と直接的表現を好む韓国人」という一般論を否定する立場から、研究を進めた。日本語母語話者 30 名（学生）と韓国語母語話者 30 名（学生）を被験者に、「ウチⅠ」「ウチⅡ」「ソト」「ヨソ」という軸による「食事の勧誘」、「翻訳の勧め」、「カセットテープ購入の勧誘」という場面を設定し、ロールプレイで断り言語行動に関するデータを収集した。また、日・韓それぞれドラマや映画から、断り非言語行動に関するデータを集めた。それで断り型を曖昧型・延期型・率直型・弁明型・嘘型の 5 つに分類した上で、日本人の代表的な断り表現の型は曖昧型と延期型であり、韓国人の断り表現の代表的な型は率直型と弁明型と嘘型であることが指摘できた（任 2004:231）。更に、意味公式の使用率、1 回目の断りと 2 回目の断りとの間のストラテジー・シフト、及

びストラテジー・シフトとウチ・ソト・ヨソとの関連を詳しく考察した。また、両言語における断り談話の開始がどのようなマーカーによって標示されるかを、考察した。日本語の理由表現の末尾に現れる形式（ノデ型、カラ型、シ型、テ型、命題型など）を中心に考察を行った。また、両言語の断り場面に見られるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを量的・質的差異、ウチ・ソト・ヨソによる差異及び男女差という観点からの考察も試みた。最後に、テレビドラマ・映画から得られた断り場面の資料をもとにして、2グループ間のアイ・コンタクト、断る側に現れる表情を考察対象として分析した。上記の考察により、多くの韓国語母語話者は、日本語母語話者よりも多様な間接表現を用いることによって相手のポジティブ・フェイスを保っていることが明らかになった(p. 237)。

このような相手との関係によるウチ・ソト・ヨソの軸を立て、ロールプレイと動画資料で断り言語行動の各方面における特徴を明らかにする研究はその後の研究でもよく引用されている。しかし、カノックワン(1995)が指摘したように、「相手との関係」、「時間的・能力的可能性」、「状況の必要性」という決定要因により、断り言語行動様式も相当に異なる(カノックワン 1995:26)。ゆえに、相手との親・疎関係以外に、上下・性別、断りの負担度、時間的・能力的可能性などの変数を入れて考察を行うことが必要であると考えられる。データ収集方法においても、ロールプレイとテレビドラマ、映画という調査法は実際の会話に比べると、特にテレビドラマ、映画というフィクションの世界に集中している調査方法の限界も感じられる。

吉田(2015)は、日本語母語話者(以下 JNS) 70名(35組)とマナド語母語話者(以下 MNS) 70名(35組)を被験者に、ロールプレイ調査法を用い、「映画への勧誘を断る」という状況を設定し、勧誘の発話から断りに至り、第1断りから第5断りまで(再勧誘が起こりうることを前提とする)をそれぞれ考察し、両言語の断り言語行動に見られる特徴を動的に、全体的に考察した。まず、勧誘の発話から断りに至るまでの心理的負担を考察した。それで意味公式数、初出に使用される意味公式の内訳及びカテゴリー、意味公式の種類と組み合わせから、第1断りから第5断りまでの断りがどのように変化していくか、断りの連鎖の様相、断りの展開パターンを分析して、両言語の特徴を明らかにした。

上記の各研究から得られた結果をもとに、JNSとMNSの断りのコミュニケーションのモデルを得た。JNSは第1断りの表出までに、積極的な態度を表出したり、時間稼ぎをして回避することをしたりしながら、言葉少なく手短かに断りを表現することで、相手に断りの意図を察してもらうことを要求し、なるべく相手に期待を持たせないように、断りを伝達していると推測される。また、その表出された断りは早く受諾されるため、「第2の断り」以降の出現はほとんどなく、会話の収束が早いことが示唆された。一方、MNSは、相手の働きかけに対して積極的に関わっているという態度を示しながら、JNSよりも複数の機能を使用して具体的に断りを表現する。また、断りが表出されてからは、再勧誘されながら複数回の断りを表出する。その場合には、「付随表現」と「間接的断り」の組み合わせを使用して、「付随表現」を減少させ、「間接的断り」を中核として断りを進め、最終的には、

説得を用いるか意味公式使用数を増加させて、断りの意図を強く伝達することで会話を収束することが見られた（吉田 2015：127-128）。

吉田（2015）は、任（2004）、藤原（2004）を受け継ぎ、ロールプレイ調査方法を用いるのみならず、1回目以上の断り、断り発話の前後に着目し、談話レベルにおいて、勧誘から断りまで、第1断りから第5断りまで（再勧誘が起こりうることを前提とする）をそれぞれ考察し、動的に断り言語行動を捉える。DCTという発話にとどまった静的研究方法の代わりに、このような、談話レベルにおいて、断り言語行動を動的に捉える研究方法是、当今の研究傾向の代表的なものだとも言えよう。また、Beebe 他（1990）の意味公式をカテゴリーによって分類することをもとに、「直接的断り」「間接的断り」「付随的表現」を分析対象とするため、断り言語行動の連鎖及びパターンも明らかにし、全体的に各文化圏の断り行動の特徴を捉えることが可能となる。そして、両言語の断り言語行動の様相を動的に、全体的に明確にするにつれ、談話参加者の心理認知過程も多少なりとも伺える。しかし、被験者は女子学生のみ限定されている。また、親・疎、上下関係、物事の負担度などを考察に入れていないので、断り言語行動を完全に考察できるとは言えないだろう。

### 2.3.1.2.3 DCT とロールプレイを同時に用いる研究

DCT とロールプレイを同時に用い、2つの調査結果を対照比較する研究には、藤原（2004）と文（2007）が挙げられる。藤原（2004）は日本語学習者も対象とするため、そのまとめは2.3.1.3に譲る。本節では文（2007）の研究をまとめる。

文（2007）は、JJ(学生)84名、CC(学生)77名を被験者に、相手（指導教官、親しい友人、一般関係の友人）からの、引越しの依頼、送別会の誘い、勉強会の提案を各々断る状況を設定し、DCT とロールプレイの2つの調査方法を使用し、意味公式の発現頻度、**意味公式（発話量）の平均値**、意味公式の構造（プロセス）を分析することにより、両言語の断り発話行為の共通点と相違点を見出した。

2つの研究法による結果を対照しながら、以下の結論を得た。意味公式の発現頻度においては、両言語ともに場面の利益・負担度及び社会的地位、親・疎関係などに関わらず、{弁明}、{不可}、{詫び}、{言い淀み}（ロールプレイ）の意味公式が相次いで高い発現頻度になっている。特に、{弁明}が最も高い出現率が現れるという共通点が見られる。一方、日本語は上記の「高頻度の意味公式」に集中しており、「低頻度の意味公式」はあまり使用されていないのに対し、中国語は{情報の要求}、{代案}や{次回の約束}、{共感}といった話し手の積極的な気持ちを表す「低頻度の意味公式」を多用する方略も用いるという相違点もある。意味公式（発話量）の平均値から見ると、どの方法でも両言語共に「依頼」の場面、指導教官に対する発話量の平均値が最も高くなっているという特徴が見られる。しかし、如何なる異なる場面と相手に対する断り表現においても、中国語は日本語より全体的に発話量の平均値が高くなる。また、物事の利益・負担度及び相手人物の社会的地位や心理的距離感の差異により、両言語の断り表現の構造（主に各々第1発話と第2発話

に見られる意味公式に集中する)が異なってくるが見られた。また、日本語に全く見られない{呼称}も中国語に多く使用される。日本語に比べ、中国語に「弁明の多用」も多く見られるという中国語の特徴も述べている。

文(2007)の研究はDCTとロールプレイの2つの調査法の各々短所を補うために、2つの調査法を同時に採用し、依頼、誘い、勧誘の3つの場面を設定し、社会的地位、親・疎関係、場面の利益・負担度を社会変数とすることにより、データの科学性、完全性を保証できるが、以下の問題がある。①場面の負荷度の軽重(依頼>誘い>提案)は先行研究によって決められたものであるが、実際に具体的な物事により、必ずしも真実ではない可能性も十分あると考えられる。②ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの分類においては、{詫び}のほかにも、{不可}もネガティブ・ポライトネスに含まれること、意味公式(発話量)の平均値が高いほど丁寧な断り表現になるという発話量と丁寧度の関係性などに③文(2007)自身でも指摘されたように、{弁明}や{呼称}の意味公式をより具体的に、深く考察する余地がある。

#### 2.3.1.2.4 電話録音による研究

施(2007)は、JJ52名とCC52名を被験者に、大学生の親しい同性(先輩、同輩、後輩)からの依頼を断る場面を設定し、電話録音の調査法を用い、断りのストラテジー(使用順序、使用頻度、具体的内容)と断りの前後に見られる断り行動の展開パターンの分析により、両言語の共通点と相違点を明らかにした。ストラテジーから見ると、両言語ともに最初に「事情説明」(ママ)を用い、最後に「謝罪」を使用する。使用頻度においては、JJには「事情説明」が最も多く使用されるのに対して、CCの場合は、「謝罪」が最も多く見られる。また、DCTには見られなかった「食い下がり」(例えば、情報要求)や「気配り発話」(例えば、「無理ならいいのよ」)などが実際の会話資料に見られた。そして、ネガティブ・ポライトネスを中心としている日本語(文2007:161-162)においても、談話レベルから見ると相手のポジティブ・フェイスに積極的に訴えることがわかった。断り言語行動を前後の段階に分けてみれば、両言語に多用されたパターンが異なる。最後に、談話参加者の認知過程からみれば、依頼の切り出し方や断り方によって気まずさを増した会話の終わらせ方に違いが見られた。

施(2007)の研究は、より自然な会話データ(電話録音)を使い、断り発話のみならず、依頼、断り発話及び断り行動の前後にも焦点を当て、談話レベルの断り言語行動を動的に考察したため、ほかの研究と異なる結論を得たのは当然である。ただ、対面ではない電話録音のため、非言語的な要素を考察できない。また、社会的変数においては、上下関係のみを考察対象として、被験者も女子学生同士の会話のみに限られるので、断り言語行動を全体的に捉えたとは言いがたいという面がある。

### 2.3.1.2.5 まとめ

上記の日本語母語話者と日本語非母語話者の対照研究を概観すると、以前はDCTやアンケート調査法による断り発話を静的に考察する研究が主流を占めているのに対して、当今のロールプレイや電話録音などの自然談話により近いデータに基づく調査法による断り言語行動を談話レベルにおいて動的に捉える研究に変わりつつあるという変化が伺われる。特に断り言語行動の前後に注目し、断り行動の展開パターンや全体的様相を明らかにする研究が少しずつ増えてきた。しかし、まだ解決できないこともいくつかあると考えられる。①B&L (1987)のポライトネス原則はあくまでも、人間関係を維持しようとすることを前提とするが、上記の研究はほとんどが学生を被験者に、学校での出来事を場面とするため、B&L (1987)のポライトネス理論を完全に検証できないとも言えよう。換言すれば、学生はまだ社会に出ていないので、人間関係を維持しようとする意欲も社会人ほど強くないこともある(親友関係を除く)。そのような考えを持っている学生を対象とする研究では、B&L (1987)のポライトネス理論を検証できるとは言い難い。②同じ調査方法を用いているにもかかわらず、被験者の属性、分析内容、分析方法により結果が異なることが見られる。前述したように、山口(1997)の研究において、DCTによって得られた社会的変数の優先順位がほかの研究と大いに異なるのは、被験者の属性が異なるためであると推測できる。③上下、親・疎、男女差、社会的属性、物事の緊急度を同時に変数として分析している研究は少ない。④蒙(2010a)を除き、断り場面の設定基準は明示されていない。先行研究と予備調査をもとに、場面設定の経緯を明確にする必要があると思われる。⑤各意味公式やストラテジーの数、順序に集中する研究には形式に留まった研究が多いのに対して、異文化間の断り言語行動に見られる意味公式やストラテジー(特に、先行研究のいずれも、異文化、場面、相手との関係に関わらず、{理由}が最も重要な位置を占めることがわかった)の内容や機能、特にさらに談話参加者の心理過程を深く探る研究は少ない。⑥前述したように、断り言語行動を動的に捉える研究が増えてきたが、発話の切り出し方、スピーチレベルシフト、意味公式のカテゴリーの頻度、展開パターンなどを分析することにより、断り言語行動の全体的な姿を捉える研究は少ない。

### 2.3.1.3 日本語学習者を対象とする研究

日本語学習者を対象とする先行研究もかなりに進んでいる。しかし、大倉(2002)が述べたように、言語教育で断り発話をどう位置づけるか、何を、どの程度まで学習項目化するか、についてはさまざまな立場があり、にわかには確定しがたい。基本的には、母語話者と同じように行動することを学習者に求めるのか否かの立場のちがいが根底にあるからである(大倉2002:122)。ゆえに、学習者観から見ると、学習者の中間言語が目標言語母

話者に合わせるべきか否かにより、日本語学習者を対象とする研究を①「学習者のマイナス・トランスファーに焦点を当てる研究」、②「学習者の主体性を重んじる研究」と③「学習者に情報を提供する研究」の3つに分類できる。①「学習者のマイナス・トランスファーに焦点を当てる研究」においては、生駒・志村(1993)、藤森(1994)、ルンティエラ(2004)などが挙げられる。②「学習者の主体性を重んじる研究」を主張した岡崎(1995)、藤原(2004)の研究が見られる。③「学習者に情報を提供する研究」という研究立場をとった熊井(1992)、大倉(2002)などがある。その他、蒙(2010)、鈴木(2011)などの研究では、「逆行転移」が観察されたが、学習者観を明確に言及していない。本研究においては、日本語学習者の考察を今後の研究課題とするので、学習者を対象とする先行研究も詳細に述べないが、上記の③「学習者に情報を提供する研究」という学習者観をとって、今後の研究をつづけようとする。

## 2.3.2 中国における研究

中国においても、中国語のみを対象に、または中国語と非中国語を対象とする断り言語行動に関する研究も盛んに行われた。代表的なのは、马月兰(1999)、王愛華(2001)、呉建設(2003)、唐玲(2004)、龚萍(2005、2006)、王静(2012)などがある。従って、本節では上記の研究を概観していく。

### 2.3.2.1 王愛華(2001)の研究

王愛華(2001)は、Blumu-kulka(1984、1989)及びWood&Kroger(1994)を参考に、依頼を断る場面を設定し、中国人とアメリカ人を合わせて、200名の大学生を対象に、DCTによる調査を行った。さらに、断り行為を「中心言語行為」(中心的言語行為)、「辅助言語行為」(付随的言語行為)、「修飾語」(修飾語)の3つに分類した。そのうち、「中心的言語行為」を断り言語行為と直接的に関わる言語行為と定義する。Beebeら(1990)の意味公式分類に基づき、「中心的言語行為」を「直接的断り言語行為」、「間接的断り言語行為」、「意志または能力の否定」の3つに分けたが、その中には、{不可}、{理由}、{詫び}、{提案}などを含む。「付随的言語行為」においては断り言語行為の効果が増加または減少するが、断り言語行為と直接的に関わるものではないと定義され、{感謝}、{共感}などを含む。「修飾語」とは「中心的言語行為」と「付随言語行為」を修飾する役割を果たしていると定義する。「呼称」、「指示代名詞」、「談話文法」、「語彙」などを含む。この意味公式の分類に基づき、中国語と英語の依頼に対する断り言語行為を対照した上で、中国人とアメリカ人のいずれも、「間接的断り言語行為」を好んでいる。しかし、中国人では「間接的断り言語行為」がより多く見られたという結果がわかった。

王（2001）の意味公式分類では、「中心的言語行為」と「付随的言語行為」の判別基準が難しいという問題が残された。また、大学生を対象とする DCT 調査方法を用いたので、学生で見られなかった意味公式には言及されていない。

### 2.3.2.2 唐玲（2004）の研究

唐（2004）は、中国人の中青年の 60 名を対象に、DCT 調査方法を用いて、中国語における断り言語行動を考察した。唐（2004）は断り言語を「採用引語」（唐（2004）であげられた例によって、ほぼ Beebe ら（1990）の「付随表現」に当たる）、「词汇」（語彙）、「句法」（談話文法）の 3 つに分類した。そのうち、「採用引語」（「付随表現」）の中に「呼称」、「感嘆詞」、「詫び」、「感謝」などが含まれる。データの分析にもとづき、中国語では多種のストラテジーを用いて相手を断ったという結論が導き出された。

唐（2004）の研究では、断り言語表現を分類した基準が明確でない。とりわけ、「採用引語」（「付随表現」）を判別する基準が曖昧であると考えられる。また、被験者の年齢、断る場面の設定などに関しては、厳密性が欠けている問題が見られた。

### 2.3.2.3 龚萍（2005、2006）の研究

龚（2005、2006）は、中国人母語話者 20 名、英語を専攻している中国人の学生 20 名、アメリカ人英語母語話者 20 名を対象に、依頼、勧誘、提案、申し出などに対する断る場面を設定して DCT による調査を行った。龚（2005、2006）は、熊学亮（2003）の認知語用論の理論に基づき、文化、場面などのパラメータを問わず、中米双方の断り言語行為における認知モデルを探り出そうとする。実証調査の結果によって、龚（2006）は、どのグループのいずれにおいても、「間接的断り」が最も頻繁に多用されたので、「間接的断り」を断り言語行動のプロトタイプとする。さらに、「Cx→Rr」という断り言語行動における認知モデルを導き出した。このモデルの中で、C は認知コンテキスト、x は、文化的変数、R は、断りストラテジー、r は、ストラテジーの出現順序を表す。換言すれば、認知コンテキスト、文化的変数のようなパラメータによって、断りストラテジー及びストラテジーの出現順序の選択が変わるといふ認知モデルは、中米のいずれにおいても見られるわけである。この認知モデルを英語教育に応用すれば、短時間で英語学習者が英語における断り言語行動のパターンを身につけるだろうと提案した。

龚（2005、2006）の調査では、断り手の相手との社会的距離、力関係などを言及しなかったため、提出された断り言語行動における認知モデルも不完全であると考えられる。一方この調査方法では、学生のみを対象とする DCT の調査方法を用いて、学生で見られなかった断りストラテジーを考察できないという問題もある。とはいえ、今までの語用論に基づいた

断り言語行動に関する実証的研究と相違があり、認知語用論に基づいた実証的研究が新しい道を開いたことには大きな意味がある。

#### 2.3.2.4 王静（2012）の研究

王（2012）は、中国人と日本人の中青年の各々50名を対象に、依頼を断る場面を設定し、DCTによる調査を行った。断り言語行動に見られたストラテジーを「直接的断りのストラテジー」、「間接的断りのストラテジー」、「付随ストラテジー」に分類した上で、データを分析した。考察の結果では、依頼を断る場面においては、日本人は中国人より「直接的断りのストラテジー」を好んだ傾向が見られた。日本人の被験者では、「詫び+理由+直接的断り」のパターンが最も多用され、曖昧な{理由}も多く用いられたので、ネガティブ・ストラテジーが好まれた。それに対して、中国人の被験者では、ポジティブ・ストラテジーとネガティブ・ストラテジーが双方ともに多用され、具体的な{理由}、そしていくつかの{理由}の連続使用が多く見られた。

王（2012）の研究は、日本における断り言語行動に関する研究に近づき、被験者、場面などを含む調査方法を厳密に、詳しく提供したが、被験者の中で、20代から70代にかける年齢による断り言語行動の相違点を考察しなかった。また、あくまでもDCT調査方法なので、実際の会話とのずれがあると思われる。

#### 2.3.2.4 まとめ

上記の中国における断り言語行動に関する先行研究を、日本における研究と対照すると、以下の特徴が見られた。

第1に、被験者も文化も問わず、日本における研究のほとんどは、Beebeら（1990）の意味公式の分類に基づき、断り言語行動に見られた各意味公式の使用頻度、出現順序などをミクロ的に考察した。ミクロ的研究では、被験者、場面などがより厳密に設定され、データと結論との繋がりがより明確であるというメリットがあるが、一方、マクロ的な結論を発見できず、その一方で、詳しい結果のみに集中したため、外国語教育に応用しにくいというデメリットもあると思われる。それに対して、中国における研究は、意味公式またはストラテジーのカテゴリーによる分類を明確にした上で、データを分析したというマクロ的研究方法が伺われた。マクロ的研究の成果を応用すれば、学習者に目標言語の断りパターンを短時間でマスターさせうるというメリットがある一方、被験者、場面の設定、データの分類、データの分析と結論の繋がりに関しては、恣意性がよく見られたというデメリットも見られた。なお、中国における先行研究では、Beebeら（1990）の意味公式の分類のみならず、Blumu-kulka(1984、1989)及びWood&Kroger（1994）を参考にした分



類もあった。

第2に、日本における研究は、ほぼすべてが語用論の理論的枠組みに基づいた実証的研究であった。一方、中国における研究も語用論に基づく実証的研究を行ったが、認知語用論の枠組みで行われた実証的研究も見られた。すなわち、日本における研究より、中国における先行研究において、より新たな道が開かれたとも言えよう。

第3に、上記の中国における断り言語行動に関する研究のいずれも、DCTによる調査方法を用いた。それに対して、日本における研究では、DCT、ロールプレイ、メール、電話での録音などの調査方法が豊かに使用された。DCT調査方法は、自然会話から最も遠く、自然会話で多く使用された {あいづち}、{ためらい}、{情報確認・要求}、{繰り返し}などは、DCTでは観察し得ないと予想される。

従って、日本と中国双方における断り言語行動に関する先行研究のメリットを組み合わせ、より新たな理論、視点などに基づいた研究、より自然会話に近づこうとする調査方法、より厳密的な調査方法、分析方法などが今後の研究には望まれる。

### 2.3.3 {理由} <sup>11</sup>を中心にする研究

上記の研究を全体的に見ると、異文化、被験者の属性、場面、相手との関係などを問わず、{理由}というストラテジーが断り言語行動を成立させるために重要な機能を果たしているということがわかった。さらに藤森(1996)は、「関係修復行動」という観点から、「弁明」が関係修復行動において重要な行為であり、各々の社会での行動期待や義務として暗黙の了解ももとに成り立っているため、異文化間での相違が予測されると「弁明」の重要性を指摘している(藤森1996:6-7)。西村(2007)も、言い訳は断るために絶対になければならないというものではないが、実際には、断る際にはその理由を説明することが多く、この理由の説得力、妥当性如何がスムーズに断りを遂行できるかに大きく影響すると思われると言い訳の位置付けを明示している(西村2007:95-96)。ゆえに、理由を中心に行われた先行研究に注目する必要もある。

理由を中心にする研究は、さらに注目する内容により「理由の言語形式に着目する研究」と「理由の内容に着目する研究」の2つに分けられる。

#### 2.3.3.1 {理由}の言語形式に着目する研究

藤森(1995)は、「弁明」のJJ98名、CJ1の11名を対象に、誘い、依頼に対する断りの場面を設定し、DCTでデータを収集した。それで「弁明」の発話意図を明示的に示すマーカー<sup>12</sup>が日本語の場合は節末及び文末に現れることに注目し、分析を行っている(藤森1995:82)。従来、原因・理由などを表すマーカーである「カラ」「ノデ」などの研究は意

味論や文法論の分野で扱われることが多く見られるのに対して、藤森（1995）の研究は語用論の視点から、「カラ」「ノデ」などを使い分けている様子を探ることを目的としている。そのため、あくまでも言語形式の研究に留まっているということも事実である。

藤森（1995）と同じように「理由」に後続する表現形式（「から」と「ので」について考察を行ったものとして、カノックワン（1997）、鮫島（1997）、元（2003）、池田（2010）なども挙げられる。本研究では「理由」の言語形式を研究の対象外とするので、これ以上言及しない。

### 2.3.3.2 {理由} の内容に着目する研究

{理由} の内容に着目する研究においては、藤森（1996）、西村（2007）、池田（2009）などが挙げられる。

藤森（1995）の「弁明」の言語形式に注目している研究に続き、藤森（1996）は、さらに「弁明」の意味内容を関係修復の観点から考察している。藤森（1996）の研究において、「弁明」を断り行為に欠かせない関係修復行動において重要な行為であると位置付けているので、「誘い／依頼／申し出」の場面でどのような内容で断っているのかという DCT を用いて、JJ98 名、CJ49 名、CC14 名を被験者としてデータを収集した。藤森（1996）は森山（1990）によって提出された断りの方略（「嫌型」「嘘型」「延期型」「ごまかし型」）を参考にして、「弁明」を「率直型」「曖昧型」「嘘型」「延期型」「回避型」5つの方略に分類している。この5つの方略分類によって、各方略型の全体的使用傾向、各方略型の場面別使用傾向を分析して、3グループの弁明方略のバラエティーについて考察した。結果として、JJは全体的にCJ、CCよりも「曖昧型」をよく使用し、特に目上の人や親しくない相手に対しては典型的に用いられていると考えられるが、同じ「曖昧型」という方略においても、JJの発話には「他者への責任転嫁」の表現形式のものが多く見られたのに対して、CJはそのような形式のものがほとんど見られなかった（例えば、「すみません。今日はどうしてもはずせない用事がありますので、無理なんです。」（JJ6）、「今晚は病院の検査の予約があるんですが」（CJ178）（藤森 1996 : 15））から、CJの発話では、ほとんど「～ガアル」という表現を用いているため、十分に関係修復ができたと感じられない恐れがあり、誤解の原因になるとも考えられる（p. 16）。

このような90%以上の被験者の発話に見られた「弁明」に焦点を当て、異文化間での相違を考察し、言語形式と機能の関係を明確にしようとする研究は、学習者の言語習得には効率的であると考えられるが、研究方法においては、次の問題が残っている。まず、上記のように3グループの被験者の数はバランスが取れていないうえに統計的手法を使用しないので、グループ間の比較から得られた結果からは一般化ができないであろう。そして、JJの中で、学生、会社員、主婦などの社会的身分のばらつきがあるのに対して、CCはもっぱら学生であるという社会的身分においてもバランスが取れないので、グループ間の比較

はしにくいとも言える。次に、「曖昧型」と「嘘型」は峻別しがたいところがあるという問題も藤森（1996）自身でも指摘された（p. 10）。それは断る前提理由の内容の深刻さが異なることに起因するとも考えられる。どのように断る前提理由を設定すれば「曖昧型」と「嘘型」ははっきりと見えてくるのかについても、さらに検討する余地があるだろう。最後に、CJはJJに比べて、同じ「曖昧型」を用いるが、言語形式において、やはりJJとの違いが見られて、それも関係修復に影響を及ぼすと述べているが、聞き手の評価を考察しないかぎり、話者としてのCJの言語形式に違和感があるか否かについても究明されていないと思われる。また、聞き手にとって、話者の言語形式より「弁明」の具体的内容のほうが気になると考えられる。

西村（2007）は、日本、ニュージーランド（以下NZ）で友人同士のペア、各々32組、30組からの談話をロールプレイで収集し、2グループでそれぞれどのような内容の言い訳が用いられているか、言い訳に対し、誘う側はどのように反応しているか、誘う側の反応に対し、断る側は更にどのような反応を示しているかという3点において分析を行った（西村 p. 96）。分析の結果として、日本資料で被勧誘者が「忙しい」「体調不良」などの決まり文句の言い訳を使い、それに対して勧誘者は言い訳を単に「断りの記号」と理解して、言い訳の内容に基づくことなく更に勧誘し続けるか、更に詳細説明を求めてその言い訳の内容を確かめる場合が多いと言える。一方、NZ資料では「用事」という言い訳がよく用いられた。これを受けた勧誘者は時間を変更する等の譲歩案を提示したり、勧誘内容の肯定的な面を強調し交渉を試みたという言い訳の内容に基づいて会話を進めたという様式が見られる（p. 110）。

西村（2007）のように、「言い訳」の内容を中心に、一回の発話に留まらず、ロールプレイ方法による一回目の断り、再勧誘、二回目の断りを分析対象として、断り側のみならず、断られる側の反応、更に断れる側の反応に対して断り側がどの反応を示しているかというダイナミックな研究方法は先行研究の中で独自の道を切り開いていると思われる。従来の各意味公式の出現頻度、出現順序、意味公式の平均値を調べる研究は形式に拘りがち危険があることを補うため、談話レベルで各意味公式の内容及び談話展開をさらに質的方法及び量的方法で深く掘り下げる必要があると考えられる。ただし、西村（2007）自身でも指摘されたように、回答から断り側と断れる側の意図や認知心理を推論することに限られているので（西村 2007 :）、さらに談話参加者の両側に対するフォローアップインタビューを行う必要があるとも言える。

森山（1990）、林（1999）、西村（2007）の続き、池田（2009）も「理由」の内容、更に学習者が用いる「理由」に対する日本語母語話者の評価に焦点を当て、考察を行った。まず、日本語学習者88名と日本語母語話者30名から、目上からの申し出に対する断りという場面を設定しているDCTでデータを収集した。その回答に見られた「理由」の内容による「理由」を「時間的な不都合概略」、「時間的な不都合詳細」、「体調不良」、「その他」4つに分類した（池田 2009 : 163）上で、2グループに見られた理由を対照的に分析した。

結果としては、学習者の回答には「忙しい」「疲れた／疲れている」の使用が多く見られたのに対して、日本語母語話者が「体調不良」を理由にすることが多いことである。次に、上記の日本語母語話者 30 名を被験者に、日本語母語話者は、学習者の回答から選んだ 6 個の文に対して、どう感じるか「失礼-普通-丁寧」から選んでもらい、失礼を選んだ人には、更にフォローアップ・インタビューをするという日本語母語話者の評価に関する考察も行った。調査結果として、「忙しい」「疲れたので家に帰りたい」を理由として断ると、日本語母語話者が失礼だと思う可能性のあることが分かった (p. 171)。そして、フォローアップ・インタビューの結果によると、目上の人に対する断りでは、「自分」を優先させているような自分本位の理由は、日本語母語話者に失礼だと思われることもわかった。

池田 (2009) は、異文化間の断り表現における「理由」の内容の対照研究のみではなく、聞き手 (日本語母語話者) の評価も考察している。このような研究方法は、「理由」の内容を中心に対照的考察を行う研究でより深く一步を踏み出してきた点において、意義があると考えられる。ただし、先生からの申し出に対する断りという 1 つの場面だけに基づいた分析は、学習者の用いる「理由」の様子の一側面しか捉ええないとも言える。もう一つ注意を払うべきだと思われるのは、日本語母語話者の評価において、学習者 88 名の回答から、6 個の文しか選ばなかった基準は何であるかについて明示されていないことである。

### 2.3.3.3 まとめ

上記の {理由} に集中する研究、特に {理由} の内容を分析する研究は、断り言語行動を社会心理学と結びつけ、談話参加者の行動様式をより深く理解でき、話し手と聞き手の心理過程を深く探るアプローチを可能とする。同じ {理由} の内容に注目するが、各々異なる角度から考察を行った。藤森 (1996) は「弁明」に焦点を当て、言語形式と機能の関係を明確にしようとする研究である。西村 (2007) はロールプレイ方法による一回目の断り、再勧誘、二回目の断りを分析対象とするダイナミックな研究である。池田 (2009) は聞き手 (日本語母語話者) の評価も考察している。ところが、いずれも下記の問題があると考えられる。①弁明・言い訳を中心に研究を行う場合、断る前提理由の設定は大切なものと思われる。前述した池田 (2009) のように、断る前提理由を慎重に設定している経緯から見ると、わかるように思われる。そうでなければ、藤森 (1996) のように、回答で「曖昧型」と「嘘型」との峻別も難しくなるという結果も出てくるだろう。②意味公式の分類と同じように、弁明の内容による分類もさまざまである。それは研究目的、場面設定 (断る前提設定も含まれる)、相手との関係、被験者の社会的属性などに起因する可能性もあると考えられる。③西村 (2007) と池田 (2009) 共に日本語学習者の用いる断り表現で重要だと思われる「弁明・理由」の内容に注目する研究であり、いずれも扱っている学習者の中で、アメリカ人、ニュージーランド人をはじめとする西洋文化圏に属する学習者が多かった。日・中両言語及び日本語学習者の用いる「弁明・理由」の様式を明確にする研究

は相当に限られている。ゆえに、本研究で、日・中両言語の母語話者が用いる「理由」の内容に注目して分析を行うことにより、両文化圏の共通点と相違点を明らかにしていきたい。

### 2.3.4 他の研究

上記の断り言語行動に見られる意味公式の出現頻度、出現順序、展開パターンを考察した研究と相違、談話参加者の相手に対する評価、心理認知過程などに着目した研究も見られる。そのうち、断り手の発話に対する評価を考察した小野・劉(1998)、岡田・杉本(2001)、水野(2003)、元(2005)、断り手の勧誘、依頼に対する態度が断り言語行動に及ぼした影響を研究した深田ら(2016)、断られる側の心理認知過程を探った目黒(1996)、王(2013)などが挙げられる。その他、日本語学習の教科書における断り表現を考察したカノックワゴン(1995)、劉・小野(1997)などがある。

### 2.3.5 先行研究のまとめ

前述したように、日本における研究と中国における研究のいずれも、DCTやロールプレイなどの調査法により、被験者の断り言語行動に見られる意味公式の出現頻度、出現順序、発話量、展開パターンなどを分析した研究は従来の断り言語行動で主流を占めている。また、日本における研究を外観することによって、DCTのような1発話のみに集中して分析を行う発話レベル、静的研究の代わりに、ロールプレイによる断りの前後、自然の会話によく見られる依頼と断り行動が何度も繰り返されるような談話参加者の相互的やりとりにも注目して分析を行う談話レベル、動的研究が増えていく傾向が見られる。一方、{理由}の言語形式や内容、談話参加者の認知心理などに着目する研究も現れ、上記の主流を占める断り言語行動に関する研究と異なる視点から考察を行ったが、これらは散在しているのみで、系統的に研究を行っておらずという周辺的研究であると位置付けられる。

## 2.4 残された課題と本研究の位置付け

上記のとおり先行研究を概観した結果、残された課題と本研究の位置付けが明らかになった。以下において、この2点について述べたい。

## 2.4.1 残された課題

先行研究で残された問題点は、次のようにまとめられる。

- (1) 先行研究の概観によると、異文化間の相違点のみに、または中間言語語用論を枠組みとし、学習者の「マイナス・トランスファー」のみに注目した研究が多く見られた。しかし、中間言語語用論における「トランスファー」には「マイナス・トランスファー」と「プラス・トランスファー」があるので、「マイナス・トランスファー」のみならず、「プラス・トランスファー」、即ち共通点にも目を向けて研究を行えば、その研究成果を日本語教育に応用することで日本語の習得に寄与できると予測する。ゆえに、日中の断り言語行動に共通している部分を考察する必要もあると考える。
- (2) 調査方法や研究視点などの相違に拘らず、ほとんどの研究は学生のみ集中している。B&L (1987)のポライトネス原則は人間関係を維持しようとするを前提とするが、学生はまだ社会に出ていないので、人間関係を維持しようとする意欲も社会人ほど強くないとも言える(親友関係を除き)。ゆえに、学生のみに着目する実証的研究は、B&L (1987)のポライトネス理論を完全に検証できないとも言えよう。したがって、学生のみならず、社会人も対象とする研究を行う必要もあると考える。
- (3) 従来の研究においては、各意味公式の出現頻度、出現順序、意味公式の平均値を調べる研究が多く見られたが、ただ形式にこだわりがちになると思われる。そして、宇佐美(2002③)で述べたように、B&L(1987)のポライトネス理論の「普遍性」を認めた上で、各言語行動をより包括的、かつ、ダイナミックに捉えて、社会科学の重要テーマの一つとして位置付けられている。ゆえに、言語形式や機能のみならず、さらに「理由」の内容を分析する先行研究と同様に、意味公式の内容を分析して、さらに被験者に対するフォローアップ・インタビューによって、断り手の心理的過程を探る研究の意義がより大きいと考える。
- (4) 前述したように、日本における研究でミクロ的の実証的研究が主流を占めるのに対して、中国における研究ではマクロ的研究が多く見られたという相違点が現れた。それぞれの長所と短所を補うために、日本における研究にも、会話の構造と、意味公式のカテゴリーの分類によって、マクロ的研究を行う必要もあると考える。

## 2.4.2 本研究の立場

前述した先行研究で残された問題を踏まえて、本研究は、B&L(1987)のポライトネス理論を理論的枠組みとし、学習者に情報を提示し、学習者に見られた「マイナス・トランスファー」のみならず、「プラス・トランスファー」にも目を向けて、学習者によりわかりやすい情報を提示する立場に基づき、言語形式のみならず、断り言語行動の内容も分析して、研究を進めていきたいと考える。

より厳密的な場面設定と、より自然な会話に近いデータに基づき、日中両言語の母語話者を対象

にし、両言語に現れる特徴を明らかにする。なお、研究対象の社会的属性による差異も究明したい。さらに、各グループの言語行動で見られる意味公式の内容及びその原因を言語学、社会学、社会心理学などの学際的な視点から、分析をしようとする。

## 第3章 研究方法

### 3.1 データ収集方法の比較

断り言語行動で最も扱っている意味公式の分類はデータ収集方法によって、大いに異なることもあるので、研究を行う際に、まずデータ収集方法を明確にすることが必要である。

前述の先行研究で扱っているデータ収集方法には、自然談話の録音・録画、DCT、ロールプレー、電話録音などがある。どの方法でもそれぞれの長所と短所があるとよく言われる。これらのデータ収集方法の長所と短所を以下のようにまとめる。

まず、自然談話の録音・録画による収集したデータは実際に使われている言葉なので、最も理想的な方法である。しかし、対象とする事象の十分なデータを集めるのに膨大な自然データが必要となること、さまざまな状況変数をコントロールすることができないため、比較可能なデータが得にくいことに加えて、データの書き起こしなどの処理に手間がかかるなどという短所が挙げられる（清水 2009：36）。また、自然なデータといっても、観察者が完全に自然な形で人間の行動を観察すること自体が不可能である（Labov1972:209 メイナード 1993：64）という指摘もある。

第2に、断り言語行動の先行研究で最も多く使われているのはDCTである。その理由は実施の容易さと効率性にある。大量のデータを短期間に収集し、量的分析に基づき、結果を一般化することができる。また、被験者の背景や状況的文脈などの条件をコントロールすることも容易である（清水 2009：44）。特に、対照分析を研究目的とするなら、他の言語社会でも似たようなデータを探することができる（メイナード 1993：64）。一方、Beebe&Cummings(1996)によると、DCTのデータは、①現実のインタラクションで使われる実際の言葉遣い、②使われる意味公式やストラテジーの範囲、③返答の長さや発話行為を完遂するのにかかるターンの数、④言語行為の調子、内容、形式に質的に影響する感情の深さ、⑤繰り返しや推敲の数、⑥発話行為の実際の発生率（Beebe&Cummings1996：80 清水 2009：45）において、実際のデータと異なるという欠点を指摘した。

第3に、ロールプレイはDCTに続き、断り言語行動に関する研究で多用されている方法である。ロールプレイにおいて、対象者への指示を最小にとどめ、なるべく自由に自然な形で会話ができるようにすれば多少はその不自然さを補うこともできる。一方、コントロールされた状況でなされ、一定の経歴を持つ対象者を選ぶことができる。異なった言語社会でも類似した状況でデータを収集することができる利点もある（メイナード 1993：65）。さらに、談話の展開や流れ、多くの談話ターン（turn talking）を動的に捉えることができる。そして、DCTで見られない繰り返し、言い淀み、非言語的要素なども観察できる。しかし、ロールプレイによって得られたデータは自然談話とまったく同じものではない（清



水 2009 : 39) という短所も指摘された。そして、DCT に比べて、場面の単純化、データ量がそれほど多くないため、結果を一般化しにくいという限界もある。

## 3.2 本研究のデータ収集方法

メイナード (1993 : 66-67) によると、実際のデータと分析の視点とはお互いに密接に結びついている。まず、2.1 で述べたように、自然談話によるデータを収集する方法は、状況や変数をコントロールできないため、実際に操作しにくいという欠点があるので、本研究の調査方法としない。日中両言語の全体像を捉えるなら、DCT によって、膨大なデータを得て、量的分析ができるが、被験者が想像した言葉にすぎなくて、1 ターントーキングの発話のみにとどまり、実際の会話分析に相応しくないと考える。本研究は語用論を中心に、対人コミュニケーション学、社会心理学の視点も加え、数回のターントーキングの考察を通じて、談話の展開パターンや流れを捉え、談話参加者の相互的作用を動的に捉える立場を取る。そのため、状況や変数がコントロールされながら、自然談話により近いロールプレイ調査を行うこととする。

### 3.2.1 データ収集地と期間

本研究は日本語と中国語における断り言語行動を対照するために、調査は日本と中国で行われた。調査期間は 2016 年 8 月から 2016 年 12 月の 4 ヶ月である。

### 3.2.2 被験者と仕掛け人

本調査は、日中の社会人と学生の誘い、依頼を断る場面を設定したため、調査対象は、被験者の年齢、文化、場面によって、8 つのグループに分かれる。誘いを断る場面においては、日本語母語話者の社会人 10 名 (以下は JJ1 とする)、日本語母語話者の大学生 10 名 (以下は JJ3 とする)、中国語母語話者の社会人 10 名 (以下は CC1 とする)、中国語母語話者 10 名 (以下は CC3 とする) を被験者にして、誘いに対する断り言語行動を対照した。依頼を断る場面においては、日本語母語話者の社会人 10 名 (以下は JJ2 とする)、日本語母語話者の大学生 10 名 (以下は JJ4 とする)、中国語母語話者の社会人 10 名 (以下は CC2 とする)、中国語母語話者 10 名 (以下は CC4 とする) を被験者にして、依頼に対する断り言語行動を対照した。上記の被験者は合計 80 名である。社会人の年齢は 30 歳から 80 歳まで、大学生の年齢は 18 歳から 23 歳までである。調査対象の詳細は、表 3-1、表 3-2、表 3-3、表 3-4 の通りである。

表 3-1 社会人の勧誘を断る場面における被験者の構成

データ番号	年齢	出身	性別	データ番号	年齢	出身	性別
JJ1F1	60代～70代	茨城	女性	CC1F1	30代～40代	遼寧省	女性
JJ1F2	40代～50代	茨城		CC1F2	40代～50代	遼寧省	
JJ1F3	40代～50代	千葉		CC1F3	40代～50代	遼寧省	
JJ1F4	60代～70代	東京都		CC1F4	40代～50代	遼寧省	
JJ1F5	60代～70代	埼玉		CC1F5	70代～80代	遼寧省	
JJ1F6	40代～50代	新潟		CC1M1	40代～50代	遼寧省	
JJ1M1	70代～80代	神奈川	男性	CC1M2	40代～50代	遼寧省	男性
JJ1M2	60代～70代	群馬		CC1M3	40代～50代	遼寧省	
JJ1M3	50代～60代	茨城		CC1M4	60代～70代	遼寧省	
JJ1M4	40代～50代	静岡		CC1M5	30代～40代	遼寧省	

表 3-2 社会人の依頼を断る場面における被験者の構成

データ番号	年齢	出身	性別	データ番号	年齢	出身	性別
JJ2F1	40代～50代	埼玉	女性	CC2F1	40代～50代	遼寧省	女性
JJ2F2	60代～70代	千葉		CC2F2	40代～50代	遼寧省	
JJ2F3	40代～50代	神奈川		CC2F3	40代～50代	遼寧省	
JJ2F4	40代～50代	茨城		CC2F4	40代～50代	遼寧省	
JJ2F5	60代～70代	千葉		CC2F5	30代～40代	遼寧省	
JJ2F6	60代～70代	千葉		CC2F6	40代～50代	遼寧省	
JJ2F7	40代～50代	茨城		CC2F7	40代～50代	遼寧省	
JJ2F8	30代～40代	東京都		CC2F8	40代～50代	遼寧省	
JJ2M1	60代～70代	栃木	男性	CC2M1	70代～80代	遼寧省	男性
JJ2M2	50代～60代	茨城		CC2M2	40代～50代	遼寧省	

表 3-3 学生の勧誘を断る場面における被験者の構成

データ番号	学年	出身	性別	データ番号	学年	出身	性別
JJ3F1	大学1年	千葉	女性	CC3F1	大学1年	遼寧省	女性
JJ3F2	大学2年	青森		CC3F2	大学1年	遼寧省	
JJ3F3	大学2年	茨城		CC3F3	大学1年	湖南省	
JJ3F4	大学2年	埼玉		CC3F4	大学1年	浙江省	
JJ3F5	大学院1年	千葉		CC3F5	大学1年	遼寧省	
JJ3F6	大学4年	群馬		CC3M1	大学1年	遼寧省	

JJ3M1	大学1年	千葉	男性	CC3M2	大学1年	遼寧省	男性
JJ3M2	大学1年	茨城		CC3M3	大学1年	遼寧省	
JJ3M3	大学1年	千葉		CC3M4	大学1年	遼寧省	
JJ3M4	大学1年	千葉		CC3M5	大学1年	遼寧省	

表 3-4 学生の依頼を断る場面における被験者の構成

データ番号	学年	出身	性別	データ番号	学年	出身	性別
JJ4F1	大学2年	千葉	女性	CC4F1	大学1年	浙江省	女性
JJ4F2	大学2年	茨城県		CC4F2	大学1年	江蘇省	
JJ4F3	大学2年	福島県		CC4F3	大学1年	遼寧省	
JJ4M1	大学1年	宮城	男性	CC4F4	大学1年	遼寧省	男性
JJ4M2	大学1年	千葉		CC4M1	大学1年	遼寧省	
JJ4M3	大学4年	神奈川		CC4M2	大学1年	遼寧省	
JJ4M4	大学院2年	東京都		CC4M3	大学1年	遼寧省	
JJ4M5	大学院2年	東京都		CC4M4	大学1年	遼寧省	
JJ4M6	大学4年	埼玉		CC4M5	大学1年	遼寧省	
JJ4M7	大学4年	茨城		CC4M6	大学1年	遼寧省	

誘い側と依頼側の言語表現によって、断る側の断り言語行動が異なるので、誘い側と依頼側は、社会人と大学生の母語話者各々1名の仕掛け人に限定しようとするが、仕掛け人の誘い表現または依頼表現は母語話者の代表的な言語行動であるか否かに対する疑問が現れた。従って、仕掛け人の言語表現と母語話者の代表的な言語行動のずれを最小限にするために、仕掛け人の数を増やした。JJ1 では誘い側の仕掛け人が3名、JJ2 では依頼側の仕掛け人が3名、JJ3 では誘い側の仕掛け人が5名、JJ4では依頼側の仕掛け人が5名、CC1 では誘い側の仕掛け人が2名、CC2 では依頼側の仕掛け人が2名、CC3 では誘い側の仕掛け人が5名、CC4 では依頼側の仕掛け人が5名、合計30名の仕掛け人からご協力を得た。

### 3.2.3 場面の設定

場面をより厳密に設定するために、予備調査を行った。先行研究でよく見られた断る場面と予備調査1に基づき、本調査の場面を設定した。そして、予備調査2の結果によって、場面の設定を修正した。

### 3.2.3.1 予備調査 1

先行研究のまとめと予備調査の結果に基づき、依頼と勧誘に対する場面を設定する。学生と社会人の共通している遭遇しやすい場面を明確にすることを目的として、JJ1(社会人)20名、JJ2(学生)20名、CC1(社会人)20名、CC2(学生)20名を被験者に、場面設定の予備調査を実施した。予備調査の調査用紙は、被験者によって、JJ1、JJ2、CC1、CC2の4つに分類される(詳細は文末付録1参照)。場面設定の科学性を保証するために、予備調査の内容は、先行研究から抽出した場面から、上位3つを選んでもらう項目と、自由に遭遇しやすい断り場面を空欄に書き込んでもらう項目、2つからなっている。ちなみに、先行研究と実際調査双方を合わせて、場面をより厳密に設定できる。そして、自然会話に近づけるように、予備調査1を2回行った。予備調査の結果に基づき、どのグループにおいても、上位1位になっている断り場面は食事(パーティーまたは飲み会)の誘いを断る場面であることがわかった。2位の場面は異文化、被験者の社会的属性による異なることが見られた。JJ1の場合は、上司からの残業を頼まれることを断る場面が2位で、JJ2の場合は、アンケート調査の頼みを断る場面が2位である。CC1の場合は、友人からの子供の面倒を見てくれるような頼みを断る場面が2位で、CC2の場合は、クラスメートからのレポート(宿題)の手伝いの頼みを断る場面が2位である。しかし、いずれのグループにおいても、お金の貸し出しを断る場面が3位である。上記の結果から、異文化や社会的属性による2位である遭遇しやすい場面が多いに異なるのに対して、3位である場面はほぼ同じであったため、お金の貸し出しを断る場面に集中することがわかった。ゆえに、異文化対照や社会的属性の対照ができるように、本研究では、どのグループでも共通している場面は①食事(パーティーまたは飲み会)の誘いを断る場面、②お金の貸し出しを断る場面、2つにする。

相手との関係の設定は、場面によって異なる。誘いを断る場面においては、大学生の場合は、上下関係や親・疎関係によると、断られる側を親しい先輩、親しくない先輩、親しい同級生、親しくない同級生に設定する。社会人の場合は、断られる側を①お世話になったり、何か教えてもらった(または非常に高齢かつ/活動的な/在職時代社会的地位が高かったなど)親友、②お世話になったり、何か教えてもらったりした(または非常に高齢かつ/活動的な/在職時代社会的地位が高かったなど)、親しくない人、③親しい同年配(または仲間意識を感じる)の親友、④親しくない同年配(または仲間意識を感じない)の人に設定する。一方、依頼を断る場面においては、実際に先輩または年上の人からお金の貸し出しを依頼されるのはまれであるので、大学生の場合は、断られる側を親しい同級生、親しくない同級生、親しい後輩、親しくない後輩に設定する。社会人の場合は、①断られる側を親しい同年配(または仲間意識を感じる)の親友、②親しくない同年配(または仲間意識を感じない)の人、③年齢が年下(または世話をした/幼馴染)の親友、④年齢が年下(または世話をした/幼馴染)、親しくない人に設定する。

### 3.2.3.2 予備調査2

予備調査1に基づき、友人の送別会の勧誘と、金銭の貸し出しの依頼を断る場面を設定した。さらに、自然会話に近いかな否か、実際の調査が順調にできるかな否か、また被験者の負担度などを明確にするために、予備調査2を行った。具体的に言えば、予備調査1の結果による遭遇しやすい断り場面を設定し、社会人の日本語母語話者 JJ6名と学生の中国語母語話者 CC6名を対象に、誘い、依頼を断るロールプレイ調査を試みた。そしてロールプレイ調査後、被験者の断る負担度、自然な会話に近いかな否か、自分の断り言語行動に対する自己評価などについて、アンケート調査とフォローアップ・インタビューも実施した。予備調査2で、以下の問題が見つかったうえで、場面の設定を修正した。

1. 誘いを断る場面においては、日本人の被験者では、友人の送別会の誘いを断らないまたは断れない人が多かったので、送別会の日時を「一週間後」から「明日」に変更した。無論、明日の送別会を急に勧誘するのは、失礼であると思われるが、被験者の断る負担度が減少し、より自然会話に近づいたデータが得られる。
2. 依頼を断る場面においては、社会人と学生のいずれにおいても、親しい友人から小金額のお金の貸し出しを依頼されたら、断らないまたは断れないというケースが多かった。従って、被験者の提案を尊重して金銭の金額を小金額から大金に変更した。それも被験者の断る負担度を減らすためである。

権(2009)のロールプレイ調査では、日韓の断る表現を対照するために、断る側が何の理由で断るか、働きかけ人が何回勧誘または依頼するかなどの制限がロールプレイカードに詳しく明示されているので、被験者が制限に拘りすぎて、自然に近い会話データを収集するのが難しいと考えるので、本調査では、理由の内容、断る回数などは、すべて被験者に任せることにした。

### 3.2.4 本調査

本調査においては、ロールプレイのデータ収集方法をとった。ロールプレイによる調査後に、即時に断り言語行動に見られた特徴またその原因、心理的過程、会話の自然さなどについて、断り手を対象にしてフォローアップ・インタビューを行った。

#### 3.2.4.1 ロールプレイによる調査

3.2.3で述べた調査対象に、①食事(パーティーまたは飲み会)の誘いを断る場面、②お金の貸し出しの依頼を断る場面のそれぞれロールカードを提示し、なるべく自然な会話を演じてもらう。各グループでは、仕掛け人と被験者が1ペアを組んでもらい、親・疎関係と上・同関係または同・下関係によって、4つのロールプレイを演じてもらって、被験者のご同意を得た上で、

会話の動画を録画した。1つのグループで40会話を録画して、8つのグループで320会話のデータが得られた。ロールカードの内容は付録を参考にする。

### 3.2.4.2 フォローアップ・インタビュー

上記の調査を補い、自然なデータを得る同時に、断り手の心理的活動を探り出すために、さらにロールプレイに協力してくれた80名の被験者を対象に、フォローアップ・インタビューを行った。インタビューの時間は1名の被験者ずつ平均2分ほどであった。インタビューの前に、以下の質問を準備した。

- ① 相手の誘い方または頼み方についてどう思いますか。
- ② 日常生活でも送別会の勧誘を断るまたは借金の依頼を断る経験はありませんか。
- ③ 自分の断り方についてどう思いますか。
- ④ 相手との関係の中で、どの関係に対して一番断りにくいですか。どの関係に対して一番断りやすいですか。

そして、ロールプレイを実施する際、筆者が気づいた断り言語行動における目立っていた特徴について、ロールプレイ調査済みの被験者に考えや原因も求めた。例えば、日本語母語話者のJJ1で現れた「あんまり親しい人でもそんなにお金の貸し借りっていうのをしないので」のような{原則的陳述}は、日常生活でも常に使われるかと、JJ1の被験者に答えを求めた。また、中国語母語話者の被験者にも、上記の{原則的陳述}が日常生活で使われるかという質問を出した。

## 3.2.5 文字起こしの手順

ビデオ録画によるデータをすべて文字起こした。文字起こしの作業は、日本語母語話者1名(録画の編集に詳しい社会人)と中国語母語話者4名(日本語言語学を専攻している大学院生)に依頼した。この作業を始める前に、担当者に文字起こしに関する宇佐美(2005)の基本原則を伝えた。ちなみに、担当者がだいたい宇佐美(2005)のBTSJに基づき、文字起こした。そして、筆者が録画によってチェックをした。文字起こしの表記方法は、宇佐美(2005)に基づき、施(2007)、権(2009)、吉田(2015)の文字化方法も参考に、以下のようにまとめる。

まず、BTSJでは、「発話文」を「発話された文」と定義する。基本的には、話者が交替するたびに改行する。しかし、話者が交替しなくても、同一話者が複数の「発話文」を続けて発するときには、「発話文」ごとに改行する。また、相手の発話に重なる短い小声のあいづちや笑などは、( )に入れて、相手の発話の中の最も近いと思われる場所に挿入する(宇佐美 2005:3)。本調査の文字起こしにおいては、「よみやすさ」の原則を重視した上で、同一話者が複数の「発話文」を続けて発するときには、改行しないことにするが、話

者の発話に重なる短いあいづちや笑いなどは、( ) にいれて、相手の発話の中の最も近いと思われる場所に挿入する。また、BTSJにおける「ライン番号」を用いて、発話された順序を表す。さらに、本調査は日中両方の母語を対象とする調査であるため、具体的に本調査で用いられた記号を以下のように示す。

。 文末のイントネーションが認められ、文法的に文と認められる発話が終わる所。

、 1発話文及び1ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。

， 1発話文及び1ライン中で、中国語表記の慣例の通りに読点をつける。

? 疑問

! 驚き

イントネーション 通常よりイントネーションに変化が見られる場合、上昇[↑]、下降[↓]とする。

／沈黙 秒数／ 1秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。

… 言い淀みを表す

( ) 短いあいづちなど(例えば、「はいはい」／「嗯嗯」)を( )で括る。

～ 長音

(笑) 笑いを表す

### 聞き取り不能であった部分につける。

なお、本調査では、「A」は誘い手または頼み手、即ち仕掛け人、「B」は断り手をそれぞれ表す。プライバシー保護のために、データで見られた場所や機関、個人の名は各々「00(姓名)」(または「0(姓)」、「00(名)」、「00さん」と記す。

本調査において記録された会話資料の2例を示す。

- 1A あのだ、00さんね、あの、私たちのお友達の00さんがね(うん)、今度あの、アメリカにスピリチュアリズムの勉強で(はい)一年行くのね(うん)。それで、あの、急でとっても悪いんだ、明日、あの、夕食会をやろうと思うんだけど(あ～)来てくれないかなあ？
- 2B 明日ちょっとダメなんだよね。明日自分やることあるんだよお。行きたいんだけど。
- 3A いや～、困ったなあ。その、やることってのは1日伸ばせない？
- 4B (笑)伸ばせないんだよね～ごめんなさい(あ～)。伸ばせればいいんですけどね。
- 5A 私がお手伝いすることできないかなあ？
- 6B プライベートなもので。
- 7A できな～い？う～ん困ったなあ。じゃあしょうがない。00さん抜きの(ごめんごめん)寂しい送別会にしよう。どうもありがとね～。
- 8B ごめんなさ～い。(JJ1M3 親・同)

1A 哎，O(姓)姐，你现在有空吗？

2B 哎，有空呀，怎么了？

3A 有个事儿。我家吧，就是，缺点儿钱，我要买房子，贷款，然后人家一周就要钱，我首付还差2万块钱，看你能不能借我一下。

4B 哎呀，2万呢。我家钱大部分都买理财了，手头现钱也不多，前两天刚给孩子补课，交了1万。我现在，啧，也一下子拿不出来这么多，要是2、3千的还行，2万实在是有点…。

5A 也是，你这儿孩子刚上初中，补课什么的开销也挺大的（是呀）。行，那我就再问问别人吧，谢谢你啊。

6B 嗯，好。（CC2F6 親・同）

訳

1A O Oさん、今空いている？

2B うん、いいよ。どうしたの？

3A ちょっとお願いしたことがあるんですけど。ちょっとお金が足りなくて、家を買いたいんですけど、ローンで、1週間後頭金を出すことになった。まだ2万元足りない。貸してくれる？

4B あら、2万元か。うちはお金をすべて投資に使っちゃった。今手元にあまり現金を持ってないし、この間に息子の塾料も一万も払ったばかりです。今、まあ、急に大金を出せない。2、3千元ならいいですけど、2万元はちょっと…。

5A そうだね。息子さんも中学校に入ったばかりで、塾なんてお金が結構かかっちゃうね（そう）。はい、ほかの人に当たってみる。ありがとうね。

6B うん。（CC2F6 親・同）

### 3.2.6 コーディングの手順

コーディング作業は筆者が行った。まず、Beebeら（1990）を元に、藤原（2004）、吉田（2015）などを参考して修正した意味公式を作成した。次に、筆者は起こした文字の意味、機能などによって、意味公式にコーディングした。それから、コーディングの恣意性を最小限にするために、日本語の場合は、語用論研究者（筆者の指導教官）と、中国語の場合は、語用論専攻の中国語を母語とする大学院生の1名にコーディングしてもらった。その依頼したコーディング結果と自分の結果とを比べながら、異なった意見を、話し合いの上合意した。さらに、コーディング作業の中で、{あいづち}と{応答・返事}の判別が最も難しかったので、あいづちの研究者の1名にも{あいづち}と{応答・返事}の分類もチェックしていただいた。



### 3.3 分析方法

本研究の分析方法においては、ザトラウスキー（1993）を参考に、会話の構造によるデータの分析を行った。また、先行研究を参考に、本調査の方法、収集したデータに基づき、意味公式を分類した。最後に、意味公式と B&L(1987)のポライトネス理論におけるストラテジー、また相手のフェイスを脅かす度合い（FT）の大きさとの関係について述べた。

#### 3.3.1 会話の構造

本研究においては、断り言語行動に関するマクロ的研究も試みようとする。従って、断り会話の全体的構造を考察するために、会話の分析単位、さらに会話の仕組みを明確にする必要がある。ただし、会話の構造を分析するに先立って、「会話」、「談話」、「話段」、「発話」の概念を明らかにしておく。まず、ザトラウスキー（1993）によれば、「会話」とは、いくつかの「談話」からなる全体的構造である（ザトラウスキー 1993 :60）。本研究でも南（1981）、ザトラウスキー（1993）の定義に従う。さらに、ザトラウスキー（1993）は、「談話」の下の単位として、「話段」<sup>12</sup>という単位を新たに設定した。最後に、「発話」を「話段」の構成単位であると定義した（ザトラウスキー 1993 : 64）。ゆえに、本研究では、ザトラウスキー（1993）の定義に従い、「会話」>「談話」>「話段」>「発話」という4つの単位の大きさに基づき、断り会話の仕組みを分析していく。

ザトラウスキー（1993）は、会話には一定の仕組みがあり、多くの言語行為は会話の枠組みが存在するという仮定の下に成立している（p. 5）と述べている。さらに、1回の電話による会話の「全体的構造」は、「開始部」、「主要部」、「終了部」という3つの談話からなるとした（p. 60）。ザトラウスキー（1993）のほかに、堀口（1997）も会話の構造を明らかにして、会話を「始まり」、「進行中」、「終わり」の3つの部分に分けた。本研究の調査からみると、被験者の文化的背景によって異なる断り表現が見られたが、会話の全体的構造には、共通点が見られた。したがって、本研究でも、堀口（1997）、林（2008）、ザトラウスキー（1993）の会話構造の区分を参考に、「誘い」や「依頼」に対する断り言語行動を「開始部」、「断り行動の談話」、「終了部」という3つの談話に分類する。

Schegloff (1968)によると、「開始部」は「呼び出しに対する答え」・参加者の「自己提示」とその「了解」・「挨拶」からなることが明らかにされている（ザトラウスキー 1993 : 60）。本研究においては、誘い手（または頼み手）が発した「勧誘」（「依頼」）談話に至るまでの話し手と聞き手の挨拶などを含むやりとりを、「開始部」とする。本研究では、「開始部」があるものと、ないものの、2つのパターンが出てきた。それにはロールプレイを始める際の状況、仕掛け人及び被験者などからの影響が見られる。本研究は断り手の断り言語行動を中心に考察するため、仕掛け人の誘い手（頼み手）を考察から除外した。従って、会

話の「開始部」も本研究の考察対象にはならない。

また、誘い手（頼み手）が発した「勧誘」（「依頼」）談話から「終了部」の開始までの談話を「断り行動の談話」とする。さらに、「断り行動の談話」を、「勧誘（依頼）話段」と「勧誘（依頼）・断り話段」の2つに細分する。「勧誘（依頼）・断り話段」は、さらに「1度目の断り」、「2度目の断り」、「3度目の断り」などからなっている。「断り行動の談話」の終結から会話の終結までの談話を「終了部」とする。

実際の会話においては、会話の「開始部」が主要部である「断り行動の談話」と重なり、必ずしも明確な切れ目があるわけでない。また、会話の「終了部」が「断り行動の談話」と重なっていることもある。特に、会話の「断り行動の談話」と「終了部」の切れ目が明確ではない例がよく見られた。堀口（1997:181-196）は、終結部の開始の提示を8種類にまとめた。①時間の提示。②自分の行動の提示。③相手の行動の提示。④共同の行動の提示。⑤約束の提示。⑥了解の提示。⑦お礼や詫びの提示。⑧一方的な突然の切り上げによる終結部の開始を挙げた。

本調査では、上記の⑤、⑥と⑦のほかに、「別れの挨拶」、「励ましの挨拶」などの提示による終結部の開始もよく見られたので、データで見られた「ありがとうございました」、「ごめんください」、「皆さんにもよろしくお伝えください」、「頑張って」、「バイバイ」「それじゃあしょうがないかあ」、「行、我们也理解」（うん、わかった）、「谢谢你哈，帮我跟00（姓名）解释一下」（ありがとうございました。00さんに解釈しといて）のような約束の提示（関係維持のための将来の約束）、「了解」、「お礼や詫び」、「別れの挨拶」、「励ましの挨拶」などの提示によって、会話の「終了部」の開始とする。また、「終了部」の開始から会話の終結までの談話を「終了部」とする。

しかし、以下の例はJJ1 男1 誘い-1 の終結として挙げられた。会話の終結においては、「詫び」の提示が見られたが、7Aにおいて誘い手が3度目に勧誘を試みようとしたため、8Aにおいて断り手が{願望} + {詫び} のパターンで相手を断った。このような終結において{詫び}の提示が見られたが、断り言語行動と深く関わるので、「終了部」とせず、「3度目の断り話段」とした。

3度目の断り

7A そうなんですかあ（すいません 申し訳ない）。せっかくね、一年も行っちゃうので最後にお別れをした  
いと思ったんですけどねえ。

8B 行きたいんだけど、申し訳ない。（JJ1M1 親・上）

また、調査のデータによって、誘い手または頼み手と断り手の間のやりとりは、1回のやりとりのみならず、断り手が再び勧誘（依頼）の行為を行ったという一連のやりとりがよく見られた。1回目の勧誘（依頼）と再勧誘<sup>13</sup>（再依頼）の境目は、倉本・大浜（2008）、吉田（2015）、黄明淑（2016）を参考に、断り手が「不可」、「具体的な理由」、「情報不足の理由」、「ためらい」、「困惑」などの意味公式で相手を断った言語行動に対して、誘い手（ま

たは頼み手)が断りへの不満を表したり、情報不足の理由について聞き返したり、断り理由を否定したり、自分の勧誘(依頼)の理由を再び提示したり、提案したりするストラテジーの提示によって、「再勧誘(再依頼)」と判断できる。ゆえに、本研究においては、倉本・大浜(2008)、鄭(2010)、吉田(2015)、黄明淑(2016)を参考に、「再勧誘(再依頼)」と判断できる意味公式の分析枠組及び発話例を表3-5に示す。

表3-5「再勧誘(再依頼)」の意味公式の分析枠組(倉本・大浜(2008)、鄭(2010)、吉田(2015)、黄明淑(2016)を参照、筆者改定。中国語例の和訳は括弧で示す。)

意味公式名	機能	発話例
断り理由の否定	断り手の理由に対して、否定する。	そんなことないですよー。／だってー、豊かに暮らしてるじゃない?／多接触接触不就熟了嘛。(何度も付き合ったら、知り合いになるんじゃないか。)
代案の否定	断り手の代案に対して、否定する。	お母さんに言ったら殺されちゃうよ!／そうなんですよ、いろいろ友達とか、あと00さんとかにもいろいろ回ってるんですけど。
再勧誘(再依頼)の理由	再勧誘(再依頼)を継続する理由を述べる。	えー、けど、みーんな明日がいいって言って、いいお店も取れたしい。／真，真是就是时间紧，啊，就是马上就交。(たしかに時間厳しい。ちなみに、すぐ頭金を出すことになった。)
情報確認・要求	相手の断りに対して、さらに具体的な情報を求めたり、聞き返したりすることによって、勧誘(依頼)を続ける。	あの、大変失礼だけど、先約ってなんだか聞いてもいいかな?／あのう、いつまで待てば大丈夫ですか?／行きたくないの?行かない?／なんで
代案提示	問題解決の方法として、ほかの代案や方法を提示することによって、勧誘(依頼)を続ける。	あの、時間ずらすとか。／あーあの、よかったら私の方からご主人様にお電話差し上げてもいいんですけど／啊，那那个，嫂子那边儿没有钱哈?(あのう、奥さんのほうはお金を持ってるでしょう。)
譲歩提示	断り手の都合に合わせて、譲歩を提示する。	けどいいよ、全部来れなくても。最後に顔だしてくれれば、挨拶がてら顔だけだしてくれれば。／10万円はどうでしょうか。
意志要求	断りに対して、さらに意志決定を求める。	いいじゃん!／そこをなんとかー、できないかなあ。／どうか貸してはくれませんか?
共同行為要求	誘い手が断り手に共に参加するよう働きかける。	哎呀，我也想去，你就陪我去呗。(まあ、行きたいので、一緒に行こうよ。)

躊躇	相手の断りに対して、再び迷いやためらいを示す。	どうしよう。
褒める	断り手を褒めたりすることによって、再勧誘（再依頼）行為を正当化させる。	だっていつもね、「おはよう」「いいお天気ねー」って、にこにこして挨拶してくださるから私ねおばちゃんのこと大好きなのよね。で、きっとこの人なら貸してくれると思ったんだけど、ダメ？
断りへの不満	相手の断りに対して、不満や批判を述べる。	你这懒鬼。（怠け者！） / 你这么对 00（名）啊！（00（名）にそんなに冷たいの？）

なお、会話例で「再勧誘」の展開を説明していく。JJ1F3 親・同の例では、4B においては、断り手が「ちょっと野暮用が入ってて…」のような情報不足の理由で断ったが、5A においては、誘い手が「野暮用」について、詳しく教えてもらおうという手段で2度目に勧誘を行った。誘い手の再勧誘に対して、断り手が 6B においてより詳しい情報を提供した。

#### 1 度目の断り

4B あー、どうしましょう。んー、行きたいのは山々なんですけど、ちょっと野暮用が入ってて…。

#### 2 度目の断り

5A えー、野暮用なんて言わないでちゃんと教えてよー。

6B どうしたらいいんだろー。よその家で私ね、ご馳走するって言ってしまったんですよ

7A あ、ケータリング。

8B うん、そうなの。

9A あー。そうかー。

10B だからちょっと、他の人に、もう少し時間があればね（そうだよねー）、他の方に私できないからって（そうだよねー）。（JJ1F3 親・同）

まとめると、本研究では、ザトラウスキー（1993）、堀口（1997）、林（2008）を参考に、本調査のデータに基づき、「誘い」や「依頼」に対する断りの会話構造を「開始部」、「断り行動の談話」、「終了部」の3つに分類した。さらに、「断り行動の談話」を「勧誘（依頼）の話段」と「勧誘（依頼）・断り話段」の2つに下位分類した。なお、吉田（2015）を参考に、「勧誘（依頼）・断り話段」を「1回目の断り」、「2回目の断り」、「3回目の断り」などに細分した。勧誘（依頼）に対する断り会話構造を図1のように区分する。本研究は「断り行動の談話」（「勧誘（依頼）の話段」と「勧誘（依頼）・断り話段」からなる）と、「終了部」に焦点を当てて考察する。

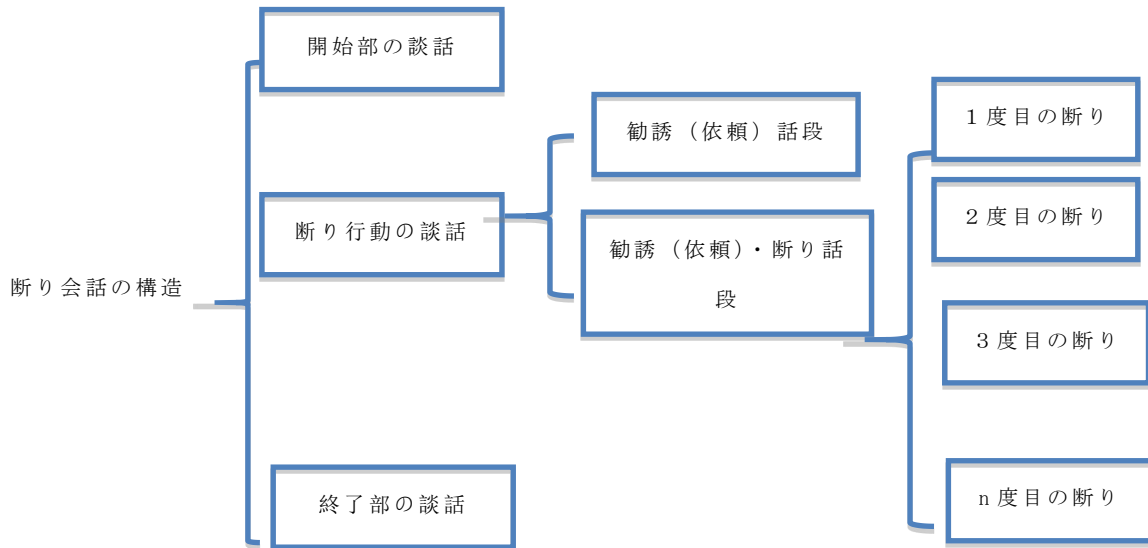


図 3-1 「誘い」や「依頼」に対する断り言語行動の構造

図 3-1 の説明として、以下の例をあげる。

開始部

- 1A あ、豊田さんお久しぶりです
- 2B お久しぶりです
- 3A お元気ですか？
- 4B はい、この間は展覧会観にきていただいてありがとうございました。
- 5A ああ、素晴らしかったです、すごいですね。
- 6B いえいえとんでもない。

断り行動の談話

依頼話段

- 7A あの、こういうところで、大変、こんなこと申し上げるのは僕としても本当に、自分に心外なんですけれども（うなずき）、今もうすぐ選挙がありまして（ええ（うなずき）、選挙資金でにっちもさっちもいなくなってます（はい（うなずき）、きっと豊田さんだったら助けていただけるんじゃないかと思いまして（あー（うなずき）、あの、もし良かったら 10 万円貸していただけないでしょうか？

依頼・断り話段

1 度目の断り

- 8B んー、そうですねー。んー、あの一、最近ちょっと台風で屋根が壊れて修理しなきゃいけなくなっちゃいまして（はい）、なんかお金が出たばかりなんですよ。で、今ちょっとね、もうちょっと先行けば、あの、年金も入るので用立てることもできると思うんですけど（あっそうですかー）、すぐというわけにはちょっと。申し訳ないですが…。

2 回目目の断り

- 9A あの、いつまで待てば大丈夫ですか？

10B そうですね、いつ頃までに必要なんですか？

11A えーっとね、1ヶ月ぐらい。

12B あー、じゃあまたその時にあの、都合がつけばまた、ちょっと今はっきりわからないので（ああ、そうでしょうねえ）、すぐできますとも（はい）言い切れないので（はい）。ちょっと変な中途半端な断りで申し訳ないんですけど（あっ、わかりました。）、すみません（はい）。なんかもっと、なんかお近くでできる方いらっしやらないですか。

終了部

13A 貸してくれそうな人はみんな当たっちゃったんで（あー）、最後の綱だったんですけども（えー！）、まあでも、致し方ありません。あの、家内に泣きつくことにします。どうもありがとうございました。

14B すみません本当に役に立てず、すみませんです。（JJ2F11 疎・同）

会話 JJAF5-11 依頼-2 は、会話構造がはっきりしている典型的な例である。会話は全体的に「開始部」、「断り行動の談話」、「終了部」という3つの談話からなっている。

1. 開始部：1A から 6B までの談話はまだ依頼の本題に入っていないので、この段階を「開始部」とする。

2. 断りの談話：7A-12B のように、頼み手が発した依頼談話から、終了部までの段階を「断り行動の談話」とする。

① 依頼話段：「断り行動の談話」のうち、7A のように、断り手が1回目の断り言語行動を発するまでの段階を「依頼話段」とする。

② 依頼・断り話段：断り手が発した {理由}、{詫び}、{条件提示}、{不可}、{代案} などの断り言語行動と深く繋がる話段から、頼み手が2度目依頼言語行動を発して、断り手が2度目依頼を断る言語行動までの段階を「依頼・断り話段」とする。そのうち、8B のような話段を「1回目の断り」として、9A-12B の段階を「2回目の断り」とする。「1回目の断り」と「2回目の断り」の境目は、9A のような頼み手が依頼を諦めずに、更に時間などの具体的な質問を出したことである。

終了部：13A-14B のように、頼み手が依頼を諦める「了解」、「お礼」や「詫び」などのマーク、または断り手が発した「詫び」などの談話を終了させるマークが提示されたので、この段階を「終了部」とする。

### 3.3.2 意味公式の分類

断り言語行動に関する意味公式の分類で、最もよく知られ、利用されてきたものは Beebe ら（1990）によって提案されたものであると考えられる。この分類は以下のようにまとめられる（Beebe 他 1990:72-73 に基づく 清水訳 2009:132-133）。以下の意味公式において（ ）内の例は筆者による（王 2015:90）。

### I Direct(直接的なもの)

1. 遂行動詞 (Performative) (e. g. 「お断りします」)
2. 非遂行的陳述 (Nonperformative statement) (e. g. 「今日には行けません」)

### II Indirect(間接的なもの)

3. 後悔の陳述 (Statement of regret) (e. g. 「すみません」「残念ですが」)
4. 希望 (Wish) (e. g. 「また今度誘ってください」)
5. 弁解 (Excuse) (e. g. 「今日は体調がよくないので…」)
6. 代案の陳述 (Statement of alternative) (e. g. 「あさってなら大丈夫ですが」)
7. 未来や過去の承諾のための条件設定 (Set condition for future or past acceptance) (e. g. 「早く言ってくれたらいいのに」)
8. 将来の承諾の約束 (Prominse of future acceptance) (e. g. 「今度はぜひ行きます」)
9. 原則の陳述 (Statement of principle) (e. g. 「友達と取引はしないことにしてるんだ」)
10. 哲学の陳述 (Statement of philosophy) (e. g. 「人は何でも完璧にはできないものだよ」)
11. 相手を思い止まらせる試み (Attempt to dissuade interlocutor) (e. g. 「そんなのやめといたら」)
12. 断りとして機能する承諾 (Acceptance that functions as a refusal) (e. g. 「うーん、たぶんね」)
13. 回避 (Avoidance) (e. g. 「考えさせてもらいます」)

### III 補助

1. 肯定的意見・同意の気持ちの陳述 (Statement of positive opinion/feeling of agreement) (e. g. 「それはいい考えしかし…」)
2. 共感の陳述 (Statement of empathy) (e. g. 「それは大変ですね」)
3. つなぎ言葉 (Pause fillers) (e. g. 「えーと」「あのうー」)
4. 感謝 (Gratitude/appreciation) (e. g. 「ありがとうございます」)

Beebe ら (1990) が提唱した意味公式分類は、英語と日本語の DCT に基づいて作成されたものであるため、調査対象によってはそのまま使用することはできない。場面の設定、調査対象、データ収集方法によって新たな意味公式が追加されることも無論であると考えられる。

横山(1993)がロールプレイを用いた考察に基づいて得られた意味公式は Beebe 他(1990)の意味公式と大いに相違、「自分の主義、曖昧な回答、興味無し、やる気欠乏、詳細を聞く」などを追加した。また、Beebe 他 (1990) の意味公式で、英語以外の言語に当てはまらな

い意味公式もある。たとえば、「原則的陳述、哲学的陳述」は日本語母語話者と日本語学習者を対象とする研究にはあまり見られない。しかし、横山（1993）の意味公式の分類は曖昧で、各意味公式の定義が明確でないという問題が残された。

Beebe 他（1990）の意味公式に修正を加えた藤森（1994:5-6）は DCT で得られたデータに基づいて、意味公式を「結論（Beebe 他「直接的なもの」に当たる）、弁明、詫び、代案、関係維持、共感、感謝、間投詞の表出、ためらい・反復、相づち」という 10 種類に分けている。最後の 3 種類は追加されたものである。藤森（1994）の意味公式もよく参考にされている。

本研究では、日中の社会人と大学生の誘いまたは依頼に対する断り言語行動を対照するために、ロールプレイ調査を行った。先行研究の意味公式の分類と比べると、本調査のデータで現れなかった意味公式もあれば、先行研究で現れなかった意味公式もある。従って、Beebe ら（1990）を元に、横山（1993）、藤原（2004）、任（2004）、吉田（2015）などを参考に、本調査で出現した意味公式及び機能、それにふさわしい例を表 3-6 に示す。

表 3-6 意味公式の分類（中国語例の和訳は括弧で示す）

意味公式の カテゴリー	意味公式	機能	日本語例と中国語例
直接的断り	不可	能力・状況の不可能、意志や気持ちの表明などで、相手の意向に添えないことを明示的に表明する。	ちょっと明日は無理かもしれないですねー。／貸せない。／人に金を貸してる場合ではないのね。 我可不去。／不能帮你了。（私は行かない。／助けてあげない。）
	遂行	断る遂行動詞で断りの意志を表す	我就拒绝这次，这个活动吧。（今回の送別会をお断りします。）
間接的断り	理由	相手の意向に添えない言い訳を説明する。	ちょっと明日は外せない用事があってー／俺も今お金が無いから、 不熟，不熟我觉得很尴尬。／现在手里头没有太多。（あまりよく知らないので、ちょっと恥ずかしいです。／今手元に現金をそれほど持ってないし。）
	条件提示	できる場合とできない場合を同時に示し、断りを正当化する。	もう少し早く言ってくれてたら。 要是改成后天吧，俺家别人值班我就能去了。／你说个，一两千的，还，还没啥事儿。（明後日に変更するなら、当番を代わってくれる人がいれば行けるんけど。／千元 2 千円ぐらいなら、大丈夫ですけど。）



詫び	相手の意向に添えない謝りの気持ちを表す。	申し訳ありません/ 申し訳ないですけど/すいません/ごめんなさい
		对不起/不好意思/抱歉(すみません/ごめんなさい/申し訳ありません)
願望	相手の意向に添いたい積極的な気持ちを表す。	すごい行きたい、お世話になったしすごい行きたいけど、/貸したいのは山々なんだけど、
		要过去吧，嘖，真是，愿意参加。（行くといえば、うん、本当に行きたいんですけど。）
言いさし	相手の意向に添えない意志を最後まで言わず、自分の気持ちを相手に察してもらう	ちょっと…。
		但是呢，这些场合呢，很难…。(だって、この場合なら、厳しい…。)
関係維持	将来の約束や頼みなどに言及し、相手との関係を維持したいことを表す。	またあった時には。/OOちゃんにメッセージ送るんで(うん)、それだけ伝えといて?
		以后有机会吧。/行，要不我请你吃饭，弥补一下。(今度チャンスがあったら。/うん、その代わりに、ご飯を奢ろうか。)
遺憾	相手の意向に添えないことに残念な気持ちを表す。	ちょっと残念かなあー。
		你说赶的巧不(あいにくですが、)
相手を思い止まらせる試み	相手が自分の断りを受け入れるよう働きかけ、自分の断りを正当化する。	でも遅れるのも失礼だよ、/3万円も払えないのになんで友達に金貸すんだよ、お前バカでしょほんとに。
		完了我去了还影响大家，/那你不能换个地儿吗?那地儿方多贵啊。(行ってもみんなに迷惑をかけるだろう/場所を変えてもいいですか?あそこの家賃はめっちゃ高いじゃん。)
代案	問題解決の方法として他の方法を提示する。	お母さんに言ったほうがいいんじゃないの?/他の人とかに聞いた?そのお金を借りられる友達とか。
		下周不行吗?/我张罗大伙聚一聚得了。(来週なら、どうですか?/今度みんなで集めようか。)
保留	断るか、受諾するかを明示せずに、即座の断りを回避する。	あのちょっとでも、一応その、都合がつけるかどうか、向こうの旅館さんの方とゼミ生に聞いてみますんで、ちょっとお待ちいただけますか?
		对，然后，完了之后，我再电话联系。/然后我问问再给你回信儿吧!(そうです。それで、終わったら、電話で連絡する。/それじゃ聞いてみよう。また返

		事をしよう。)	
原則的 陳述	自分の原則や信念を示し、断りを 当化する。	友達なくしちゃうから、とってお金の貸し借りで、 前、貸しちゃって、気まずい思いになっちゃってす ごい、親友だと思ってたのに、それで…。やっぱり それは、親友をなくすから、 你也知道我的现在这个位置，跟那个下属就是同事之 间如果有太多的金钱交易，是不是领导不太好。（私 のポジション（立場）がわかるでしょう。部下に、 同僚の間にあまり金のやりとりをしたら、上司の悪 いでしょう）	
付随表現	肯定的 表現	相手の意向に対して興味を示し、 肯定的な気持ちを表明する。	あーら素敵 这个这个，真太好了啊，这么长时间，好长时间没见 面了，见见面真是个好事儿。（そりゃそりゃ、素敵で すね。長い間、ずっと会ってなかったから、会えて よかったですね。）
	あいづ ち	相手の発話に協力したり、同意し たりする役割を果たしている。	はい／うん／そうだね／そっかー 対対／嗯／好（そうそう／うん／いいね）
	困惑	困った気持ちを表す。	ああ、そうですかー。／どうしましょう。 我挺为难的，（ちょっと困りますね、）
	ためら い	自分の気持ちを表す前に、間を持 たせるフィラー的役割をする。	あの一／夜…んー…。 我就…／明天晚上啊…，（僕なんて…／明日の夜 か…）
	驚き	驚きを表す。	～さんの送別会！？／明日！？／3万円かー！ 这么多啊！（結構大きい額じゃん！）
	情報確 認・要 求	相手が提供した情報について、よ り詳しい情報を求めたりもう一度 情報を確認したりするために聞き 返す。	皆さん行かれます？／それでいいですかー？ 啊，首付，还差多钱呐？／啊，那天那谁那个，（姓） 00那个哈？（あ、頭金って、どのぐらい足りない の？／ああ、00さんか。）
	共感	相手の状況に対して理解を示す。	事情はわかりますけど、 这买房子也是个大事呀，解决孩子的事，父母帮着想 办法，这事理所应当的。（家を買うことも大事だか ら、子供のことに對して、親から考えてもらうこと も、当たり前じゃん。）
	否定の	断りの意向を表す前に否定的な	非常に失礼な言い方なんですけど、

前置き	ヒントを相手に与える。	你这挺有钱啊，你这百八十平的房子我这，都买不了那房子。（だいぶお金持ちですね。80、100 平米の家って、うち買えないよ。）
感謝	相手の好意に対する感謝の気持ちを表す。	ありがとうございます。
		谢谢哦。还来通知我来了。（ありがとうね。わざわざ教えにくれる。）
呼び掛け	相手の呼称を呼ぶ	先生
		00（姓）姐／领导／哥们儿（00（姓）お姉さん／リーダ／兄さん <sup>14</sup>
挨拶	別れの挨拶、相手を励ますための挨拶。	頑張って。／バーイ。／じゃあね。
		别，别难过，这种事情，肯定会有解决的嘛。／拜拜。／再见。（悲しむな。こういうこと、必ずいつか解決するよ。）
ヘッジ	自分の意向を緩和する。	ちょっと
		有点多（ちょっと大きい額だね。）
その他	上記に該当しないもの	ちょっとですね。／まあ／お願いいたします。
		你也知道，／是不？／哎呀（知ってるように、／です？／まあ）

本調査のデータで、上記の各意味公式の間の境界線が曖昧である問題もあった。この問題について、以下のように意味公式の分類を修正した。

まず、意味公式の上位分類、即ち意味公式のカテゴリーの分類は、日本における実証的研究では多く見られなかったが、中国における研究ではよく見られた。本研究では、Beebeら（1990）の意味公式のカテゴリーの分類及び吉田（2015）の分類に倣い、意味公式を「直接的断り」、「間接的断り」と「付随表現」に分類して、断り言語行動におけるマクロ的な特徴を捉えようとする。

次に、「直接的断り」とほかの意味公式カテゴリーの判別は簡単であるが、「間接的断り」と「付随表現」の峻別が難しい。先行研究では、藤原（2004）はBeebeら（1990）での「間接的なもの」（「間接的断り」に当たる）と「補助」（「付随表現」に当たる）を「間接的戦略」に統一した。Beebeら（1990）の「間接的なもの」（「間接的断り」に当たる）に分類した {願望}、{「補助」（「付随表現」に当たる）で見られなかったが、本調査で見られた {あいづち}、{困惑}、{ためらい}、{驚き} などの意味公式は、「間接的断り」に分類するか、「付随表現」に分類するかという問題もあった。本調査では、断り言語行動に間接的に、深く関わる意味公式を「間接的断り」に、断り言語行動に関わるが、語彙、文、談話レベルの手段で補助の役割を果たしている意味公式を「付随表現」にそれぞれ分類した。

この基準に基づき、主に Beebe ら (1990) の「間接的断り」の分類に倣い、{理由}、{詫び}、{代案}、{条件提示}、{願望}、{遺憾}、{原則的陳述}、{相手を思い止まらせる試み}を「間接的断り」に分類した。また、「OOちゃんにメッセージ送るんで、それだけ伝えといて」と「また、会った時には」のような表現を、Beebe ら (1990) では {将来の約束の承諾} とするが、本研究においては、相手との関係が維持できる機能を表すので、{関係維持} とする。また、「それにちょっと聞いてみて。」のような表現はを、Beebe ら (1990) では {回避} とするが、本研究においては、断り手が断るか、受諾するかを明示しないことを表すために、{保留} とする。なお、Beebe ら (1990) で見られなかったが、本調査で見られた「ちょっと…」のような表現は、談話の最後に出たので、最後まで言わずに断りの意向を示した。従って、本研究においては {言いさし} とする。つづいて、Beebe ら (1990) の「付随表現」の分類においては、{肯定的な表現}、{共感}、{つなぎことば}、{感謝} の4つの意味公式のみあったが、本調査では、前述した4つの意味公式の他に、{困惑}、{ためらい}、{驚き}、{情報確認・要求}、{呼びかけ}を、吉田 (2015) に倣い、「付随表現」に分類した。また、吉田 (2015) の分類になかった {あいづち}、{否定の前置き}、{挨拶}、{ヘッジ} は、本調査でも見られたので、「付随表現」にも分類される。

それから、同じ表現でも、談話のコンテクスト、イントネーション、口調の強さなどによって、異なる意味公式に分類することもある。例えば、「明日なんですか」の表現では、上昇のイントネーションで「情報確認・要求」とするが、下降のイントネーションで、そして音が伸びているものを「ためらい」とする。

最後に、本調査で現れた断り手の「応答・返事」は、仕掛け人の次第であるので、考察対象外とする。そして、「まあー」、「あ」、「いや」、「お願いします」、「你知道 (ご存知のように)」などは、語彙、文、談話レベルの修飾語 (王愛華 2001 を参考) に当たるので、本調査では、その他に分類して、考察対象外とする。

### 3.3.3 意味公式と断りのストラテジー、FT の関係

B&L (1987:60 訳は宇佐美 2002e:105) によって提出されたストラテジーは、①FT (相手のフェイスを脅かす) 軽減行為なしの直接的表現、②ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーと③ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを含む FT 軽減行為を行うストラテジー、④オフ・レコード・ストラテジー (非明示的なストラテジー)、⑤相手のフェイスを脅かさない行為 (例えば、断らない行為) の5つに分かれた。さらに、②ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーと③ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、④オフ・レコード・ストラテジーの下位分類では、40のストラテジーが挙げられた。B&L(1987)はあらゆる言語行動に見られたストラテジーを分類したが、断り言語行動に見られた意味公式を、

B&L(1987)のどちらのストラテジーに分類するのか、言及されていない。断り言語行動に関する先行研究では、意味公式とストラテジーの置き換えは述べられたが、以下のように、研究者によって、曖昧で、そして異なる分類が行われている

B&L (1987 : 60) では5つのストラテジーが挙げられたが、意味公式をポジティブ・ストラテジー、ネガティブ・ストラテジーの2つのみに置き換え、日本語と日本語非母語話者の断り言語行動を対照する実証的研究が多く見られた。蒙 (2010:92) は、ただ断り言語行動におけるポジティブ・ストラテジーとネガティブ・ストラテジーを考察し、{結論}({不可}に当たる)、{言いさし}、{条件}などが、ポジティブ・ストラテジーとネガティブ・ストラテジーのどちらにも分類されないので、考察対象から外した。断りストラテジーで重要な位置を占めている {不可} ({結論}) はポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーのどちらにも入らずに、without redressive action, baldly(FT 軽減行為なしまたは「直接的断り」)に属する。日本語で重要視される {言いさし} (例えば、明日はちょっと…) は、Off record (非明示的または伝達意図を明示的に表さずほのめかす) に該当する。しかし、上記の意味公式は蒙の研究では分析対象ではないとすることに疑問が生じる。さらに蒙 (2010:90-92) は {理由}、{代案}、{共感}、{感謝}、{呼称}、{賞賛} をポジティブ・ポライトネス・ストラテジーに分類する。一方、{詫び}、{関係維持}、{確認}、{承諾}、{間投詞的表出}、{ためらい、相づち} はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーに当てはまる。しかし、本調査のデータに基づき分類した意味公式では、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーのどちらにも入らない {不可} が多く見られた。また、{関係維持} はDCTによる調査と相違、詳しい表現で相手との関係が維持できる役割を果たしているのので、本研究においてはポジティブ・ストラテジーに分類する。そして、同じ {呼称} の中でも、相手を尊敬し、相手との距離を拡大する機能を果たすネガティブ・ストラテジーもあれば、相手を仲間同士で呼び、相手との距離を近づける役割を果たすポジティブ・ポライトネスもある。従って、同じ意味公式でも、ポジティブ・ストラテジーとネガティブ・ストラテジーのどちらにも分類する問題もある。

李 (2013:29) は、意味公式の下位分類によって、{さらに聞き手と話し手のポジティブ・フェイスまたはネガティブ・フェイスを分かれて考察した。李 (2013:29) の分類によると、同じ {理由} の中でも、「明確な理由」を話し手のポジティブ・フェイスに分類したが、「不明確な理由」を話し手のネガティブ・フェイスに分類したことがわかった。また、同じ {代案} においても、「自分から働きかける」を表す {代案} を、聞き手のポジティブ・フェイスに分類したが、「自分は回避する」(例えば「ほかの人に当たってみて」) のような {代案} を、話し手のネガティブ・フェイスに分類した。しかし、{理由}、{不可}、{代案} などをさらに下位分類したが、このような分類は表現と前後のつながり、つまりコンテキストを考慮せずに分析を行ったので、やはり静的な研究に陥った。本調査のデータに基づき、{不可} と {理由} の下位分類においては、同じ表現でも、コンテキストによって、そ

れぞれ異なる分類も現れた。例えば、「できない」のような{不可}表現は、もともと「能力・状況」に分類すべきであるが、その前後に理由が1つも現れなかったので、「意志」に分類した。一方、その前後に{理由}が現れた場合、不可表現を「能力・状況」に分類したこともある。

従って、本研究においては、意味公式とストラテジーの置き換えのみならず、断り言語行動のコンテキストに基づき、意味公式の内容をさらに細分類して分析を行おうとする。

また、2.1.4.1で述べたように、B&L(1987:60)によって「フェイス侵害行為」(Face Threatening Act: FTA)とFTAリスク(フェイスを脅かす度合い)見積もりの公式も提出された。それに対して、宇佐美(2002④:101)は、話し手が聞き手との「社会的距離(D)」、「力関係(P)」、「相手にかける負荷度(R)」などの社会的・文化的要因の重みを「総合的に」見積もって、その「度合い」に応じた言語行動を選ぶという、ある程度、予測可能で、動的な捉えかたに変化したと評価する。

ゆえに、本研究の分析に先立って、聞き手のフェイスを脅かす度合い(FT)を取り入れた。即ち、本調査で多く見られた意味公式である{理由}、{不可}の内容を分類する際に、聞き手のフェイスを脅かす度合い(FT)の大きさによって、{理由}、{不可}の内容を分類して考察を行った。

# 第4章 調査1 — 社会人対象の勧誘に対する 断り言語行動

本章では、調査1 — 日中の母語話者である社会人を対象に、勧誘に対する断り言語行動に関する調査の結果を述べた。その分析は会話の構造による分析、意味公式の量的分析、意味公式の内容分析及び表現形式の分析からなっている。

## 4.1 勧誘を断る言語行動の会話構造

本節においては、3.3.1で提示した会話構造による分析方法を使用する。まず、各話段の意味公式の使用数及び使用平均値を対照した。次に、意味公式のカテゴリー及び各意味公式の展開パターンの対照を行った。最後に、日中の母語話者である社会人を対象とする断り言語行動の会話構造を抽出した。

### 4.1.1 話段ごとの断り言語行動の日中対照

3.3.1で提示した会話の構造で、社会人を対象とする断り会話を「勧誘話段」、「勧誘・断りの交渉」、「終了部」の3つに分かれた。本節において、各話段の意味公式の使用数及び平均値の日中対照を行う。

#### 4.1.1.1 勧誘話段

誘い手が勧誘を発してから、断り手が{理由}、{不可}、{詫び}などのような、断りに深く関わる意味公式で1回目相手を断る行為に至るまでの言語行動を「勧誘話段」とする。この話段においては、断り手がほとんど{あいづち}、{情報確認・要求}、{ためらい}などの「付随表現」で、誘い手の勧誘言語行動に参加して、会話を進める特徴が観察される。

1A      あのね〇〇さん(うん)、知ってた? XXちゃんがねニュージーランドにさ(うん)、自然食の研究に半年勉強に行くんだって(えー)。すごいでしょ(うん)? それでね、だから私たちが送別会をしてあげようと思って(うーん)、日にちをいっぱい(うん)努力して探したんだけど、明日しかぞろっていない(うん)、悪いんだけど、〇〇さんも行ってくれないかなあ?(JJ1F2 親・上)

例（JJ1F2 親・上）で示したように、誘い手が勧誘発話を発する同時に、断り手が「うん／うんうん」、「えー！」などの {あいづち} を用いて、相手の勧誘発話に参加する会話のスタイルが見られた。

無論、「勧誘話段」において、断り手が何も言語行動を発していないことも見られたが、本調査で数が少なかった。

#### 4.1.1.1.1 勧誘話段の開始から1回目の断りに至るまでの言語表現の有無

勧誘話段においては、JJ1 も CC1 もいずれも誘い手の勧誘発話から会話を始めた。そして、双方ともに、断り手が誘い手の勧誘発話を聞きながら、{あいづち}、{情報確認・要求}などを用いて、誘い手の発話に協力したり、自分の関心を示したりして、会話を進めた。ゆえに、本節において、まず、断り手が言語表現を発するかどうかを考察する。

表 4-1 JJ1 と CC1 の勧誘話段における断り手の言語表現の有無<sup>15</sup>

	1 回目の断りに至るまでの言語表現あり	1 回目の断りに至るまでの言語表現なし	合計
JJ1 合計	38	2 <sup>16</sup>	40 組
JJ1 割合	95%	5%	100%
CC1 合計	27	13	40 組
CC1 割合	67.5%	32.5%	100%

表 4-1 のとおり、JJ1 と CC1 両者間では断り手の言語表現があるかどうかに関して、顕著な差が見られた。JJ1 では、誘い手が勧誘発話を展開する同時に、38 組の断り手（95%）が言語表現を発したのに対して、CC1 では、27 組の断り手（67.5%）が言語表現を発した。

#### 4.1.1.1.2 勧誘話段における意味公式の使用数<sup>17</sup>

次に、JJ1 と CC1 の勧誘話段における意味公式の使用数及び平均値を対照していく。

表 4-2 JJ1 と CC1 の勧誘話段における意味公式の使用数及び平均値<sup>18</sup>

意味公式の カテゴリー	意味公式	JJ1 (34 組)		CC1 (27 組)	
		個数	平均値/34	個数	平均値/27
間接的断り	理由	1	0.03	0	0
	詫び	1	0.03	0	0
	願望	1	0.03	1	0.04
	遺憾	1	0.03	0	0



	条件提示	0	0	1	0.04
	代案	0	0	2	0.07
	間接的断り合計	4	0.12	4	0.15
付随表現	肯定的表現	10	0.29	1	0.04
	あいづち	168	4.94	26	0.96
	困惑	12	0.35	0	0
	ためらい	9	0.26	10	0.37
	驚き	12	0.35	0	0
	情報確認・要求	17	0.50	29	1.07
	呼びかけ	0	0	1	0.04
	付随表現合計	228	6.71	67	2.48
意味公式合計	232	6.82	71	2.63	

表 4-2 によると、JJ1 と CC1 の双方共に勧誘話段において、付随表現が最も多く使われた。間接的断りと直接的断りは JJ1 と CC1 のいずれでもわずかな数値またはゼロとして現れたといった共通点が挙げられた。上記の共通点からみると、文化差異を問わず、誘い手の勧誘発話を聞いてから、いきなり間接的断りまたは直接的断りで相手を断るのは少なかったのに対して、{あいづち}、{情報確認・要求}、{ためらい} などの付随表現の多用によって人間関係を維持しながら、後の断り表現に繋がる前置きを示して、少しずつ相手を断ったのが実際の会話でもよく見られたと言えるだろう。次に、JJ1 と CC1 両者間の差異も出てきた。第 1 に、勧誘話段において、JJ1 のほうが CC1 より相当に意味公式を多く使用している (JJ1-232/6.82, CC1-71/2.63)。第 2 に、JJ1 で用いられた {あいづち}、{困惑}、{驚き}、{肯定} の使用数が CC1 より多かった。とりわけ、JJ1 と CC1 の {あいづち} の差が顕著であった (JJ1-168/4.94, CC1-26/0.96)。JJ1 で現れた {困惑} (12/0.35) と {驚き} (12/0.35) は CC1 では 1 つも見られなかった。一方、JJ1 より CC1 のほうで {情報確認・要求} が多用された (JJ1-17/0.5, CC1-29/1.07)。3.2.3.2 の予備調査 2 で述べたように、JJ1 では、「誘い」に対して、断れないまたは断らないという声が多かったので、送別会の日付をわざと「明日」に設定し、JJ1 の断る負担度を減らした。即ち、誘い手から「明日の送別会にいきませんか」を聞かれたのは、日本人の断り手にとっては、多少失礼であり受けいれられない行動とみなすので、聞き手の断る負担度も低くなった。一方、明日の送別会を急に断り手に伝えたのは、中国人の断り手にとっては普通のことだと思われる<sup>19</sup>ので、CC1 では送別会を「明日」にしたことについて、誰もさほど気に留めなかった。そのため、JJ1 では送別会の日付である「明日」を聞くと、驚いたり、迷ったりした会話のスタイルが見られたのに対して、CC1 では「明日」を聞いても驚いたり、困惑したりする会話のスタイルが見られずに、誘い手の勧誘発話を最後まで聞いてから、断り発話を発

する傾向が見られた。

#### 4.1.1.2 勧誘・断り話段

本節では、断り発話の出現回数について1回目の断り、2回目の断り、および3回目の断りに関して日中の数的比較対象を行った。

##### 4.1.1.2.1 断り発話数

勧誘・断り話段においては、誘い手が1回目の勧誘発話に止まらず、再勧誘(cf. 3.3.1)によって断り手の再断り行動もよく見られた。ゆえに、誘い手の勧誘発話の回数によって、勧誘・断り話段はさらに「1回目の断りのみで収束」、「2回目の断りで収束」、「3回目の断りで収束」などからなっている。各断り発話の回数及び割合を表4-3に示す。

表 4-3 JJ1 と CC1 の断り発話の回数及び割合

	1回目の断りのみで収束	2回目の断りで収束	3回目の断りで収束	4回目の断りで収束	5回目の断りで収束	6回目の断りで収束	合計
JJ1 合計	11	18	7	1	2	1	40組
JJ1 割合	27.5%	45%	17.5%	2.5%	5%	2.5%	100%
CC1 合計	27	10	2	0	0	1	40組
CC1 割合	67.5%	25%	5%	0	0	2.5%	100%

表4-3によると、JJ1では、「2回目の断りで収束」の断り発話数が最も多かった(18組)、続いて「1回目の断りで収束」(11組)、「3回目の断りのみで収束」(7組)という順であった。一方、CC1では、「1回目の断りのみで収束」の断り発話数が最も多く見られ(27組)、続いて「2回目の断りで収束」(10組)、「3回目の断りで収束」(2組)という順がであった。また、「4回目の断りで収束」から「6回目の断りで収束」まで、どちらも会話数が極少なかったため、考察対象から除外することにした。即ち、本研究では、主に「1回目の断りのみで収束」から「3回目の断りで収束」までの断り発話に注目し考察していく。

##### 4.1.1.2.2 1回目の断りにおける意味公式の使用数

1回目の断りに現れた意味公式の使用数及び平均値を表4-4に示す。

表 4-4 JJ1 と CC1 の 1 回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	依頼話段における意味公式の使用数	JJ1 (40 組)		CC1 (40 組)	
		個数	平均値/40	個数	平均値/40
直接的断り	不可	18	0.45	47	1.18
	遂行	0	0	1	0.03
	直接的断り合計	18	0.45	48	1.20
間接的断り	理由	55	1.38	67	1.68
	詫び	22	0.55	17	0.43
	願望	16	0.40	9	0.23
	代案	0	0	3	0.08
	条件提示	7	0.18	4	0.10
	関係維持	13	0.33	5	0.13
	遺憾	4	0.10	3	0.08
	言いさし	4	0.10	1	0.03
	保留	1	0.03	1	0.03
	相手を思いとどまらせる試み	1	0.03	1	0.03
	原則的陳述	0	0.00	4	0.10
	間接的意味公式合計	123	3.08	115	2.88
付随表現	肯定的表現	1	0.03	2	0.05
	あいづち	6	0.15	4	0.10
	困惑	26	0.65	1	0.03
	ためらい	36	0.90	21	0.53
	驚き	1	0.03	0	0.00
	情報確認・要求	10	0.25	3	0.08
	呼びかけ	0	0.00	4	0.10
	感謝	0	0.00	2	0.05
	否定の前置き	9	0.23	0	0.00
	ヘッジ	2	0.05	0	0.00
	その他	4	0.10	9	0.23
	付随表現意味公式合計	95	2.38	46	1.15
意味公式合計		236	5.90	209	5.23

表 4-4 から以下の共通点が見られた。第 1 に、全体的に 1 回目の断り発話で見られた意

意味公式の使用数及び平均値から見ると、JJ1 と CC1 両者の全体的意味公式の使用回数がほぼ同じであった（JJ1-236/5.90, CC1-209/5.23）。さらに、「間接的断り」における JJ1 と CC1 の間の差もあまり大きくなかった（JJ1-123/3.08, CC1-115/2.88）。第2に、勧誘話段に比べると、JJ1 と CC1 共に、直接的断りと間接的断りにおける意味公式の使用数が増えた一方で、付随表現における意味公式の使用数が減ったという共通点もわかった。第3に、各意味公式の使用数からすれば、JJ1 と CC1 共に、{理由}、{ためらい}、{詫び}、{不可} の使用数が15個以上で、1回目の断り発話において主に使用された意味公式であることがわかった。そのうち、JJ1 と CC 両方ともに、最も多く使用した意味公式は{理由}であった。

一方、JJ1 と CC1 の1回目の断り発話における意味公式数の差異も見られた。まず、意味公式のカテゴリーからすれば、JJ1 より CC1 のほうで「直接的断り」が多く使用された（JJ1-18/0.45, CC1-48/1.2）のに対して、CC1 より JJ1 のほうで「付随表現」が多用されたことがわかった（JJ1-95/2.38, CC1-46/1.15）。次に、意味公式の使用数及び平均値を見ると、JJ1 より CC1 のほうで{不可}、{理由} が顕著に多く使用されたのに対して、CC1 より JJ1 のほうが{ためらい}、{困惑} を多用した。

#### 4.1.1.2.3 2回目の断りにおける意味公式の使用数

2回目の断りにおいては、CC1 より JJ1 のほうでは、断り発話の数が多かった（JJ1-28組, CC1-13組）。JJ1 と CC1 の2回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値などを表4-5にまとめる。

表 4-5 JJ1 と CC1 の2回目の断りにおける意味公式の使用回数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ1 (28組)		CC1 (13組)	
		個数	平均値/28	個数	平均値/13
直接的断り	不可	19	0.68	5	0.38
	<b>直接的断り合計</b>	<b>19</b>	<b>0.68</b>	<b>5</b>	<b>0.38</b>
間接的断り	理由	29	1.04	13	1
	詫び	17	0.61	3	0.23
	<b>条件提示</b>	<b>2</b>	<b>0.07</b>	<b>1</b>	<b>0.08</b>
	関係維持	6	0.21	1	0.08
	<b>願望</b>	<b>7</b>	<b>0.25</b>	<b>0</b>	<b>0</b>
	遺憾	3	0.11	0	0
	<b>代案</b>	<b>3</b>	<b>0.11</b>	<b>0</b>	<b>0</b>
保留	3	0.11	2	0.15	

	言いさし	2	0.07	0	0
	相手を思い止まらせる試み	2	0.07	0	0
	原則的陳述	0	0	1	0.08
	間接的断り合計	74	2.64	21	1.62
付随表現	あいづち	39	1.39	0	0
	困惑	7	0.25	0	0
	ためらい	12	0.43	1	0.08
	情報確認・要求	5	0.18	0	0
	否定の前置き	1	0.04	0	0
	呼びかけ	1	0.04	0	0
	ヘッジ	2	0.07	0	0
	その他	1	0.04	2	0.15
	付随表現合計	68	2.43	3	0.23
意味公式合計		161	5.75	29	2.23

表 4-5 に示したように、JJ1 と CC1 双方共に 2 回目の断りにおいて、{理由}、{不可}、{詫び} を主に使用したことが認められる。

一方、2 回目の断りで見られた JJ1 と CC1 の相違点を 2 つにまとめる。第 1 に、全体的意味公式の使用回数の差異が出てきた。JJ1 のほうが CC1 より意味公式を相当に多用したことが見られた (JJ1-161/5.75, CC1-29/2.23)。それは、直接的断りにおける意味公式総数も、間接的断りにおける意味公式総数も、付随表現における意味公式総数も、JJ1 のほうが CC1 より意味位公式を相当に多く使ったからである。第 2 に、各意味公式の使用回数及び平均値からみると、最も目立つ差異は {あいづち} (JJ1-39/1.39, CC2-0/0) の使用数であった。即ち、CC1 より JJ1 のほうでは {あいづち} が著しく多く見られた。

#### 4.1.1.2.4 3 回目の断りにおける意味公式の使用数

JJ1 と CC1 の 3 回目の断りにおける意味公式の使用回数及び平均値などを表 4-6 に示す。

表 4-6 JJ1 と CC1 の 3 回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ1 (11 組)		CC1 (3 組)	
		個数	平均値/11	個数	平均値/3
直接的断り	不可	5	0.45	2	0.67
	直接的断り合計	5	0.45	2	0.67
間接的断り	理由	7	0.64	2	0.67

	詫び	7	0.64	0	0
	関係維持	1	0.09	0	0
	<b>願望</b>	4	0.36	0	0
	保留	1	0.09	2	0.67
	言いさし	1	0.09	0	0
	<b>間接的断り合計</b>	<b>21</b>	<b>1.91</b>	<b>4</b>	<b>1.33</b>
付随表現	あいづち	2	0.18	0	0
	困惑	1	0.09	0	0
	ためらい	2	0.18	0	0
	否定の前置き	1	0.09	0	0
	<b>付随表現合計</b>	<b>6</b>	<b>0.55</b>	<b>0</b>	<b>0</b>
<b>意味公式合計</b>		<b>32</b>	<b>2.91</b>	<b>6</b>	<b>2</b>

表 4-6 に示したように、1 回目と 2 回目の断り発話を比べてみると、JJ1 と CC1 双方共に 3 回目の断り発話においては、いずれの意味公式カテゴリーの使用数が減少した。また、JJ1 と CC1 双方共に、3 回目の断り発話においては、{理由}、{不可} を主に使用するという共通点が見られた。一方、双方共に 3 回目の断り発話において、意味公式の数が激減したため、双方の相違点を対照できないが、全体的に CC1 より JJ1 のほうで意味公式の数が多かった (JJ1-32/2.91, CC1-6/2)。

勧誘・断り話段においては、双方ともに、{理由}、{詫び} などを含む「間接的断り」が中心に使用された。また、両者のいずれも、{理由} と {不可} を主に使用したという共通点があった。一方、JJ1 では {不可}、{理由} のほかに、{詫び}、{願望}、{関係維持}、{あいづち}、{困惑}、{ためらい} なども多く使用された。そのうち、{不可} を除き、ほかの意味公式はすべて、CC1 より JJ1 のほうでは多く見られたという相違点も観察された。

#### 4.1.1.3 終了部

3.3.1 で提示した会話構造においては、収集したデータで見られた「ありがとうございました」、「ごめんください」、「皆さんにもよろしくお伝えください」、「頑張って」、「バイバイ」「それじゃあしょうがないかあ」、「行、我们也理解」(うん、わかった)、「谢谢你哈，帮我跟 O (姓) 解释一下」(ありがとうございますあます。O (姓) に説明しといて) のような「約束の提示 (関係維持のための将来の約束)」、「了解」、「お礼や詫び」、「別れの挨拶」、「励ましの挨拶」などの提示によって、会話の「終了部」の開始とする。また、「終了部」

の開始から会話の終結までの談話を「終了部」とする。「勧誘話段」と同様に、「終了部」の開始から、会話の終わりに至るまでにおいて、①断り手が言語表現を発しているかどうか、②「終了部」における意味公式の使用数及び平均値を対照する。

#### 4.1.1.3.1 終了部における断り手の言語表現の有無について

終了部における断り手の言語表現の有無に関しては、表 4-7 の通りである<sup>20</sup>。

表 4-7 JJ1 と CC1 の終了部における断り手の言語表現の有無

	断り手の言語表現あり	断り手の言語表現なし	合計
JJ1 合計	35	5	40 組
JJ1 割合	87.5%	12.5%	100%
CC1 合計	39	1	40 組
CC1 割合	97.5%	2.5%	100%

終了部談話においては、JJ1 では断り手の言語表現がある会話の数が 35 組であったのに対して、断り手の言語表現がない会話の数が 5 組であった。CC1 では断り手の言語表現がある会話の数が 39 組であったのに対して、断り手の言語表現がない会話の数が 1 組しかなかった。つまり、JJ1 と CC1 双方共に、断り手の言語表現がある会話数が少なくても、87.5% であるので、その差があまり見られなかった。

#### 4.1.1.3.2 終了部における意味公式の使用数

JJ1 と CC1 の終了部における意味公式の使用数及び平均値などを表 4-8 に示す。

表 4-8 JJ1 と CC1 の終了部における意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ1 (33 組)		CC1 (32 組)	
		個数	平均値/33	個数	平均値/32
直接的断り	不可	0	0	3	0.09
	直接的断り合計	0	0	3	0.09
間接的断り	理由	2	0.06	0	0
	詫び	40	1.21	12	0.38
	条件提示	1	0.03	0	0
	関係維持	19	0.58	14	0.44

	保留	0	0	2	0.06
	代案	1	0.03	0	0
	遺憾	2	0.06	0	0
	願望	1	0.03	0	0
	間接的断り合計	66	2	28	0.88
付随表現	肯定的表現	1	0.03	0	0
	あいづち	14	0.42	8	0.25
	ためらい	1	0.03	1	0.03
	情報確認・要求	1	0.03	0	0
	感謝	6	0.18	11	0.34
	挨拶	0	0	0	0
	その他	1	0.03	1	0.03
	付随表現合計	24	0.73	21	0.66
意味公式合計		90	2.73	52	1.63

表 4-8 に示したように、JJ1 と CC1 双方共に、終了部においては、{詫び}、{関係維持}、{あいづち}、{感謝} を主に使用したという共通点が見られたが、JJ1 のほうが CC1 より間接的断りにおける意味公式のいずれも多く使用したため、JJ1 で使用された「間接的断り」が CC1 より顕著に多かった (JJ1 -66/2, CC1 -28/0.88)。そのうち、{詫び} に見られた両者間の差は最も顕著であった (JJ1 -40/1.21, CC1 -12/0.38)。直接的断りと付随表現における JJ1 と CC1 の間の差があまり見られなかった。

#### 4.1.1.4 まとめ

上記の各話段における意味公式の使用平均値の高い順に並ぶと、社会人の勧誘を断る言語行動の連鎖は表 4-9 の通りである。

表 4-9 JJ1 と CC1 の断り言語行動の連鎖構造

	勧誘話段	1 回目の断り	2 回目の断り	3 回目の断り	終了部
JJ1	あいづち (4.94)	理由 (1.38)	あいづち (1.39)	理由、詫び (0.64)	詫び (1.21)
CC1	情報確認・要求 (1.07)	理由 (1.68)	理由 (1)	不可、理由、保留 (0.67)	関係維持 (0.44)

上記の各話段における意味公式のカテゴリの使用数及び平均値をまとめると、以下の



共通性が見られた。勧誘話段においては、双方ともに、{あいづち}、{情報確認・要求}、{ためらい}を含む「付随表現」を中心に使用したのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」の使用数及び平均値がごく少なかった。勧誘・断り話段においては、JJ1とCC1のいずれも、{理由}、{詫び}などを含む「間接的断り」を最も多用した。最後の終了部においては、双方ともに{詫び}、{関係維持}を含む「間接的断り」を多く用いた。一方、各話段における意味公式の連鎖構造によると、以下の相違点も挙げられる。勧誘話段においては、JJ1では{あいづち}、CC1では{情報確認・要求}がそれぞれ最も多用された。1回目の断りから3回目の断りにかけて、JJ1では①{理由}、②{あいづち}、③{理由}{詫び}といった使用平均値の最も高い意味公式が現れたのに対して、CC1では①{理由}、②{理由}、③{不可}{理由}{保留}といった使用平均値の高い意味公式が見られた。終了部においては、JJ1では{詫び}、CC1では{関係維持}の使用平均値が最も多かった。

## 4.1.2 断りの展開パターンの日中対照

前節において、話段ごとにおける各意味公式の使用数及び平均値を考察してきたが、本節においては、各話段を合わせて、意味公式のカテゴリーと各意味公式の展開パターンを考察する。

### 4.1.2.1 意味公式のカテゴリーの展開パターン

表4-10はJJ1の勧誘話段から、勧誘・断り話段（1回目の断り、2回目の断り、3回目の断り）を経て、終了部に至るまでの意味公式のカテゴリーの使用数及び1組の会話の使用回数の平均値である。

表4-10 JJ1の意味公式のカテゴリーの使用数及び平均値

意味公式 のカテゴリ	勧誘話段		1回目の断り		2回目の断り		3回目の断り		終了部	
	JJ1(3 4組)	JJ1平 均値 /34	JJ1(4 0組)	JJ1平 均値 /40	JJ1(28 組)	JJ1平 均値 /28	JJ1(11 組)	JJ1平 均値 /11	JJ1(33 組)	JJ1平 均値 /33
直接的断り	0	0	18	0.45	19	0.68	5	0.45	0	0
間接的断り	4	0.12	123	3.08	74	2.64	21	1.91	66	2
付随表現	228	6.71	95	2.38	68	2.43	6	0.55	24	0.73

なお、JJ1の各話段の意味公式のカテゴリーの平均値を図4-1に示す。

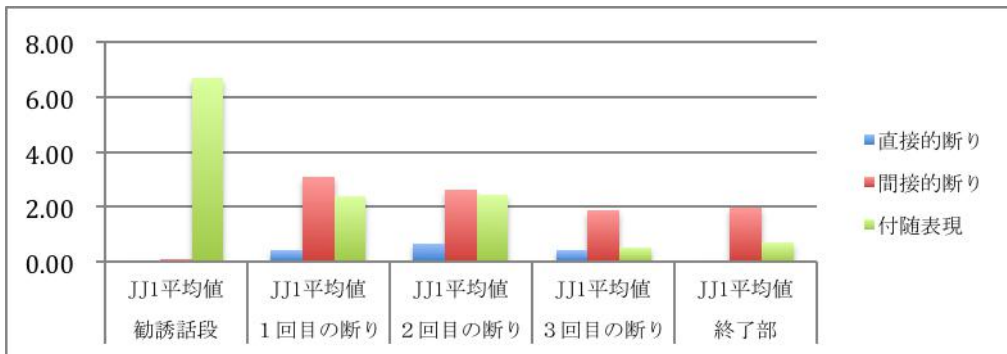


図4-1 JJ1の各話段の意味公式のカテゴリーの平均値

表4-10と図4-1を合わせると、JJ1の各意味公式のカテゴリーの展開パターンも伺える。JJ1では勧誘話段において、付随表現が中心に使用されて、勧誘・断り話段においては、「直接的断り+間接的断り+付随表現」というパターンが使われたが、主に「間接的断り」を手段として、相手との関係を維持しながら、断り言語行動を遂行する展開パターンが見られた。最後の終了部においては、「間接的断り+付随表現」というパターンが使用されたが、やはり「間接的断り」が主に用いられたという全体的な特徴が観察された。

次に、CC1の勧誘話段から、勧誘・断り話段（1回目の断り、2回目の断り、3回目の断り）を経て、終了部に至るまでの各意味公式のカテゴリーの使用数及び平均値は表4-11に示す。

表4-11 CC1の意味公式のカテゴリーの使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	勧誘話段		1回目の断り		2回目の断り		3回目の断り		終了部	
	CC1 (27組)	CC1 平均値 /27	CC1 (40組)	CC1 平均値 /40	CC1 (13組)	CC1 平均値 /13	CC1 (3組)	CC1 平均値 /3	CC1 (32組)	CC1 平均値 /32
直接的断り	0	0	48	1.20	5	0.38	2	0.67	3	0.09
間接的断り	4	0.15	115	2.88	21	1.62	4	1.33	28	0.88
付随表現	67	2.48	46	1.15	3	0.23	0	0	21	0.66
意味公式合計	71	2.63	209	5.23	29	2.23	6	2	52	1.63

なお、CC1の各話段の意味公式のカテゴリーの平均値を図2に示す。

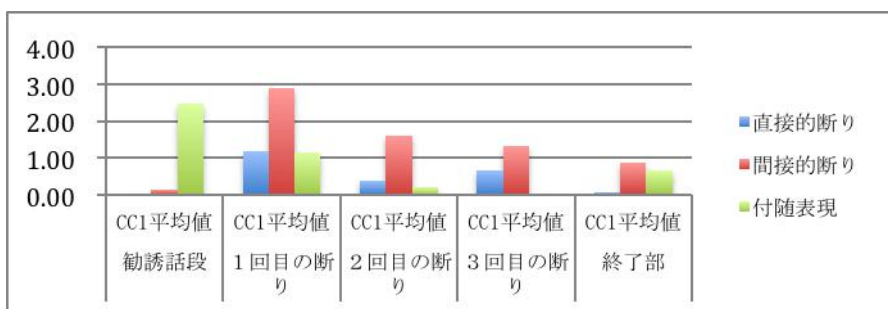


図 4-2 CC 1 の各話段の意味公式の Kategorii の平均値

表 4-11 と図 4-2 を合わせると、CC 1 の意味公式の Kategorii の展開パターンの全体的な特徴が観察された。CC 1 では勧誘話段において、「間接的断り + 付随表現」というパターンが見られたが、「付随表現」が圧倒的に多く用いられた。勧誘・断りという交渉話段においては、「直接的断り + 間接的断り」というパターンが使われた。そのうち、「間接的断り」が主に使用された。3 回目の断りでは「付随表現」が現れなかった。最後の終了部において、「直接的断り + 間接的断り + 付随表現」というパターンが出てきたが、「直接的断り」がわずかであったのに対して、「間接的断り」がより多く見られた。

上記の JJ1 と CC1 の意味公式の Kategorii の話段ごとにおける使用平均値を対照すれば、以下の図 4-3 に示したとおりである。



図 4-3 JJ1 と CC1 の意味公式の Kategorii の話段ごとにおける使用平均値

JJ1 と CC1 双方ともに、勧誘話段と終了部において、「間接的断り + 付随表現」というパターンが主に使用され、勧誘・断り話段において、CC1 の 3 回目の断り話段を除き、「直接的断り + 間接的断り + 付随表現」が中心に使われたという共通している意味公式の Kategorii の展開パターンが見られた。ただし、JJ1 の 1 回目の断りから 3 回目の断りにかけて、「間接的断り + 付随表現」が主に使用されたのに対して、CC1 の 1 回目から 3 回目の断りにかけて、「間接的断り + 直接的断り」が中止的に用いられた傾向が見られた。

一方、いずれの話段においても、CC1 より JJ1 のほうで「付随表現」が多用されたのに対して、1 回目の断りと 3 回目の断りにおいては、JJ1 より CC1 のほうで「直接的断り」が多く使用されたという相違点も見られた。

#### 4.1.2.2 各意味公式の展開パターン

JJ1 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値を表 4-12 と図 4-4 に表す。

表 4-12 JJ1 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式 のカテゴリー	意味公式	勧誘話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		JJ1 (34 組)	JJ1 平 均值 /34	JJ1(4 0 組)	JJ1 平 均值 /40	JJ1 (28 組)	JJ1 平 均值 /28	JJ1 (11 組)	JJ1 平 均值 /11	JJ1(3 3 組)	JJ1 平 均值 /33
直接的断り	不可	0	0	18	0.45	19	0.68	5	0.45	0	0
間接的断り	理由	1	0.03	55	1.38	29	1.04	7	0.64	2	0.06
	詫び	1	0.03	22	0.55	17	0.61	7	0.64	40	1.21
	願望	1	0.03	16	0.40	7	0.25	4	0.36	1	0.03
	条件提示	0	0	7	0.18	2	0.07	0	0	1	0.03
	関係維持	0	0	13	0.33	6	0.21	1	0.09	19	0.58
	代案	0	0	0	0	3	0.11	0	0	1	0.03
	遺憾	1	0.03	4	0.10	3	0.11	0	0	2	0.06
	言いさし	0	0	4	0.10	2	0.07	1	0.09	0	0
	保留	0	0	1	0.03	3	0.11	1	0.09	0	0
相手を思い止まらせる試み	0	0	1	0.03	2	0.07	0	0	0	0	

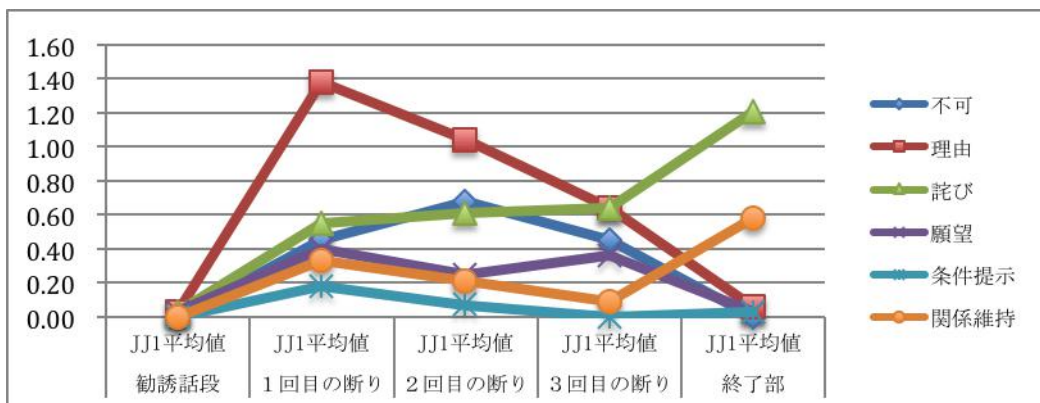


図 4-4 JJ1 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の平均値<sup>21</sup>

上記の表 4-12 と図 4-4 から、JJ1 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する各意味公式の展開パターンは以下の 2 種類に分類できる。①中高型：{不可}、{理由}、{願望}、{条件提示} の使用変化が中高型に属する。中高型というのは、勧誘話段においては、わずかであったが、勧誘・断り話段においては、高い使用平均値で現れた。終了部においては、勧誘話段と同様、0.1 以下の使用平均値であったという意味公式の展開パターンが見られた。そのうち、{理由} の使用変化が最も目立っている。②尾高型：{詫び}、{関係維持} の展開パターンがこのタイプである。尾高型というのは、他の話段と比べて、終了部に出てきた意味公式使用平均値が最も多かったものである。

次に、JJ1 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値を表 4-13 と図 4-5 に表す。

表 4-13 JJ1 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	意味公式	勧誘話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		JJ1 (3 4 組)	JJ1 平 均値 /34	JJ1 (40 組)	JJ1 平 均値 /40	JJ1 (28 組)	JJ1 平 均値 /28	JJ1 (11 組)	JJ1 平 均値 /11	JJ1 (33 組)	JJ1 平 均値 /33
付随 表現	肯定的表 現	10	0.29	1	0.03	0	0	0	0	1	0.03
	あいづち	168	4.94	6	0.15	39	1.39	2	0.18	14	0.42
	困惑	12	0.35	26	0.65	7	0.25	1	0.09	0	0
	ためらい	9	0.26	36	0.90	12	0.43	2	0.18	1	0.03
	驚き	12	0.35	1	0.03	0	0	0	0	0	0
	情報確認・ 要求	17	0.50	10	0.25	5	0.18	0	0	1	0.03

感謝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0.18
否定の前 置き	0	0	9	0.23	1	0.04	1	0.09	0	0	0
呼びかけ	0	0	0	0	1	0.04	0	0	0	0	0
ヘッジ	0	0	2	0.05	2	0.07	0	0	0	0	0

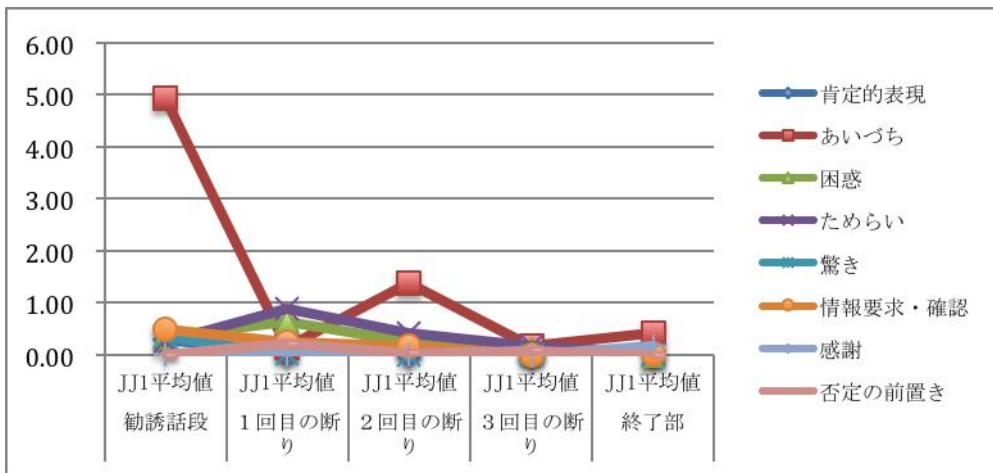


図 4-5 JJ1 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の平均値<sup>22</sup>

表 4-13 と図 4-5 に示した通り、「付随表現」に属する各意味公式の展開パターンは以下の 3 種類に区分できる。①頭高型：{あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き}、{肯定的表現} のように、最初の勧誘話段において、最も多く現れたという展開パターンを頭高型と言えるだろう。ただし、{あいづち} の展開パターンがとりわけ目立っていた。②中高型：{ためらい}、{困惑}、{否定の前置き} はこのタイプである。この 3 つの意味公式は、勧誘話段において高くない平均数値で現れ、2 回目の断りにおいて使用平均数値が高くなったが、3 回目の断りから減り、終了部において 1 つも見られなかったという展開パターンが認められた。③尾高型：{感謝} の使用数と使用平均値は、終了部を除いたどの話段においても少なかったが、終了部においては 0.18 の使用平均値で現れた。

上記の JJ1 の各意味公式の使用展開パターンをまとめると、以下の 3 種類の展開パターンがわかった。1 つ目は「付随表現」に属する {あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き}、{肯定的表現} のような頭高型である。2 つ目は「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{願望}、{条件提示}、「付随表現」に属する {ためらい}、{困惑}、{否定の前置き} のよう中高型である。3 つ目は「間接的断り」に属する {詫び}、{関係維持} と、「付随表現」に属する {感謝} のような尾高型である。従って、JJ1 の「誘い」に対する断り会話構造を図 4-6 にまとめる。そのうち、意味公式のカテゴリーの使用平均値は枠の大きさによって示される。{困惑} と {ためらい} は中高型であるが、勧誘話段においても 0.10 以上の数値で現れたので、勧誘話段の「付随表現」にも取り入れた。勧誘・

断り話段における{否定の前置き}が中高型であるのに対して、{あいづち}と{情報確認・要求}が頭高型であるが、勧誘・断り話段においても、0.10の使用平均値として現れたため、{否定の前置き}のかわりに、{あいづち}を勧誘・断り話段の「付随表現」にも取り入れた。{詫び}と{関係維持}は「尾高型」であるが、勧誘・断り話段においても0.10以上の使用平均値で現れたので、勧誘・断り話段の「間接的断り」にも取り入れた。{あいづち}は頭高型であるが、終了部話段においても0.10以上の数値で出現したため、終了部の「付随表現」にも取り

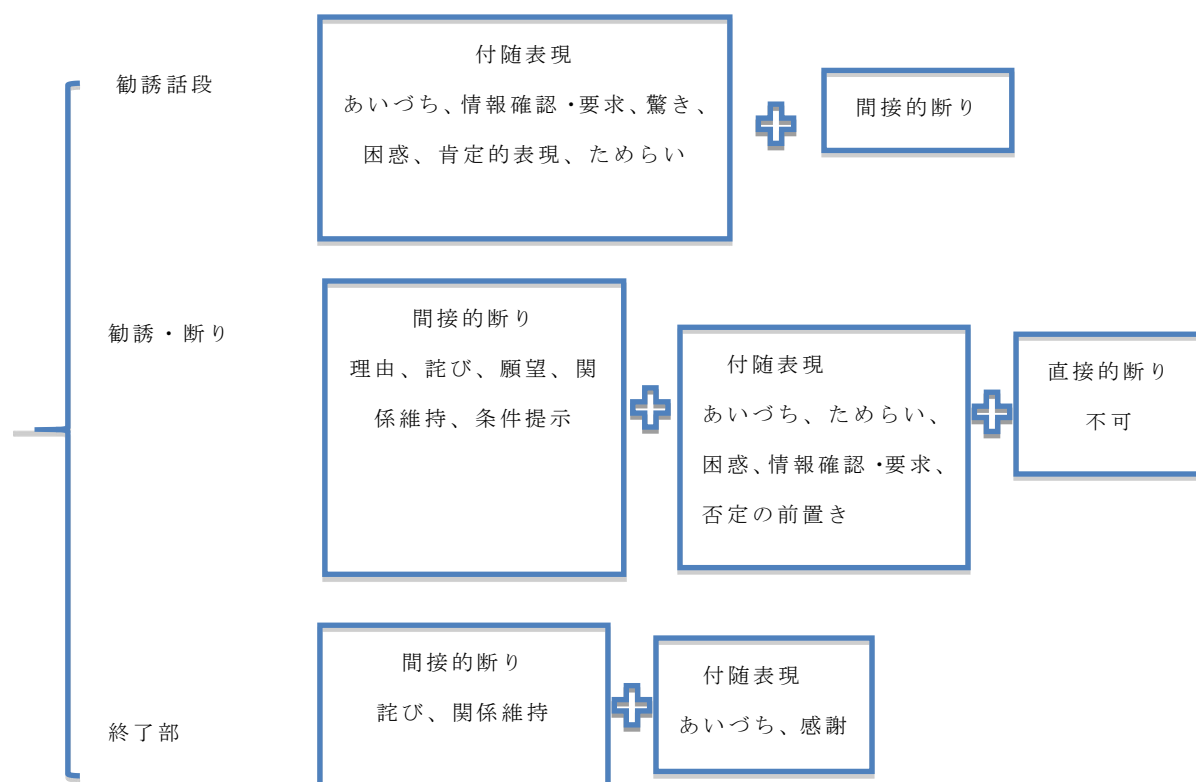


図 4-6 JJ1 の「誘い」に対する断りの会話構造

つづいて、CC1の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値を表 4-14 と図 4-7 に示す。

表 4-14 CC1の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式カテゴリー	意味公式	勧誘話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		CC1	CC1 平	CC1	CC1 平	CC1	CC1 平	CC1	CC1 平	CC1	CC1
		(27 組)	均値 /27	(40 組)	均値 /40	(13 組)	均値 /13	(3 組)	均値 /3	(32 組)	平均 値

											/32
直接的断り	不可	0	0	47	1.18	5	0.38	2	0.67	3	0.09
	遂行	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0
間接的断り	理由	0	0	67	1.68	13	1	2	0.67	0	0
	詫び	0	0	17	0.43	3	0.23	0	0	12	0.38
	願望	1	0.04	9	0.23	0	0	0	0	0	0
	関係維持	0	0	5	0.13	1	0.08	0	0	14	0.44
	保留	0	0	1	0.03	2	0.15	2	0.67	2	0.06
	代案	2	0.07	3	0.08	0	0	0	0	0	0
	条件提示	1	0.04	4	0.10	1	0.08	0	0	0	0
	遺憾	0	0	3	0.08	0	0	0	0	0	0
	言いさし	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0
	相手を思い止 まらせる試み	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0
	原則的陳述	0	0	4	0.10	1	0.08	0	0	0	0

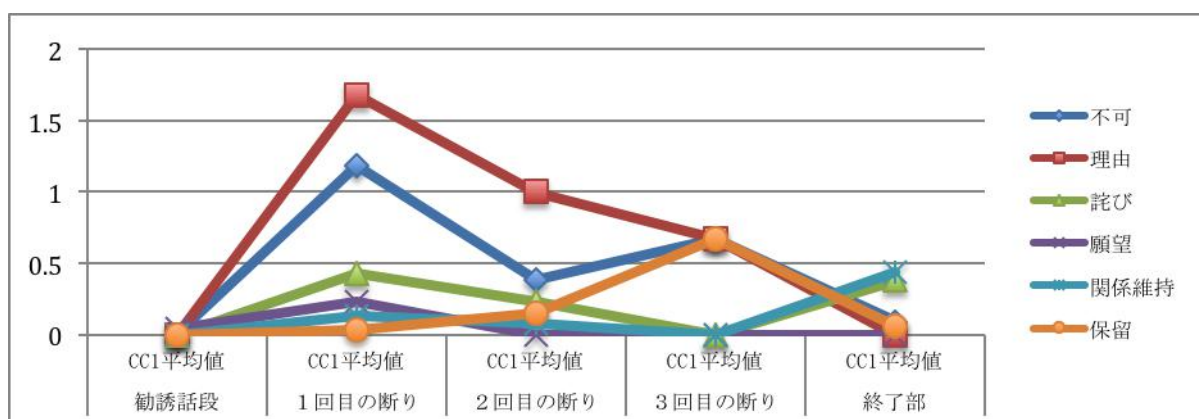


図 4-7 CC1 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の平均値<sup>23</sup>

表 4-14 と図 4-7 を合わせてみると、CC1 の「直接的断り」、「間接的断り」に属する各意味公式の展開パターンを以下の 2 種類に分けられる。①中高型：{不可}、{理由}、{詫び}、{保留}、{願望} のように、勧誘話段においてほとんど現れず、終了部に出現しても、使用平均値が低かったのに対して、勧誘・断り話段において数多く使用された展開パターンを中高型であると言える。②尾高型：{関係維持} は勧誘話段と勧誘・断り話段においてゼロまたは低い数値として現れたが、終了部において、使用平均値が随分高くなったので、尾高型に属する。

CC1 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び 1 組の会話の使用回



数の平均値を表 4-15 と図 4-8 に示す。

表 4-15 CC1 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式カテゴリー	意味公式	勧誘話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		CC1 (27 組)	CC1 平 均値 /27	CC1 (40 組)	CC1 平 均値 /40	CC1 (13 組)	CC1 平 均値 /13	CC1 (3 組)	CC1 平 均値 /3	CC1 (32 組)	CC1 平均 値 /32
付随表現	あいづち	26	0.96	4	0.10	0	0	0	0	8	0.25
	困惑	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0
	ためらい	10	0.37	21	0.53	1	0.08	0	0	1	0.03
	情報確認・要求	29	1.07	3	0.08	0	0	0	0	0	0
	感謝	0	0	2	0.05	0	0	0	0	11	0.34
	その他	0	0	9	0.23	2	0.15	0	0	1	0.03
	呼びかけ	1	0.04	4	0.10	0	0	0	0	0	0
	肯定的表現	1	0.04	2	0.05	0	0	0	0	0	0

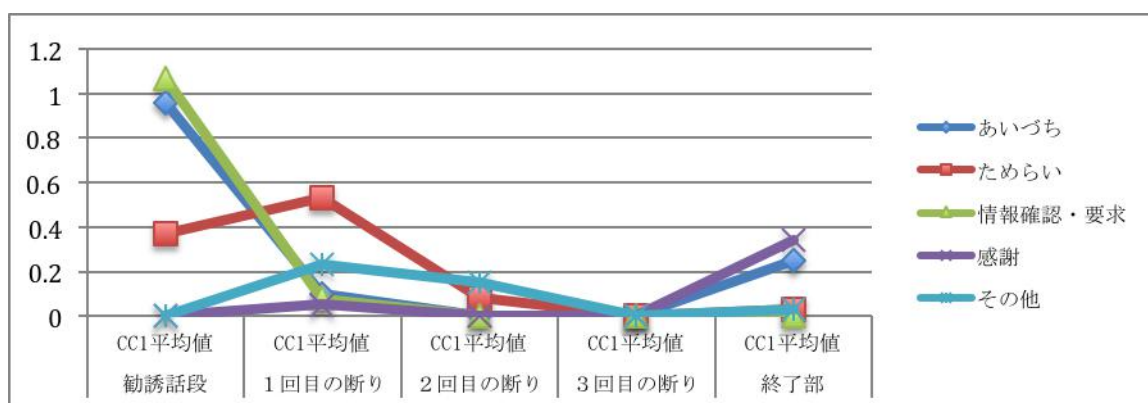


図 4-8 CC1 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の平均値<sup>24</sup>

表 4-15 と図 4-8 を合わせてみると、CC1 の「付随表現」に属する各意味公式の展開パターンを 3 種類に分類できる。①頭高型：{あいづち}、{情報確認・要求} など、勧誘話段において最も多く現れた展開パターンを頭高型であると言える。②中高型：{ためらい}、{その他} などは 1 回目の断りの話段においては、最も高い使用平均値で現れたので、中高型の展開パターンであった。③尾高型：CC1 は勧誘話段と勧誘・断り話段においては、{感謝} をわずかに使用したが、終了部においては、多く使用したという尾高型の展開パターンが見られた。

上記の CC1 の意味公式のカテゴリーの展開パターンと意味公式に属する各意味公式の展

開パターンをまとめてみると、以下の3種類の展開パターンが抽出された。1つ目は「付随表現」に属する {あいづち}、{情報確認・要求} のような頭高型である。2つ目は「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{詫び}、{保留}、{願望} と、「付随表現」に属する {ためらい} のよう中高型である。3つ目は「間接的断り」に属する {関係維持} と「付随表現」に属する {感謝} のような尾高型である。従って、CC 1の「誘い」に対する断り会話構造を図4-9にまとめる。そのうち、{ためらい} は中高型であるが、勧誘話段においても、0.10以上の数値で出現したため、勧誘話段の「付随表現」にも取り入れた。{関係維持} は尾高型であるが、勧誘・断り話段においても、0.10以上の数値で現れたので、勧誘・断り話段における「間接的断り」にも取り入れた。{詫び} が中高型であるが、終了部においても、ほかの意味公式に比べて、より高い使用平均値で出現したため、終了部における「間接的断り」にも取り入れた。{あいづち} が頭高型であるが、終了部においても高い使用平均値で現れたので、終了部における「付随表現」にも取り入れた。

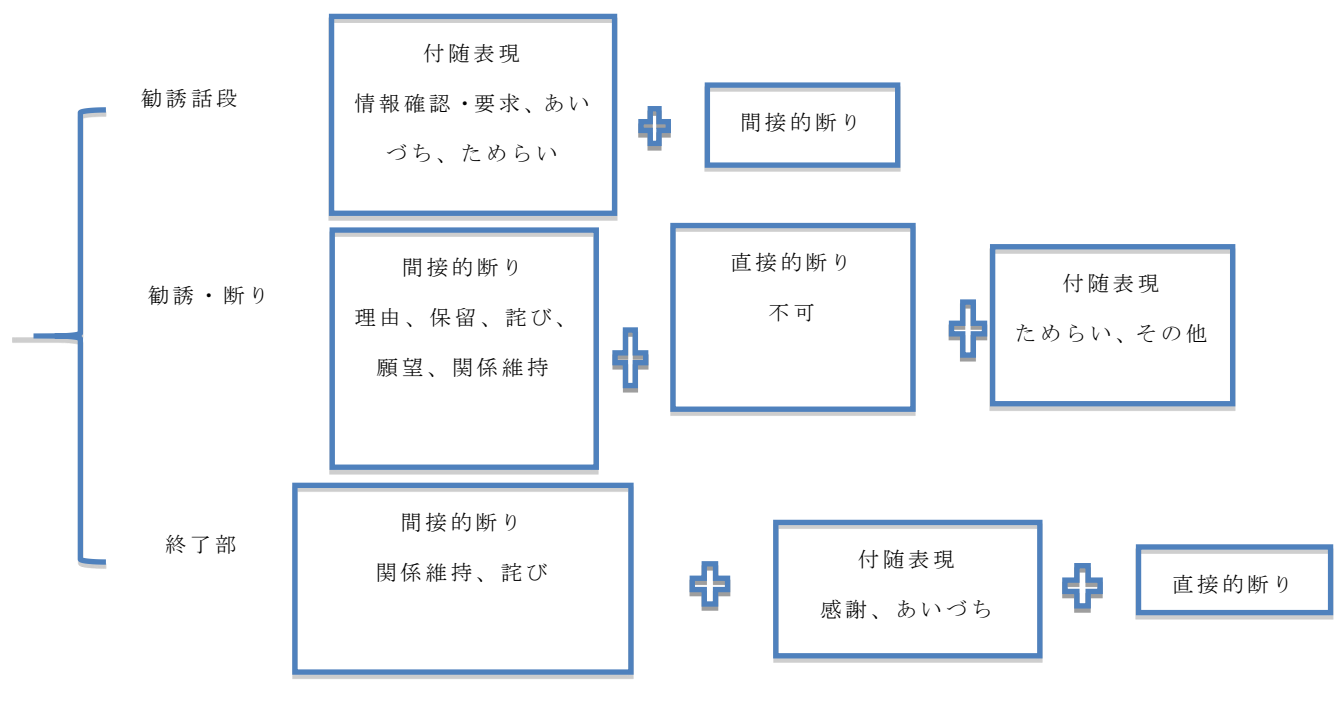


図 4-9 CC 1の「誘い」に対する断り会話構造

JJ1 と CC1 の各意味公式の展開パターンをまとめた結果、次の共通点がわかった。①JJ1 と CC1 とともに、「付随表現」に属する {あいづち}、{情報確認・要求} は「頭高型」の展開パターンであった。②双方共に、「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{願望}、「付随表現」に属する {ためらい} の展開パターンは「中高型」であった。③JJ1 と CC1 のいずれの「間接的断り」に属する {関係維持} と「付随表現」に属す

る {感謝} は「尾高型」の展開パターンであった。

一方、以下の相違点も見られた。まず、{詫び} の展開パターンは、JJ1 では「尾高型」であったのに対して、CC1 では「中高型」であった。次に、JJ1 の「頭高型」に見られた {驚き}、{情報要求} と「中高型」に見られた {条件提示}、{困惑}、{否定の前置き} などは、CC1 のどの話段においても、ゼロまたはごく低い数値で出現したため、その展開パターンを考察しないことにした。それに対して、CC1 の「中高型」に見られた {保留} などは、JJ1 のどの話段においても、ゼロまたはごく低い数値で現れたので、その展開パターンを考察しないことにした。

上記の各意味公式の異同をまとめた結果、使用数及び使用平均値が高い意味公式の展開パターンは、JJ1 と CC1 のいずれにおいても、{詫び} を除き、ほとんど同じであったという結論を導き出した。

なお、JJ1 と CC1 の「誘い」に対する断り会話構造を比較すると（上記図 4-6・図 4-9 参照）、いずれも勧誘話段、勧誘・断り話段、終了部からなっていることが明らかになったと同時に、次の共通点も見られた。即ち、勧誘話段において、JJ1 と CC1 双方に、{あいづち}、{情報確認・要求}、{ためらい} などを含む「付随表現」が中心に使用されたのに対して、「直接的断り」が全く使用されず、「間接的断り」が使用されても、使用平均値が少なかった。次に、勧誘・断り話段においては、CC1 の 3 回目の断りを除き、JJ1 と CC1 はいずれも、「直接的断り」、「間接的断り」、「付随表現」を併用した。そして、双方ともに、{理由}、{詫び}、{願望}、{関係維持} などを含む「間接的断り」を中心に多用したのに続き、{ためらい} を含む「付随表現」と {不可} を含む「直接的断り」を使用したことが判明した。最後の終了部においては、{関係維持}、{詫び} を含む「間接的断り」と {あいづち}、{感謝} を含む「付随表現」が JJ1 と CC1 のいずれにおいても見られた。従って、社会人の依頼に対する断り言語行動における話段ごとに、意味公式のカテゴリー及び各意味公式の展開パターンの対照によると、日中双方において、「誘い」に対する断りの会話構造が大筋において同じであるという結論が導き出されるだろう。

一方、勧誘話段と勧誘・断り話段のいずれにおいても、CC1 より JJ1 のほうでは「付随表現」が顕著に多用されたのに対して、勧誘・断り話段においては、JJ1 より CC1 のほうでは「直接的断り」がやや多く見られたという相違点もわかった。さらに、各意味公式の使用数を見ると、JJ1 で見られた「付随表現」の意味公式である {あいづち} をはじめ、{驚き}、{困惑}、{肯定的表現} などは、CC1 では少なかった。なお、{詫び} の使用数が JJ1 の終了部において最も多く見られたのに対して、CC1 の勧誘・断り話段においては最も多く用いられた。それから、CC1 で使用された「直接的断り」の意味公式である {不可} は、JJ1 より多かった。

### 4.1.3 会話構造による分析のまとめ

本節では、社会人を対象とする誘いに対する断り言語行動の話段ごとにおける各意味公式の使用数及びカテゴリーの使用回数、意味公式のカテゴリー及び各意味公式の展開パターンを分析した上で、JJ1 と CC1 の誘いに対する断りの会話構造が抽出された。上記の分析によって、以下の結果が得られた。

まず、話段ごとにおける意味公式のカテゴリー及び各意味公式の使用回数及び平均値の考察によると、JJ1 と CC1 双方共に、勧誘話段において、{あいづち}、{情報確認・要求}などを含む「付随表現」が中心に使われた。勧誘・断り話段においては、両者ともに{理由}、{詫び}、{願望}、{関係維持}などを含む「間接的断り」が主に使用された。また、{不可}を含む「直接的断り」も勧誘・断り話段においても多く見られた。最後の終了部においては、JJ1 と CC1 のいずれでも、「関係維持」、{詫び}を含む「間接的断り」と、{あいづち}、{感謝}を含む「付随表現」が多く見られたという共通点がわかった。

一方、どの話段においても、CC1 より JJ1 のほうでは、{あいづち}、{困惑}、{驚き}、{ためらい}などを含む「付随表現」が著しく多かった。また、勧誘・断り話段と終了部のいずれにおいても、CC1 より JJ1 のほうでは、{詫び}が多用された。それに対して、勧誘・断りの交渉話段においては、JJ1 より CC1 のほうでは、{不可}を含む「直接的断り」が多く使用されたという相違点も観察された。

上記の結果をまとめると、誘いに対する断り言語行動における JJ1 と CC1 の特徴がそれぞれ観察されたが、意味公式のカテゴリーと各意味公式の展開パターンを考察することによって、JJ1 と CC1 の誘いに対する断りの会話構造がほぼ同じであったという結果も得られた。

まず、意味公式のカテゴリーの展開パターンを考察すると、JJ1 と CC1 ともに、勧誘話段において、「付随表現」が主に使用され、勧誘・断り話段において、CC1 の3回目の断り話段を除き、双方共に「直接的断り+間接的断り+付随表現」のパターンが中心に使われ、終了部においては、「間接的断り+付随表現」というパターンが中心であった。一方、いずれの話段においても、CC1 より JJ1 のほうで「付随表現」が多用されたのに対して、勧誘・断り話段においては、JJ1 より CC1 のほうで「直接的断り」が多く使用されたという相違点も伺われた。

次に、各意味公式の展開パターンの考察をまとめると、JJ1 と CC1 の各意味公式の展開パターンがほぼ同様であった。そのうち、{あいづち}、{情報確認・要求}を始めとする「付随表現」の展開パターンは「頭高型」であった。「直接的断り」に属する{不可}、「間接的断り」に属する{理由}、{願望}と、「付随表現」の意味公式である{ためらい}は、「中高型」の展開パターンであった。終了部に出るはずである{関係維持}と{感謝}の展開パターンは「尾高型」であった。一方、JJ2 で見られた{詫び}の展開パターンが「尾高

型」であったのに対して、CC2 では「中高型」であったという相違も見られた。

上記の話段ごとにおける意味公式のカテゴリーと各意味公式の使用数、展開パターンの考察を合わせると、社会人の誘いに対する断りの会話構造がほぼ同じであったという結果が得られた。換言すれば、JJ1 と CC1 のいずれも主に勧誘話段、勧誘・断り話段、終了部からなっていることが検証された。そして、勧誘話段において、JJ1 と CC1 双方に、{あいづち}、{情報確認・要求}、{ためらい} などを含む「付随表現」が中心に使用された。勧誘・断りの交渉話段においては、双方ともに、{理由}、{詫び}、{願望}、{関係維持} などを含む「間接的断り」が中心に多用されたのに続き、{ためらい} を含む「付随表現」と、{不可} を含む「直接的断り」も多く見られた。最後の終了部においては、{関係維持}、{詫び} を含む「間接的断り」と、{あいづち}、{感謝} を含む「付随表現」が JJ1 と CC1 のいずれにおいても見られた。

無論、CC1 より JJ1 のほうでは {あいづち}、{情報確認・要求} などを含む「付随表現」が顕著に多用されたのに対して、JJ1 より CC1 のほうでは {不可} を含む「直接的断り」と、「間接的断り」に属する {詫び} の使用数が多かったという相違点もわかったが、JJ1 と CC1 とともに共通した誘いに対する断り言語行動の会話のスタイルが抽出された。即ち、文化を問わず、JJ1 と CC1 のいずれも、いきなり「直接的断り」と「間接的断り」で相手を断らずに、誘い手の勧誘をよく聞いている同時に、{あいづち}、{情報確認・要求} などを含む「付随表現」で、会話を進めた。このような「付随表現」は、実際の断り言語行動でも会話を円滑に進め、相手との関係が維持できる働きも、断り手のネガティブ・フェイスを守るための前置きの働きもあるので、欠かせない役割を果たしていると考えられる。会話が進んだにつれ、{理由}、{詫び}、{不可}、{願望}、{ためらい} などの意味公式を豊かに用いて、相手のポジティブ・フェイスと自分のネガティブ・フェイスを同時に守り、少しずつ相手を断ったプロセスも本調査では伺われた。終了部で見られた {詫び}、{関係維持}、{感謝} などは、会話を終わらせようとするマークという働きも、相手との関係が維持できる役割もあると考えられる。従って、本調査では、DCT のかわりに、社会人を対象とするロールプレイを用いて、誘いに対する断り言語行動のダイナミックなプロセスが観察された。さらに、JJ1 と CC1 の誘いに対する断り言語行動の構造がほぼ同じであったという結論が導き出された。

一方、JJ1 で {あいづち} が相当に多用されたのは、実際の日本語の会話で {あいづち} の重要性を検証した。なお、JJ1 のほうで {詫び} が多く見られたのに対して、CC1 のほうでは {不可} がやや多く使用された結果は、劉・小野 (1996)、李 (1999) などの研究結果と一致している。また、JJ1 の勧誘話段で {驚き}、{困惑} などが多く使用された原因も分析した (cf. 4. 1. 1. 1. 2)。即ち、フォローアップ・インタビューによると、送別会の日付を「明日」に設定すれば、日中の両言語母語話者にとって、断る負担度が異なるからであると考えられる。

## 4.2 意味公式の量的分析

本節では誘いを断る場面に見られた各意味公式の使用回数と、親・疎関係、上・同関係を含む社会的変数が意味公式の使用回数に及ぼした影響を考察する。

### 4.2.1 意味公式の全体的な使用回数

まず、JJ1 と CC1 の意味公式の全体的な使用数及び割合を表 4-16 に示す。

表 4-16 JJ1 と CC1 の各意味公式の使用数及び割合

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ1 使用数	JJ1 割合%	CC1 使用数	CC1 割合%
直接的断り	不可	48	6.13	58	15.80
	遂行	0	0	1	0.27
	直接的断り合計	48	6.13	59	16.08
間接的断り	理由	95	12.13	85	23.16
	条件提示	10	1.28	6	1.63
	詫び	90	11.49	32	8.72
	願望	32	4.09	10	2.72
	言いさし	8	1.02	1	0.27
	関係維持	40	5.11	21	5.72
	遺憾	10	1.28	3	0.82
	相手を思い止まらせる試み	3	0.38	1	0.27
	代案	5	0.64	5	1.36
	保留	15	1.92	7	1.91
	原則的陳述	0	0	5	1.36
	間接的断り合計	308	39.34	176	47.96
付随表現	肯定的表現	12	1.53	3	0.82
	あいづち	235	30.01	37	10.08
	困惑	45	5.75	1	0.27
	ためらい	61	7.79	33	8.99
	驚き	12	1.53	0	0
	情報確認・要求	31	3.96	31	8.45
	否定の前置き	12	1.53	0	0
	感謝	6	0.77	13	3.54

	呼び掛け	1	0.13	5	1.36
	挨拶	2	0.26	0	0
	ヘッジ	4	0.51	0	0
	その他	6	0.77	9	2.45
	付随表現合計	427	54.53	132	35.97
意味公式合計		783	100	367	100

表 4-16 に示したように、まず、JJ1 で使用された意味公式の使用回数合計は、CC1 より 2 倍も多かった (JJ1-783, CC1-367)。即ち、CC1 より JJ1 のほうでは意味公式が多用されたことがわかった。次に、意味公式のカテゴリーの割合からみれば、JJ1 より CC1 のほうで「直接的断り」と「間接的断り」の使用率が多かったのに対して、JJ1 のほうで「付随表現」の使用率が 54.53% で、CC1 より随分多かった。また、各意味公式の使用回数の割合をみれば、各意味公式の使用率が最高でも、JJ1 の {あいづち} の使用率が 30.01% であった。即ち、JJ1 と CC1 とともに、各意味公式の使用率が少なかったため、JJ1 と CC1 の意味公式の使用割合の有意差を統計的に表すことができないという結果になった。このような結果が出た原因を 2 つにまとめる。第 1 に、本調査の被験者数が少なかったため、有意差が統計的に出てこないからである。第 2 に、本章は社会人を対象とするロールプレイ調査法を用いるので、JJ1 と CC1 双方共に、先行研究に比べると、豊富な意味公式 (JJ1-23 種類、CC1-22 種類) が見られたほかに、数が相当に多かった {あいづち} も考察対象として計算し、意味公式総数も多かったため、各意味公式の使用率が相応に少なくなったため、JJ1 と CC1 の間の有意差が見られなかったからである。それにもかかわらず、各意味公式の使用回数の割合をみれば、JJ1 では多く使用された意味公式の上位 7 位が① {あいづち} (30.01%)、② {理由} (12.13%)、③ {詫び} (11.49%)、④ {ためらい} (7.79%)、⑤ {不可} (6.13%)、⑥ {困惑} (5.75%)、⑦ {関係維持} (5.11%) という順であったのに対して、CC1 では① {理由} (23.16%)、② {不可} (15.8%)、③ {あいづち} (10.08%)、④ {ためらい} (8.99%)、⑤ {詫び} (8.72%)、⑥ {情報要求} (8.45%)、⑦ {関係維持} (5.72%) という上位 7 位が見られた。そのうち、JJ1 と CC1 双方共に、{あいづち}、{理由}、「詫び」、{ためらい}、{不可} という 5 つの意味公式を多用したという共通点が挙げられる。とりわけ、{ためらい} の使用率においては、JJ1 と CC1 はほぼ同様であった。一方、JJ1 のほうが CC1 より {あいづち} (JJ1-235/30.01%、CC1-37/10.08%)、{詫び} (JJ1-90/11.49%、CC1-32/8.72%)、{困惑} (JJ1-45/5.75%、CC1-1/0.27%) を多用したのに対して、CC1 のほうが JJ1 より {理由} (JJ1-95/12.13%、CC1-85/23.16%)、{不可} (JJ1-48/6.13%、CC1-58/15.8%) を好んだという相違点も見られた。

## 4.2.2 被験者による意味公式の使用平均値の有意差

つづいて、本章の調査は JJ1 と CC1 の被験者各々 10 名を対象とするので、被験者が一人一人の意味公式の使用回数に及ぼした影響も考察する必要があると考える。ゆえに、各意味公式の使用回数においては、JJ1 と CC1 の各被験者が及ぼした影響を t 検定で対照する。その結果を以下の 3 つの表に示す。

表 4-17 JJ1 と CC1 の直接的断りにおける人による意味公式の平均使用数

	JJ1(n=10)		CC1(n=10)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	4.80	5.633	5.90	2.470	-0.509	0.623
遂行	0.00	0.000	0.10	0.316	-1.000	0.343
直接的断り合計	4.80	5.633	6.00	2.404	-0.578	0.577

表 4-18 JJ1 と CC1 の間接的断りにおける人による意味公式の平均値使用数

	JJ1(n=10)		CC1(n=10)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	9.50	3.171	8.50	3.028	0.563	0.587
条件提示	1.00	1.155	0.60	0.699	0.840	0.423
詫び	9.00	3.651	3.20	2.150	6.018	0.000
願望	3.20	2.573	1.00	1.333	2.400	0.040
言いさし	0.80	0.789	0.10	0.316	2.689	0.025
関係維持	4.00	3.712	2.10	1.370	1.575	0.150
遺憾	1.00	1.247	0.30	0.675	1.655	0.132
相手を思い止 まらせる試み	0.30	0.675	0.10	0.316	0.802	0.443
提案	0.50	0.972	0.50	0.850	0.000	1.000
保留	1.50	3.408	0.70	1.252	0.694	0.505
原則的陳述	0.00	0.000	0.50	1.080	-1.464	0.177
間接的断り合計	30.80	5.692	17.60	5.190	4.342	0.002

表 4-19 JJ1 と CC1 の付随表現における人による意味公式の平均使用数



	JJ1 (n=10)		CC1 (n=10)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	1.20	1.874	0.30	0.483	1.646	0.134
あいづち	23.50	12.159	3.70	3.831	4.756	0.001
困惑	4.50	6.329	0.10	0.316	2.193	0.056
ためらい	6.10	4.067	3.30	2.751	1.745	0.115
驚き	1.20	1.874	0.00	0.000	2.025	0.074
情報確認・要求	3.10	2.183	3.10	3.315	0.000	1.000
否定の前置き	1.20	1.687	0.00	0.000	2.250	0.051
感謝	0.60	1.075	1.30	1.160	-1.655	0.132
呼びかけ	0.10	0.316	0.50	0.527	-2.449	0.037
挨拶	0.20	0.422	0.00	0.000	1.500	0.168
ヘッジ	0.40	0.516	0.00	0.000	2.449	0.037
その他	0.60	1.578	0.90	1.370	-0.439	0.671
付随表現合計	42.70	17.926	13.20	7.099	4.866	0.001

人による各意味公式の使用平均値の比較によると、JJ1 と CC1 の間に「直接的断り」の有意差が見られなかった。「間接的断り」においては、CC1 より JJ1 のほうでは、5%水準「間接的断り」が有意に多く見られた。そのうち、{詫び}、{願望}、{言いさし} の使用回数が JJ1 のほうでは有意に多く使用された。「付随表現」においては、CC1 より JJ1 のほうでは、「付随表現」が有意に多く用いられた。そのうち、{あいづち}、{ヘッジ} の使用回数が JJ1 のほうでは有意に多く見られたが、{呼びかけ} の使用回数が CC1 のほうでは有意に多かった。上記の結果をまとめると、CC1 より JJ1 のほうでは、「間接的断り」と「付随表現」が有意に多用されたことがわかった。それは、CC1 より JJ1 のほうでは、{詫び}、{願望}、{言いさし}、{あいづち}、{ヘッジ} が有意に多く使用されたからであった。

### 4.2.3 社会的関係が意味公式の使用平均値に与えた影響

まず、JJ1 と CC1 の親・疎関係によるそれぞれの意味公式使用平均値及び親と疎の間の有意差があるか否かを考察する。JJ1 の親・疎による「直接的断り」、「間接的断り」、「付随表現」における意味公式の使用回数の平均値の差を表 4-19、表 4-20 と表 4-21 にまとめる。

表 4-20 JJ1 親と疎（直接的断り）

	JJ1親 (n=20)		JJ1疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	1.35	1.785	1.05	1.356	1.064	0.301
遂行	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
直接的断り合計	1.35	1.785	1.05	1.356	1.064	0.301

表4-21 JJ1親と疎（間接的断り）

	JJ1親 (n=20)		JJ1疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	2.30	0.979	2.45	1.234	-0.679	0.505
条件提示	0.15	0.366	0.35	0.587	-1.453	0.163
詫び	2.10	1.483	2.40	1.392	-0.780	0.445
願望	1.15	1.226	0.45	0.686	2.666	0.015
言いさし	0.25	0.550	0.15	0.366	0.623	0.541
関係維持	1.05	1.276	0.95	1.050	0.525	0.606
遺憾	0.20	0.410	0.30	0.571	-0.698	0.494
相手を思い止まらせる 試み	0.10	0.447	0.05	0.224	0.438	0.666
代案	0.10	0.447	0.15	0.366	-0.567	0.577
保留	0.55	1.234	0.20	0.696	2.333	0.031
原則的陳述	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
間接的断り合計	7.95	2.114	7.45	2.665	0.778	0.446

表 4-22 JJ1 親と疎（付随表現）

	JJ1親 (n=20)		JJ1疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.35	0.813	0.25	0.550	0.490	0.629
あいづち	5.35	3.689	6.35	4.804	-0.960	0.349
困惑	1.30	2.105	1.05	1.572	0.575	0.572
ためらい	1.50	1.100	1.55	1.701	-0.127	0.900
驚き	0.45	0.826	0.15	0.366	1.552	0.137
情報確認・要求	0.90	1.119	0.65	0.813	0.865	0.398
否定の前置き	0.35	0.671	0.25	0.550	0.698	0.494
感謝	0.15	0.366	0.15	0.366	0.000	1.000
呼びかけ	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
挨拶	0.05	0.224	0.05	0.224	0.000	1.000
ヘッジ	0.10	0.308	0.10	0.308	0.000	1.000
その他	0.20	0.894	0.10	0.308	0.462	0.649
付随表現合計	10.75	5.590	10.65	6.360	0.062	0.951

上記の3つの表によると、「間接的断り」に属する{願望}と{保留}を除き、ほかの意味公式においては、JJ1の親・疎による有意差が見られなかった。即ち、JJ1では、親しくない人より親しい人のほうに対して、{願望}と{保留}が有意に多く用いられたことがわかった。

なお、CC1の親・疎による意味公式の使用回数の差を以下の表に示す。

表 4-23 CC1 親と疎 (直接的断り)

	CC1親 (n=20)		CC1疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	1.85	1.309	1.10	1.021	1.994	0.061
遂行	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
直接的断り合計	1.85	1.309	1.15	1.040	1.789	0.090

表4-24 CC1親と疎 (間接的断り)

	CC1親 (n=20)		CC1疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	2.30	1.174	1.95	0.945	1.196	0.246
条件提示	0.20	0.410	0.10	0.308	0.809	0.428
詫び	0.55	0.887	1.05	1.234	-1.486	0.154
願望	0.25	0.444	0.25	0.716	0.000	1.000
言いさし	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
関係維持	0.70	0.865	0.35	0.489	1.584	0.130
遺憾	0.10	0.308	0.05	0.224	0.567	0.577
相手を思い止ま らせる試み	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
代案	0.15	0.489	0.10	0.308	0.370	0.716
保留	0.15	0.366	0.20	0.696	-0.295	0.772
原則的陳述	0.15	0.489	0.10	0.447	0.326	0.748
間接的断り合計	4.60	2.257	4.20	2.215	0.522	0.607

表 4-25 CC1 親と疎 (付随表現)

	CC1親 (n=20)		CC1疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.05	0.224	0.10	0.308	-0.567	0.577
あいづち	0.95	1.701	0.90	1.165	0.117	0.908
困惑	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
ためらい	0.85	1.424	0.80	0.894	0.131	0.897
驚き	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
情報確認・要求	0.80	1.005	0.75	0.967	0.252	0.804
否定の前置き	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
感謝	0.25	0.444	0.40	0.503	-1.000	0.330
呼びかけ	0.20	0.410	0.05	0.224	1.371	0.186
挨拶	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
ヘッジ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
その他	0.40	0.754	0.05	0.224	2.101	0.049
付随表現合計	3.55	2.819	3.05	1.932	0.845	0.409

上記の3つの表に示した通りに、親・疎関係がCC1の意味公式の使用平均値に与えた影響が見られなかった。

次に、JJ1とCC1の上・同関係による意味公式使用平均値及びと上と同一の間の有意差があるか否かを考察する。

表 4-26 JJ1 上と同（直接的断り）

	JJ1上 (n=20)		JJ1同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	1.05	1.234	1.35	1.872	-0.946	0.356
遂行	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
直接的断り合計	1.05	1.234	1.35	1.872	-0.946	0.356

表4-27 JJ1上と同（間接的断り）

	JJ1上 (n=20)		JJ1同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	2.45	0.999	2.30	1.218	0.448	0.659
条件提示	0.25	0.550	0.25	0.444	0.000	1.000
詫び	2.45	1.669	2.05	1.146	0.954	0.352
願望	0.90	1.294	0.70	0.733	0.748	0.464
言いさし	0.30	0.571	0.10	0.308	1.285	0.214
関係維持	1.10	1.373	0.90	0.912	0.657	0.519
遺憾	0.28	0.575	0.28	0.461	0.000	1.000
相手を思い止まらせる 試み	0.05	0.224	0.10	0.447	-0.438	0.666
代案	0.00	0.000	0.25	0.550	-2.032	0.056
保留	0.55	1.317	0.20	0.523	1.677	0.110
原則的陳述	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
間接的断り合計	8.30	2.296	7.10	2.382	1.798	0.088

表 4-28 JJ1 上と同（付随表現）

	JJ1上 (n=20)		JJ1同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.35	0.813	0.25	0.550	0.490	0.629
あいづち	5.85	4.580	5.85	4.030	0.000	1.000
困惑	1.15	2.110	1.20	1.576	-0.114	0.910
ためらい	1.30	1.174	1.75	1.618	-1.229	0.234
驚き	0.25	0.444	0.35	0.813	-0.623	0.541
情報確認・要求	0.85	1.089	0.70	0.865	0.459	0.651
否定の前置き	0.15	0.366	0.45	0.759	-1.831	0.083
感謝	0.25	0.444	0.05	0.224	2.179	0.042
呼びかけ	0.00	0.000	0.50	0.707	-1.000	0.500
挨拶	0.05	0.224	0.05	0.224	0.000	1.000
ヘッジ	0.10	0.308	0.10	0.308	0.000	1.000
その他	0.25	0.910	0.05	0.224	0.940	0.359
付随表現合計	10.55	5.951	10.85	6.020	-0.202	0.842

JJ1 では同の人より上の人の方に対して、{感謝} が有意に多く見られたが、ほかの意味公式の使用回数においては、上・同による有意差が見られなかった。

つづいては、CC1 の上・同関係による各意味公式の使用回数の差を表 4-29、表 4-30 と表 4-31 にまとめる。

表 4-29 CC1 上と同 (直接的断り)

	CC1上 (n=20)		CC1同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	1.20	1.005	1.75	1.372	-1.636	0.118
遂行	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
直接的断り	1.20	1.005	1.80	1.361	-1.831	0.083
合計						

表 4-30 CC1 上と同 (間接的断り)

	CC1上 (n=20)		CC1同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.85	0.813	2.40	1.231	-1.993	0.061
条件提示	0.15	0.366	0.15	0.366	0.000	1.000
詫び	1.20	1.105	0.40	0.940	2.629	0.017
願望	0.15	0.366	0.35	0.745	-1.165	0.258
言いさし	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
関係維持	0.60	0.821	0.45	0.605	0.645	0.527
遺憾	0.05	0.224	0.10	0.308	-1.000	0.330
相手を思い止まらせる る試み	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
代案	0.05	0.224	0.20	0.523	-1.143	0.267
保留	0.05	0.224	0.30	0.733	-1.561	0.135
原則的陳述	0.20	0.616	0.05	0.224	1.000	0.330
間接的断り合計	4.30	1.922	4.50	2.524	-0.315	0.756

表 4-31 CC1 上と同 (付随表現)

	CC1上 (n=20)		CC1同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.15	0.366	0.00	0.000	1.831	0.083
あいづち	0.90	1.410	0.95	1.504	-0.152	0.881
困惑	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
ためらい	0.80	0.768	0.85	1.496	-0.156	0.878
驚き	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
情報確認・要求	0.70	0.865	0.85	1.089	-0.679	0.505
否定の前置き	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
感謝	0.30	0.470	0.35	0.489	-0.326	0.748
呼びかけ	0.20	0.410	0.05	0.224	1.371	0.186
挨拶	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
ヘッジ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
その他	0.20	0.616	0.25	0.550	-0.295	0.772
付随表現合計	3.30	2.319	3.30	2.536	0.000	1.000

CC1 では同の人より上の人の方に対して、{詫び} が有意に多用されたが、ほかの意味公式の使用回数においては、上・同による有意差が見られなかった。

上記の JJ1 と CC1 の親・疎関係及び上・同関係が各意味公式の使用回数に与えた影響をまとめると、JJ1 では、親しい人の方に対して、{願望} と {保留} が有意に多く用いられた。そして、上の人の方に対して、{感謝} が有意に多く使用された。一方、CC1 では、同の人より上の人の方に対して、{詫び} が有意に多用された。その他、JJ1 と CC1 のい

ずれも、親・疎関係及び上・同関係による各意味公式の使用回数の有意差が見られなかった。

## 4.2.4 本節のまとめ

本節では、JJ1 と CC1 の各意味公式の使用数及び割合、人による各意味公式の使用平均値の有意差、親・疎関係と力関係を含む社会的関係による各意味公式の使用平均値の有意差があるか否かを考察した。

まず、各意味公式の使用数及び割合の対照によると、JJ1 と CC1 双方共に、{あいづち}、{理由}、「詫び」、{ためらい}、{不可} という 5 つの意味公式を多用したという共通点が見られたが、JJ1 のほうが CC1 より {あいづち}、{詫び}、{困惑} を多用したのに対して、JJ1 より CC1 のほうで {理由}、{不可} が多く見られたという相違点もわかった。

次に、上記の JJ1 のほうが CC1 より {あいづち}、{詫び} を多用したのは、人による各意味公式の使用平均値の有意差の考察でも検証された。その他、JJ1 で見られた {願望}、{言いさし}、{ヘッジ} の使用数が多くなかったが、CC1 より有意に多かった。それに対して、CC1 で見られた {呼びかけ} の使用数が少なかったが、JJ1 より有意に多く見られた結果も得られた。

最後に、JJ1 と CC1 の親・疎関係及び上・同関係が各意味公式の使用回数に与えた影響をまとめると、JJ1 では、親しい人のほうに対して、{願望} と {保留} が有意に多く用いられた。そして、上の人に対して、{感謝} が有意に多く使用された。一方、CC1 では、同の人より上の人に対して、{詫び} が有意に多用された。その他、JJ1 と CC1 のいずれも、親・疎関係及び上・同関係による各意味公式の使用回数の有意差が見られなかった。

## 4.3 意味公式の内容と表現形式の分析

4.1 と 4.2 では、構造分析と量的分析によって、意味公式の使用回数及び展開パターンを考察して、JJ1 と CC1 の断り言語行動を対照してきたが、意味公式の具体的な内容または具体的な表現形式を分析することによって、JJ1 と CC1 の共通点と相違点、さらに親・疎、上・同を含む社会的変数が意味公式内容または表現形式の使い分けに与えた影響を考察する必要があると考える。また、4.2 で前述したとおり、JJ1 と CC1 とともに {あいづち}、{理由}、{詫び}、{ためらい}、{不可} が主に使用されたことがわかった。従って、本節では、{不可}、{理由}、{詫び}、{あいづち} を取り上げ、意味公式の内容を分析する。



### 4.3.1 {不可} の内容分析

4.2.1と4.2.2で述べたように、JJ1よりCC1のほうでは{不可}が多く使用されたが、人による意味公式の使用平均値の有意差が見られなかった。JJ1とCC1の間に{不可}の使用においては、異同があるか否か、またあるとすれば何の異同があるか、まだ明確ではない。そのため、本節では、3.3.3で提示した誘い手のフェイスを脅かす度合い（FT）の大きさに基づき、{不可}の内容を分類した上で、社会的変数が{不可}の内容の使い分けに及ぼした影響を考察していく。

まず、誘い手のFTの大きさに基づき、{不可}を、①能力・状況、②緩和的結論、③意志、④本音、⑤否定の5つに分類する。そのうち、①「能力・状況」の{不可}は、相手のフェイスを脅かす度合いが最も小さく、②から⑤までは、相手のFT度が大きくなる順番である。

本調査のデータでは、{不可}の内容分類間の境目が明確ではないこともあった。例えば、JJ1で見られた「ダメだ」という表現は「能力・状況」にも、「意志」にも分類できる。本研究では、{不可}と{理由}のつながりによって、{不可}の内容を分類することもある。例えば、「ダメだ」の前後に{理由}が来た場合、「能力・状況」に分類する。一方、「ダメだ」の前後に{理由}のような説明が現れなかった場合、「意志」に分類する。以下の例を見よう。

#### 1度目の断り

14B イヤー、①ちょっと俺明日はダメですね、ちょっと申し訳ないですけど。

#### 2度目の断り

15A 何時が都合が悪いの？

16B いや明日はね、子供の行事が学校で集まらなきゃいけないくて、②明日多分1日ダメなんですよねー。(JJ1M4 疎・同)

上記の例の1度目の断りにおいて、何も説明せずに{不可}を述べたが、2度目の断りにおいて、{理由}を説明した上で、{不可}を使用したため、1組の会話における一貫性を保証できるように、この会話で2回見れら{不可}をすべて自分の意志でコントロールできない「能力・状況」に分類した。

なお、JJ1の{不可}の内容の中で、同じ「無理」という表現であるが、「緩和的結論」に分類する場合もあれば、「能力・状況」の不可に分類する場合もある。それは「無理」の前後に「ちょっと」、「かもしれない」などのような緩和的表現があるか否かによって判断する。即ち、「ちょっと無理」、「むりかもしれない」などの表現を「緩和的結論」とするのに対して、「明日無理」のような表現を「能力・状況」の不可とする。

上記の分類の基準に基づき、{不可}の内容を5つに分類した。また、{不可}の内容分類に対応する使用回数及び例を表4-31に示す。( )の前の数字は{不可}の各内容の使用数を、( )の数字は使用率を表4-32す。

表4-32 JJ1とCC1の{不可}の内容分類及び例

不可の内容	JJ1	CC1
能力・状況	19(39.58%)	26(44.83%)
	行けない。/1後ほど送別会には出れませんが /ちょっと明日だと参加できないんですけれ ども/ちょっと家族の用事があってダメだ。	明天晚上我得参加孩子的家长会呀，去不了了。 /去不上了。/明天晚上真不行。(明日の夜に、 子供のPTAがあるんで、行けない。/行けない /明日の夜確かにだめです。)
緩和的結論	20(41.67%)	5(8.62%)
	ちょっとむりですね。/1やっぱり、難しいか なあ。/ちょっと今回は遠慮させてもらいま すー。/ まあこちらを優先させていただいて	我参加可能是够呛。/回去看看估计够呛。(ち ょっと参加できないですけど。/聞いてみて も、多分行けないかもしれないですけど。)
意志	7(14.58%)	15(25.86%)
	1 明日ちょっとダメなんだよね。	我不去了这次。/我这一，不行。(今回は行か ない。/僕一、だめだよ。)
本音	1(2.08%)	12(20.69%)
	行かなくてもいいかな	我不想去。/我有时间也不去。/我不愿意那啥， 不去了。(行きたくないですけど。/時間が あっても行かない。/行きたくない)
否定	1(2.08%)	0
	いやいやいや(1つのみ見られた)	
合計	48(100%)	58(100%)

表4-32に示した使用回数からみれば、前述のように、{不可}の全体的な使用回数に関しては、JJ1よりCC1のほうが{不可}を多用したことが見られたが、誘い手のFT度が小さい「能力・状況」の使用数が、JJ1とCC1両方共に最も多く見られた。しかし、誘い手のFT度が小さい「緩和的結論」とFT度が大きい「本音」の使用回数に関しては、JJ1とCC1間の差が目立っていた。JJ1では、「能力・状況」と同じように、「緩和的結論」も多用されたのに対して、CC1で見られた「緩和的結論」は数が少なかった。しかも、CC1では{保留}と「緩和的結論」を表す{不可}を同時に使用することも観察された。例えば、「行，我看看，跟那打个电话，但是，估计会够呛，因为不光是他，还，还有别人(CCAM2親・上)。(訳：うん、考えておく。誰かに電話で連絡してみるけど、多分無理だ。彼だけでなく、

ほかの人もいるから)のように、{保留}を述べたが、保証できないという「緩和的結論」としての{不可}で、相手のポジティブ・フェイスを脅かす危険性をできるだけ縮小しながら、自分のネガティブ・フェイスを維持する経緯が観察された。一方、誘い手のFT度が大きい「本音」の使用数に関しては、JJ1で1つしか見られなかったのに対して、CC1で12回の「本音」としての{不可}が出てきた。そして、CC1で見られた「本音」としての{不可}は全てCC1の4名の女性の被験者<sup>25</sup>に集中した。また、JJ1で見られた2つの本音も女性に集中したこともわかった。

6B: ①我有时间也不去。

7A: (笑)。

8B: 我跟他…啥样 你还不知道哦。(是。)我不去啦。我去也没啥意思,没啥啥唠的。我不愿意那啥,不去了。

9A: 是省着去了也尴尬,好。

10B: 是,是。

11A: 行,行行。

12B: 我跟他关系真、真不行,你都知一道!我还去干啥去啊!(CC1F2親・同)

訳

6B: ①時間があっても行かない。

7A: (笑)。

8B: 彼との関係は、知ってるだろう。(うん。)行かないわ。行っても面白くない、話したいこともないし。行きたくないわ、行かないよ。

9A: そうですね。行っても気まずいだろう。

10B: そう、そう。

11A: うんうん。

12B: 彼とは本当に仲良くない、知ってるでしょう。行くわけないでしょう。

上記の例から、CC1の女性が親しい同年輩に対して、{不可}の「本音」を何度も使用したことが見られた。なお、「本音」のほかに、CC1では、相手のFT度が大きい「意志」の出現回数もJJ1より多く見られたという相違点もわかった。

JJ1とCC1の{不可}の内容を分類したことによって、JJ1では相手のフェイスを脅かす度合いが小さい「緩和的結論」と「能力・状況」が同時に好まれたのに対して、CC1では相手のFT度が小さい「能力・状況」が多用された同時に、相手のFT度が大きい「意志」と「本音」も好まれた傾向が見られた。従って、社会人の誘いに対する断り言語行動においては、ただ{不可}の使用数からすれば、JJ1とCC1の間に有意差は見られなかったが、{不可}の内容分析によると、JJ1よりCC1のほうが、直接的な会話のスタイルを好んだことがわかった。

次に、親・疎関係と力関係を含む社会的変数が{不可}の内容に及ぼした影響を考察す

る。

表 4-33 JJ1 と CC1 の親・疎関係による {不可} の各内容の使い分け

	能力・状況	緩和的結論	意志	本音	否定	合計
JJ1 親合計	11	10	4	1	1	27
JJ1 親割合/48	22.92%	20.83%	8.33%	2.08%	2.08%	56.25%
JJ1 疎合計	8	10	3	0	0	21
JJ1 疎割合/48	16.67%	20.83%	6.25%	0	0	43.75%
CC1 親合計	10	4	11	12	0	37
CC1 親割合/58	17.24%	6.90%	18.79%	20.69%	0	63.79%
CC1 疎合計	16	1	4	0	0	21
CC1 疎割合/58	27.59%	1.72%	6.90%	0	0	36.21%

表 4-33 からは、親・疎関係が JJ1 の {不可} の内容の使い分けに与えた影響が観察されなかった。一方、CC1 では誘い手の FT 度が大きくなるほど、親・疎による {不可} の内容の差が目立っていた。具体的に言えば、CC1 では、疎の人からの勧誘を断る際に、相手の FT 度が小さい「能力・状況」が多用されたのに対して、相手の FT 度が大きい「意志」や「本音」の使用は少なかった。それに対して、親の人からの勧誘を断る際に、相手の FT 度が大きい「意志」や「本音」が多用されたのに対して、相手の FT 度が小さい「能力・状況」が少なく使用された。とりわけ、親しい人からの勧誘を断る際に多用された「本音」は 12 回見られたが、疎の人からの勧誘を断る場面では 1 つも見られなかった。従って、{不可} の内容分析からすれば、JJ1 より CC1 のほうでは親・疎関係が、{不可} の内容に与えた影響が著しく見られた。

表 4-34 JJ1 と CC1 の上・同関係による {不可} の各内容の使い分け

	能力・状況	緩和的結論	意志	本音	否定	合計
JJ1 上合計	10	9	1	1	0	21
J1 上割合/48	20.83%	18.75%	2.08%	2.08%	0	43.75%
JJ1 同合計	9	11	6	0	1	27
J1 同割合/48	18.75%	22.92%	12.50%	0	2.08%	56.25%
CC1 上合計	13	2	6	3	0	24
CC1 上割合/58	22.41%	3.45%	10.34%	5.17%	0	41.38%
CC1 同合計	13	3	9	9	0	34
CC1 同割合/58	22.41%	5.17%	15.52%	15.52%	0	58.62%

表 4-34 に示したとおり、JJ1 では、上の人より同の人のほうに対して、「意志」が多く見られた。一方、CC1 では、上の人より同の人のほうに対して、「本音」が多く用いられたという影響が見られた。ただし、上・同関係による {不可} の内容の使い分けは親・疎関係ほど顕著でなかった。

社会的関係が JJ1 と CC1 の {不可} の内容に与えた影響をまとめると、CC1 では親・疎関係による相手の FT 度が大きい「意志」、「本音」の使い分けの差が最も著しかった。即ち、親の人のほうに対して、「意志」と「本音」が多く使用された。また、同・下関係が JJ1 と CC1 の「意志」、「本音」の使い分けにも影響を及ぼしたが、その影響は CC1 の親・疎関係ほど顕著ではなかった。

### 4.3.2 {理由} の内容分析

4.1 と 4.2 で示したとおり、異文化、被験者の属性、場面、相手との関係などを問わず、{理由} というストラテジーが断り言語行動を成立させるために重要な機能を果たしているということがわかった。他に、藤森 (1996) は、「関係修復行動」という観点から「弁明」は関係修復行動において重要な行為であり、各々の社会での行動期待や義務として暗黙の了解ももとに成り立っているため、異文化間での相違が予測されるとして「弁明」の重要性を指摘している (藤森 1996 : 6-7)。西村 (2007) も、言い訳は断るために絶対なければならないというものではないが、実際、断る際にはその理由を説明することが多く、この理由の説得力、妥当性如何がスムーズに断りを遂行できるかに大きく影響すると思われる、言い訳の位置付けを明示している (西村 2007 : 95-96)。ゆえに、理由を中心に行われた先行研究に注目する必要もある。

理由を中心にする研究は、さらに注目する内容によって、「理由の言語形式に着目する研究」と「理由の内容に着目する研究」の 2 つに別れる。本研究では、「理由の内容」に焦点を当て、考察を行う。{理由} の内容に着目する研究においては、熊井 (1993)、藤森 (1996)、藤原 (2004)、権 (2006)、西村 (2007)、池田 (2009) などが挙げられる。

熊井 (1993 : 9) はロールプレイ調査法で現れた「理由」を「能力・知識の欠如」、「時間や時期」の 2 つに分けた。藤森 (1996 : 9) は、森山 (1990) によって提出された断りの方略 (「嫌型」、「嘘型」、「延期型」、「ごまかし型」) を参考にして、「弁明」を「率直型」、「曖昧型」、「嘘型」、「延期型」、「回避型」の 5 つの方略に分類している。権 (2006 : 322) は、ロールプレイ調査法で出てきた「理由」を「自分のことによる理由」、「相手のことによる理由」、「第 3 の物事による理由」の 3 つに区分した。西村 (2007 : 99) は、ロールプレイ調査法で現れた「言い訳」を「用事」、「体調不良」、「忙しい」、「宿題」、「家でゆっくり」、「金欠」、「その他」の 7 つに分けた。池田 (2009 : 163) は、DCT で現れた「理由」を「時間的な不都合概略」、「時間的な不都合詳細」、「体調不良」、「その他」の 4 つに分類し

た。

上記の先行研究をまとめると、{理由}の内容を分析する研究は相当に進んでいることが分かった。しかし、次の問題も残っている。①意味公式の分類と同じように、理由の内容による分類もさまざまである。それは研究目的、場面設定（断る前提設定も含まれる）、相手との関係、被験者の社会的属性などに起因する可能性もあると考えられる。②西村(2007)と池田(2009)共に日本語学習者の用いる断り表現で重要だと思われる「弁明・理由」の内容に注目する研究であり、いずれも扱っている学習者の中で、アメリカ人、ニュージーランド人をはじめとする西洋文化圏に属する学習者が多かった。日・中両言語の用いる「弁明・理由」の内容を明確にする研究は相当に限られている。

上記の先行研究の中で、熊井(1993)、藤森(1996)、権(2006)の理由分類は、マクロ的で、そして、「曖昧型」と「嘘型」は峻別しがたいところがあるという問題も藤森(1996)でも指摘された。従って、本研究では、西村(2007)、池田(2009)のような具体的内容による分類を参考に、3.3.3で提示した誘い手のフェイスを脅かす度合い(FT度)の大きさに基づき、{理由}の曖昧さと、コンテキストも合わせて、社会人を対象とするロールプレイ調査で現れた「理由」を①「明日の予定詳細」、②「仕事の詳細」、③「体調不良」、④「家族病気」、⑤「明日の不都合の概略」、⑥「明日の予定概略」、⑦「気持の表明」という7つに分類する。そのうち、①、②、③、④は「具体的な理由」に分類できる。⑤と⑥は、「情報不足の理由」に属する。「具体的な理由」が相手のFT度が最も小さい断り言語行動であるのに対して、「気持の表明」が相手のFT度が最も大きい断り言語行動であると考えられる。

{理由}内容を分類する基準は{理由}内容のほかに、1つの断り言語行動で現れたいくつかの{理由}の繋がりによることもある。例えば、

#### 1度目の断り

4B 明日かぁー(うん)、明日ねえ…。そっかぁ、いや、仕事、明日ね、①まあ仕事もあるんだけど、夜…んー…。そうね、ちょっとね、絶対ね、明後日までにしなきゃいけない書類があって、それが、まあ早く終わればいいんだけど、多分、今のこの調子だと長くかかって、またちょっとか終電帰りくらいになっちゃうから、多分いけないと思うんだよね、どうしよう。

5A いつも終電多いもんねえ〇〇ちゃんねえ…。(笑)

6B そうなんだ、しかも明日ね。もうちょっと後ならんとかこう、時間を作って(うん私もそう思う)、でも②明日だから、ねー、ちょっと急だからなー…。んー、ちょっとそれは難しいっていか無理だなあー。(JJ1F3 親・同)

上記の会話例のように、2度目に現れた「でも明日だから、ねー、ちょっと急だからなー…。」という理由表現はそもそも「情報不足の理由」と分類しようとするが、「まあ仕事もあるんだけど、～またちょっとか終電帰りくらいになっちゃうから」という1度目の理由表現の後ろに来たので、1度目の理由表現と同様に、「具体的な理由」に分類した。

上記の分類基準に基づき、JJ1とCC1{理由}の内容を分類した。そして、それに対応す

る使用回数及び例を表 4-35 に示す。

表 4-35 JJ1 と CC1 の {理由} の内容分類及び例

理由内容 の上位分 類	理由内容の 下位分類	JJ1	CC1
具体的 な理由	明日の予定 詳細	31 (32.63%)	34 (40%)
		その日娘が、家に遊びに来て、私の誕生日だから	明天我大学同学那个正好回来，那个同学之间咋说也得聚一下子。（明日大学の同級生がちょうど来るから、どうしても集まりたいです。）
	仕事の詳細	19 (20%)	2 (2.35%)
		明日から出張なんですよ。	这段时间接了一个大项目，这项目工作比较重。（このごろ、重要なプロジェクトがあるから。）
	体調不良	3 (3.16%)	8 (9.41%)
		体調がね、良くないんですよ。	这两天懒的呢，鼻炎，犯得特别严重。（このごろ、鼻炎がひどくなったから。）
	家族病気	0	10 (11.76%)
		我婆婆有病住院了，然后晚上，下了班我就赶紧去医院，（義理のお母さんが入院したから、それで仕事が終わったら、すぐ病院に行く。）	
具体的な理由合計	53 (55.79%)	54 (63.53%)	
情報不足 の理由	明日の不都合の概略	13 (13.68%)	0
		急ですね、明日ね。	
	明日の予定概略	17 (17.89%)	12 (14.12%)
		ちょっと明日の予定もあるんですよえ。	明天的话，那…那我得那什么，我有急事儿，我得去。（明日なら、ちょっと…、急用があつて、行かないといけない。）
情報不足の理由合計	30 (31.58%)	12 (14.12%)	
気持の		12 (12.63%)	19 (22.35%)

表明		ちょっと、やっぱりあまりよく知らない人で、なんか、こう、気持ちが向かないんですが…。	确实不太熟。我本来就是一个，比较喜欢安静的一个人儿。（確かによく知らないです。僕って、自分で静かにいることが好きなタイプです。）
合計		95(100%)	85(100%)

まず、{理由}の内容の上位分類の割合を見ると、JJ1とCC1双方ともに、「具体的な理由」が最も多用されたことがわかった。一方、「具体的な理由」につづき、JJ1では「情報不足の理由」が2番目に多く使用されたのに対して、CC1では、「気持の表明」が2番目多く見られた。次に、{理由}内容の下位分類の割合を見ると、JJ1とCC1両方ともに、「具体的な理由」に属する「明日の予定詳細」を最も多く使用したという共通点がわかった(JJ1- 32.63%, CC1-40%)。一方、JJ1のほうでは、「仕事の詳細」(20%)と「明日の不都合概略」(17.89%)が多く見られたのに対して、CC1では、「気持の表明」(22.35%)、「家族病気」(11.76%)が多く使用された。換言すれば、「明日の予定詳細」を除き、JJ1では「情報不足の理由」が多用されたのに対して、CC1では「気持の表明」が好まれたことが伺える。とりわけ、JJ1で見られた「情報不足の理由」に属する「明日の不都合概略」(17.89%)が、CC1では1つも見られなかった。下記の例を挙げながら、日中の{理由}の内容の使い分けの相違点を詳しく述べる。

#### 1度目の断り

8B     ①そうだよなー、②明日あ？③ええー！行けるかもしれないけど、a えーでも急だよねえ（そうなの）？  
a 急だよねえそれ（うーん）？ええ、④どうしよう。

#### 2回目の断り

9A     んー、だってやっとなかともう、すぐ行っちゃうんだって。  
10B    そうなのー。ええー、b急だなあ、ももちゃん行くの？⑤どうしよう、⑥まずい。（笑）えっ、⑦ももちゃんが行く…えー…行かないとまずいかな？  
11A    まずいってことはないわよ、どうせただの親戚だもん。そんなことないよ。  
12B    そうだよね？〇〇ちゃん、誰も行かないってったらまずいけど、でも何人かが行けばまあ、いいかね？  
          （あっそう、）  
13A    私も行くし、それからXXちゃんも来るし（うんうん）、□□さんも来るし（うんうん）、△△ちゃんも来るから  
14B    あ、そっか、もうその人たちになんか託しちゃおっかなー？ちょっとなー、そっかあ…。いいかな？私じゃあさあ、ちょっと、行かなくても、ちょっと後で手紙とか書くようにして（うん）、ちょっとみんなに大学ってことで言ってもらって、ちょっと私アレかな、行かなくてもいいかな？（JJ1F3親・上）



例のように、JJAF 3 の断り手が親・上の人からの勧誘に対して、断り行為を2度行ったが、ただ a「急だよね」、b「急だなあ」という「明日の不都合概略」の{理由}を使用して、「具体的な理由」にまったく言及していなかったのに対して、「どうしよう」のような{困惑}を7度も使った。そして、中国人の被験者を対象とするフォローアップ・インタビューでは、JJAF 3 親・上の会話例で見られた、迷ったり、ためらったりする姿を相手に示しながら、相手のフェイスを維持しながら、自分のネガティブ・フェイスも守るといふ会話のスタイルは、中国人にとっては理解しがたいという答えをもらった。

1 回目の断り

2B: 啊, 明天晚上。啊, 那天那谁那个, 张工那个哈? (嗯) 哎呀, 0 0 (姓) 这个吧, 我不想去。这实话跟你说啊。我不想去。

3A: 没事。你有啥你就跟我说。

4B: 我就…我不去了这次。啊。完了, 以后那个那啥…, 我不是冲你啊。

5A: 嗯, 明白, 明白。

6B: 我主要是跟他吧, 没什么太多交往。完了这方面联系啥的特别少。啊, 我就不去了。(行行行。) 行, 谢谢哦。还来通知我来了。(CC1F 2 親・上)

訳

2B: 明日の夜かあ。明日のあれ、0 0 (姓) か。(うん) まあ、0 0 さんなら、①行きたくないです。正直に言うと、行きたくないです。

3A: 大丈夫です。何かあったら言ってもいいですよ。

4B: ②今回行かないよ。あ、これからあのさあ…、あなたのせいじゃないです。③まあ、行かないです。(うんうんうん)

5A: うん、わかった。わかった。

6B: 彼とあまり関わりがなかったから。そして、連絡も非常に少ない。④まあ、行かない。(うんうんうん。) うん、ありがとう。わざわざ教えてくれるなんて。(CC1F 2 親・上)

一方、中国人を対象とする CCAF 2 親・上会話例のように、CCAF 2 の断り手が親・上の人からの勧誘を断る際に、{ためらい}、{情報確認}など「付随表現」を述べたあとで、すぐに相手の FT 度が大きい{不可}に属する「本音」を2度も使用した。途中で、誘い手のポジティブ・フェイスを潰さないように、{関係維持}を使ったが、また「彼とあまり関わりがなかったから、行かない」という「気持の表明」を表す{理由} + 「意志」を表す{不可}を使用することになった。

上記の2つの会話例のスタイルから、JJ1 では「情報不足の理由」が多く使用されたのに対して、CC1 では相手の FT 度が大きい「気持の表明」が多用されたことがわかった。

また、「具体的な理由」においても、JJ1 と CC1 の間に相違点が見られた。「明日の約束

詳細」のほかに、JJ1は「仕事の詳細」(20%)を多用したのに対して、CC1は「家族病気」(11.76%)や「体調不良」(9.41%)を多く使ったこともわかった。JJ1が家族の病気を使わない原因としては、JJ1のほとんど被験者が親戚関係だから、家族病気を理由にしにくい。もう一つは、JJ1の被験者の年齢が高いので、ご両親の病気を理由にするわけがないからである。それにも関わらず、中国の子供が両親の面倒を見るという家族絆が強いという生活のスタイル(意識)も伺える。一方、日本では、ご両親からみれば、なるべく子供の迷惑にならないという意識が強いことも観察される。つまり日中の親子関係に対する意識の違いが見られる。なお、日本は「仕事の詳細」を使った原因としては、日本の被験者がほとんど親戚関係だから、仕事を理由に使いやすいのに対して、中国の被験者は全員同僚関係で、仕事を理由にしにくいという原因もある。要するに、日中両国の対人関係(距離)の違いもわかった。

さらに、親・疎関係と力関係が{理由}の内容の使い分けに及ぼした影響を考察する。

表 4-36 JJ1 と CC1 の親・疎関係による {理由} の各内容の使い分け

	具体的な理由				具体的な理由 合計	情報不足の理由		情報不足の理由 合計	気持の 表明	合計
	明日の 予定詳 細	仕事 詳細	体調 不良	家族 の病 気		明日の 不都合 の概略	明日の 予定概 略			
JJ1 親合計	18	6	3	0	27	7	10	17	3	47
JJ1 親割合/95	18.95%	6.32%	3.16%	0	28.42%	7.37%	10.53%	17.89%	3.16%	49.47%
JJ1 疎合計	13	13	0	0	26	6	7	13	9	48
JJ1 疎割合/95	13.68%	13.68%	0	0	27.37%	6.32%	7.37%	13.68%	9.47%	50.53%
CC1 親合計	11	2	7	6	26	0	7	7	13	46
CC1 親割合/85	12.94%	2.35%	8.24%	7.06%	30.59%	0	8.24%	8.24%	15.29%	54.12%
CC1 疎合計	23	0	1	4	28	0	5	5	6	39
CC1 疎割合/85	27.06%	0	1.18%	4.71%	32.94%	0	5.88%	5.88%	7.06%	45.88%

表 4-36 から、JJ1 では親・疎を問わず、「明日の予定詳細」が最も多く使用された。それに対して、JJ1 では親しい人より親しくない人のほうに対して、「仕事の詳細」(親-6/6.32%, 疎-13/13.68%)と「気持の表明」(親-3/3.16%, 疎-9/9.47%)が多く見られた。その他、親・疎関係は他の理由の内容に影響を与えなかった。一方、CC1 では親しくない人からの勧誘を断る際に、「明日の予定詳細」の使用回数が親しい人に対する断り場面より12回も多く、その親・疎による差が最も顕著であった。それに対して、親しくない人より親しい人のほうに対して、「気持の表明」が多く見られたという興味深い結果になった。フ

フォローアップ・インタビューの結果によると、CC1では親しくない人のフェイスを潰さないように、具体的な理由（嘘をついてもかまわないという方便的な嘘も使用した）を使ったほうが良いと考えるのに対して、親しい人に対して、相手との親しい関係が維持できるように、なるべく嘘をつかないように配慮するので、本音をそのまま相手に示した。即ち、具体的な理由が見つからないのを断る前提とすれば、{理由}を具体的に使うほど、親しい人に嘘がばれる危険性が大きく、逆に相手のフェイスを潰したという心配もあった。一方、気持ちをそのまま伝えても、親しい人が理解してくれるという親しい人に甘える考えも伺われた。

次に、力関係が JJ1 と CC1 の {理由} の使い分けに及ぼした影響を表 4-37 にまとめる。

表 4-37 JJ1 と CC1 の上・同関係による {理由} の各内容の使い分け

	具体的な理由				具体的な理由 合計	情報不足の理由		情報不足の理由 合計	気持の 表明	合計
	明日の 予定詳細	仕事 詳細	体調 不良	家族 の病 気		明日の 不都合 の概略	明日 の予 定概 略			
JJ1 上合計	12	11	3	0	26	10	8	18	5	49
JJ1 上割合/95	12.63%	11.58%	3.16%	0	27.37%	10.53%	8.42%	18.95%	5.26%	51.58%
JJ1 同合計	19	8	0	0	27	3	9	12	7	46
JJ1 同割合/95	20%	8.42%	0	0	28.42%	3.16%	9.47%	12.63%	7.37%	48.42%
CC1 上合計	16	2	0	6	24	0	8	8	5	37
CC1 上割合/85	18.82%	2.35%	0	7.06%	28.24%	0	9.41%	9.41%	5.88%	43.53%
CC1 同合計	18	0	8	4	30	0	4	4	14	48
CC1 同割合/85	21.18%	0	9.41%	4.71%	35.29%	0	4.71%	4.71%	16.47%	56.47%

表 4-37 からは、JJ1 と CC1 ともに、上・同を問わず、「明日の予定詳細」が最も多く使用された共通点があった。一方、以下の相違も観察された。JJ1 では上の人に対して、「明日の予定詳細」、「仕事の詳細」を含む具体的な理由と、「明日の不都合の概略」を含む情報不足の理由が同時多用されたのに対して、CC1 では上の人に対して「明日の予定詳細」のみが主に多く用いられた。なお、JJ1 では同の人に対して、「明日の予定詳細」のみが主に使用されたのに対して、CC1 では「明日の予定詳細」と「気持の表明」が同時に用いられた。そのうち、力関係による CC1 の「気持の表明」の差が最も顕著であった。

上記の JJ1 と CC1 の社会的変数が {理由} の内容の使い分けに与えた影響をまとめると、親・疎による CC1 の「明日の予定詳細」の差が最も顕著であった。即ち、CC1 では親しく

ない人のほうに対して、「明日の予定詳細」が好まれたことがわかった。その他、親・疎関係及び上・同関係が CC1 の「気持の表明」に与えた影響も伺える。即ち、CC1 では親しい人と同の人のほうに対して、「気持の表明」が多用された。一方、社会的関係が JJ1 の {理由} の内容の使い分けに与えた影響も見られたが、CC1 ほど顕著でなかった。

最後に、{理由} を「具体的な理由」、「情報不足の理由」、「気持の表明」の 3 つのカテゴリーに分けて、{理由} のカテゴリーの展開パターンから、日中対照を行う。

表 4-38 JJ1 と CC1 の {理由} の内容カテゴリーの分類による展開パターン

理由の展開パターン	JJ1 場面数 (割合%)	CC1 場面数 (割合%)
具体的な理由のみ	15 (37.5%)	24 (60%)
情報不足の理由のみ	11 (27.5%)	3 (7.5%)
気持の表明のみ	1 (2.5%)	9 (22.5%)
情報不足の理由+具体的な理由	8 (20%)	2 (5%)
具体的な理由+気持の表明	1 (2.5%)	0
情報不足の理由+気持の表明	3 (7.5%)	1 (2.5%)
情報不足の理由+具体的な理由+本音	1 (2.5%)	1 (2.5%)
合計	40 (100%)	40 (100%)

表 4-38 に示したとおり、JJ1 と CC1 とともに、「具体的な理由のみ」のパターンが最も多く使用されたが、JJ1 より CC1 のほうでは「具体的な理由のみ」パターンの割合が相当に多かった。なお、JJ1 では「具体的な理由のみ」につづき、2 番目に多く使用された「情報不足の理由のみ」の使用数及び割合は、CC1 より多く見られた。それに対して、CC1 では 2 番目に多用された「気持の表明のみ」の使用回数及び割合は、JJ1 より相当に多かった。つづいて、CC1 より JJ1 のほうでは、「情報不足の理由+具体的な理由」（このパターンについて、説明する。つまり、断り手が 1 度目の断りにおいては、「情報不足の理由」のみ提供したが、誘い手から 2 度目に誘われて、2 度目の断りにおいては、「具体的な情報」を述べた会話場面は、JJ1 では 8 組見られた。）というパターンの使用率が多かった。まとめた結果、JJ1 は「具体的な理由のみ」と「情報不足の理由のみ」を両方共に好んだのに対して、CC1 は「具体的な理由のみ」に続き、「気持の表明のみ」も好んだことが伺える。

### 4.3.3 {あいづち} の表現形式の分析

「あいづち」に関する研究は、とりわけ日本で相当に進んでいる。小宮 (1986)、黒崎 (1987)、杉戸 (1987)、堀口 (1988、1990)、ザトラウスキー (1991、1987、1993)、メイナード (1986、1987、1993) などが挙げられる。中国でも、黄衍 (1987)、吴平 (2000、2001)

匡小栄（2000）、胡健（2001）、于国栋（2003）などの研究も見られた。また、劉建華（1987）、楊晶（2001）などのような、「あいづち」に関する日中対照を考察する研究もあった。しかし、断り言語行動に見られたあいづちを取り扱う研究は相当に限られている。ただ任（2004）、権（2007）のようなロールプレイによる日韓の断り言語行動を対照する研究には、{あいづち}を断る意味公式の1つとする考察が見られた。無論、DCTによる断り言語行動を考察する際に想像した書き言葉には、{あいづち}が見られるはずがないので、ロールプレイとフィールドワークにしか{あいづち}が見られないからという原因もあった。しかし、ロールプレイ調査による日本語の断り言語行動または日本と他の言語を対照する研究も数多かったが、{あいづち}を詳しく考察する研究は少なかった。4.2 量的分析で述べたように、本調査のデータによると、各意味公式の使用回数の全体的に占める割合からすると、JJIとCC1両方共に、{あいづち}を多用したことがわかった。そのうち、JJIでは「あいづち」が最も多く使用されて、CC1では{あいづち}が3番目に多く使われたという結果が出てきた。故に、断り言語行動を考察する際に、会話で重要な役割を果たしている{あいづち}の考察を避けることができないと考える。

まず、「あいづち」の定義に関して、研究者によって様々に提出された。小宮（1986）は「単に「聞いている」、「わかった」という意味で用いられるもの」という定義に、「自由意志に基づいて」という限定をつけて、これは「積極的な応答の求め、あるいは、ポーズのような消極的な求めに応じる形でなされた受け答えではないという意味である」と説明している（小宮 1986：45—46）。黒崎（1987）は「あいづち」を「話者の発話に対して、肯否等の判断を表明すること」と定義して（黒崎 1987：17）、水野（1988）は、「話し手の話を聞いているということを伝える機能だけ」という定義を述べた（水野 1988：20）。表現形式による記述にはそれぞれの研究の間で一致しない点が見られるが、「聞いているということを示す」と「わかったということを示す」という働きをあいづちの機能と認める点ではほとんど一致している（堀口 1997：43）。

また、メイナード（1993）はあいづちの機能を6つに分類した。

- ①「続けてというシグナル」(continuer)
- ②内容理解を示す表現
- ③話し手の判断を支持する表現
- ④相手の意見、考え方に賛成の意志表示をする表現
- ⑤感情を強く出す表現
- ⑥情報の追加、訂正、要求などをする表現。

堀口（1997）はあいづちの機能を5つに分類した。

- ①聞いている信号
- ②理解している信号
- ③同意の信号
- ④否定の信号

## ⑤感情の表出

本調査で JJ1 に見られた {あいづち} の表現形式は、「うん／うんうん／うーん」、「ええ／ええええ」、「はい」、「そうですね／そうなんです」、「そうなんです／そうなんだ／そうです」、「そうなんですよね／そうだよね」、「そうなんですよ」、「そうですか／そうなんですか／そうでしたか／あ、そうなんですか／あーそー」、「えっ」、「あー」、「あーら」、「ねえ」、「ふーん」、「そうなの」、「なるほど」、繰り返し、言い換えなどがある。一方、CC1 に見られた {あいづち} の表現形式は（以下の日本語訳は、大まかに等価であると考えられるものである）、「哎／哎哎」（えー）、「啊」（はい）、「嗯」（うん）、「哦哦」（うん）、「行」（うん）、「对」（そうね）、繰り返し、「可不」（そうそう）、「啊，是嘛」（あ、そうですか）などがある。

本研究ではメイナードと堀口の分類を参考にし、本調査のデータに現れたあいづちの機能を①「聞いている」、②「同意・支持」、③「感情の表出」④「了解」、⑤「会話への共同参加」という5つに分類する。④と⑤は CC1 を対象とする調査においては見られなかった。ところで、各機能の間に境目が明確に見えない {あいづち} の表現形式もあった。

### 勧誘話段

- 1A あ、実は（はい）、私たちの仲間に（はい）「〇〇ちゃん」って人がいて（はい）、長いこといけなかったんですけど、やっと（はい）台湾に留学に行けることになりましたため（はい）、あの、急で申し訳ないんですけど、明日送別会をやるんですよ（はい）。それで、なるべく多くの方にいらしていただきたく思いまして、「〇〇ちゃん」のことをそんなにご存知じゃないかもわからないんですけど（ええ）、もしよろしかったら、あの、送別会と一緒に出ていただきたいんですけどお。（JJ1F1 疎・上）

例のように、勧誘話段において、断り手が誘い手からの勧誘に対して、発した「はい」を、「聞いている」機能と理解できるが、もう1つの例を見ると、「同意」という機能もあった。

### 終了部

- 9A はい、わかりました（すみません）。これはもうどうしようもないですね（ないですねー）。（すみません）市会議員さんの方も〇〇さん頼りだしねー（はい）。
- 10B 申し訳ございません、本当に。
- 11A あ、時間の組み方が悪かったのはどうしようもないですね。本当に（はい）ありがとうございました（ありがとうございます）。じゃあ、1万円お出ししときますね。
- 12B はい、よろしくお願ひします。（JJ1F4 親・上）

例のように、終了部において、JJ1F4 が相手の「あの、時間の組み方が悪かったのはどうしようもないですね。」という判断に対して、同意を示すために、「はい」という {あ

いづち} を発した。従って、{あいづち} の機能を判断する基準としては、言語表現形式のみでなく、コンテキスト、口調、イントネーションなども加えて判断する必要があると考える。

上記の機能判断の基準に基づき、JJ1 の {あいづち} の機能使い分け詳細を、表 4-39 に示す。

表 4-39 JJ1 の {あいづち} の機能分類

あいづちの機能	あいづちの表現形式	回数	割合%
聞いている	うん／うんうん／うーん	47	20
	はい	50	21.28
	ええ／ええええ	45	19.15
	あー・／ああ	9	3.83
	聞いている合計	152	64.26
同意・支持	うん／うんうん／うーん	6	2.55
	はい	1	0.43
	ええ／ええええ	2	0.85
	そうですね/そうなんですね	3	1.28
	そうなんですよ	1	0.43
	そうなんです/そうなんだ/ そうです/そうなの	5	2.13
	そうなんですよね/そうだよ	6	2.55
	繰り返し	3	1.28%
	同意・支持合計	27	11.49
感情の表出	そうですか/そうなんですか/そうでしたか/ あ、そうなんですか/あーそー。	15	6.38
	うん／うんうん／うーん	1	0.43
	えっ	2	0.85
	あー	4	1.70
	あーら	1	0.42
	へー	1	0.43
	言い換え	1	0.43
	感情の表出合計	25	10.64

了解	うん／うんうん／うーん	1	0.43
	そうですか／そうなんですか／そうでしたか／ あ、そうなんですか／あーそー。	16	6.81
	あー	2	0.85
	なるほど	1	0.43
	了解合計	20	8.51
会話への共同参加	うん／うんうん／うーん	4	1.70
	ええ／ええええ	1	0.43
	ねえ	1	0.43
	そうですね/そうなんですね	3	1.28
	そうなんですよね/そっだよ	1	0.43
	そうなんですよ	2	0.85
	会話への共同参加合計	12	5.11
合計		235	100

CC1 の {あいづち} の機能分類による使い分けの詳細は以下のようなになる。

表 4-40 CC1 の {あいづち} の機能分類

あいづちの機能	あいづちの表現形式	回数	割合%
聞いている	哎 / 哎哎 (えー)	1	2.70
	啊 (はい)	8	21.62
	嗯 (うん)	13	35.14
	哦哦 (うんうん)	2	5.41
	聞いている合計	24	64.86
同意・支持	嗯 (うん)	1	2.70
	行 (うん)	2	5.41
	对 (そうね)	7	18.92
	繰り返し	1	2.70
	可不 (そうそう)	1	2.70
	同意・支持合計	12	32.43
感情の表出	啊, 是嘛 (あ、そうですか)	1	2.70
	感情の表出合計	1	2.70



合計		37	100
----	--	----	-----

次に、JJ1 と CC1 の {あいづち} の機能による使い分け及び割合を 4-41 表に示す。

表 4-41 JJ1 と CC1 の {あいづち} の機能による表現形式の使い分け

あいづちの機能	JJ1 (回数)	JJ1 (割合%)	CC1 (回数)	JJ1 (割合%)
聞いている	151	64.26	24	64.86
同意・支持	27	11.49	12	32.43
感情の表出	25	10.64	1	2.70
了解	20	8.51	0	0
会話への共同参加	12	5.11	0	0
合計	235	100	37	100

表 4-41 を見ると、双方共に、{あいづち} の機能による使い分けの中で、「聞いている」という機能を果たしている {あいづち} が最も多く使用された。一方、JJ1 で使用された {あいづち} の機能の種類が CC1 より多かったという相違点もわかった。具体的な表現形式を見ると、JJ1 では主に「聞いている」を表す「うん／うんうん／うーん」、「はい」、「ええ／ええええ」に集中したのに対して、CC1 では「聞いている」を表す「嗯」（うん）が最も多く見られた。

次に、親・疎関係と力関係が JJ1 と CC1 の {あいづち} の使い分けに与えた影響を考察する。JJ1 の親・疎による {あいづち} の使い分けを表 4-42 に示す。

表 4-42 JJ1 の親・疎関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	親割合		疎割合	
		親 (回数)	/235	疎 (回数)	/235
聞いている	うん／うんうん／うーん	27	11.49%	20	8.51%
	はい	18	7.66%	32	13.62%
	ええ／ええええ	16	6.81%	29	12.34%
	あー・／ああ	0	0	9	3.83%
	聞いている合計	61	25.96%	90	38.30%
同意・支持	うん／うんうん／うーん	5	2.13%	1	0.43%
	はい	1	0.43%	0	0
	ええ／ええええ	1	0.43%	1	0.43%
	そうですね/そうなんですね	2	0.85%	1	0.43%
	そうなんですよ	1	0.43%	0	0

	そうなんです／そうなんだ／ そうです ／そうなの	4	1.70%	1	0.43%
	そうなんですよね／そっだよ	3	1.28%	3	1.28%
	繰り返し	2	0.85%	1	0.43%
	同意・支持合計	19	8.09%	8	3.40%
感情の 表出	そうですか／そうなんですか／そうでし たか／ あ、そうなんですか／あーそー。	6	2.55%	9	3.83%
	うん／うんうん／うーん	0	0	1	0.43%
	えっ	2	0.85%	0	0
	あー	1	0.43%	3	1.28%
	あーら	1	0.43%	0	0
	へー	0	0	1	0.43%
	言い換え	1	0.43%	0	0
	感情の表出合計	11	4.68%	14	5.96%
了解	うん／うんうん／うーん	1	0.43%	0	0
	そうですか／そうなんですか／そうでし たか／ あ、そうなんですか／あーそー。	6	2.55%	10	4.26%
	あー	1	0.43%	1	0.43%
	なるほど	1	0.43%	0	0
	了解合計	9	3.83%	11	4.68%
会話への共同参 加	うん／うんうん／うーん	4	1.70%	0	0
	ええ／ええええ	0	0	1	0.43%
	ねえ	1	0.43%	0	0
	そうですね/そうなんです	1	0.43%	2	0.85%
	そうなんですよね／そっだよ	0	0	1	0.43%
	そうなんです	2	0.85%	0	0
	会話への共同参加合計	8	3.40%	4	1.70%
合計		108	45.96%	127	54.04

表 4-42 から、親・疎関係が JJ1 の {あいづち} の使い分けに及ぼした影響が主に「聞いている」機能に集中することがわかった。全体的に、JJ1 では親の人より疎の人のほうに対して、「聞いている」の役割を果たしている {あいづち} が多く見られた。それに対して、疎の人より親の人のほうに対して、「同意・指示」の機能を果たしている {あいづち} が多く使用された。なお、「聞いている」機能を表す {あいづち} の中で、親しい人に対

して、「うん／うんうん／うーん」が好まれたのに対して、疎の人に対して、「え／ええ」、「はい」の回数が多かったという傾向が観察された。ほかの機能を表す {あいづち} の出現回数が少なかったため、親・疎関係による {あいづち} に与えた影響を考察できなかった。

表 4-43 CC1 の親・疎関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	親 (回数)	親割合/37	疎 (回数)	疎割合/37
聞いている	哎 / 哎哎 (えー)	1	2.70%	0	0
	啊 (はい)	8	21.62%	0	0
	嗯 (うん)	6	16.22%	7	18.92%
	哦哦 (うんうん)	2	5.41%	0	0
	聞いている合計	17	45.95%	7	18.92%
同意・支持	嗯 (うん)	0	0	1	2.70%
	行 (うん)	0	0	2	5.41%
	对 (そうね)	2	5.41%	5	13.51%
	繰り返し	0	0	1	2.70%
	可不 (そうそう)	0	0	1	2.70%
	同意・支持合計	2	5.41%	10	27.03%
感情の表出	啊, 是嘛 (あ, そうですか)	0	0	1	2.70%
	感情の表出合計	0	0	1	2.70%
合計		19	51.35%	18	48.65%

表 4-43 によれば、「聞いている」に属する「啊」のみの使い分けには、CC1 の親・疎による差が見られた。即ち、親の人に対して、「啊」を 8 回使用したのに対して、疎の人に対して、1 回も使用しなかった。また、「聞いている」としての {あいづち} の使用回数合計からみれば、CC1 は親しくない人より親しい人のほうに対して、{あいづち} を多く使った結果が出た。他の {あいづち} の使い分けには、親・疎関係が及ぼした影響が見られなかった。「聞いている」、「同意・支持」から見ると、親・疎関係が CC1 の {あいづち} の表現形式の使い分けに与えた影響が見られたが、CC1 では {あいづち} の使用数がそもそも少なかったため、CC1 の {あいづち} の使い分けにおいて、待遇性が見られるのを一般化とすることができない。

JJ1 の上・同による {あいづち} の使い分けを表 4-44 にまとめる。

表 4-44 JJ1 の上・同関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづち の機能	あいづちの表現形式	上(回数)	上割合/235	同(回数)	同割合/235
聞いている	うん／うんうん／うーん	13	5.53%	34	14.47%
	はい	29	12.34%	21	8.94%
	ええ／ええええ	29	12.34%	16	6.81%
	あー・／ああ	3	1.28%	6	2.55%
	聞いている合計	74	31.49%	77	32.77%
同意・ 支持	うん／うんうん／うーん	0	0	6	2.55%
	はい	1	0.43%	0	0
	ええ／ええええ	2	0.85%	0	0
	そうですね/そうなんですね	2	0.85%	1	0.43%
	そうなんですよ	1	0.43%	0	0
	そうなんです/そうなんだ/ そうです/そ うなの	2	0.85%	3	1.28%
	そうなんですよね/そうだよね	2	0.85%	4	1.70%
	繰り返し	1	0.43%	2	0.85%
	同意・支持合計	11	4.68%	16	6.81%
感情の 表出	そうですか/そうなんですか/そうでした か/ あ、そうなんですか/あーそー。	8	3.40%	7	2.98%
	うん／うんうん／うーん	1	0.43%	0	0
	えっ	2	0.85%	0	0
	あー	2	0.85%	2	0.85%
	あーら	0	0	1	0.43%
	へー	1	0.43%	0	0
	言い換え	0	0	1	0.43%
	感情の表出合計	14	5.96%	11	4.68%
了解	うん／うんうん／うーん	0	0	1	0.43%
	そうですか/そうなんですか/そうでした か/ あ、そうなんですか/あーそー。	13	5.53%	3	1.28%
	あー	0	0	2	0.85%
	なるほど	0	0	1	0.43%
	了解合計	13	5.53%	7	2.98%
会話への	うん／うんうん／うーん	0	0	4	1.70%

共同参加	ええ／ええええ	1	0.43%	0	0
	ねえ	1	0.43%	0	0
	そうですね/そうなんです	2	0.85%	1	0.43%
	そうなんですよね/そっだよ	0	0	1	0.43%
	そうなんです	0	0	2	0.85%
	会話への共同さんか合計	4	1.70%	8	3.40%
合計		116	49.36%	119	50.64%

表 4-44 をみると、JJ1 の上・同による {あいづち} の使い分けに与えた影響もほぼ「聞いている」という機能に集中した。最も目立っているのは「うん／うんうん／うーん」の使いわけであった。同の人に対して、「うん／うんうん／うーん」を 34 回も高頻度で使用したのに対して、上の人に対して、14 回のみ使用した。つづいて、「はい」と「ええ／ええええ」の使い分けにも、上・同による差があった。JJ1 は同の人より上の人の方に対して、「はい」と「ええ／ええええ」を多く使用したが、その差はそれほど大きくなかった。

CC1 の力関係が {あいづち} の使い分けに与えた影響を表 4-45 に示す。

表 4-45 CC1 の上・同関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	上 (回数)	上割合/37	同 (回数)	同割合/37
聞いている	哎 / 哎哎 (えー)	1	2.70%	0	0
	啊 (はい)	5	13.51%	3	8.11%
	嗯 (うん)	4	10.81%	9	24.32%
	哦哦 (うんうん)	2	5.41%	0	0
	聞いている合計	12	32.43%	12	32.43%
同意・支持	嗯 (うん)	0	0	1	2.70%
	行 (うん)	2	5.41%	0	0
	对 (そうね)	3	8.11%	4	10.81%
	繰り返し	1	2.70%	0	0
	可不 (そうそう)	0	0	1	2.70%
	同意・支持合計	6	16.22%	6	16.22%
感情の表出	啊, 是嘛 (あ、そうですか)	0	0	1	2.70%
	感情の表出合計	0	0	1	2.70%
合計		18	48.65%	19	51.35%

表 4-45 によると、力関係が CC1 の {あいづち} の使い分けに影響を及ぼしていなかった

という結果が見られたが、唯一の「聞いている」の機能を表す「「嗯」(うん)」の使い分けには力関係による差が見られた。即ち、CC1 では上より同の人のほうに対して、「「嗯」(うん)」が多用されたが、その差が大きくなかった。

#### 4.3.4 {詫び} の表現形式の分析

4.2 の意味公式の量的分析によると、JJ1 では {詫び} が 3 番目に多かったのに対して、CC1 では {詫び} が 4 番目に多く使用された。また、人による意味公式の使用平均値の考察によると、JJ1 と CC1 の間に、{詫び} の有意差が見られたことがわかった。本節では、{詫び} の表現形式の使い分けを分類した上で、親・疎関係と力関係を含む社会的変数が JJ1 と CC1 の {詫び} の表現形式の使い分けに影響を与えたか否か、そして、{詫び} の連続使用回数のパターンを考察する。

まず、JJ1 の {詫び} には「申し訳ございません／申し訳ありません」、「申し訳ないです」、「すみません」、「すいません」、「ごめんなさい」、「ごめん」の表現形式がある。各表現形式の使用回数及び割合を表 4-46 に示す。

表 4-46 JJ1 の {詫び} の表現形式の分類

	申し訳ございません/ 申し訳ありません	申し訳ない です	すみま せん	すいま せん	ごめんな さい	ごめん	合計
JJ1 合計	7	28	11	22	12	10	90
JJ1 割合%	7.78	31.11	12.22	24.44	13.33	11.11	100

表 4-46 のように、JJ1 の {詫び} の表現形式では、「申し訳ないです」が最も多用されたのにつづき、「すいません」、「ごめんなさい」、「すみません」、「ごめん」、「申し訳ございません／申し訳ありません」といった並び順で使用された。

つづいては、JJ1 の親・疎と上・同関係による {あいづち} の表現形式の使い分けを表 4-47 に示す。

表 4-47 JJ1 の社会的関係による {詫び} の表現形式の使い分け

	申し訳ございません /申し訳ありません	申し訳ない です	すみませ ん	すいま せん	ごめん なさい	ごめん	合計
JJ1 親合計	5	13	4	8	5	7	42
JJ1 親割合/90	5.56%	14.44%	4.44%	8.89%	5.56%	7.78%	46.67%
JJ1 疎合計	2	15	7	14	7	3	48
JJ1 疎割合/90	2.22%	16.67%	7.78%	15.56%	7.78%	3.33%	53.33%

JJ1 上合計	6	14	6	17	3	3	49
JJ1 上割合/90	6.67%	15.56%	6.67%	18.89%	3.33%	3.33%	54.44%
JJ1 同合計	1	14	5	5	9	7	41
JJ1 同割合/90	1.11%	15.56%	5.56%	5.56%	10%	7.78%	45.56%

表 4-47 を見ると、まず親・疎関係も上・同関係も問わず、最も多く用いられた {あいづち} の表現形式が「申し訳ないです」であった。次に、親・疎による {あいづち} の表現形式別の使い分けの差が主に「申し訳ございません／申し訳ありません」と「すいません」に集中した。具体的に言えば、JJ1 では、親の人より疎の人のほうに対して、「すいません」が多く見られた。なお、同の人より上の人の方に対して、「申し訳ございません／申し訳ありません」と「すいません」が多く使用されたことがわかった。

次に、CC1 の {あいづち} を「抱歉」(baoqian 申し訳ありません)、「对不起」(duibuqi すみません)、「不好意思」(buhaoyisi ごめんなさい) (以下の日本語訳は、大まかに等価であると考えられるものである) 3つの表現形式に分けた。その表現形式の使い分けを表 4-48 にまとめる。

表 4-48 CC1 の {詫び} の表現形式の分類

	抱歉	对不起	不好意思	合計
CC1 合計	10	2	20	32
CC1 割合%	31.25%	6.25%	62.5%	100%

表 4-48 によると、CC1 では「不好意思」(buhaoyisi ごめんなさい) が最も多く用いられたのにつづき、「抱歉」(baoqian 申し訳ありません) の使用率も少なくなかった。一方、「对不起」(duibuqi すみません) は 2 回しか見られなかった。

次に、親・疎関係と上・同関係が CC1 の {詫び} の使い分けに与えた影響を表 4-49 に示す。

表 4-49 CC1 の社会的関係による {詫び} の表現形式の使い分け

	抱歉	对不起	不好意思	合計
CC1 親合計	4	0	7	11
CC1 親割合/32	12.5%	0	21.88%	34.38%
CC1 疎合計	6	2	13	21
CC1 疎割合/32	18.75%	6.25%	40.63%	65.63%
CC1 上合計	8	1	15	24
CC1 上割合/32	25%	3.13%	46.88%	75%

CC1 同合計	2	1	5	8
CC1 同割合/32	6.25%	3.13%	15.63%	25%

表 4-49 から、まず、親・疎関係も上・同関係も問わず、最も多く使われた {あいづち} の表現形式が「不好意思」(buhaoyisi ごめんなさい) であった。それに対して、「对不起」(duibuqi すみません) の使用回数が最も少なかったという結果が見られた。とりわけ、CC1 では親しい人に対して、「对不起」が 1 回も使用されなかった。次に、親・疎関係が {詫び} の表現形式の使い分けに与えた影響は、「不好意思」(buhaoyisi ごめんなさい) と「抱歉」(baoqian 申し訳ありません) に集中した。即ち、CC1 では、疎の人と上の人の方に対して、「不好意思」(buhaoyisi ごめんなさい) と「抱歉」(baoqian 申し訳ありません) の出現回数が多く見られた。とりわけ、同の人より上の方の方に対して、「不好意思」(buhaoyisi ごめんなさい) が顕著に多く見られた。

また、同じ場面において、{詫び} の連続使用回数のパターンも考察する。表 4-50 は 1 つの場面における JJ1 と CC1 の {詫び} の使用回数による場面数及び割合である。

表 4-50 JJ1 と CC1 の 1 つの場面における {詫び} の使用回数による場面数及び割合

詫びの使用回数	JJ1 合計	JJ1 割合%	CC1 合計	CC1 割合%
詫び 5 回	5	12.5%	0	0
詫び 4 回	2	5%	2	5%
詫び 3 回	7	17.5%	0	0
詫び 2 回	13	32.5%	8	20%
詫び 1 回	10	25%	8	20%
詫びなし	3	7.5%	22	55%
合計	40	100%	40	100%

表 4-50 によれば、JJ1 では、1 つの場面において、{詫び} を 2 回使用する場面が 13 場面(32.5%)で、最も多かった。つづいて、「詫びの 1 回使用」の場面が 10 場面(25%)で、2 番目に多かった。一方、CC1 では、場面ごとに、「詫びなし」の場面が 22 場面(55%)で、最も多く見られたが、JJ1 では 3 場面しか見られず、最も少なかった。なお、「詫び 5 回使用」と「詫びの 3 回使用」の場面は、JJ1 では各々 5 場面と 6 場面見られたのに対して、CC1 では 1 つも見られなかった。まとめた結果、JJ1 では全体的に、場面ごとに「詫びの 2 回使用」が最も好まれた。一方、CC1 では場面ごとに「詫びなし」のパターンが最も多用された。



### 4.3.5 本節のまとめ

本節においては、JJ1 と CC1 とともに多く見られた意味公式である {不可}、{理由} の内容分析、{あいづち} と {詫び} の表現形式の分析を行ってきた。

第1に、{不可} の内容分析によると、誘い手の FT 度が小さい「能力・状況」の使用数が、JJ1 と CC1 両方共に最も多く見られたが、JJ1 では、「能力・状況」と同様に、「緩和的結論」も多用されたのに対して、CC1 では誘い手の FT 度が大きい「意志」と「本音」を表す {不可} が多かった。そして、「意志」と「本音」は、全て CC1 の親しい人に対する断り言語行動に見られた。社会的関係が JJ1 と CC1 の {不可} の内容に与えた影響をまとめると、親・疎関係が CC1 の {不可} の内容の使い分けに及ぼした影響は、JJ1 より顕著であった。とりわけ、CC1 では親の人に対して、誘い手の FT 度が大きい「本音」が 12 回見られたが、疎の人に対して、1 度も見られなかった。また、力関係が、JJ1 と CC1 の相手の FT 度が大きい「意志」と「本音」にも、各々影響を及ぼしたが、その差が親・疎関係による CC1 の「本音」の差ほど大きくなかった。

第2に、{理由} の内容分析を見ると、JJ1 と CC1 双方ともに、相手の FT 度が小さい「具体的な理由」で相手を断った会話のスタイルが見られた。ただし、CC1 では親の人または同の人のほうに対して相手の FT 度が大きい「気持の表明」も多く見られたのに対して、疎の人のほうに対して、相手の FT 度が小さい「具体的な理由」に属する「明日の予定詳細」が顕著に多用されたこともわかった。そして、{理由} の内容によるカテゴリーの展開パターンの考察によると、JJ1 と CC1 双方ともに、「具体的な理由のみ」の展開パターンが最も多かった。ただし、JJ1 では「具体的な理由のみ」につづき、「情報不足の理由のみ」の展開パターンが 2 番目に多かったのに対して、CC1 では「気持の表明のみ」の展開パターンが 2 番目に多く使用された。

JJ1 と CC1 双方共に、「聞いている」という機能を果たす {あいづち} が最も多く使用された。一方、JJ1 で使用された {あいづち} の機能の種類が CC1 より多かったという相違点もわかった。次に、各表現形式を見ると、JJ1 では「聞いている」の機能を表す「はい」、「うん／うんうん／うーん」、「ええ／ええええ」が主に使用された。一方、CC1 では「嗯」（うん）の使用数が多く見られた。それから、JJ1 の {あいづち} の表現形式では待遇性が見られた。親の人と同の人のほうに対して、「うん／うんうん／うーん」が多く使用されたのに対して、疎の人と上の人のほうに対して、「はい」、「ええ／ええええ」が多く見られた。そのうち、力関係が「うん／うんうん／うーん」に与えた影響が最も顕著であった。一方、社会的関係による CC1 の {あいづち} の表現形式の差も見られたが、その差が JJ1 ほど顕著でなかった。熊（2008:65）では、日本人は相手との親・疎関係及び上・下関係によってあいづち詞を選別して使い、友人には「うん系」を、教師には「は系」を最も多く用いている。それに対して、中国語のあいづち詞には待遇性がなく、友人

と教師のどちらにも「嗯」（うん）が最も多く使用されたといった結果は、本調査1においても検証された。

JJ1とCC1の{詫び}の表現形式を分類した結果によって、JJ1では「申し訳ないです」が最も多用された。それに対して、CC1では「不好意思」（buhao yisi ごめんなさい）が最も多く使用されたことがわかった。なお、JJ1では親・疎関係も上・同関係も問わず、「申し訳ないです」が最も多く見られたという結果は、周（2013）の学生を対象とする勧誘を断る場面における詫び表現の研究結果と不一致である。即ち、周（2013）では上の人に対して、「すみません」や「申し訳ないです」を多用したのに対して、同の人または下の人に対して、「ごめん」を使用する結果と相違、社会人を対象とする本調査においては、社会的関係を問わず、「申し訳ないです」が顕著に最も多く使用された。それは調査対象の年齢が異なったからであろうと推測する。最後に、1つの会話ごとに{詫び}の連続使用回数のパターンの考察によって、JJ1では「詫びの2回使用」が最も好まれたのに対して、CC1では「詫びなし」のパターンが最も多用された。

#### 4.4 本章のまとめ

本章では、会話の構造、全体的に意味公式の量的分析、意味公式の内容という3つのアプローチから、社会人を対象とする勧誘に対する断り言語行動を考察してきた。

まず、会話構造の分析によると、JJ1とCC1のいずれも主に「勧誘話段」、「勧誘・断りの交渉話段」、「終了部」からなっていることが検証された。勧誘話段においては、双方ともにいきなり「直接的断り」と「間接的断り」で相手を断らずに、誘い手の勧誘をよく聞いている同時に、{あいづち}、{情報確認・要求}などを含む「付随表現」で、相手の発話に協力したり、断り表現に繋がる前置きを相手に示したりして、会話をスムーズに進めた。ゆえに、文化を問わず、自然により近い断り会話においては、{あいづち}、{情報確認・要求}などを含む「付随表現」は重要な役割を果たしていると考えられる。勧誘・断り話段においては、{理由}、{詫び}、{不可}、{願望}、{ためらい}などの意味公式が豊かに用いられ、ポジティブ・ストラテジー、ネガティブ・ストラテジー、そしてどちらにも分類されないストラテジーが併用されて、少しずつ相手を断ったプロセスが本調査において伺われた。終了部においては、{詫び}、{関係維持}、{感謝}などは、会話を終わらせようとするマークという働きも、相手との関係が維持できる働きもあると考えられる。従って、本調査において、DCTの代わりに、社会人を対象とするロールプレイを用いて、勧誘に対する断り言語行動におけるダイナミックなプロセスが観察された。そして、JJ1とCC1の誘いに対する断り言語行動の構造がほぼ同じであったという結果になった。

一方、CC1に比べると、JJ1ではどの話段においても、{あいづち}、{驚き}、{困惑}などを含む「付随表現」が多く見られた。また、JJ1のほうでは{詫び}が多用されたのに

対して、CC1のほうでは{不可}が多く用いられたという相違点もわかった。この相違点からすれば、JJ1よりCC1のほうでは直接的な表現が好まれたという結論が検証された。

JJ1のほうではネガティブ・ストラテジーである{詫び}が多用されたのは、文(2004)、蒙(2010b)などの先行研究の結果と一致したが、藤森(1994)、劉・小野(1996)、李(1999)、加納・梅(2002)の研究によると、JJ1では{詫び}がほとんど最初に現れたという結論は、本調査では検証されなかった。本調査の意味公式の展開パターン分析によると、JJ1で見られた{詫び}は「尾高型」の展開パターンであった。つまり、会話の終了部において{詫び}が多く見られたという結果は、先行研究と一致していなかった。

CC1のほうでは相手のFT度が大きい{不可}が多く見られた結果も先行研究の結果と一致しているが、本調査での量的分析によると、{不可}におけるJJ1とCC1両者間の差が大きくなかった。とりわけ、人による意味公式の使用平均値の有意差の考察では検証されなかった。

次に、全体的に意味公式の量的分析によると、JJ1とCC1双方共に、{あいづち}、{理由}、「詫び」、{ためらい}、{不可}という5つの意味公式を多用したという共通点が挙げられたが、JJ1のほうがCC1より{あいづち}、{詫び}、{困惑}を多用したのに対して、CC1のほうがJJ1より{理由}、{不可}を多く用いたという相違もわかった。さらに、人による各意味公式の使用数の平均値の有意差の考察によると、{あいづち}、{詫び}におけるJJ1とCC1の間の有意差が見られた。その他、CC1よりJJ1のほうでは{願望}、{言いさし}、{ヘッジ}が有意に多かったのに対して、JJ1よりCC1のほうでは{呼びかけ}が有意に多く使用された。また、社会的関係がJJ1の{願望}、{保留}、{詫び}と、CC1の{詫び}に与えた影響も見られた。

最後に、{不可}、{理由}の内容分析と、{あいづち}と{詫び}の表現形式の分析によると、誘い手のFT度が小さい「能力・状況」の使用数が、JJ1とCC1両方共に最も多く見られたが、JJ1では、「能力・状況」と同じように、「緩和的結論」も多用されたのに対して、CC1で相手のFT度が大きい「意志」と「本音」を表す{不可}も多く使用された。そして、「意志」と「本音」は、全てCC1の親しい人に対する断り言語行動に見られた。JJ1とCC1双方ともに、相手のFT度が小さい「具体的な理由」が最も多かった。ただし、「具体的な理由」のほかに、CC1では親の人または同の人のほうに対して相手のFT度が大きい「気持の表明」も多く見られた。JJ1とCC1双方共に、「聞いている」という機能を果たしている{あいづち}が最も多く使用された。そして、力関係がJJ1の{あいづち}の表現形式の使い分けに与えた影響が最も顕著であった。JJ1とCC1の{詫び}の表現形式を分類した結果によって、JJ1では社会的関係を問わず、「申し訳ないです」が最も多用されたのに対して、CC1では「不好意思」(buhao yisi ごめんなさい)が最も多く使用されたことがわかった。

本章の考察の結果をまとめると、会話構造の分析によると、社会人であるJJ1とCC1の勧誘に対する断りの会話構造がほぼ同様であるという結論が得られたが、JJ1のほうでは

{あいづち}などを含む「付随表現」と、{詫び}などが多く使用されたのに対して、CC1のほうでは{不可}を含む「直接的断り」がやや多く見られたという相違もわかった。そのうち、{あいづち}、{詫び}などにおけるJJ1とCC1の差が、人による意味公式の使用平均値の有意差の考察においても検証されたが、{不可}、{理由}における有意差が見られなかった。しかし、{不可}、{理由}の内容分析からすると、JJ1よりCC1のほうでは親しい人に対して、相手のFT度が大きい「意志」、「本音」、「気持の表明」の内容が好まれた結果もわかった。ゆえに、誘いを断る場面においては、社会人であるJJ1よりCC1のほうでは直接的な表現が好まれたという結論が導き出された。

# 第5章 調査2——社会人対象の依頼に対する断り言語行動

本章では、調査2——日中の母語話者である社会人を対象に、依頼に対する断り言語行動に関する調査の結果を述べた。その分析は会話の構造による分析、意味公式の量的分析、意味公式の内容分析及び表現形式の分析からなっている。

## 5.1 依頼を断る言語行動の会話構造

本節においては、3.3.1で提示した会話構造による分析方法を採用する。まず、各話段の意味公式の使用数及び平均値を対照した。次に、意味公式のカテゴリー及び各意味公式の展開パターンの対照を行った。最後に、日中の母語話者である社会人を対象とする断り言語行動の会話構造を抽出した。

### 5.1.1 話段ごとの断り言語行動の日中対照

3.3.1で提示した会話の構造で、社会人を対象とする断り会話を「依頼話段」、「依頼・断りの交渉」、「終了部」の3つに分かれた。第4章と同様に、本節においても、各話段の意味公式の使用数及び平均値を考察していく。

#### 5.1.1.1 依頼話段

勧誘を断る場面と同様に、頼み手が依頼を発してから、断り手が{理由}、{不可}、{詫び}など断りに深く関わる意味公式で1回目相手を断る行為に至るまでの言語行動を「勧誘話段」とする。この話段においては、断り手がほとんど{あいづち}、{情報確認・要求}、{ためらい}などを含む「付随表現」で、誘い手の勧誘言語行動に参加して、会話を進める特徴が観察された。無論、「勧誘話段」において、断り手が何も言語行動を発していないことも見られたが、数が少なかった。ただし、JJ2の依頼話段においては、断り手が言語表現を発していなかったが、「領き」のような行動で頼み手の依頼発話に協力する特徴も観察された。

### 5.1.1.1.1 依頼話段の開始から1回目の断りに至るまでの言語表現の有無

JJ1 と CC2 の依頼話段における断り手の言語行動の有無を表 5-1 に示す。

表 5-1 JJ2 と CC2 の依頼話段における断り手の言語表現の有無

	1 回目の断りに至るまでの言語表現あり	1 回目の断りに至るまでの言語表現なし	合計
JJ2 合計	27	13 <sup>26</sup>	40 組
JJ2 割合	67.5%	32.5%	100%
CC2 合計	26	14	40 組
CC2 割合	65%	35%	100%

表 5-1 のとおり、JJ2 と CC2 双方共に、1 回目の断りに至るまでの断り手の「言語表現あり」が半分以上を占めた。そして、両者の割合もほぼ同じであった。

### 5.1.1.1.2 依頼話段における意味公式の使用数

また、依頼話段における断り手の意味公式の使用数及び平均値を表 5-2 に示す。

表 5-2 JJ2 と CC2 の依頼話段における意味公式の使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	意味公式	JJ2 (25 組)		CC2 (26 組)	
		個数	平均値/25	個数	平均値/26
直接的断り	不可	0	0	1	0.04
	直接的断り合計	0	0	1	0.04
間接的断り	願望	0	0	1	0.04
	遺憾	0	0	0	0
	相手を思い止まらせる試み	3	0.12	0	0
	間接的断り合計	3	0.12	1	0.04
付随表現	あいづち	58	2.32	17	0.65
	情報確認・要求	16	0.64	36	1.38
	驚き	11	0.44	1	0.04
	ためらい	4	0.16	1	0.04
	困惑	7	0.28	0	0
	否定の前置き	1	0.04	3	0.12

	共感	4	0.16	2	0.08
	ヘッジ	1	0.04	0	0
	付随表現合計	102	4.08	60	2.31
意味公式合計		105	4.20	62	2.38

表 5-2 から、まず意味公式のカテゴリーの割合からみれば、JJ2 と CC2 の共通点が見られた。第 1 に、JJ2 と CC2 両方共に、依頼話段において、「付随表現」が中心に使用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」が少なかった。第 2 に、「付随表現」の中で、JJ2 と CC2 双方共に {あいづち}、{情報確認・要求} を多用した。

一方、JJ2 と CC2 両者間の相違点も見られた。まず、依頼話段において、JJ2 のほうが CC2 より意味公式を全体的に多く使用した (JJ2-105/4.20, CC2-62/2.38)。次に、CC2 より JJ2 のほうで「付随表現」が多用された (JJ2-102/4.08, CC2-60/2.31)。さらに、付随表現の中で、CC2 より JJ2 のほうで {あいづち} (JJ2-58/2.32, CC2-17/0.65) と {驚き} (JJ2-11/0.44, CC2-1/0.04) が多く用いられた。それに対して、JJ2 より CC2 のほうで {情報確認・要求} (JJ2-16/0.64, CC2-36/1.38) が多く使用された。CC2 で見られた {情報確認・要求} が多かったのは、お金の貸し借りを依頼する負担度が増えたので、中国の頼み手が金額を言いづらい一方で、断り手が金額の情報を要求したからである。

上記の共通点からみると、誘いに対する断り言語行動と同様に、依頼に対する断り言語行動においても、社会人の断り手がいきなり「間接的断り」または「直接的断り」で相手を断るのが少なかったのに対して、{あいづち}、{情報確認・要求} などを含む「付随表現」の多用によって人間関係を維持しながら、少しずつ相手を断る会話のスタイルが多く見られた。

### 5.1.1.2 依頼・断り話段

勧誘を断る場面と同様に、「依頼・断り話段」も「1 度目の断り」、「2 度目の断り」、「3 度目の断り」などからなっている。ゆえに、本節においては、「依頼・断り話段」における断り発話の数を考察した上で、各話段ごとにおける意味公式の使用数及び平均値を対照していく。

#### 5.1.1.2.1 断り発話数

依頼・断り話段は、頼み手の依頼発話の回数によって、さらに「1 回目の断りのみで収束」、「2 回目の断りで収束」、「3 回目の断りで収束」などからなっている。各断り発話の回数及び割合を下記の表に示す。

表 5-3 JJ2 と CC2 の断り発話の回数及び割合

	1 回目の断りのみで収束	2 回目の断りで収束	3 回目の断りで収束	4 回目の断りで収束	合計
JJ2 合計	7	20	11	2	40 組
JJ2 割合	17.5%	50%	27.5%	5%	100%
CC2 合計	22	13	4	1	40 組
CC2 割合	55%	32.5%	10%	2.5%	100%

表 5-3 によると、JJ2 では、「2 回目の断りで収束」（20 組）の断り発話数が最も多かったのにつづき、「3 回目の断りで収束」（11 組）の断り発話数が 2 番目に多かった。一方、CC2 では、「1 回目の断りのみで収束」（22 組）の断り発話数が最も多く見られ、続いて「2 回目の断りで収束」（13 組）の断り発話数が 2 番目に多かった。JJ2 と CC2 双方共に 4 回以上の断りは見られなかった。そして、両方のいずれも「4 回目の断りで収束」の会話数が少なかった。そのため、依頼を断る場面と同様に、本章でも、主に「1 回目の断りのみで収束」から「3 回目の断りで収束」までの断り発話に注目して考察を行う。

### 5.1.1.2.2 1 回目の断りにおける意味公式の使用数

1 回目の断り発話に現れた意味公式の使用数及び平均値は表 5-4 の通りである。

表 5-4 JJ2 と CC2 の 1 回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ2 (40 組)		CC2 (40 組)	
		個数	平均値/40	個数	平均値/40
直接的断り	不可	28	0.70	14	0.35
	直接的断り合計	28	0.70	14	0.35
間接的断り	理由	33	0.83	47	1.18
	詫び	16	0.40	5	0.13
	代案	16	0.40	14	0.35
	遺憾	3	0.08	6	0.15
	願望	11	0.28	6	0.15
	条件提示	7	0.18	18	0.45
	相手を思い止まらせる試み	5	0.13	6	0.15
保留	1	0.03	5	0.13	



	言いさし	2	0.05	3	0.08
	原則的陳述	6	0.15	0	0
	間接的断り合計	100	2.50	110	2.75
付随表現	肯定的表現	0	0	1	0.03
	あいづち	5	0.13	4	0.10
	困惑	6	0.15	0	0
	ためらい	23	0.58	6	0.15
	驚き	3	0.08	0	0
	情報確認・要求	2	0.05	0	0
	ヘッジ	7	0.18	1	0.03
	否定の前置き	5	0.13	1	0.03
	共感	3	0.08	0	0
	挨拶（励まし）	1	0.03	0	0
	呼びかけ	0	0	4	0.10
	その他	3	0.08	3	0.08
		付随表現合計	58	1.45	20
意味公式合計		186	4.65	144	3.60

表 5-4 から以下の共通点が見られた。第 1 に、依頼話段に比べると、JJ2 と CC2 共に、直接的断りと間接的断りににおける意味公式の使用数が増えた一方で、付随表現における意味公式の使用数が減ったという共通点もあった。そのうち、JJ2 と CC2 共に、間接的断りににおける意味公式の使用数が最も多かった。第 2 に、各意味公式の使用数からすれば、JJ2 と CC2 共に、{理由}、{不可}、{代案} の使用数が 14 個以上で、1 回目の断り発話において主に使用された意味公式であることがわかった。そのうち、JJ2 と CC2 両方ともに、最も多く使用された意味公式は {理由} であった。

一方、JJ2 と CC2 の 1 回目の断り発話における意味公式数の差異も見られた。まず、JJ2 のほうが CC2 より、全体的に意味公式を数多く使用した (JJ2-186/4.65, CC-144/3.60)。次に、意味公式のカテゴリーの使用数と平均値をみると、CC2 より JJ2 のほうで「直接的断り」(JJ2-28/0.70, CC-14/0.35) と「付随表現」(JJ2-58/1.45, CC-20/0.50) が多用されたことがわかった。また、各意味公式の使用数及び平均値から見れば、JJ2 より CC2 のほうで {理由}、{条件提示}、{呼びかけ} が多く用いられたのに対して、CC2 より JJ2 のほうで {不可}、{詫び}、{原則的陳述}、{困惑}、{ためらい} が多用された。

JJ2 で多く見られた {不可} と {原則的陳述} のいずれも、頼み手のフェイスを脅かす、

つまり FT 度が大きい言語行為だと思われる。とりわけ、JJ2 で見られた {原則的陳述} が CC2 で 1 度も使用されなかったという興味深い結果が観察されたので、例を挙げながら、説明していく。

#### 1 度目の断り

2B ごめんなさい、お金の貸し借りはあまりしてないので、それはちょっとお引き受けできかねます。

3A あー、そうでしょうねえ (ええ)。あの、それは 30 万って高額だからですか？

4B それもありますし、あんまり親しい人でもそんなにお金の貸し借りっていうのをしないので。(JJ2F9 疎・同)

例えば、JJ2F9 疎・同の会話例のように、{理由} を 1 度も述べずに、{原則的陳述} で相手の依頼を断ったという会話のスタイルを、中国人の被験者に聞いたら、このような直接的な断り方は中国人にとっては、相手のフェイスを大きく潰す危険があるので、中国人を対象とする調査においては、1 度も見られなかった。一方、JJ2 の断られる側を対象に、インタビューをすることによって、{原則的陳述} を聞かれても、自分のフェイスが潰されたと思わなかったという答えが得られた。また、CC2 より JJ2 のほうでは、{不可} が多く見られたのは、社会人の誘いに対する断り言語行動で見られた結果と逆であった。従って、社会人の依頼に対する断り言語行動においては、{不可} と {原則的陳述} の使用回数からみると、日本人のほうが中国人より直接的であるという結果になった。

### 5.1.1.2.3 2 回目の断りにおける意味公式の使用数

2 回目の断りにおいては、JJ2 で見られた発話数が 33 組であるのに対して、CC2 で現れた発話数が 18 組であった。従って、2 回目の断りにおいて、CC2 より JJ2 のほうでは、断り発話数が多かった。JJ2 と CC2 の 2 回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値などを表 5-5 に示す。

表 5-5 JJ2 と CC2 の 2 回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ2 (33 組)		CC2 (18 組)	
		個数	平均値/33	個数	平均値/18
直接的断り	不可	24	0.73	3	0.17
	直接的断り合計	24	0.73	3	0.17
間接的断り	理由	18	0.55	21	1.17
	詫び	22	0.67	2	0.11
	代案	20	0.61	2	0.11
	願望	2	0.06	2	0.11

	条件提示	1	0.03	3	0.17
	相手を思い止まらせる試み	2	0.06	5	0.28
	保留	4	0.12	3	0.17
	言いさし	2	0.06	1	0.06
	原則的陳述	3	0.09	0	0
	間接的断り合計	74	2.24	39	2.17
付随表現	あいづち	21	0.64	3	0.17
	情報確認・要求	4	0.12	2	0.11
	困惑	2	0.06	0	0
	ためらい	15	0.45	1	0.06
	驚き	2	0.06	0	0
	ヘッジ	1	0.03	0	0
	否定の前置き	0	0	2	0.11
	共感	4	0.12	0	0
	その他	2	0.06	4	0.22
	付随表現合計	51	1.55	12	0.67
意味公式合計	149	4.52	54	3	

表 5-5 に示したように、2 回目の断り発話に見られた JJ2 と CC2 の共通点が以下の通りである。意味公式のカテゴリーをみれば、1 回目の断りと同様に、JJ2 と CC2 共に「間接的断り」を主に使用したのに続き、「付随表現」を 2 番目に多く用いた。「直接的断り」が 2 回目の断りにおいては、最も少なく使用された。そのうち、JJ2 と CC2 の「間接的断り」(JJ2-74/2.24, CC-29/2.17) の使用数がほぼ同じであった。

一方、2 回目の断りにおける JJ2 と CC2 の相違点も見られた。第 1 に、全体的に、JJ2 のほうが CC2 より意味公式を顕著に多く使用した (JJ2-149/4.52, CC-54/3)。第 2 に、CC2 より JJ2 のほうで「直接的断り」(JJ2-24/0.73, CC-2/0.17) と「付随表現」(JJ2-51/1.55, CC-12/0.67) が多く使用された。第 3 に、各意味公式の使用数及び平均値をみると、CC2 より JJ2 のほうで {不可}、{詫び}、{代案}、{あいづち}、{ためらい} などが多く使用されたのに対して、JJ2 より CC2 のほうで {理由} などが多く用いられた。また、2 回目の断りにおいても、JJ2 では {不可}、{詫び}、{あいづち}、{代案}、{理由}、{ためらい} などが豊かに使用されたのに対して、CC2 では {理由} のみが主に使用されたといった相違もわかった。

#### 5.1.1.2.4 3回目の断りにおける意味公式の使用数

3回目の断りにおいては、JJ2で見られた発話数が13組であるのに対して、CC2で現れた発話数が5組しか見られなかった。JJ2とCC2の3回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値を表5-6にまとめる。

表5-6 JJ2とCC2の3回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ2 (13組)		CC2 (5組)	
		個数	平均値/13	個数	平均値/5
直接的断り	不可	6	0.46	5	1
	直接的断り合計	6	0.46	5	1
間接的断り	理由	4	0.31	0	0
	詫び	5	0.38	0	0
	代案	3	0.23	2	0.40
	願望	1	0.08	0	0
	条件提示	0	0	4	0.80
	保留	3	0.23	2	0.40
	原則的陳述	2	0.15	0	0
	間接的断り合計	18	1.38	8	1.60
付随表現	あいづち	7	0.54	0	0
	情報確認・要求	1	0.08	0	0
	ためらい	1	0.08	2	0.40
	驚き	1	0.08	0	0
	困惑	1	0.08	0	0
	ヘッジ	1	0.08	0	0
	その他	0	0	2	0.40
	付随表現合計	12	0.92	4	0.80
意味公式合計		36	2.77	17	3.40

表5-6に示したように、1回目、2回目の断りに比べると、JJ2とCC2双方共に、意味公式の使用数が顕著に減った。なお、「間接的断り」と「付随表現」におけるJJ2とCC2両者間の差が小さかった。

一方、JJ2のほうで{あいづち}、{不可}、{詫び}、{理由}が主に使用されたのに対し

て、CC2 では {不可} と {条件提示} が主に多用されたという相違点も見られた。

1 回目の断りから 3 回目の断りにかける依頼・断り話段における特徴をまとめると、双方ともに、「間接的断り」を主に使用した。また、両者のいずれも、{理由} と {不可} を主に使用したという共通点がわかった。

一方、JJ2 では {不可}、{理由}、{詫び}、{代案}、{ためらい}、{あいづち} が多く用いられたのに対して、CC2 では {理由}、{条件提示}、{不可} が主に使用された。つまり、CC2 より JJ2 のほうでは、意味公式の種類も使用回数も顕著に多かったという相違点が観察された。さらに、CC2 より JJ2 のほうでは、{不可}、{詫び}、{代案}、{原則的陳述}、{あいづち}、{ためらい} の使用数が著しく多かったのに対して、JJ2 より CC2 のほうでは、{理由}、{条件提示} が顕著に多く見られた。

### 5.1.1.3 終了部

勧誘を断る場面と同様に、社会人を対象に、依頼に対する断り場面においても、3.3.1 で提示した会話構造においては、収集したデータで見られた「頑張って」、「バイバイ」「それじゃあしょうがないかあ」、「行，我们也理解」（うん、わかった）のような「了解」、「別れの挨拶」、「励ましの挨拶」などの提示によって、会話の「終了部」の開始とする。また、「終了部」の開始から会話の終結までの談話を「終了部」とする。さらに、「終了部」の開始から、会話の終わりに至るまでにおいて、断り手が言語表現を発しているかどうか、また「終了部」における意味公式の使用数及び平均値を分析する。

#### 5.1.1.3.1 終了部における断り手の言語表現の有無について

終了部における断り手が言語表現を発しているか否かを表 5-7 に示す。

表 5-7 JJ2 と CC2 の終了部における断り手の言語表現の有無

	断り手の言語表現あり	断り手の言語表現なし	合計
JJ2 合計	29	11	40 組
JJ2 割合	72.5%	27.5%	100%
CC2 合計	33	7	40 組
CC2 割合	82.5%	17.5%	100%

終了部においては、JJ2 で見られた断り手の言語表現がある会話数が 29 組であったのに対して、CC2 で出現した断り手の言語表現がある会話数が 33 組であった。即ち、JJ2 と CC2 とともに、70%以上の会話場面で断り手が言語表現を発したことがわかった。

### 5.1.1.3.2 終了部における意味公式の使用数

JJ2 と CC2 の終了部における意味公式の使用数及び平均値を表 5-8 に示す。

表 5-8 JJ2 と CC2 の終了部における意味公の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ2 (22 組)		CC2 (20 組)	
		個数	平均値/22	個数	平均値/20
直接的断り	不可	2	0.09	5	0.25
	直接的断り合計	2	0.09	5	0.25
間接的断り	詫び	24	1.09	10	0.50
	代案	3	0.14	6	0.30
	保留	2	0.09	2	0.10
	条件提示	3	0.14	1	0.05
	関係維持	1	0.05	0	0
	願望	0	0	1	0.05
	間接的断り合計	33	1.50	20	1
付随表現	あいづち	7	0.32	2	0.10
	ためらい	1	0.05	0	0
	挨拶	2	0.09	1	0.05
	その他	1	0.05	1	0.05
	付随表現合計	11	0.50	4	0.20
意味公式合計		46	2.09	29	1.45

表 5-8 に示したように、終了部においては、JJ2 と CC2 双方共に、「間接的断り」が中心に使用された。さらに、「間接的断り」に属する {詫び} が最も多く用いられたといった共通点が見られた。一方、CC2 より JJ2 のほうで、{詫び} が多く使用されたといった相違点もわかったが、ほかの意味公式の使用数が少なかつたため、JJ2 と CC2 の間に差が見られなかった。

### 5.1.1.4 まとめ

上記の各話段における使用された意味公式のカテゴリーと各意味公式の使用数及び平均値をまとめると、JJ2 と CC2 両者間の異同点が以下の通りである。

共通点：① JJ2 と CC2 双方共に、依頼話段においては、「付随表現」が主に使用されたの

に対して、「直接的断り」と「間接的断り」の使用数及び平均値がごく少なかった。さらに、「付随表現」の中で、双方ともに {あいづち}、{情報確認・要求} を多く使用した。②依頼・断り話段と終了部においては、「間接的断り」が中心に用いられた。③依頼・断り話段においては、3回目の断りを除き、JJ2 と CC2 のいずれも {理由} と {不可} を多く使用した。④最後の終了部においては、双方ともに {詫び} を最も多く使用した。

相違点：①依頼話段においては、CC2 より JJ2 のほうで {あいづち}、{驚き}、{困惑}、{共感} が多用されたのに対して、CC2 のほうで {情報確認・要求} が多く使用された。②依頼・断り話段においては、CC2 より JJ2 のほうで {不可}、{詫び}、{原則的陳述}、{あいづち}、{ためらい} などが多く見られたのに対して、JJ2 より CC2 のほうで {理由}、{条件提示} などが多く使用された。③終了部においては、JJ2 と CC2 双方ともに、{詫び} を最も多用したが、JJ2 のほうで {詫び} の使用平均値が多かった。

さらに、各話段における意味公式の使用平均値の高い順に並ぶと、社会人の依頼を断る言語行動の連鎖を表 5-9 に示す。

表 5-9 JJ2 と CC2 の断り言語行動の連鎖構造

	依頼話段	1 回目の断り	2 回目の断り	3 回目の断り	終了部
JJ2	あいづち (2.32)	理由 (0.83)	不可 (0.73)	あいづち (0.54)	詫び (1.09)
CC2	情報確認・要求 (1.38)	理由 (1.18)	理由 (1.17)	不可 (1)	詫び (0.5)

各話段における意味公式の連鎖構造によると、依頼話段において、JJ2 では {あいづち}、CC2 では {情報確認・要求} がそれぞれ最も多用された。1 回目の断りから 3 回目の断りにかけて、JJ2 では① {理由}、② {不可}、③ {あいづち} といった使用平均値の最も高い意味公式が現れたのに対して、CC2 では① {理由}、② {理由}、③ {不可} といった使用平均値の最も高い意味公式が出現した。終了部において、JJ2 と CC2 ともに {詫び} が最も多用された。

## 5.1.2 断りの展開パターンの日中対照

つづいて、社会人の依頼に対する断り言語行動における各話段を合わせて、意味公式の категорияと各意味公式の展開パターンを考察していく。

### 5.1.2.1 意味公式のカテゴリーの展開パターン

JJ2 の依頼話段から依頼・断り話段（1 回目の断り、2 回目の断り、3 回目の断り）を経て、終了部に至るまでの意味公式のカテゴリーの使用数及び1組の会話の平均値を表 5-10 に示す。

表 5-10 JJ2 の意味公式のカテゴリーの使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	依頼話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
	JJ2(25 組)	JJ2 平 均値 /25	JJ2(40 組)	JJ2 平 均値 /40	JJ2(33 組)	JJ2 平 均値 /33	JJ2(13 組)	JJ2 平 均値 /13	JJ2(2 組)	JJ2 平 均値 /22
直接的断り	0	0	28	0.70	24	0.73	6	0.46	2	0.09
間接的断り	3	0.12	100	2.50	74	2.24	18	1.38	33	1.50
付随表現	102	4.08	58	1.45	51	1.55	12	0.92	11	0.50

なお、JJ2 の各話段の意味公式のカテゴリーの平均値を図 5-1 に示す。

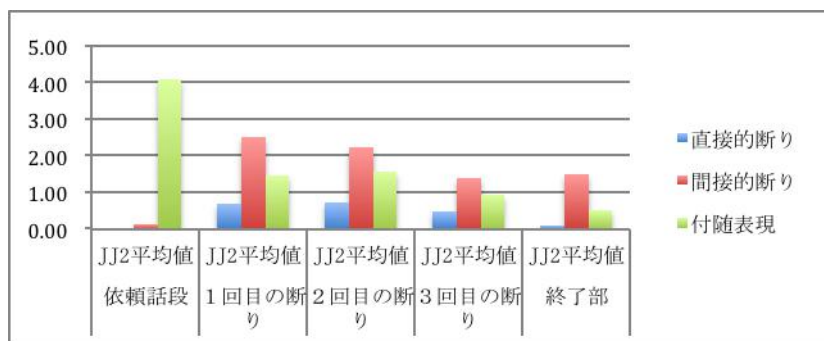


図 5-1 JJ2 の各話段の意味公式のカテゴリーの平均値

表 5-10 と図 5-1 を合わせて見ると、JJ2 の各意味公式のコテゴリーの展開パターンも伺える。まず、依頼話段においては、「間接的断り」が中心に使用されたが、「直接的断り」と「間接的断り」はゼロまたはごくわずかな数値として見られた。次に、依頼・断り話段のどの話段においても、「直接的断り+間接的断り+付随表現」というパターンが観察された。そのうち、「間接的断り」が中心に使用された。最後に、終了部においては、依頼・断り話段と同様に、「間接的断り」が主に使用されたのに対して、「直接的断り」と「付随表現」が少なかった。

次に、CC2 の依頼話段から依頼・断り話段（1 回目の断り、2 回目の断り、3 回目の断り）を経て、終了部に至るまでの意味公式のカテゴリーの使用回数及び平均値は表 5-11 に示す。



表 5-11 CC2 の意味公式のカテゴリの使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	依頼話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
	CC2 (26 組)	CC2 平 均值 /26	CC2 (40 組)	CC2 平 均值 /40	CC2 (18 組)	CC2 平 均值 /18	CC2 (5 組)	CC2 平 均值/5	CC2 (20 組)	CC2 平 均值 /20
直接的断り	1	0.04	14	0.35	3	0.17	5	1	5	0.25
間接的断り	1	0.04	110	2.75	39	2.17	8	1.60	20	1
付随表現	60	2.31	20	0.50	12	0.67	4	0.80	4	0.20

なお、CC2 の各話段の意味公式のカテゴリの平均値を図 5-2 に示す。

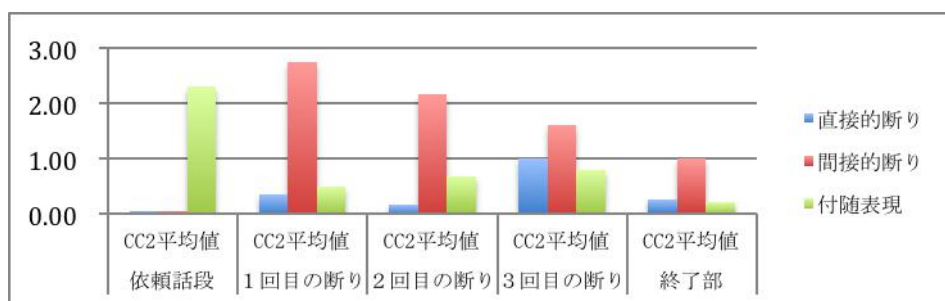


図 5-2 CC2 の各話段の意味公式のカテゴリの平均値

表 5-11 と図 5-2 を合わせてみると、CC2 の各意味公式のカテゴリの展開パターンの全体的特徴を以下にまとめる。まず、依頼話段においては、「直接的断り」と「間接的断り」の使用数はわずかであった。それに対して、「付随表現」が中心に使用された。次に、依頼・断り話段においては、1 回目の断りから 3 回目の断りにかけて、「直接的断り + 間接的断り + 付随表現」というパターンが見られた。そのうち、「間接的断り」が主に用いられた。最後に、終了部においては、「間接的断り」が中心に使用されたのに対して、「直接的断り」と「付随表現」の数が少なかった。

上記の JJ2 と CC2 の意味公式のカテゴリの話段ごとにおける使用平均値を対照すると、図 5-3 のとおりである。

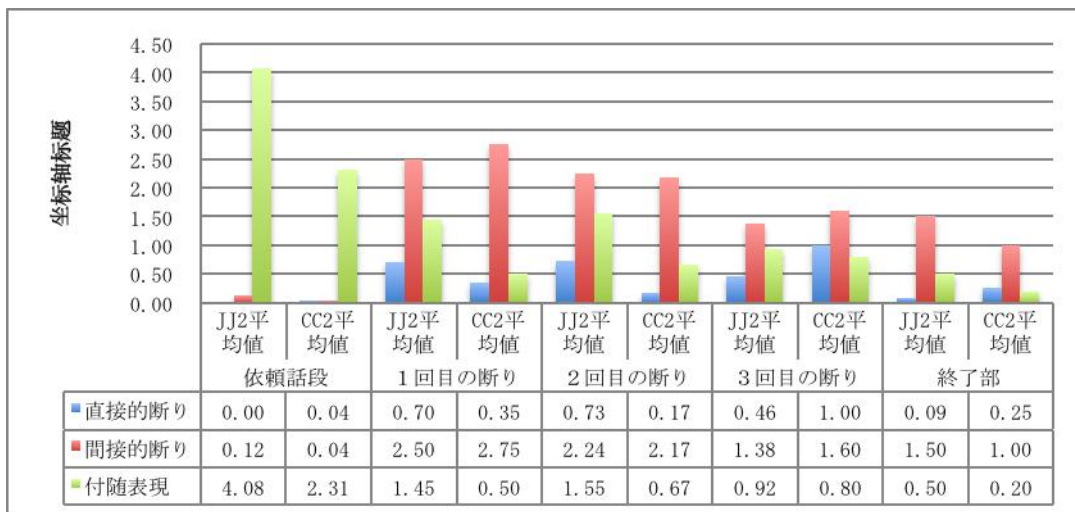


図 5-3 JJ2 と CC2 の意味公式の Kategorii の話段ごとにおける使用平均値

図 5-3 に示したように、JJ2 と CC2 双方ともに、依頼話段において、「付随表現」を主に使用して、依頼・断り話段と終了部において、「直接的断り+間接的断り+付随表現」というパターンが主に見られたが、「間接的断り」を圧倒的に多く使用したという共通点が伺われた。一方、どの話段においても、CC2 より JJ2 のほうで「付随表現」が多用された。また、1 回目の断りから 3 回目の断りを合わせると、CC2 より JJ2 のほうで「直接的断り」が多く使用された。

### 5.1.2.2 各意味公式の展開パターン

JJ2 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び 1 組の会話の使用回数の平均値を表 5-12 と図 5-4 に表す。

表 5-12 JJ2 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式 の Kategorii	意味公式	依頼話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		JJ2 (25 組)	JJ2 平 均值 /25	JJ2 (40 組)	JJ2 平均 値/40	JJ2 (33 組)	JJ2 平 均值 /33	JJ2 (13 組)	JJ2 平 均值 /13	JJ2 (22 組)	JJ2 平 均值 /22
直接的断り	不可	0	0	28	0.70	24	0.73	6	0.46	2	0.09
間接的断り	理由	0	0	33	0.83	18	0.55	4	0.31	0	0
	詫び	0	0	<b>16</b>	<b>0.40</b>	22	0.67	5	0.38	24	1.09

代案	0	0	16	0.40	20	0.61	3	0.23	3	0.14
願望	0	0	11	0.28	2	0.06	1	0.08	0	0
条件提示	0	0	7	0.18	1	0.03	0	0	3	0.14
相手を思い止 まらせる試み	3	0.12	5	0.13	2	0.06	0	0	0	0
保留	0	0	1	0.03	4	0.12	3	0.23	2	0.09
原則的陳述	0	0	6	0.15	3	0.09	2	0.15	0	0
遺憾	0	0	3	0.08	0	0	0	0	0	0
言いさし	0	0	2	0.05	2	0.06	0	0	0	0
関係維持	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.05

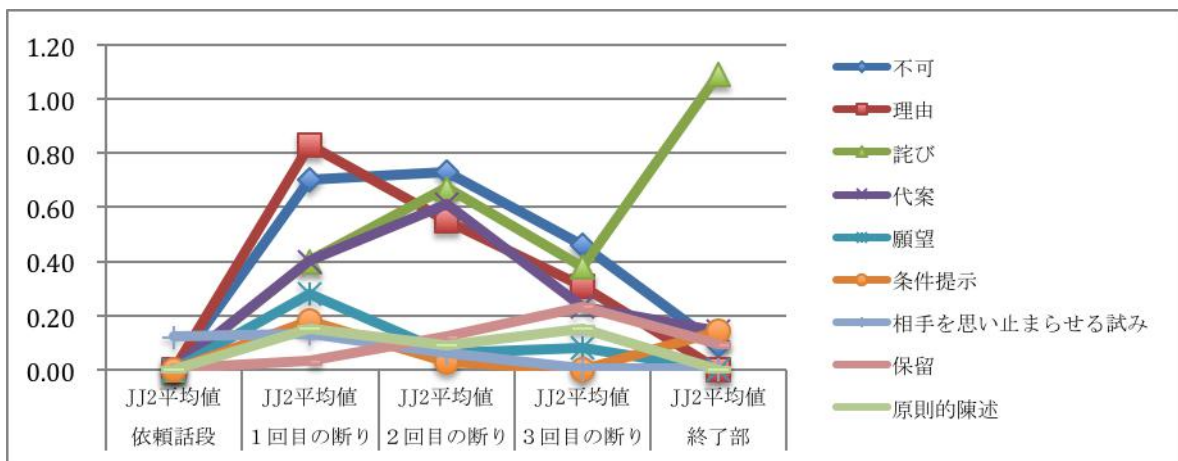


図 5-4 JJ2 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の平均値<sup>27</sup>

上記の表 5-12 と図 5-4 から、JJ2 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する各意味公式の展開パターンは 2 種類に分類できる。①中高型：{不可}、{理由}、{代案}、{願望}、{保留}、{原則的陳述}、{条件提示}、{相手を思い止まらせる試み} のような中高型の意味公式が、依頼話段においては、わずかであったが、依頼・断り話段においては、高い使用平均値で現れた。終了部においては、高くない使用平均値で出現したという意味公式の展開パターンである。そのうち、{理由} の展開パターンが最も目立っていた。②尾高型：{詫び} のみの展開パターンが尾高型である。即ち、他の話段と比べて、終了部で見られた使用平均値が最も多かったものである。

JJ2 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値を表 5-13 と図 5-5 に表す。

表 5-13 JJ2 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	意味公式	依頼話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		JJ2 (25 組)	JJ2 平 均值 /25	JJ2 (40 組)	JJ2 平均 値/40	JJ2 (33 組)	JJ2 平 均值 /33	JJ2 (13 組)	JJ2 平均 値/13	JJ2 (22 組)	JJ2 平均 値/22
付随表現	あいづち	58	2.32	5	0.13	21	0.64	7	0.54	7	0.32
	困惑	7	0.28	6	0.15	2	0.06	1	0.08	0	0
	ためらい	4	0.16	23	0.58	15	0.45	1	0.08	1	0.05
	驚き	11	0.44	3	0.08	2	0.06	1	0.08	0	0
	情報確認 ・要求	16	0.64	2	0.05	4	0.12	1	0.08	0	0
	ヘッジ	1	0.04	7	0.18	1	0.03	1	0.08	0	0
	否定の前 置き	1	0.04	5	0.13	0	0	0	0	0	0
	共感	4	0.16	3	0.08	4	0.12	0	0	0	0
	挨拶	0	0	1	0.03	0	0	0	0	2	0.09

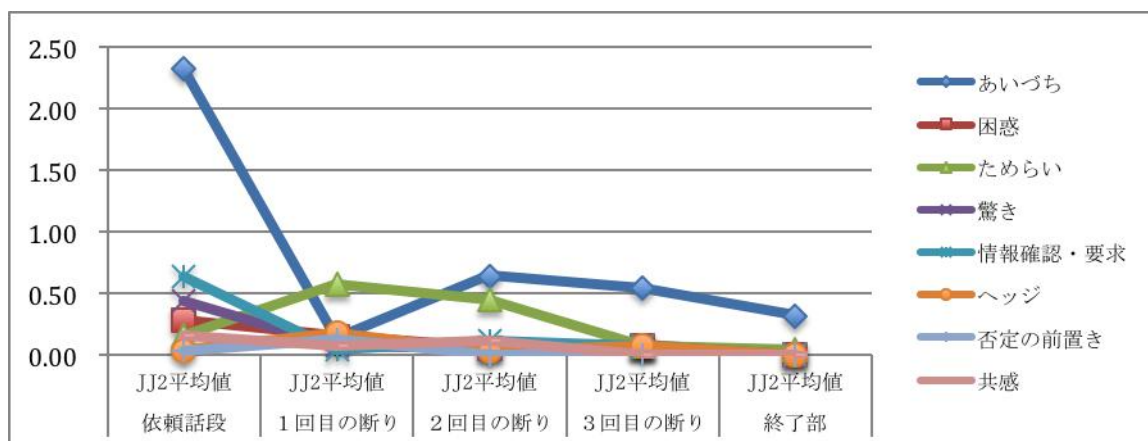


図 5-5 JJ2 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の平均値<sup>28</sup>

表 5-13 と図 5-5 に示した通り、「付随表現」に属する各意味公式の展開パターンは以下の 2 種類に区分できる。①頭高型：{あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き}、{困惑}、{共感} のように、最初の依頼話段において、最も多く現れたという展開パターンは頭高型と言えるだろう。そのうち、{あいづち} の展開パターンが最も際立っていた。②中高型：{ためらい}、{ヘッジ}、{否定の前置き} は依頼話段ではわずかな平均数値で現れ、1 回目の断りでは使用平均数値が最も高く、終了部においてもう一度わずかな数値またはゼロまで減少したという展開パターンが見られた。

上記の JJ2 の意味公式のカテゴリーの展開パターンと意味公式に属する各意味公式の使

用展開パターンを合わせ、まとめると、以下の3種類の展開パターンがわかった。1つ目は「付随表現」に属する {あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き}、{困惑}、{共感} のような頭高型である。2つ目は「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{代案}、{願望}、{保留}、{原則的陳述}、{条件提示}、{相手を思い止まらせる試み}、また「付随表現」に属する {ヘッジ}、{ためらい}、{否定の前置き} のような中高型である。3つ目は「間接的断り」に属する {詫び} のような尾高型である。従って、JJ2の「依頼」に対する断り会話構造を図5-6にまとめる。そのうち、{あいづち}が頭高型であるが、どの話段においても高い使用平均値で出現したため、{あいづち}を依頼・断り話段と終了部の「付随表現」にも取り入れた。また、依頼・断り話段においても、{詫び}が少なくない数値として現れたため、依頼・断り話段の「間接的断り」にも取り入れた。

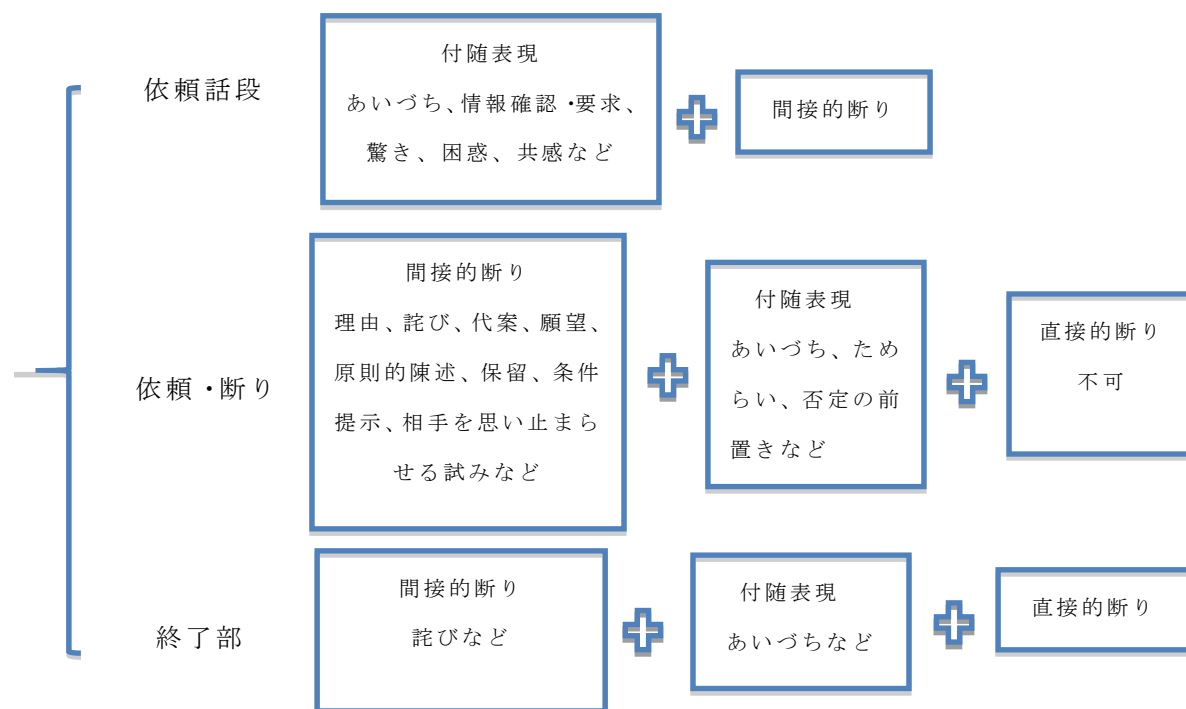


図 5-6 JJ2の「依頼」に対する断り会話構造

つづいて、CC2の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用回数及び平均値を表5-14と図5-7に示す。

表 5-14 CC2の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	意味公式	依頼話段		1回目の断り		2回目の断り		3回目の断り		終了部	
		CC2	CC2平	CC2	CC2平	CC2	CC2平	CC2	CC2平	CC2	CC2

		(26 組)	均値 /26	(40 組)	均値 /40	(18 組)	均値 /18	(5 組)	均値 /5	(20 組)	平均 値/20
直接的断り	不可	1	0.04	14	0.35	3	0.17	5	1	5	0.25
間接的断り	理由	0	0	47	1.18	21	1.17	0	0	0	0
	詫び	0	0	5	<b>0.13</b>	2	0.11	0	0	10	0.50
	代案	0	0	14	0.35	2	0.11	2	0.40	6	0.30
	遺憾	0	0	6	0.15	0	0	0	0	0	0
	願望	1	0.04	6	0.15	2	0.11	0	0	1	0.05
	条件提示	0	0	18	0.45	3	0.17	4	0.80	1	0.05
	相手を思い 止まらせる 試み	0	0	6	0.15	5	0.28	0	0	0	0
	保留	0	0	5	0.13	3	0.17	2	0.40	2	0.10
	言いさし	0	0	3	0.08	1	0.06	0	0	0	0

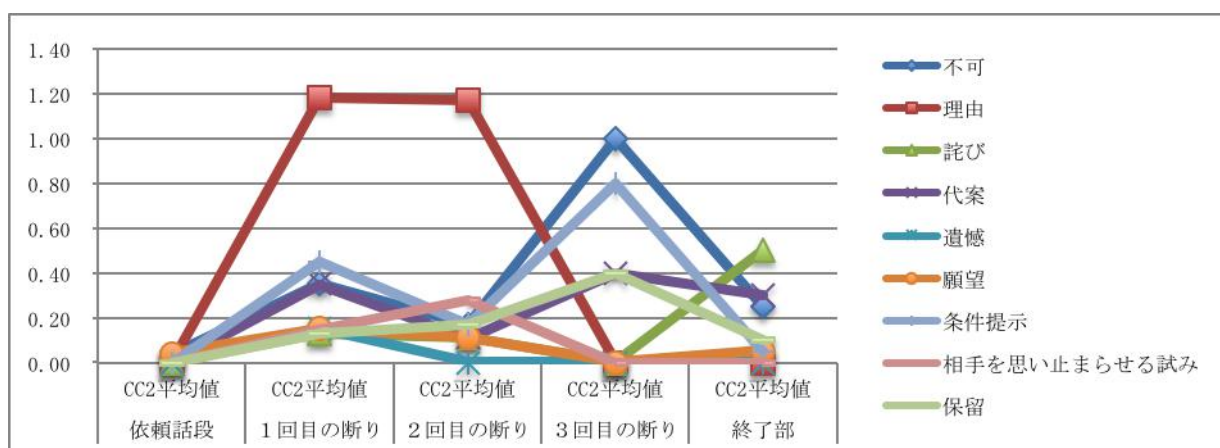


図 5-7 CC2 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の平均値<sup>29</sup>

表 5-14 と図 5-7 を合わせると、CC2 の「直接的断り」、「間接的断り」に属する各意味公式の展開パターンは 2 種類に分かれる。①中高型：{不可}、{理由}、{条件提示}、{代案}、{保留}、{相手を思い止まらせる試み}、{願望}、{遺憾} のように、依頼話段と終了部において、ゼロまたはごく低い数値で出現したのに対して、真ん中の依頼・断り話段においては数多く使用された展開パターンを中高型と言える。そのうち、{理由} の変化が最も顕著であった。②尾高型：{詫び} は依頼話段において出現しなかったが、依頼・断り話段において少し出てきた。一方、終了部においては、使用平均値が高くなったので、尾高型に属する。CC1 の勧誘場面と CC2 の依頼場面を比べると、勧誘場面では、{詫び} は中高型であったのに対して、依頼場面では、{詫び} は尾高型であった。そして、勧誘場面のほうが、

依頼場面より {詫び} を多く使うことがわかった。

CC2 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値を表 5-15 と図 5-8 に示す。

表 5-15 CC2 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式 のカテゴリー	意味公式	依頼話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		CC2 (26 組)	CC2 平 均値 /26	CC2 (40 組)	CC2 平 均値 /40	CC2 (18 組)	CC2 平 均値 /18	CC2 (5 組)	CC2 平均 値/5	CC2 (20 組)	CC2 平 均値 /20
付随表現	あいづち	17	0.65	4	0.10	3	0.17	0	0	2	0.10
	ためらい	1	0.04	6	0.15	1	0.06	2	0.40	0	0
	情報確認・要求	36	1.38	0	0	2	0.11	0	0	0	0
	否定の前置き	3	0.12	1	0.03	2	0.11	0	0	0	0
	呼びかけ	0	0	4	0.10	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	3	0.08	4	0.22	2	0.40	1	0.05
	肯定的表現	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0
	驚き	1	0.04	0	0	0	0	0	0	0	0
	ヘッジ	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0
	共感	2	0.08	0	0	0	0	0	0	0	0
挨拶	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.05	

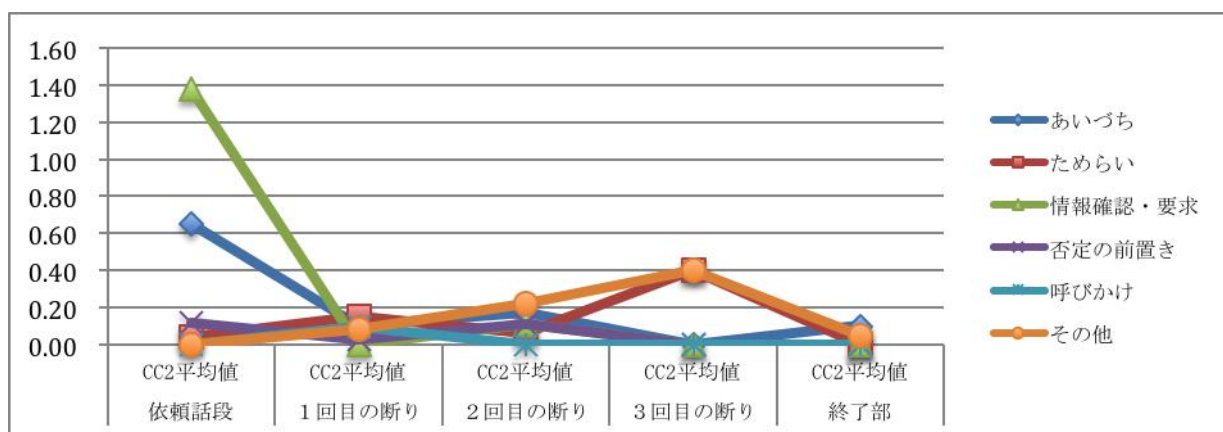


図 5-8 CC2 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の平均値<sup>30</sup>

表 5-15 と図 5-8 を合わせてみると、CC2 の「付随表現」に属する各意味公式の展開パタ



ーンは2種類に分類できる。①頭高型：{情報確認・要求}、{あいづち}、{否定の前置き}は依頼話段において最も多く現れた展開パターンである。そのうち、{情報確認・要求}の展開パターンが最も際立っていた。②中高型：{ためらい}、{呼びかけ}、{その他}は、依頼・断り話段においては最も高い数値として現れたので、中高型であると言える。

上記のCC2の意味公式のカテゴリの展開パターンと意味公式に属する各意味公式の展開パターンをまとめると、以下の3種類の展開パターンが抽出された。1つ目は「付随表現」に属する{情報確認・要求}、{あいづち}、{否定の前置き}のような頭高型である。2つ目は「直接的断り」に属する{不可}、「間接的断り」に属する{理由}、{条件提示}、{代案}、{保留}、{相手を思い止まらせる試み}、{願望}、{遺憾}、「付随表現」に属する{ためらい}、{呼びかけ}、{その他}のような中高型である。3つ目は「間接的断り」に属する{詫び}のような尾高型である。従って、CC2の「依頼」に対する断り会話構造を図5-9にまとめる。そのうち、{不可}と{代案}が中高型であるが、終了部においても0.20以上の平均値として現れたので、それぞれ終了部の「直接的断り」と「間接的断り」にも取り入れた。また、{あいづち}が頭高型であったが、依頼・断り話段においても、0.20以上の平均値として現れたので、依頼・断りの「付随表現」にも取り入れた。なお、{詫び}が尾高型であったが、依頼・断り話段においても、0.20以上の使用平均値で出現したため、依頼・断り話段の「間接的断り」にも取り入れた。

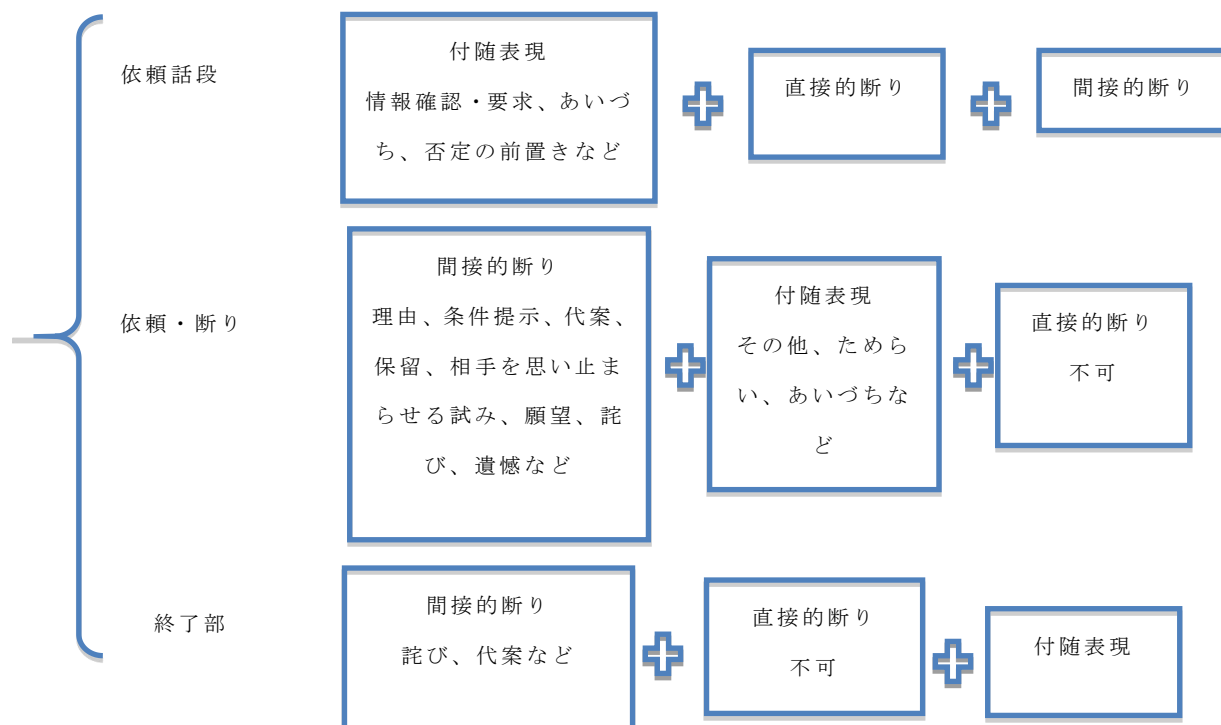


図 5-9 CC2 の「依頼」に対する断り会話構造



JJ2 と CC2 の各意味公式の展開パターンをまとめた結果、次の共通点もわかった。①JJ2 と CC2 双方ともに、「付随表現」に属する {あいづち}、{情報確認・要求} は「頭高型」の展開パターンであった。②双方共に、「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{代案}、{願望}、{保留}、{条件提示}、{相手を思い止まらせる試み} と、「付随表現」に属する {ためらい} の展開パターンは「中高型」であった。③JJ2 と CC2 のいずれの「間接的断り」に属する {詫び} は「尾高型」の展開パターンであった。

一方、以下の相違点も見られた。第1に、JJ2 で見られた {驚き}、{困惑}、{共感} の展開パターンは頭高型であったのに対して、CC2 の最初の依頼話段においても、ゼロまたはごく低い数値で現れた。第2に、JJ2 で見られた「原則的陳述」と「ヘッジ」の展開パターンが中高型であったが、CC2 では、どの話段においても、出現しなかった。それに対して、CC2 で見られた中高型であった {呼びかけ} は JJ2 のどの話段においても出現しなかった。

従って、上記の各意味公式の異同をまとめた結果、使用数及び平均値が高い意味公式の展開パターンに見られた JJ2 と CC2 両者間の差がそれほど大きくなかった。

なお、JJ2 と CC2 の「誘い」に対する断り会話構造を比較すると（上記図 5-6 ・ 図 5-9 を参照）、いずれも主に勧誘話段、勧誘・断り話段、終了部からなっていることが明らかになったと同時に、次の共通点も見られた。即ち、依頼話段において、JJ2 と CC2 双方ともに、{あいづち}、{情報確認・要求} を含む「付随表現」が中心に使用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」がゼロまたはわずかな数値として現れた。次に、依頼・断り話段においては、JJ2 と CC2 はいずれも、「間接的断り」、「直接的断り」、「付随表現」を併用した。そして、双方ともに、{理由}、{代案}、{保留}、{願望}、{条件提示}、{詫び}、{相手を思い止まらせる試み} などを含む「間接的断り」が中心に多用されたのにつづき、{あいづち}、{ためらい} などを含む「付随表現」と「直接的断り」も使用されたことが判明した。最後の終了部においても、JJ2 と CC2 双方共に、「間接的断り」、「直接的断り」、「付随表現」を併用したが、{詫び} を含む「間接的断り」が主に用いられたことがわかった。

一方、依頼話段においては、JJ2 のほうで {あいづち} のほかに、{驚き}、{困惑}、{共感} などを含む「付随表現」が数も種類も多く用いられたのに対して、CC2 のほうでは {情報確認・要求} の使用数が JJ2 より多かった。依頼・断り話段においては、JJ2 のほうでは {詫び}、{原則的陳述}、{不可}、{あいづち}、{ためらい} などが多く見られたが、CC2 のほうでは {理由}、{条件提示} などが多く使用されたという相違も伺われた。

### 5.1.3 会話構造による分析のまとめ

本節では、社会人を対象とする依頼に対する断り言語行動の話段ごとにおける各意味公

式の使用数及びカテゴリーの使用回数、意味公式のカテゴリー及び各意味公式の展開パターンの考察によって、全体的な構造を分析してきた。上記の分析によって、以下の結果が得られた。

まず、話段ごとにおける意味公式のカテゴリー及び各意味公式の使用回数と平均値の考察によると、JJ2 と CC2 双方共に、依頼話段においては、「付随表現」が主に使用された。さらに、「付随表現」の中で、双方ともに {あいづち}、{情報確認・要求} が多く使用された。また、依頼・断り話段と終了部においては、「間接的断り」が中心に用いられた。なお、3 回目の断りを除き、JJ2 と CC2 のいずれも依頼・断り話段においては、{理由} と {不可} が多く使用された。なお、最後の終了部においては、双方ともに {詫び} が最も多く見られた。

一方、依頼話段においては、CC2 より JJ2 のほうで {あいづち}、{驚き}、{困惑}、{共感} などが多用されたのに対して、CC2 のほうで {情報確認・要求} が多く使用された。依頼・断り話段においては、CC2 より JJ2 のほうで {不可}、{詫び}、{原則的陳述}、{あいづち}、{ためらい} などが多く見られたのに対して、JJ2 より CC2 のほうで {理由}、{条件提示} などが多く使用された。終了部においては、JJ2 のほうで {詫び} の使用平均値が多かったという相違点も見られた。

次に、意味公式のカテゴリーの展開パターンをまとめると、JJ2 と CC2 双方ともに、依頼話段において、「付随表現」が中心に使用されて、依頼・断り話段と終了部において、「直接的断り+間接的断り+付随表現」というパターンが主に見られたが、「間接的断り」が圧倒的に多く用いられたという共通点が伺われた。一方、どの話段においても、CC2 より JJ2 のほうで「付随表現」が多用された。また、1 回目の断りから 3 回目の断りを合わせると、CC2 より JJ2 のほうで「直接的断り」が多く使用された。

また、JJ2 と CC2 の各意味公式の展開パターンを対照すると、以下の共通している 3 種類の展開パターンが挙げられる。① JJ2 と CC2 双方ともに、「付随表現」に属する {あいづち}、{情報確認・要求} は「頭高型」の展開パターンであった。② 双方共に、「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{代案}、{願望}、{保留}、{条件提示}、{相手を思い止まらせる試み} と、「付随表現」に属する {ためらい} の展開パターンは「中高型」であった。③ JJ2 と CC2 のいずれの「間接的断り」に属する {詫び} は「尾高型」の展開パターンであった。即ち、JJ2 と CC2 のほとんどの意味公式の展開パターンが同様であった。

最後に、JJ2 と CC2 の依頼に対する断りの会話構造をまとめた結果、いずれも主に依頼話段、依頼・断り話段、終了部から会話を構成しているという共通点がわかった。即ち、依頼話段において、JJ2 と CC2 双方に、{あいづち}、{情報確認・要求} を含む「付随表現」が中心に使用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」の出現数がゼロまたはごく少なかった。次の依頼・断り話段においては、JJ2 と CC2 はいずれも、「間接的断り」、「直接的断り」、「付随表現」を併用した。そして、双方ともに、{理由}、{代案}、{保留}、{願

望} などを含む「間接的断り」が中心に多用されたのにつづき、{あいづち}、{ためらい} などを含む「付随表現」と「直接的断り」も使用されたことが観察された。最後の終了部においても、JJ2 と CC2 双方共に、「{詫び}」を含む「間接的断り」が主に用いられた。

## 5.2 意味公式の量的分析

本節では依頼を断る場面に見られた各意味公式の使用数及び親・疎関係、同・下関係を  
含む社会的変数が意味公式の使用数に及ぼした影響を考察する。

### 5.2.1 意味公式の全体的な使用回数

まず、JJ2 と CC2 の各意味公式の全体的な使用数及び割合を表 5-16 に示す。

表 5-16 JJ2 と CC2 の各意味公式の使用数及び割合

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ2 使用数	JJ2 割合%	CC2 使用数	CC2 割合%
直接的断り	不可	61	11.34	28	9.03
	遂行	2	0.37	0	0
	直接的断り合計	63	11.71	28	9.03
間接的断り	理由	55	10.22	68	21.94
	条件提示	11	2.04	26	8.39
	詫び	67	12.45	17	5.48
	願望	14	2.60	10	3.23
	言いさし	4	0.74	4	1.29
	関係維持	1	0.19	0	0
	遺憾	3	0.56	6	1.94
	相手を思い止まらせる試み	10	1.86	11	3.55
	代案	43	7.99	24	7.74
	保留	11	2.04	13	4.19
	原則的陳述	14	2.60	0	0
	間接的断り合計	233	43.31	179	57.74
付随表現	肯定的表現	0	0	2	0.65
	あいづち	102	18.96	26	8.39
	困惑	16	2.97	0	0
	ためらい	47	8.74	12	3.87

	驚き	17	3.16	1	0.32
	情報確認・要求	23	4.28	38	12.26
	否定の前置き	6	1.12	6	1.94
	呼び掛け	0	0	4	1.29
	挨拶	3	0.56	1	0.32
	ヘッジ	11	2.04	1	0.32
	共感	11	2.04	2	0.65
	その他	6	1.12	10	3.23
	付随表現合計	242	44.98	103	33.23
意味公式合計		538	100	310	100

表 5-16 に示したように、まず、JJ2 のほうが CC2 より全体的に意味公式を多用したことがわかった (JJ2-538, CC2-310)。次に、意味公式のカテゴリーからみれば、CC2 より JJ2 のほうで、「直接的断り」、「間接的断り」、「付随表現」のいずれも多用された。そのうち、「間接的断り」、「付随表現」における JJ2 と CC2 両者間の差が顕著に見られた。社会人を対象とする勧誘を断る場面に比べると、JJ1 より JJ2 のほうでは「直接的断り」が増加したのに対して、CC1 より CC2 のほうでは「直接的断り」が減少した。また、各意味公式の使用回数の割合をみれば、各意味公式の使用率が最高でも、CC2 の {理由} (21.94%) であった。即ち、各意味公式の使用率が少なかったため、JJ2 と CC2 の意味公式使用割合の有意差を統計的に表すことができないという結果になった。このような結果が出た原因に関する分析は、第 4 章と同様であるので、ここで省くことにする。それにもかかわらず、各意味公式の使用回数の割合をみれば、JJ2 では多く使用された意味公式の上位 7 位が① {あいづち} (18.96%)、② {詫び} (12.45%)、③ {不可} (11.34%)、④ {理由} (10.22%)、⑤ {ためらい} (8.74%)、⑥ {代案} (7.99%)、⑦ {情報確認・要求} (4.28%) という順であったのに対して、CC2 では① {理由} (21.94%)、② {情報確認・要求} (12.26%)、③ {不可} (9.03%)、④ {あいづち} (8.39%)、⑤ {条件提示} (8.39%)、⑥ {代案} (7.74%)、⑦ {詫び} (5.48%) という上位 7 位が見られた。そのうち、JJ2 と CC2 双方共に、{あいづち}、{理由}、{詫び}、{不可}、{代案} という 5 つの意味公式を多用したという共通点が挙げられる。とりわけ、{代案} の使用率においては、JJ2 と CC2 はほぼ同様であった。一方、JJ2 のほうが CC2 より {不可}、{詫び}、{あいづち}、{ためらい} を多用したのに対して、CC2 のほうが JJ2 より {理由}、{情報確認・要求}、{条件提示} を好んだ傾向が伺われた。

## 5.2.2 被験者による意味公式の使用平均値の有意差

本章の調査は JJ2 と CC2 の被験者各々 10 名を対象とするので、被験者が一人一人意味公

式の使用回数に及ぼした影響も考察する必要があると考える。ゆえに、JJ2 と CC2 の各被験者が各意味公式の使用回数に及ぼした影響を t 検定で考察する。

表 5-17 JJ2 と CC2 の「直接的断り」における人による意味公式の平均使用数

	JJ2 (n=10)		CC2 (n=10)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	6.30	3.335	2.80	2.936	2.081	0.067
直接的断り合計	6.30	3.335	2.80	2.936	2.081	0.067

表5-18 JJ2とCC2の「間接的断り」における人による意味公式の平均使用数

	JJ2 (n=10)		CC2 (n=10)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	5.50	3.064	6.80	2.251	-1.197	0.262
条件提示	1.10	1.370	2.60	2.119	-1.830	0.101
詫び	6.70	3.945	1.70	2.406	2.595	0.029
願望	1.40	1.776	1.00	0.816	0.840	0.423
言いさし	0.40	0.699	0.40	0.699	0.000	1.000
関係維持	0.10	0.316	0.00	0.000	1.000	0.343
遺憾	0.30	0.949	0.60	0.843	-0.818	0.434
相手を思い止まらせる 試み	1.00	1.491	1.10	1.197	-0.165	0.872
代案	4.30	2.751	2.40	1.578	1.777	0.109
保留	1.10	1.729	1.30	1.252	-0.264	0.798
原則的陳述	1.40	1.506	0.00	0.000	2.941	0.016
間接的断り合計	23.30	7.861	17.90	3.446	2.057	0.070

表 5-19 JJ2 と CC2 の「付随表現」における人による意味公式の平均使用数

	JJ2 (n=10)		CC2 (n=10)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.20	0.422	-1.500	0.168
あいづち	10.20	8.189	2.60	2.875	2.679	0.025
困惑	1.60	2.675	0.00	0.000	1.891	0.091
ためらい	4.70	2.497	1.20	1.549	5.351	0.000
驚き	1.70	1.947	0.10	0.316	2.667	0.026
情報確認・要求	2.30	3.268	3.80	2.700	-1.307	0.224
否定の前置き	0.60	1.265	0.60	0.966	0.000	1.000
感謝	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
呼びかけ	0.00	0.000	0.40	0.699	-1.809	0.104
挨拶	0.30	0.483	0.10	0.316	1.000	0.343
ヘッジ	1.10	2.025	0.10	0.316	1.500	0.168
共感	1.10	1.595	0.20	0.632	1.784	0.108
その他	0.60	1.075	1.00	1.054	-0.688	0.509
付随表現合計	24.20	13.718	10.30	6.056	3.690	0.005

JJ2 と CC2 の人による意味公式のカテゴリーの使用平均値の有意差をまとめると、CC2 より JJ2 のほうでは「付随表現」のみが有意に多く使用された。各意味公式の使用平均値の有意差を見ると、CC2 より JJ2 のほうでは {詫び}、{原則的陳述}、{あいづち}、{ためらい}、{驚き} が有意に多く見られた。また、上記の意味公式を除き、5.1 及び 5.2.1 で述べた社会人の CC2 より JJ2 のほうでは {不可}、{代案}、{願望} が多用されたのに対して、JJ2 より CC2 のほうでは {理由}、{情報確認・要求}、{条件提示} が多く使用されたのは、人による意味公式の使用平均値の有意差の考察では検証されなかった。

### 5.2.3 社会的関係が意味公式の使用平均値に与えた影響

まず、JJ2 の親・疎関係による各意味公式使用平均値及び親と疎の間の有意差があるか否かを考察する。

表 5-20 JJ2 親と疎（直接的断り）

	JJ2親 (n=20)		JJ2疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準差	平均値	標準差		
不可	1.80	1.642	1.35	1.040	1.088	0.290
直接拒絶总和	1.80	1.642	1.35	1.040	1.088	0.290

表 5-21 JJ2 親と疎（間接的断り）

	JJ2親 (n=20)		JJ2疎 (n=20)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.65	1.725	1.10	0.852	1.273	0.218
条件提示	0.40	0.681	0.15	0.366	1.751	0.096
詫び	1.80	2.067	1.55	1.395	0.677	0.506
願望	0.40	0.681	0.30	0.571	0.809	0.428
省略	0.05	0.224	0.15	0.489	-0.809	0.428
関係維持	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
遺憾	0.05	0.224	0.10	0.447	-0.438	0.666
相手を思い止まらせる試み	0.30	0.657	0.20	0.616	0.623	0.541
代案	0.90	1.071	1.25	1.209	-1.196	0.246
保留	0.30	0.733	0.25	0.716	0.224	0.825
原則的陳述	0.40	0.754	0.30	0.657	0.438	0.666
間接的断り合計	6.25	3.851	5.40	2.437	1.019	0.321

表 5-22 JJ2 親と疎 (付随表現)

	JJ2親 (n=20)		JJ2疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
あいづち	2.40	3.926	2.75	3.210	-0.327	0.747
困惑	0.45	1.572	0.35	0.875	0.256	0.800
ためらい	1.45	0.887	0.90	1.252	1.764	0.094
驚き	0.45	0.605	0.40	0.940	0.203	0.841
情報確認・要求	0.70	1.302	0.45	0.605	1.000	0.330
否定の前置き	0.20	0.523	0.10	0.308	1.000	0.330
感謝	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
呼びかけ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
挨拶	0.00	0.000	0.15	0.366	-1.831	0.083
ヘッジ	0.20	0.523	0.35	0.988	-0.645	0.527
共感	0.35	0.745	0.20	0.410	1.000	0.330
その他	0.20	0.523	0.10	0.447	0.623	0.541
付随表現合計	6.40	4.593	5.75	5.428	0.489	0.630

JJ2 では、親・疎関係による各意味公式の有意差がなかったという結果になった。次に、CC2 の親・疎関係による各意味公式の差を考察する。

表 5-23 CC2 親と疎 (直接的断り)

	CC2親 (n=20)		CC2疎 (n=20)		t	p
	平均 値	標準偏 差	平均 値	標準偏 差		
不可	0.75	0.851	0.65	1.040	0.384	0.705
直接的断り合計	0.75	0.851	0.65	1.040	0.384	0.705

表5-24 CC2親と疎（間接的断り）

	CC2親 (n=20)		CC2疎 (n=20)		t	P
	平均 値	標準偏 差	平均 値	標準偏 差		
理由	2.05	0.999	1.35	0.933	2.666	0.015
条件提示	0.90	0.968	0.40	0.598	2.032	0.056
詫び	0.37	0.597	0.53	0.841	-0.900	0.380
願望	0.20	0.410	0.30	0.571	-0.567	0.577
言いさし	0.15	0.366	0.05	0.224	1.453	0.163
関係維持	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
遺憾	0.15	0.366	0.15	0.366	0.000	1.000
相手を思い止まらせる試 み	0.30	0.923	0.25	0.550	0.195	0.847
代案	0.50	0.688	0.70	0.979	-0.748	0.464
保留	0.40	0.821	0.25	0.786	0.547	0.591
原則的陳述	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
間接的断り合計	5.00	1.622	3.95	1.731	2.037	0.056

表 5-25 CC2 親と疎（付随表現）



	CC2親 (n=20)		CC2疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.10	0.308	-1.453	0.163
あいづち	0.60	0.883	0.70	1.174	-0.357	0.725
困惑	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
ためらい	0.30	0.733	0.30	0.571	0.000	1.000
驚き	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
情報確認・要求	1.00	1.376	0.90	1.119	0.252	0.804
否定の前置き	0.22	0.732	0.11	0.323	0.566	0.579
感謝	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
呼びかけ	0.10	0.308	0.10	0.308	0.000	1.000
挨拶	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
ヘッジ	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
共感	0.10	0.447	0.00	0.000	1.000	0.330
その他	0.35	0.587	0.15	0.366	1.285	0.214
付随表現合計	2.65	2.834	2.50	2.666	0.186	0.854

CC2 では、疎の人より親の人のほうに対して、{理由} が有意に多用された。その他の意味公式の有意差が見られなかった。

また、JJ2 の同・下関係による各意味公式の使用回数の差をまとめる

表 5-26 JJ2 同と下（直接的断り）

	JJ2同 (n=20)		JJ2下 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	1.55	1.432	1.60	1.353	-0.152	0.881
直接的断り合計	1.55	1.432	1.60	1.353	-0.152	0.881

表5-27 JJ2同と下（間接的断り）

	JJ2同 (n=20)		JJ2下 (n=20)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.85	1.565	0.90	0.968	3.133	0.005
条件提示	0.30	0.571	0.25	0.550	0.326	0.748
詫び	2.35	2.084	1.00	0.973	2.549	0.020
願望	0.50	0.761	0.20	0.410	1.831	0.083
言いさし	0.20	0.523	0.00	0.000	1.710	0.104
関係維持	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
遺憾	0.10	0.447	0.05	0.224	0.438	0.666
相手を思い止まらせる 試み	0.05	0.224	0.45	0.826	-2.373	0.028
代案	0.75	1.118	1.40	1.095	-2.041	0.055
保留	0.45	0.887	0.10	0.447	1.926	0.069
原則的陳述	0.35	0.671	0.35	0.745	0.000	1.000
間接的断り合計	6.95	3.776	4.70	2.055	2.517	0.021

表 5-28 JJ2 同と下 (付随表現)

	JJ2同 (n=20)		JJ2下 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
あいづち	2.45	3.940	2.70	3.197	-0.223	0.826
困惑	0.50	1.606	0.30	0.801	0.507	0.618
ためらい	1.20	1.240	1.15	0.988	0.142	0.888
驚き	0.50	0.827	0.35	0.745	0.616	0.545
情報確認・要求	0.35	0.671	0.80	1.240	-2.269	0.035
否定の前置き	0.15	0.366	0.15	0.489	0.000	1.000
感謝	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
呼びかけ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
挨拶	0.00	0.000	0.15	0.366	-1.831	0.083
ヘッジ	0.20	0.894	0.35	0.671	-0.679	0.505
共感	0.35	0.745	0.20	0.410	1.000	0.330
その他	0.05	0.224	0.25	0.639	-1.710	0.104
付随表現合計	5.75	5.711	6.40	4.235	-0.462	0.649

意味公式のカテゴリからすれば、JJ2では、下の人より同の人のほうに対して、「間接的断り」が全体的に有意に多用されたことがわかった。そのうち、下の人より同の人のほうに対して、{理由}、{詫び}が有意に多く見られたのに対して、同の人より下の人のほうに対して、{相手を思い止まらせる試み}が有意に多かった。また、「付随表現」に属する{情報確認・要求}が下の人からの依頼に対する断り言語行動では有意に多く見

られた。その他の意味公式の有意差がなかった。

最後に、CC2の同・下関係による各意味公式の使用回数の差をまとめる。

表 5-29 CC2 同と下（直接的断り）

	CC2同 (n=20)		CC2下 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	0.75	0.967	0.65	0.933	0.462	0.649
直接的断り合計	0.75	0.967	0.65	0.933	0.462	0.649

表 5-30 CC2 同と下（間接的断り）

	CC2同 (n=20)		CC2下 (n=20)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.95	0.945	1.45	1.050	1.697	0.106
条件提示	0.60	0.681	0.70	0.979	-0.567	0.577
詫び	0.37	0.597	0.53	0.841	-1.143	0.268
願望	0.35	0.587	0.15	0.366	1.453	0.163
言いさし	0.10	0.308	0.10	0.308	0.000	1.000
関係維持	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
遺憾	0.15	0.366	0.15	0.366	0.000	1.000
相手を思い止まらせる試み	0.05	0.224	0.50	1.000	-1.917	0.070
代案	0.30	0.470	0.90	1.021	-2.449	0.024
保留	0.35	0.813	0.30	0.801	0.188	0.853
原則的陳述	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
間接的断り合計	4.20	1.609	4.75	1.860	-1.078	0.295

表 5-31 CC2 同と下（付随表現）

	CC2同 (n=20)		CC2下 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.05	0.224	0.05	0.224	0.000	1.000
あいづち	0.60	1.046	0.70	1.031	-0.317	0.755
困惑	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
ためらい	0.45	0.759	0.15	0.489	1.552	0.137
驚き	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
情報確認・要求	0.65	1.226	1.25	1.209	-1.831	0.083
否定の前置き	0.06	0.236	0.28	0.752	-1.166	0.260
感謝	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
呼びかけ	0.05	0.224	0.15	0.366	-1.000	0.330
挨拶	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
ヘッジ	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
共感	0.00	0.000	0.10	0.447	-1.000	0.330
その他	0.15	0.366	0.35	0.587	-1.453	0.163
付随表現合計	2.05	2.481	3.10	2.900	-1.204	0.243

CC2 では、同の人より下の方のほうに対して、{代案} が有意に多く使用されたことがわかった。その他の意味公式の有意差が見られなかった。

## 5.2.4 本節のまとめ

JJ2 と CC2 の意味公式の量的分析をまとめると、以下の特徴がわかった。まず JJ2 と CC2 双方共に、{あいづち}、{理由}、「詫び」、{不可}、{代案}、という 5 つの意味公式を多用したという共通点もわかった。一方、全体的に JJ2 で見られた意味公式の使用数が CC2 より相当に多かったのは、CC2 より JJ2 のほうで、「直接的断り」、「間接的断り」、「付随表現」のいずれも多用されたためである。また、JJ2 のほうが CC2 より {不可}、{詫び}、{あいづち}、{ためらい} を多用したのに対して、CC2 のほうが JJ2 より {理由}、{情報確認・要求}、{条件提示} を好んだ傾向が見られた。さらに、人による意味公式の使用平均値の有意差に関する考察では、上記の意味公式の中で、JJ2 のほうが CC2 より {詫び}、{あいづち}、{ためらい} を多用したのは、検証されたが、ほかの {不可}、{理由}、{情報確認・要求}、{条件提示} における JJ2 と CC2 両者間の有意差が見られなかった。なお、上記の使用数が多かった意味公式の以外に、使用数が多くなかった {原則的陳述} と {驚き} においても、JJ2 と CC2 両者間の有意差が見られた。

親・疎関係と同・下関係を含む社会的関係が JJ2 と CC2 の意味公式の使用平均値に与えた影響をまとめると、同・下関係が JJ2 の意味公式の使用平均値に及ぼした影響が最も顕著に見られた。即ち、JJ2 では同の方のほうに対して、{理由}、{詫び} を含む「間接的断

り」が有意に多く見られたのに対して、下の人のほうに対しては、{相手を思い止まらせる試み}、{情報確認・要求}が有意に多く使用されたことがわかった。親・疎関係による JJ2 の意味公式の使用平均値の有意差が見られなかった。一方、CC2 では親しい人のほうに対して、{理由}が有意に多用されたが、下の人のほうに対して、{代案}が有意に多用されたという社会的関係による有意差が観察された。

## 5.3 意味公式の内容と表現形式の分析

5.2 では、JJ2 で意味公式の使用回数が上位 4 位は {あいづち}、{詫び}、{不可}、{理由}であった。一方、CC2 では意味公式の使用回数が上位 4 位は {理由}、{情報確認・要求}、{不可}、{あいづち}であった。そのうち、{情報確認・要求}は頼み手の仕掛け方による次第であったので、本研究ではそのうち容を考察しないことにする。一方、JJ2 での意味公式の使用回数が上位 4 位であった {詫び}は、CC2 では上位 4 位でなかったが、17 回の使用数として、7 番目に多く使用された意味公式であった。従って、本節では JJ2 と CC2 の {あいづち}、{詫び}、{不可}、{理由}を取り上げ、そのうち容または表現形式を考察する。さらに、親・疎関係と力関係を含む社会的関係が意味公式の内容及び表現形式の使い分けに与えた影響も考察する。

### 5.3.1 {不可} の内容分析

5.1 と 5.2. で述べたように、CC2 より JJ2 のほうでは {不可}が多用されたが、5.2.2 での人による意味公式の使用平均値の有意差の考察によると、JJ2 と CC2 両者間の有意差が見られなかった。本節では、社会人の依頼に対する断り言語行動における {不可}の内容を、相手の FT 度の大きさ、具体的な内容及びコンテキストの基準に基づき、分類した上で、親・疎関係と同・下関係を含む社会的関係が {不可}の内容に与えた影響を考察する。

まず、第 4 章の誘いを断る場面と同様に、頼み手のフェイスを脅かす度合い (FT 度) の大きさによって、{不可}を、①能力・状況、②緩和的結論、③意志の 3 つに分類する。①「能力・状況」の {不可}は、相手のフェイスを脅かす度合いが最も小さいのに対して、③「意志」の {不可}は、相手の FT 度が最も大きい。

第 4 章の誘いを断る場面と同様に、{不可}の内容分類間の境目が明確ではないこともあった。例えば、JJ2 で見られた「無理」のような不可表現は、その前後に「ちょっと」、「かもしれない」などのような緩和的表現があれば、「緩和的結論」に分類した。

また、第 4 章と同様に、{不可}と {理由}のつながりによって、不可表現を「能力・状況」にも「意志」にも分類したこともある。例えば、「できない」のような不可表現は、もともと「能力・状況」に分類すべきであるが、その前後に理由が 1 つも現れなかったので、

「意志」に分類した。

1 度目の断り

5B えー、どうして、お母さんに言ったほうがいいんじゃないの？

2 度目の断り

6A お母さんに言ったら殺されちゃうよ！

7B えー、そしたら、それは貸すっていうのはダメね私

3 度目の断り

8A じゃあちょうだい？

9B あげるんならあげるけれど、でも、あげたら何してくれるの？代わりに。

10A あの一、お家掃除してあげる。

11B えー。じゃあ、それはちょっとやっぱり、それってちょっと難しいんじゃないかな？そういう理由って。  
(確かにねー) なんとかねー。

4 回目の断り

12A あの、時給 1000 円にしてもものすごい時間かかっちゃうよね (ねえ)。そっかー、そりゃまずいかー。  
あの、それじゃあ 1 ヶ月分の 10 万円はどうだろう？

13B んー、貸すのはダメねとにかく。貸し借りっていうのは良くないから。

14A なんで？

15B 良くないってそれ、昔からねそういう風に、貸すんだったらあげるっていうことにしないと、人間関係うまくいなくなるから (あー)、貸すっていうのは、私はできないな。あげるっていうのはありかもしれないけどね (あーそうかー)。でもただ (うん)、あげるっていうのは、親じゃないし、どうなんでしょ  
うね？やっぱり恥を忍んでもなんでも、親に言うべきだと思う。(JJ2F11 親・同)

上記の例によると、断り手はお金を頼み手に貸す能力があるが、理由を 1 つも述べずに、「だめ」、「できない」のような不可表現を 4 度も使用し、相手にお金を貸したくないと判断できるので、この例で見られた「できない」、「だめ」のいずれも、「意志」に分類した。

しかし、{理由} が 1 つも現れなかったのに、不可表現を「能力・状況」に分類したこともある。以下の例がそれである。

1 回目の断り

4B えー、無理ッ。

2 回目の断り

5A うーん (無理無理無理)、そこをなんとか一、できないかなあ。

6B 無理。

7A あー、(ごめーん。) そっかあ…。(無理。)

8B もう無理の一言しかないわ。無理。(JJ2F13 親・上)

例で示したように、断り手は、理由を1つも述べずに、ただ「無理」を6度も繰り返した。フォローアップ・インタビューによると、この断り手は家族が重病にかかり、貧乏な生活をおくっているため、親友から30万円を貸してもらえませんかと言われても、まったく貸せない状態で、「無理」の表現でしか断れなかった。従って、この被験者の経済状況によって、「意志」に分類するよりはむしろ、「能力・状況」に分類した。

表 5-32 JJ2 と CC2 の {不可} の内容分類及び例

不可の内容	JJ2	CC2
能力・状況	23(37.70%)	19(67.86%)
	貸せない。/貸すことできないわ。/いや、本当に本当に無理。	手头现在暂时还拿不出来。/那也没帮上你。/这段时间太紧了/我现在真是无能为力。但是不能借太多。 (今(現金)を持ってないです。/手伝ってあげられないです。/時間は厳しい/どうしようもないです。たくさん貸してあげられないです。)
緩和的結論	23(37.70%)	9(32.14%)
	うちはちょっと無理かなあ…。/ねちょっと厳しくてね、/えー、それはちょっと難しいかなー。/無理かなー。	也估计够呛，估计够呛，/就是不太方便。(多分無理だと思います、/ちょっと…。)
意志	15(24.59%)	0
	それはちょっとお引き受けできかねます。/それはちょっとできないというよりは、やるべきじゃないと思う、/それはちょっと、貸すっていうのはダメね私	
合計	61(100%)	28(100%)

5.2で述べたように、誘いを断る場面と逆に、大人の依頼を断る場面においては、CC2よりJJ2のほうが、{不可}を多用したことがわかった。JJ2で見られた{不可}の内容は、「能力・状況」、「緩和的結論」、「意志」の3つに分類された。其の内、「能力・状況」と「緩和的結論」が最も多く使用されたのに続き、頼み手のFT度が大きい「意志」も24.59%の割合で用いられた。一方、CC2で見られた{不可}の内容は、ただ頼み手のFT度が小さい「能力・状況」と「緩和的結論」の2つのみに集中した。其の内、「能力・状況」が最も多く使用された。しかも、使用率からみれば、CC2のほうがJJ2より「能力・状況」を相当に多用したこともわかった(JJ2-37.70%, CC2-67.86%)。「能力・状況」に続き、CC2では「緩和的結論」が2番目に多用された。「緩和的結論」の使用率に関しては、CC2とJJ2はほぼ同じであった(JJ2-37.7%, CC2-32.14%)。JJ2で見られた頼み手のFT度が大きい「意志」

は、CC2 では1つも見られなかった。

JJ2 と CC2 の依頼に対する断り言語行動における {不可} の内容分析の結果を、JJ1 と CC1 の誘いに対する断り言語行動と比べると、誘い場面においては、CC1 のほうが JJ1 より頼み手の FT 度が大きい「意志」、「本音」を好んだのに対して、依頼場面においては、JJ2 のほうが、CC2 より「意志」を多用したことがわかった。故に、場面を問わず、日本人のほうが中国人より「曖昧な表現」を多用したのに対して、中国人のほうが「直接的表現」を好んだという結論を下すことができないだろう。

次に、親・疎関係と力関係を含む社会的変数が {不可} の内容に及ぼした影響を考察する。

表 5-33 JJ2 と CC2 の親・疎関係による {不可} の各内容の使い分け

	能力／状況	緩和的結論	意志	合計
JJ2 親合計	14	12	9	35
JJ2 親割合/61	22.95%	19.67%	14.75%	57.38%
JJ2 疎合計	9	11	6	26
JJ2 疎割合/61	14.75%	18.03%	9.84%	42.62%
CC2 親合計	11	4	0	15
CC2 親割合/28	39.29%	14.29%	0	53.57%
CC2 疎合計	8	5	0	13
CC2 疎割合/28	28.57%	17.86%	0	46.43%

表 5-33 によると、JJ2 では、親の人のほうに対して、「能力・状況」が最も多く使用されたのに対して、疎の人に対して、「緩和的結論」が最も多用された。一方、CC2 では、親・疎関係を問わず、「能力・状況」が最も多く見られた。

表 5-34 JJ2 と CC2 の同・下関係による {不可} の各内容の使い分け

	能力・状況	緩和的結論	意志	合計
JJ2 同合計	14	11	4	29
JJ2 同割合/61	22.95%	18.03%	6.56%	47.54%
JJ2 下合計	9	12	11	32
JJ2 下割合/61	14.75%	19.67%	18.03%	52.46%
CC2 同合計	9	6	0	15
CC2 同割合/28	32.14%	21.43%	0	53.57%
CC2 下合計	10	3	0	13
CC2 下割合/28	35.71%	10.71%	0	46.43%



{不可}の各内容の使用数及び割合からみれば、JJ2とCC2共に、力関係による{不可}の使い分けの差が見られた。JJ2では、「意志」の同・下関係による使い分けの差が最も大きかった。即ちJJ2では下の人の方に対して、頼み手のFT度が大きい「意志」が多用された。それに対して、同の人の方に対して、頼み手のFT度が小さい「能力・状況」と「緩和的結論」が多用された結果も見られた。一方、CC2では、同・下関係を問わず、「能力・状況」が最も多用された。

上記の親・疎関係と力関係が{不可}の内容の使い分けに及ぼした影響をまとめると、JJ2では、親の人と同の人の方に対して、相手のFT度が小さい「能力・状況」が多用されたのに対して、下の人の方に対して、相手のFT度が大きい「意志」が顕著に好まれた傾向が見られた。一方、CC2では、親・疎関係も同・下関係も問わず、「能力・状況」が最も多用された。換言すれば、社会的関係によるCC2の{不可}の内容の使い分けの差があまり見られなかった。なお、JJ2で見られた相手のFT度が大きい「意志」はCC2では、親・疎関係と力関係を問わず、一つも見られなかった。

### 5.3.2 {理由}の内容分析

本節でも、誘いを断る場面と同様に、西村(2007)、池田(2009)のような具体的内容による分類を参考に、相手のフェイスを脅かす度合い(FT度)の大きさ、{理由}の曖昧さ、具体的内容、1会話ごとに2度目または2度目以上現れた理由の繋がりなどの基準に基づき、社会人を対象とする依頼に対する断り言語行動に現れた「理由」を①「自分の生活もきつい」、②「消費や投資のため」、③「他人に金銭を貸している」、④「第3者による理由」、⑤「原則のため」、⑥「情報不足の理由」、⑦「気持の表明」の7つに分類される。そのうち、④「第3者による理由」とは、断り手の家族、親友などの第3者がお金を貸したくないまたは貸せないという意味である。⑤「原則のため」とは、具体的な原則を理由として提供したという意味である。従って、①、②、③、④、⑤は「具体的な理由」に属する。つづいては、「ちょっと今お金が出せない状態です」のように、具体的な情報を提供せずに、ただ「お金がない」または「大きな額」のみを提示する{理由}を、⑥「情報不足の理由」とする。最後に、「私よくあなたのこと知らない」のような理由を⑦「気持の表明」とする。「具体的な理由」が頼み手のフェイスを脅かす度合いが最も小さい言語行為であるのに対して、最後の「気持の表明」が相手のFT度がもっとも高い言語行動だと見なす。

JJ2とCC2の依頼に対する断りにおける{理由}の内容の使い分け及びそれに対応する例を表5-35にまとめる。

表5-35 JJ2とCC2の{理由}の内容分類及び例

理由内容の上 位分類	理由内容の 下位分類	JJ2	CC2
具体的な理由	自分の生活もきつい	31(56.36%)	7(10.29%)
		本当に毎月パツパツな生活をしてるもので、主人も居ないし私一人の稼ぎだし、/”まだ子供も4人いるしさ。めっちゃめっちゃお金かかる。/私も年金暮らしでね、今ちょっとお金を慎重に使わなきゃって思ってます。/今、俺も会社リストラになってさ、金がないんだよ。	啊，你看姐夫也是，然后那个做买卖的公司也是，就是，现在经验也不是很好，反正现在经济形势也不是很好，（うちの旦那も、商売をやってる会社も、今は経済もよくないし。）
	消費や投資のため	7(12.73%)	34(50%)
		実はうちもついこの間（うん）土地と家を買うことにして、/それで貯金も下ろせない状態にしてあるんでね、	手头现钱也不多，前两天刚给子补课，交了1万。/最近我家吧，刚买了理财，然后吧全投里头了，还真拿不出来现钱，（今手元にあまり現金を持ってないし、この間息子の塾料金も1万円も払ったばかりです。/最近、うちは株など買ったばかりなので、ぜんぜん出せないです。）
	他人に金銭を貸している	0	7(10.29%)
第3者のこ	4(7.27%)	8(11.76%)	

	とによる理由	主人はね、そういうの大嫌いだから/金持ちの友達とか知り合いがないんですよね。	但是吧，有时候一问他吧，他这那的事儿贼多，我也不爱说，他总问。那谁阿，谁借的啊。/我这边儿吧，就是…不太管钱，因为我感觉我工作特别忙，我就没有精力管这些钱。然后一般都是那个我爱人，她可能是炒股，然后理财乱七八糟的。（だけど、聞いたら、けっこういろんなことがあります。私だって言いたくない。よく聞かれたからです。あの人って誰？誰に貸してあげたのか？/私って、あまりお金のこと知らない。仕事がとても忙しくて、余裕がない。うちの妻に任してるから。彼女は株とか投資などやっているかもしれない。）
	原則のため	2(3.64%)	1(1.47%)
		お前だけを特別扱いをして、何かそういう関係に持っていくっていうのはやっぱり自分はしたくないし、	然后就是借还是不借的，完事儿别人也有借的吧，不太好弄现在。（貸すかどうか、ほかの人からお金を貸してくれるように依頼されるかも。ちょっと困ります）
	具体的な理由合計	44(80%)	57(83.82%)
情報不足の理由	大金またはお金ないのみ	9(16.36%)	11(16.18%)
		うちも物入りで、ちょっと今お金が出せない状態なの/30万っていうと結構大きな額なんですよ。	我这边也着急用钱。/没有，关键是现在手里没有现钱，都干别的用了。/我现在是手里肯定没有钱了（こっちも金の急用があります。/ないです。今手元に現金を持ってないです。全部よそのことで使っちゃった。/絶対に金なくなっ）
気持の表明		2(3.64%)	0
		ちょっとあまりにも唐突だし、/でも私たち、そんなに…私よくあなたのこと知らないし、	
合計		55(100%)	68(100%)

表 5-35 から、JJ2 と CC2 両方ともに、「具体的な理由」が中心に使用されたことがわかった（JJ2- 44/80%，CC2-57/83.82%）。しかし、「具体的な理由」の使用内訳からみれば、

JJ2 で使用された「具体的な理由」は主に「自分の生活もきつい」に集中した (JJ2-56. 36%)。

#### 1 度目の断り

10B いやー、①実はわたしも年金暮らしでね、恥ずかしいんですけど、やはりわたしもなんか自転車操業状態なんですよ (あ、そう…)。それで貯金も下ろせない状態にしてあるんでね (うーん)、あの、銀行じゃなく証券会社に預けてあるんだけど (うーん)、その決済がまだ、決済っていうか期限がまだ来てないので、あと数ヶ月後だったらなんとか貸してあげられるかもしれないけど…。

#### 2 回目の断り

11A あー (申し訳ないんだけど…)、そんなには待てないや…。あ、そう…。じゃあ 30 万円とは言わないから 10 万円はどうだろう？

12B 10 万円かー。②いや実は私の残金ね実は 5000 円ぐらいしか無いんですよ。

13A あー、じゃあ私の上をいってるじゃん

14B そうなのだから、申し訳ないけど私がお借りしたいくらいなので。

15A あっ、じゃあ貸してあげる！つつって

16B ごめんなさいね、申し訳ないですね。

17A あー、わかりました。

18B 他にお借りする方いらっしゃらない？

#### 3 回目の断り

19A だって〇〇さんってさ (うん (うなずき))、素敵な洋服着て素敵な貴金属つけててね (うなずき)、私お金の心配なんてないわ～！っていうような顔してるからさ (うなずき)、それで頼んでみたんだけど。

20B ごめんね、(ごめんね) ③私だからね、なんていうんですかね、その洋服を売りたいくらいなんですけど、買ってくれる人がいないんですよ。(あそうー) で、変なところに出してもいくらも返ってこないし (うん)、だから私もね実は、本当にはっきりいって困ってるんですよ。

21A あ、そうなんだー。

22B ④だから、先生だから本当のこと言っちゃいますけど、本当に自転車操業です。

23A あ、そう…。

24B ⑤で、年金も私が誤解してて、一ヶ月に、一ヶ月ずつその普通の 20 万とか 17 万とかが来ると思ってたら、二ヶ月にその (うん)、二ヶ月に結局その振り分ければいいんですけど、二ヶ月にいつ二ヶ月分が来るんで (うん)、だから結局あれなんですよ、使っちゃうんですよ、無計画に。

25A ああ、そうかあ。

26B すいません。(JJ2F12 依頼親・同)

例のように、断り手が親・同の人からの依頼に対して、{理由} を 5 度も述べた。其の内、「貯金も下ろせない状態にしてあるんでね」を除き、他の {理由} がすべて「自分の生活でも余裕がない」という状態を説明した。

一方、CC2 で見られた {理由} の内容は主に「消費や投資のため」に集中した (CC2-50%)。

1 度目の断り

4B 哎呀，2万呢一。①我家钱大部分都买理财了，手头现钱也不多，②前两天刚给孩子补课，交了1万。我现在，  
啧，也一下子拿不出来这么多，要是2、3千的还行，2万实在是有点…。(CC2F6 依頼親・同)

訳

4B あれ、2万元か。うちはだいぶのお金はすべて投資に使っちゃった。手元に現金をあまり持ってないし、前日  
に子供の塾料金も1万元払ったばかりでした。今さ、まあ、そんな多く出せない。2、3千元なら、まだ行けるか  
な、2万元だったら、本当に無理…。

会話例のように、断り手が「投資のため」＋「子供の教育のため」ということを{理由}として使用した、この2つの理由内容は、CC2の「具体的な理由」では最も多く見られた。

上記の2つの例及び表5-34で示した使用率のように、JJ2では「自分の生活もきつい」という「具体的な理由」が好まれるのに対して、CC2では「消費や投資のため」という「具体的な理由」が多用されたことがわかった。JJ2とCC2の被験者の階級が異なるためであろうと考える。JJ2の被験者は主婦、自営者、フリーター、年金生活者が中心になっているのに対して、CC2の被験者は国営企業に就職している会社員を中心になっているので、双方の生活スタイルが異なったため、2つのグループの間に、金銭の貸し出しを断る具体的な理由も異なった。

また、CC2で見られた「具体的な理由」に属する「他人に借金をする」(7/10.29%)が、JJ2では1つも見られなかった。なお、JJ2で見られた「本音」(2/3.64%)がほんのわずかであったが、CC2では1つも見られなかったという興味深い結果になった。

1 回目の断り

5A どうにかなんないかな??

6B そうねー、誰か他の人に相談したら?(うーん)ちょっと私は相談相手にはならないんじゃない?誰か他の人を当たってみて…。

2 回目の断り

7A 相談したんだけど、他に頼める人もいないから、なんとかしてもらえないかしら??

8B ーん。でも私たち、そんなに…私よくあなたのこと知らないし(うん)、ちょっと誰か他の人に相談してみて?ごめんね。(JJ2F13 依頼疎・下)

JJ2F13の断り手が2回目に依頼された際に、「気持の表明」としての{理由}を使用した  
が、このような「気持の表明」はCC2では、親・疎の如何に関わらず、用いられない表現  
だと思われる。CC2を対象とするフォローアップ・インタビューでは、借金の依頼を断  
る場面においては、親しい人はもちろん、親しくない人に対しても「本音」の理由を表出  
すれば、相手も自分のフェイスも潰されちゃったという答えも得られた。

さらに、親・疎関係と力関係が {理由} の内容の使い分けに及ぼした影響をまとめる。

表 5-36 JJ2 と CC2 の親・疎関係による {理由} の各内容の使い分け

	具体的な理由					具体的 な理由 合計	情報不足 の理由 大金またはお金のみのみ	本音	合計
	自分の生活もきつい	消費や投資のため	他人に金を貸している	原則のため	第三者の理由				
JJ2 親合計	19	4	0	2	3	28	5	0	33
JJ2 親割合/55	34.55%	7.27%	0	3.64%	5.45%	50.91%	9.09%	0	60%
JJ2 疎合計	12	3	0	0	1	16	4	2	22
JJ2 疎割合/55	21.82%	5.45%	0	0	1.82%	29.01%	7.27%	3.64%	40%
CC2 親合計	4	18	6	1	6	35	6	0	41
CC2 親割合/68	5.88%	26.47%	8.82%	1.47%	8.82%	51.47%	8.82%	0	60.29%
CC2 疎合計	3	16	1	0	2	22	5	0	27
CC2 疎割合/68	4.41%	23.53%	1.47%	0	2.94%	32.35%	7.35%	0	39.71%

表 5-36 から、まず、JJ2 と CC2 双方ともに、親しくない人より、親しい人のほうに対して「具体的な理由」を多用したことがわかった。とりわけ、JJ2 の親・疎関係による「具体的な理由」の割合の差が最も大きかった（JJ2 親 50.91%、:疎:29.01%）。次に、JJ2 では親しい人からの依頼を断る際に、「自分の生活もきつい」を「具体的な理由」として多用された。ほかの {理由} の内容は、親・疎を問わず、ほぼ同じであった。ただし、「本音」が親しくない人に対する断りで見られたが、親しい人では1つも見られなかったことが目にとまった。一方、CC2 では親しくない人より、親しい人のほうに対して、「他人に借金をする」と「第3者による理由」をやや多く使用した。ほかの {理由} の内容は、親・疎を問わず、ほぼ同じであった。

表 5-37 JJ2 と CC2 の同・下関係による {理由} の各内容の使い分け

	具体的な理由					具体的 な理由 合計	情報不足の理由	気持の表明	合計
	自分の生活もきつい	消費や投資のため	他人に金を貸している	原則のため	第三者の理由				
JJ2 同合計	23	5	0	0	3	31	5	1	37

JJ2 同割合/55	41.82%	9.09%	0	0	5.45%	51.36%	9.09%	1.82%	67.27%
JJ2 下合計	8	2	0	2	1	13	4	1	18
JJ2 下割合/55	14.55%	3.64%	0	3.64%	1.82%	23.64%	7.27%	1.82%	32.73%
CC2 同合計	7	20	2	0	6	35	4	0	39
CC2 同割合/68	10.29%	29.41%	2.94%	0	8.82%	51.47%	5.88%	0	57.35%
CC2 下合計	0	14	5	1	2	22	7	0	29
CC2 下割合/68	0	20.59%	7.35%	1.47%	2.94%	32.35%	10.29%	0	42.65%

表 5-37 によると、JJ2 と CC2 双方共に、下の人より同の人のほうに対して、「具体的な理由」が多く見られた。とりわけ、同・下関係による JJ2 の「具体的な理由」の割合の差が最も大きかった（同-51.36%, 下-23.64%）。「具体的な理由」の下位分類をみれば、JJ2 では、同・下関係による「自分の生活もきつい」の割合の差も際立っていた（同-41.82%, 下-14.55%）。即ち、下の人より同の人のほうに対して、「自分の生活もきつい」が相当に多用された。なお、JJ2 では下の人に対して、使用された「原則のため」は同の人に対しては、1 つも見られなかった。一方、CC2 では、同の人より上の人に対して、「自分の生活もきつい」、「消費や投資のため」、「第3者による理由」も多く見られたが、その同・下関係による差は、JJ2 ほど際立っていなかった。

最後に、{理由} を相手のフェイスを脅かす度合いの大きさによって、「具体的な理由」、「情報不足の理由」、「気持の表明」の3つのカテゴリーに分けて、{理由} のカテゴリーの展開パターンから、日中対照を行う。JJ2 と CC2 の {理由} の内容カテゴリーの展開を表 5-38 にまとめる<sup>31</sup>。

表 5-38 JJ2 と CC2 の {理由} の内容カテゴリーの分類による展開パターン

理由の展開パターン	JJ2 場面数 (割合%)	CC2 場面数 (割合%)
具体的な理由のみ	18 (66.67%)	28 (80%)
情報不足の理由のみ	6 (22.22%)	6 (17.14%)
気持の表明のみ	2 (7.41%)	0
具体的な理由 + 情報不足の理由	1 (3.70%)	1 (2.86%)
具体的な理由 + 気持の表明	0	0
情報不足の理由 + 気持の表明	0	0
具体的な理由 + 情報不足の理由 + 気持の表明	0	0
合計	27 (100%)	35 (100%)

JJ2 では {理由} を述べた場面は 27 場面であったのに対して、CC2 では理由を表出した場面は 35 場面であった。そのうち、JJ2 と CC2 共に「具体的な理由のみ」のパターンが中

心に使用されたが、使用回数及び割合をみれば、JJ2 より CC2 のほうでは「具体的な理由のみ」の展開パターンが多かった。つづいては、JJ2 と CC2 共に「情報不足の理由のみ」が 2 番目に多用されたが、CC2 より JJ2 のほうでは、「情報不足の理由のみ」の使用率がやや多かった。

### 5.3.3 {あいづち} の表現形式の分析

5.2 で述べたように、各意味公式の使用回数及び割合からすると、誘いに対する断り場面と同様に、JJ2 では {あいづち} が最も頻繁に使用された。一方、CC2 では {あいづち} がそれほど多く使用されなかったが、CC2 では、4 番目に多く使用された意味公式であった。従って、本節では、JJ2 と CC2 の {あいづち} の表現形式を考察していく。

本調査の JJ2 で見られた {あいづち} の表現形式は、「うん／うんうん／うーん」、「ええ／ええええ」、「はい／はあ」、「あー」、「あらあらあら／あらららら」、「えー」、「なるほど」、「ねえ」、「そう／そうなの」、「そうですね／そうなんですか／そうねー」、「そうですか／そうっかー／あ、そうなんですか」、「繰り返し」がある。一方、CC2 で見られた {あいづち} の表現形式は、「啊」（はい）、「嗯」（うん）、「哦／哦哦」（うん）、「是是 / 是啊」（そう）、「对 / 对对 / 对啊」（そうそう）、「繰り返し」がある。

誘いに対する断り場面と同様に、本節でもメイナード(1993)と堀口(1997)の分類を参考に、本調査のデータに現れたあいづちの機能を①「聞いている」、②「同意・支持」、③「感情の表出」④「了解」、⑤「考え中」の 5 つに分類する。ところが、下記の会話例のように、同じ「あいづち」表現でも、会話のコンテクスト、口調、イントネーションなどによって、異なる機能が現れたこともある。

#### 1 度目の断り

2B 30 万、大変な金額だから、あの一、主人とも相談しないとわからないけども、ちょっと今の状況だと難しいわ。

3A あの、ご主人持ってないかな？

4B 主人はね、そういうの大嫌いだから

5A あー、じゃあ言ったら怒られちゃうかー。

6B ①そうねー（うなずき）

#### 2 度目の断り

7A あー、じゃあね、あの、30 万ってのはとっても無理だろうから、1 ヶ月分の 10 万はどうだろう？

8B 10 万？ 10 万…、ごめんね うちも物入りで、ちょっと今お金が出せない状態なの申し訳ないんだけど…（うなずき）。

#### 3 回目の断り



9A 誰か貸してくれそうな人を紹介してもらおうのはどうだろう？

10B ②そうねえ、じゃあちょっと探してみるわね。(JJ2F9 親・同)

例のように、1回目の断りにおいて、断り手は、頼み手が発した「あー、じゃあ言ったら（主人に）怒られちゃうかー。」に対して、「そうねー」の{あいづち}で相手に同意するという機能が見られた。それに対して、3回目の断りの最後において、「そうねえ」という{あいづち}は2度目使用されたが、コンテキストによって、頼み手の「誰か貸してくれそうな人を紹介してもらおうのはどうだろう？」の頼みにたいして、「ちょっと考えている」という機能があった。従って、JJ2AF3-9 親・同の例では、「そうね」という{あいづち}が2回使用されたが、前者を「同意・支持」の機能に分類したが、後者を「考え中」の機能に分類した。

上記の機能判断の基準に基づき、JJ2の{あいづち}の機能を表5-39にまとめる。

表 5-39 JJ2の{あいづち}の機能分類

あいづちの機能	あいづちの表現形式	回数	割合%
聞いている	うん／うんうん／うーん	54	52.94
	ええ／ええええ	9	8.82
	はい／はあ	10	9.80
	あー	1	0.98
	聞いている合計	74	72.55
同意・支持	うん／うんうん／うーん	1	0.98
	ええ／ええええ	0	0
	はい／はあ	1	0.98
	なるほど	1	0.98
	ねえ	1	0.98
	そう／そうなの	2	1.96
	そうですね／そうなんです／そうねー	1	0.98
	同意・支持合計	7	6.86
感情の表出	あー	1	0.98
	あらあらあら／あらららら	2	1.96
	えー	3	2.94
	繰り返し	2	1.96
	感情の表出合計	8	7.84

了解	そうですか/そっかー/ あ、そうなんですか	4	3.92
	あー	4	3.92
	そうですね/そうなんですか/そうねー	3	2.94
	了解合計	11	10.78
考え中	そうですね/そうなんですか/そうねー	2	1.96
合計		102	100

CC2 の {あいづち} の機能の詳細を表 5-40 に示す。

表 5-40 CC2 の {あいづち} の機能分類

あいづちの機能	表現形式	回数	割合%
聞いている	啊 (はい)	3	11.54
	嗯 (うん)	12	46.15
	哦 / 哦哦 (うん)	1	3.85
	繰り返し	2	7.69
	聞いている合計	18	69.23
同意・支持	是是 / 是啊 (そう)	2	7.69
	对 / 对对 / 对啊 (そうそう)	3	11.54
	同意・支持合計	5	19.23
了解	啊 (はい)	1	3.85
	哦 / 哦哦 (うん)	2	7.69
	了解合計	3	11.54
合計		26	100

また、JJ2 と CC2 の {あいづち} の機能の使い分け及び割合を表 5-41 にまとめる。

表 5-41 JJ2 と CC2 の {あいづち} の機能の使い分け

あいづちの機能	JJ2 (回数)	JJ2 (割合%)	CC2 (回数)	CC2 (割合%)
聞いている	74	72.55	18	69.23
同意・支持	7	6.86	5	19.23
感情の表出	8	7.84	0	0
了解	11	10.78	3	11.54
考え中	2	1.96	0	0
合計	102	100	26	100

表 5-41 を見ると、JJ2 と CC2 双方共に、「聞いている」（JJ2-72.55%, CC2-69.23%）という機能を果たしている {あいづち} が最も多く使用された共通点が見られた。一方、CC2 で2番目に多く使用された「同意・支持」の使用率は、JJ2 より多かった。なお、JJ2 で見られた「感情の表出」と「考え中」の機能は、CC2 では1つもなかった。さらに、{あいづち} の各表現形式の割合から見ると、JJ2 では、「聞いている」という機能を表す「うん／うんうん／うーん」の表現が最も多く使用された。それに対して、CC2 では、「聞いている」という機能を表す「嗯（うん）」の表現が最も多く用いられた。この結果によると、日本語のあいづち表現である「うん」と中国語の「嗯」（うん）はほぼ等価であると言えるだろう。また、JJ2 では、「聞いている」という機能を表す「うん／うんうん／うーん」の表現形式につづき、「ええ／ええええ」、「はい／はあ」の表現形式の割合も少なくなかった。

次に、親・疎関係と力関係が JJ2 と CC2 の {あいづち} の使い分けに与えた影響を考察する。

表 5-42 JJ2 の親・疎関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	親(回数)	親割合 /102	疎(回数)	疎割合 /102
聞いている	うん／うんうん／うーん	32	31.37%	22	21.57%
	ええ／ええええ	3	2.94%	6	5.88%
	はい／はあ	1	0.98%	9	8.82%
	あー	0	0	1	0.98%
	聞いている合計	36	35.29%	38	37.25%
同意・支持	うん／うんうん／うーん	0	0	1	0.98%
	ええ／ええええ	0	0	0	0
	はい／はあ	0	0	1	0.98%
	なるほど	1	0.98%	0	0
	ねえ	1	0.98%	0	0
	そう／そうなの	2	1.96%	0	0
	そうですね/そうなんです/そうねー	1	0.98%	0	0
	同意・支持合計	5	4.90%	2	1.96%
感情の表出	あー	1	0.98%	0	0
	あらあらあら／あらららら	1	0.98%	1	0.98%
	えー	2	1.96%	1	0.98%
	繰り返し	2	1.96%	0	0

	感情の表出合計	6	5.88%	2	1.96%
了解	そうですか／そっかー／ あ、そうなん ですか	0	0	4	3.92%
	あー	0	0	4	3.92%
	そうですね/そうなんですね/そうねー	0	0	3	2.94%
	了解合計	0	0	11	10.78%
考え中	そうですね/そうなんですね/そうねー	1	0.98%	1	0.98%
合計		48	47.06%	54	52.94%

JJ2 では、「聞いている」の機能を表す {あいづち} が中心に使用されたので、親・疎関係が JJ2 の {あいづち} の使い分けに及ぼした影響も主に「聞いている」の機能に集中した。そのうち、「うん／うんうん／うーん」の親・疎による使い分けの差が最も目立っている（親-31.37%, 疎-21.57%）。即ち、疎の人より親の人のほうに対して、「うん／うんうん／うーん」が好まれた傾向が JJ2 で見られた。つづいて、「はい／はあ」の使い分けに関しても、親・疎による差がそれほど目立っていなかったにも関わらず、疎の人のほうに対して、「はい／はあ」がより多く使用される傾向も伺われた。

CC2 の親・疎による {あいづち} の使い分けは表 5-43 の通りである。

表 5-43 CC2 の親・疎関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	親（回数）	親割合/26	疎（回数）	疎割合/26
聞いている	啊（はい）	1	3.85%	2	7.69%
	嗯（うん）	6	23.08%	6	23.08%
	哦 / 哦哦（うん）	0	0	1	3.85%
	繰り返す	2	7.69%	0	0
	聞いている合計	9	34.62%	9	34.62%
同意・支持	是是 / 是啊（そう）	1	3.85%	1	3.85%
	对 / 对对 / 对啊（そうそう）	1	3.85%	2	7.69%
	同意・支持合計	2	7.69%	3	11.54%
了解	啊（はい）	0	0	1	3.85%
	哦 / 哦哦（うん）	1	3.85%	1	3.85%
	了解合計	1	3.85%	2	7.69%
合計		12	46.15%	14	53.85%

表 5-43 のように、CC2 で見られた {あいづち} が少なかったため、各 {あいづち} の表

現形式の回数と割合からみれば、親・疎関係が {あいづち} の表現形式には影響をほとんど及ぼさないという結果になった。

なお、JJ2 の同・下による {あいづち} の使い分けを表 5-44 にまとめる。

表 5-44 JJ2 の同・下関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	同(回数)	同割合 /102	下(回数)	下割合 /102
聞いている	うん／うんうん／うーん	24	23.53%	30	29.41%
	ええ／ええええ	3	2.94%	6	5.88%
	はい／はあ	5	4.90%	5	4.90%
	あー	1	0.98%	0	0
	聞いている合計	33	32.35%	41	40.20%
同意・支持	うん／うんうん／うーん	0	0	1	0.98%
	ええ／ええええ	0	0	0	0
	はい／はあ	1	0.98%	0	0
	なるほど	0	0	1	0.98%
	ねえ	0	0	1	0.98%
	そう／そうなの	1	0.98%	1	0.98%
	そうですね/そうなんですね/そうねー	1	0.98%	0	0
	同意・支持合計	3	2.94%	4	3.92%
感情の表出	あー	1	0.98%	0	0
	あらあらあら／あららららら	0	0	2	1.96%
	えー	1	0.98%	2	1.96%
	繰り返す	2	1.96%	0	0
	感情の表出合計	4	3.92%	4	3.92%
了解	そうですか/そっかー/ あ、そうなんですか	2	1.96%	2	1.96%
	あー	3	2.94%	1	0.98%
	そうですね/そうなんですね/そうねー	2	1.96%	1	0.98%
	了解合計	7	6.86%	4	3.92%
考え中	そうですね/そうなんですね/そうねー	2	1.96%	0	0
合計		49	48.04%	53	51.96%

表 5-44 をみると、JJ2 では同の人より下の人のほうに対して、「聞いている」機能を果たす「うん／うんうん／うーん」がやや多用されたことがわかった(親-23.53%, 疎-29.41%)。

ほかの {あいづち} の内容には JJ2 の力関係がほとんど影響を与えなかった。

CC2 の力関係が {あいづち} の表現形式の使い分けに与えた影響を表 5-45 に示す。

表 5-45 CC2 の同・下関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	同 (回数)	同割合/26	下 (回数)	下割合/26
聞いている	啊 (はい)	2	7.69%	1	3.85%
	嗯 (うん)	6	23.08%	6	23.08%
	哦 / 哦哦 (うん)	1	3.85%	0	0
	繰り返し	0	0	2	7.69%
	聞いている合計	9	34.62%	9	34.62%
同意・支持	是是 / 是啊 (そう)	1	3.85%	1	3.85%
	对 / 对对 / 对啊 (そう そう)	2	7.69%	1	3.85%
	同意・支持合計	3	11.54%	2	7.69%
了解	啊 (はい)	0	0	1	3.85%
	哦 / 哦哦 (うん)	0	0	2	7.69%
	了解合計	0	0	3	11.54%
合計		12	46.15%	14	53.85%

表 5-45 に示したように、CC2 で見られた {あいづち} は数が少なかったため、力関係が CC2 の {あいづち} の使い分けに及ぼした影響はほとんど見られなかった。

親・疎関係と力関係が JJ2 と CC2 の {あいづち} の表現形式の使い分けに与えた影響をまとめると、JJ2 では、親・疎関係も同・下関係も問わず、「聞いている」を表す「うん / うんうん / うーん」の差が見られた。とりわけ、親・疎によるその差が大きかった。一方、CC2 では親・疎関係も力関係も問わず、{あいづち} が少なく用いられたので、社会的関係による {あいづち} の差は見られなかった。

### 5.3.4 {詫び} の表現形式の分析

5.2.によると、JJ2 では {詫び} が 2 番目に多用されたのに対して、CC2 では {詫び} の使用回数が 17 回しかなかった。従って、本節では、JJ2 と CC2 の {詫び} の各表現形式の使用回数と、親・疎と力関係を含む社会的変数が JJ2 の {詫び} の使い分けに与えた影響を考察するが、CC2 の社会的関係による {詫び} の表現形式の使い分けが考察できない。

まず、JJ2 の {詫び} には「申し訳ありません」、「申し訳ないです」、「すみません」、「すいません」、「ごめんなさい」、「ごめん」の表現形式がある。JJ2 の {詫び} の各表現形式の使用数及び割合を表 5-46 に示す。

表 5-46 JJ2 の {詫び} の表現形式の分類

	申し訳ありません	申し訳ないです	すみません	すいません	ごめんなさい	ごめん	合計
JJ1 合計	2	22	6	6	7	24	67
JJ1 割合%	2.99	32.84	8.96	8.96	10.45	35.82	100

表 5-46 に示したように、JJ2 では「ごめん」の使用数及び割合が最も多かった。つづいて、「申し訳ないです」の使用回数が 2 番目多かった。そして、「ごめん」の使用率との差がごく小さかった。「ごめんなさい」、「すみません」、「すいません」の使用数及び割合がほぼ同じであり、数が多くなかった。最も少なく見られた {詫び} の表現形式は「申し訳ありません」であった。

次に、JJ2 の親・疎関係と同・下関係による {詫び} 表現形式の使い分けの差を表 5-47 に示す。

表 5-47 JJ2 の社会的関係による {詫び} の表現形式の使い分け

	申し訳ありません	申し訳ないです	すみません	すいません	ごめんなさい	ごめん	合計
JJ2 親合計	0	11	3	3	3	16	36
JJ2 親割合/67	0	16.42%	4.48%	4.48%	4.48%	23.88%	53.73%
JJ2 疎合計	2	11	3	3	4	8	31
JJ2 疎割合/67	2.99%	16.42%	4.48%	4.48%	5.97%	11.94%	46.27%
JJ2 同合計	1	20	5	5	6	10	47
JJ2 同割合/67	1.49%	29.85%	7.46%	7.46%	8.96%	14.93%	70.15%
JJ2 下合計	1	2	1	1	1	14	20
JJ2 下割合/67	1.49%	2.99%	1.49%	1.49%	1.49%	20.90%	29.85%

JJ2 の {詫び} の表現形式では、下の人を除き、親、疎、同の人に対して、「申し訳ないです」と「ごめん」のいずれも顕著に多用された。一方、下の人に対しては、「申し訳ないです」が 2 回しか見られなかったが、「ごめん」が 14 回も使用された。なお、JJ2 では下の人より同の人のほうに対して、「申し訳ないです」が相当に多く見られた（同-29.85%、下-2.99%）ため、同の人のほうに対して、{詫び} が全体的に多く使用された。

親・疎関係と力関係が JJ2 の {詫び} の表現形式に及ぼした影響をまとめると、親・疎

関係が JJ2 の {詫び} の表現形式に影響を与えたが、それほど大きくなかった。一方、力関係が JJ2 の {詫び} の表現形式に及ぼした影響は比較的顕著であった。

次に、CC2 の {詫び} を「抱歉」(baoqian 申し訳ありません)、「对不起」(duibuqi すみません)、「不好意思」(buhayisi ごめんなさい) の 3 つの表現形式に分けた。その表現形式の使い分けを表 5-48 にまとめる。

表 5-48 CC2 の {詫び} の表現形式の分類

	抱歉 (申し訳ありません)	对不起 (すみません)	不好意思 (ごめんなさい)	合計
CC2 合計	3	5	9	17
CC2 割合%	17.65	29.41	52.94	100

CC2 の {詫び} では、「不好意思」(buhayisi ごめんなさい) の使用数及び割合が最も多かった。「对不起」(duibuqi すみません) の使用率が 2 番目に多かった。「抱歉」(baoqian 申し訳ありません) の使用率が最も少なかった。前述したように、CC2 の {詫び} の使用回数がそもそも少なかったため、親・疎関係と力関係が CC2 の {詫び} の使い分けに与えた影響を考察することができないので、親・疎関係と力関係による CC2 の {詫び} の表現形式の使い分けを考察しない。

また、同じ場面において、{詫び} の連続使用回数のパターンも考察する。下記の表 5-49 は 1 つの場面における JJ2 と CC2 の {詫び} の使用回数による場面数及び割合である。

表 5-49 JJ2 と CC2 の 1 つの場面における {詫び} の使用回数による場面数及び割合

詫びの使用回数	JJ2 合計	JJ2 割合%	CC2 合計	CC2 割合%
詫び 8 回	1	2.5	0	0
詫び 6 回	1	2.5	0	0
詫び 5 回	1	2.5	0	0
詫び 4 回	1	2.5	0	0
詫び 3 回	5	12.5	1	2.5
詫び 2 回	8	20	2	5
詫び 1 回	13	32.5	10	25
詫びなし	10	25	27	67.5
合計	40	100	40	100

表 5-49 によれば、JJ2 では、1 つの場面において、「詫びの 1 回使用」が最も多く使用されたのに対して、CC2 では、場面ごとに「詫びなし」が最も多用されたことがわかった。なお、「詫びなし」の展開パターンに関しては、JJ2 と CC2 両者間の差が最も大きかった



(JJ2-25%, CC2-67.5%)。即ち、JJ2 より CC2 のほうでは、「詫びなし」が相当に多用された。その他の {詫び} の使用パターンは、いずれも CC2 より JJ2 のほうで多く用いられた。ただし、「詫びの1回使用」に関しては、JJ2 と CC2 両者間の差が小さかった。

### 5.3.5 本節のまとめ

本節においては、JJ2 と CC2 ともに多く見られた意味公式である {不可}、{理由} の内容分析、{あいづち} と {詫び} の表現形式の分析を行ってきた。

まず、JJ2 では「能力・状況」と「緩和的結論」が共に多く使用されたのに続き、頼み手の FT 度がより大きい「意志」の使用率も少なくなかった。一方、CC2 で見られた {不可} の内容は、「能力・状況」と「緩和的結論」の2つのみに集中した。換言すれば、JJ2 で見られた「意志」が CC2 では1つも見られなかった。また、社会的関係が {不可} の内容に与えた影響を見ると、JJ2 では「能力・状況」、「意志」の使い分けにおいては、社会的関係が及ぼした影響が見られたが、CC2 では社会的関係を問わず、{不可} の内容は主に「能力・状況」のみに集中した。

次に、JJ2 と CC2 両方ともに、「具体的な理由」が中心に使用された。しかし、「具体的な理由」の下位分類を見ると、JJ2 で使用された「具体的な理由」は主に「自分の生活もきつい」に集中したのに対して、CC2 では主に「消費や投資のため」に集中した。社会的関係が {理由} の内容の使い分けに与えた影響をみると、両方ともに、親の人または同の人のほうに対して「具体的な理由」を多用したことがわかった。とりわけ、JJ2 の親・疎関係と同・下関係による「具体的な理由」の割合の差が顕著に見られた。なお、双方共に「具体的な理由のみ」のパターンが中心に使用されたのにつづき、「情報不足の理由」が2番目に多用された。しかし、使用回数及び割合をみれば、CC2 のほうでは「具体的な理由のみ」の展開パターンが多かったのに対して、JJ2 のほうでは、「情報不足の理由のみ」の使用率がやや多かった。

なお、{あいづち} の表現形式の分析によると、双方共に「聞いている」という機能を果たしている {あいづち} が最も多く使用された共通点が挙げられた。さらに、{あいづち} の各表現形式の割合から見ると、JJ2 では、「聞いている」という機能を表す「うん／うんうん／うーん」の表現が最も多く使用されたのに対して、CC2 では、「聞いている」という機能を表す「嗯（うん）」の表現が最も多く用いられた。社会的関係が {あいづち} に与えた影響を見ると、JJ2 では、親の人と下の人のほうに対して、「聞いている」を表す「うん／うんうん／うーん」が顕著に多く見られた。とりわけ、親・疎によるその差が大きかった。一方、CC2 では社会的関係による {あいづち} の差が見られなかった。

JJ2 と CC2 の {詫び} の表現形式による分析も対照した。JJ2 では「申し訳ないです」と「ごめん」のいずれの使用数が多かったのに対して、CC2 では、「不好意思」(buhaoyisi

ごめんなさい)の使用数が最も多かった。さらに、同・下関係が JJ2 の「申し訳ないです」に及ぼした影響が顕著に見られたという結果は、崔 (2002) など論文に見られる力関係が {詫び} の使い分けに影響を与えた結論と一致した。また、{詫び} の展開パターンに関しては、JJ2 では、1つの場面において、「詫びの1回使用」が最も多く使用されたのに対して、CC2 では、場面ごとに「詫びなし」が最も多用されたという相違点がわかった。

## 5.4 本章のまとめ

社会人の誘いに対する断り言語行動と同様に、JJ2 と CC2 を対象とする依頼に対する断り言語行動においても、依頼話段、依頼・断り話段、終了部から成っている会話の構造が抽出された。そして、依頼・断り話段の中で、頼み手の仕掛け方や断り手の断り方によって、「1回目の断りで収束」のみでなく、「2回目または2回目以上の断りで収束」のパターンも見られた。

まず、依頼話段においては、いきなり「直接的断り」と「間接的断り」で相手を断らずに、頼み手の会話に協力したりしたという役割を果たしている {あいづち} と、相手のことに関心を見せたりしたという機能を表す {情報確認・要求} などを含む「付随表現」で、会話を進めたという会話のスタイルが観察された。つまり、依頼に対する断り言語行動においても、{あいづち}、{情報確認・要求} などを含む「付随表現」の重要性が再び検証された。次に、依頼・断り話段においては、{理由}、{不可}、{代案}、{ためらい} などの意味公式が豊かに用いられた。そして、断り会話の回数によって、{理由}、{不可} などが何度も使用された場合もあった。最後の終了部で見られた {詫び} などは、本調査では会話を終わらせようとするマークという働きも、相手との関係が維持できる働きもあると考える。従って、本調査では、DCT のかわりに、社会人を対象とするロールプレーを用いて、依頼に対する断り言語行動のダイナミックなプロセスが観察された。さらに話段ごとに意味公式のカテゴリー及び各意味公式の使用数と、意味公式のカテゴリー及び各意味公式の展開パターンの分析に基づき、JJ2 と CC2 の依頼に対する断り言語行動の構造がほぼ同じであったという結果になった。

一方、JJ2 ではどの話段においても、{あいづち}、{驚き}、{困惑} などを含む「付随表現」が多く見られた特徴がわかった。また、JJ2 のほうでは {不可}、{詫び}、{代案}、{願望}、{原則的陳述} などが多用されたのに対して、CC2 のほうでは {理由}、{条件提示}、{呼びかけ} が多く用いられたという相違点もわかった。

誘いに対する断り言語行動とは逆に、中国人より日本人のほうでは、頼み手のフェイスを脅かす度合い (FT 度) が大きい {不可} と、中国人にとって相手との関係を潰しやすいと思われる {原則的陳述} が多く見られた。従って、場面によって、日本人は中国人より「直接的」であったのは、本章で検証された。それに対して、社会人を対象とする勧誘に

対する断り言語行動においては、中国人は日本人より「直接的」であったことも第4章で検証された。

依頼に対する断り言語行動においては、JJ2とCC2で見られた「詫び」の展開パターンは、共に尾高型であった。つまり、本調査では、JJ2とCC2ともに、終了部における「詫び」の使用数が最も多かった。この結果は、先行研究でよく見られた「詫び先行型」の結果と一致していなかったが、その原因は以下の2つあると考える。一つ目は断り手が依頼話段と依頼・断り話段で「詫び」を1度も使用せず、最後の終了部のみで「詫び」を使用したからかもしれない。二つ目は断り手が真ん中の依頼・断り話段で「詫び」を用いたが、終了部で「詫び」の使用数がより多かったからかもしれないと分析する。いずれの原因分析においても、最初の依頼話段で「付随表現」を用いて相手の発話に協力する会話のスタイルが多かったため、DCT調査による「詫び先行型」は、ロールプレイ調査においては、検証されなかった。

意味公式の量的分析によると、JJ2とCC2双方共に、「あいづち」、「理由」、「詫び」、「不可」、「代案」、という5つの意味公式を多用したという共通点もわかった。一方、JJ2のほうがCC2より「不可」、「詫び」、「あいづち」、「ためらい」を多用したのに対して、CC2のほうがJJ2より「理由」、「情報確認・要求」、「条件提示」を好んだ傾向が見られた。さらに、人による意味公式の使用平均値の有意差に関する考察では、上記の意味公式の中で、JJ2のほうがCC2より「詫び」、「あいづち」、「ためらい」を有意に多用したのは、検証された。なお、CC2よりJJ2のほうでは「驚き」、「原則的陳述」が有意に多く見られたこともわかった。社会的関係がJJ2とCC2の意味公式の使用平均値に与えた影響を見ると、同・下関係がJJ2の「理由」、「詫び」、「相手を思い止まらせる試み」、「情報確認・要求」の使用平均値に及ぼした影響が見られた。即ち、JJ2では同の人のほうに対して、「理由」、「詫び」が有意に多く使用されたのに対して、下の人のほうに対して、「相手を思い止まらせる試み」、「情報確認・要求」が有意に多く見られた。一方、CC2では社会的関係による意味公式の有意差が見られたが、JJ2ほど顕著でなかった。

「不可」の内容からすれば、JJ2では「能力・状況」と「緩和的結論」が共に多く使用されたのに続き、頼み手のFT度がより大きい「意志」の使用率も少なくなかった。一方、CC2で見られた「不可」の内容は、ただ「能力・状況」と「緩和的結論」の2つのみに集中した。即ち、JJ2で見られた「意志」がCC2では1つも見られなかった。また、力関係によるJJ2の「不可」の内容の使い分けの差が見られた。即ち、JJ2では同の人のほうに対して、「能力・状況」が多用されたのに対して、下の人のほうに対して、「意志」が多く見られた。それに対して、CC2では親・疎関係も同・下関係も問わず、「能力・状況」が最も多用された。即ち、社会的関係がCC2の「不可」の内容の使い分けに与えた影響が観察されなかった。

「理由」の内容分析によると、JJ2とCC2双方ともに、「具体的な理由」が中心に使用された。ただし、2グループの生活のスタイルなどによって、「具体的な理由」の内容が異な

った。社会的関係が{理由}の内容に与えた影響をみると、両方ともに、親の人または同  
の人のほうに対して「具体的な理由」を多用したことがわかった。とりわけ、JJ2の親・  
疎関係と同・下関係による「具体的な理由」の割合の差が顕著に見られた。なお、{理由}  
の内容カテゴリーの展開パターンを見ると、JJ2とCC2ともに「具体的な理由のみ」が最  
も多かった一方、CC2のほうでは「具体的な理由のみ」の使用率が多かったのに対して、  
JJ2のほうでは、「情報不足の理由のみ」の使用率がやや多かった。

{あいづち}の表現形式の分析によると、双方共に「聞いている」という機能を果たし  
ている{あいづち}が最も多用された。そのうち、JJ2では「うん／うんうん／うーん」  
の表現が最も多く使用されたのに対して、CC2では「嗯（うん）」の表現が最も多く用い  
られた。社会的関係が{あいづち}に与えた影響を見ると、JJ2では、疎より親の人に対  
して、「聞いている」という機能を果たしている「うん／うんうん／うーん」が顕著に多  
く見られたが、CC2では社会的関係が{あいづち}の表現形式に与えた影響が見られな  
かった。

{詫び}の表現形式の分析を見ると、JJ2では「申し訳ないです」と「ごめん」のい  
ずれの使用数が多かったのに対して、CC2では、「不好意思」（buhaoyisi ごめんなさい）  
の使用数が最も多かった。なお、力関係による「申し訳ないです」の使い分けが見られた。  
また、{詫び}の各表現形式の展開パターンをまとめた結果、JJ2では「詫びの1回使用」  
が最も多く使用されたのに対して、CC2では「詫びなし」が最も多用された。

## 第6章 調査3——学生対象の勧誘に対する

### 断り言語行動

本章では、調査3——日中の母語話者である学生を対象に、勧誘に対する断り言語行動に関する調査の結果を述べる。本章は、会話の構造による分析、意味公式の量的分析、意味公式の内容分析及び表現形式の分析から構成されている。

#### 6.1 勧誘を断る言語行動の会話構造

学生の断り言語行動は大人より意味公式の使用数も種類も少なかったですが、大人の断り言語行動と同様に、「開始部」、「断り行動の談話」、「終了部」という3つの談話からなっていることが観察された。さらに、「断り行動の談話」は「勧誘話段」と、「1回目の断り」、「2回目の断り」、「3回目の断り」などを含む「勧誘・断り話段」（各談話及び話段の説明は4.1を参照）、終了部からなっている。従って、本節においても、学生を対象とする勧誘に対する断り言語行動の全体的構造を考察することもできる。なお、本節でも、「断り行動の談話」（「勧誘の話段」と「勧誘・断り話段」からなる）と、「終了部」に焦点を当て考察していく。

##### 6.1.1 話段ごとの断り言語行動の日中対照

4.1.1と同様に、会話の構造に基づき、社会人を対象とする断り会話を「勧誘話段」、「勧誘・断り話段」、「終了部」の3つに分かれた。本節において、各話段の意味公式の使用数及び平均値の日中対照を行う。

###### 6.1.1.1 勧誘話段

社会人を対象とする勧誘を断る場面と同様に、学生の断り手も「勧誘話段」においては、{あいづち}、{情報確認・要求}などの「付随表現」で、誘い手の勧誘発話に参加して、会話を進める特徴が観察された。しかし、社会人に比べると、学生の断り手が「勧誘話段」において、言語表現を発した発話の数がそれほど多くなかった。

### 6.1.1.1.1 勧誘話段の開始から1回目の断りに至るまでの言語表現の有無

まず、勧誘話段の開始から1回目の断りに至るまでの言語行動の有無について、考察する。

表 6-1 JJ3 と CC3 の勧誘話段における断り手の言語表現の有無

	1 回目の断りに至るまでの言語表現あり	1 回目の断りに至るまでの言語表現なし	合計
JJ3 合計	28	12	40 組
JJ3 割合	70%	30%	100%
CC3 合計	32	8	40 組
CC3 割合	80%	20%	100%

表 6-1 に示したように、勧誘発話が表出されてから、「1 回目の断り」に至るまでの段階においては、JJ3 では、28 組の断り手（70%）が言語表現を発したのに対して、12 組みの断り手（30%）が言語表現を何も発しなかった。一方、CC3 では、32 組のみの断り手（80%）が言語表現を発したのに対して、8 組の断り手（20%）が言語表現を発しなかった。JJ3 と CC3 双方ともに、70%以上の断り手が言語表現を発したことがわかった。

### 6.1.1.1.2 勧誘話段における意味公式の使用数

また、勧誘話段における断り手の意味公式使用数及び平均値を表 6-2 に示す。

表 6-2 JJ3 と CC3 の勧誘話段における意味公式使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	意味公式	JJ3 (28 組)		CC3 (32 組)	
		個数	平均値/28	個数	平均値/32
間接的断り	相手を思い止まらせる試み	0	0	1	0.03
	条件提示	1	0.04	0	0
	間接的断り合計	1	0.04	1	0.03
付随表現	あいづち	79	2.82	4	0.13
	情報確認・要求	16	0.57	24	0.75
	驚き	6	0.21	2	0.06
	ためらい	1	0.04	3	0.09
	困惑	2	0.07	0	0
	呼びかけ	0	0	6	0.19

	肯定的表現	1	0.04	0	0
	挨拶	0	0	2	0.06
	付随表現合計	105	3.75	41	1.28
意味公式合計		106	3.79	42	1.31

まず表 6-2 によると、JJ3 と CC3 両方共に、「直接的断り」は勧誘話段では見られなかった。そして、「間接的断り」がわずかな数値として現れたのに対して、双方はいずれも勧誘話段においては「付随表現」を中心に使用したという共通点がわかった。一方、全体的に JJ3 のほうが CC3 より意味公式の使用総数も多かった (JJ3-106/3.79, CC3-42/1.31)。それは CC3 より JJ3 のほうが、「付随表現」を顕著に多く使用した (JJ3-105 /3.75, CC3-41/1.28) からであった。さらに、CC3 より JJ3 のほうが、「付随表現」を顕著に多用したのは、CC3 より JJ3 のほうが {あいづち} を著しく多用したからであった (JJ3-79/2.82, CC3-4/0.13)。それに対して、JJ3 より CC3 のほうが、{情報確認・要求} を多く用いた (JJ3-16/0.57, CC3-24/0.75) が、その差は大きくなかった。なお、CC3 で見られた {呼びかけ} の使用数は 6 回であったが、JJ3 では 1 つも見られなかった。その他の意味公式の使用回数及び平均値は、JJ3 と CC3 両者の間にほぼ同じであった。

### 6.1.1.2 勧誘・断り話段

学生を対象とする調査 3 で見られた意味公式の数も種類も社会人ほど多くなかったが、社会人と同様に、「勧誘・断り話段」も「1 度目の断り」、「2 度目の断り」、「3 度目の断り」などからなっている。ただし、学生の断り発話数が社会人ほど多く見られなかった。本節においては、「勧誘・断り話段」における断り発話の数を日中対照した上で、各話段における意味公式の使用数及び平均値を考察していく。

#### 6.1.1.2.1 断り発話数

勧誘・断り話段は、頼み手が何回目の勧誘発話を発するかによって、さらに「1 回目の断りのみで収束」、「2 回目の断りで収束」、「3 回目の断りで収束」などからなっている。各断り発話の回数及び割合を表 6-3 に示す。

表 6-3 JJ3 と CC3 の断り発話の回数及び割合

	1 回目の断り のみで収束	2 回目の断 りで収束	3 回目の断 りで収束	4 回目の断 りで収束	5 回目の断 りで収束	7 回目の断 りで収束	合計
--	------------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----

JJ3 合計	25	8	3	1	2	1	40 組
JJ3 割合	62.5%	20%	7.5%	2.5%	5%	2.5%	100%
CC3 合計	24	10	4	1	1	0	40 組
CC3 割合	60%	25%	10%	2.5%	2.5%	0	100%

表 6-3 によると、JJ3 と CC3 共に、「1 回目の断りのみで収束」の断り発話数が最も多かった（JJ3-25/62.5%, CC3-24/60%）。それにつづき、両者共に「2 回目の断りで収束」、「3 回目の断りで収束」という順で見られた。そして、日中両者間の差が小さかった。その他、「4 回断りで収束」、「5 回断りで収束」、「7 回断りで収束」も見られたが、数はごく少なかった。

JJ3 と CC3 双方共に「4 回目または 4 回目以上の断りで収束」の会話数が少なかったため、本節では、主に「1 回目の断りのみで収束」から「3 回目の断りで収束」までの断り発話に注目し、考察していく。

#### 6.1.1.2.2 1 回目の断りにおける意味公式の使用数

1 回目の断り発話に現れた意味公式の使用数及び平均値は表 6-4 の通りである。

表 6-4 JJ3 と CC3 の 1 回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ3 (40 組)		CC3 (40 組)	
		個数	平均値/40	個数	平均値/40
直接的断り	不可	24	0.60	35	0.88
	直接的断り合計	24	0.60	35	0.88
間接的断り	理由	38	0.95	40	1
	詫び	18	0.45	13	0.33
	願望	3	0.08	2	0.05
	条件提示	2	0.05	1	0.03
	相手を思い止まらせる試み	2	0.05	2	0.05
	保留	0	0	3	0.08
	言いさし	1	0.03	1	0.03
	関係維持	4	0.10	5	0.13
	間接的断り合計	68	1.70	67	1.68
付随表現	あいづち	1	0.03	1	0.03
	情報確認・要求	2	0.05	0	0



	ためらい	13	0.33	16	0.40
	驚き	4	0.10	4	0.10
	困惑	5	0.13	4	0.10
	ヘッジ	1	0.03	0	0
	肯定的表現	0	0	1	0.03
	呼びかけ	0	0	4	0.10
	否定の前置き	2	0.05	1	0.03
	感謝	0	0	1	0.03
	その他	0	0	0	0
	付随表現合計	28	0.70	32	0.80
意味公式合計		120	3	134	3.35

表 6-4 に示したとおり、JJ3 と CC3 は、全体的に使用した意味公式の数がほぼ同じであった（JJ3-120/3, CC3-134/3.35）。なお、両者共に 1 回目の断り話段においては、「間接的断り」を中心に使用した。また、JJ3 と CC3 で使用された「間接的断り」の数もほぼ同じであった（JJ3-68/1.7, CC3-67/1.68）といった共通点がわかった。一方、CC3 のほうが JJ3 より「直接的断り」（JJ3-24/0.6, CC3-35/0.88）を多用したが、その差は大きくなかった。各意味公式の使用数及び平均値をみると、JJ3 と CC3 共に {理由}、{不可}、{詫び} が中心に用いられた。そのうち、JJ3 と CC3 双方共に {理由} の使用数が最も多く見られた。また、CC3 のほうが JJ3 より {不可} をやや顕著に多用したことを除き、ほかの意味公式の使用数がほぼ同じであった。

1 回目の断りをまとめた結果、JJ3 と CC3 両者間の意味公式のカテゴリ及び各意味公式の使用数と平均値の差はあまり顕著でなかったといった特徴が観察された。

### 6.1.1.2.3 2 回目の断りににおける意味公式の使用数

1 回目の断りに比べると、2 回目の断りにおいては、JJ3 と CC3 双方共に会話数が減少した。また、双方共に会話数がほぼ同じであった（JJ3-13 組, CC3-16 組）。JJ3 と CC3 の 2 回目の断り発話における意味公式の使用数及び平均値を表 6-5 にまとめる。

表 6-5 JJ3 と CC3 の 2 回目の断りににおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリ	意味公式	JJ3 (13 組)		CC3 (16 組)	
		個数	平均値/13	個数	平均値/16

直接的断り	不可	6	0.46	11	0.69
	直接的断り合計	6	0.46	11	0.69
間接的断り	理由	14	1.08	10	0.63
	詫び	3	0.23	0	0
	願望	0	0	1	0.06
	条件提示	1	0.08	0	0
	関係維持	1	0.08	0	0
	相手を思い止まらせる試み	0	0	3	0.19
	言いさし	0	0	1	0.06
	代案	0	0	1	0.06
	間接的断り合計	19	1.46	16	1
付随表現	情報確認・要求	0	0	1	0.06
	ためらい	1	0.08	1	0.06
	呼びかけ	0	0	1	0.06
	驚き	1	0.08	0	0
	その他	0	0	3	0.19
	付随表現合計	2	0.15	6	0.38
意味公式合計		27	2.08	33	2.06

表 6-5 の意味公式のカテゴリーの使用平均値を見ると、JJ3 と CC3 共に 2 回目の断り話段においては、「間接的断り」が最も多用された。なお、「直接的断り」、「間接的断り」と「付随表現」のいずれにおいても、JJ3 と CC3 両者間の差があまり大きくなかった。従って、全体的に両者間の意味公式合計の差も顕著ではなかった。各意味公式の使用数及び平均値からすれば、JJ3 のほうが {理由}、{詫び} を多用したのに対して、CC3 のほうが {不可} と {相手を思い止まらせる試み} を多く使用したが、その差は大きくなかった。

#### 6.1.1.2.4 3 回目の断りにおける意味公式の使用数

3 回目の断りにおいては、JJ3 で見られた会話数が 6 組であるのに対して、CC3 で出現した会話数が 5 組しか見られなかった。JJ3 と CC3 の 3 回目の断りにおける意味公式の使用回数及び平均値を表 6-6 に示す。

表 6-6 JJ3 と CC3 の 3 回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ3 (6組)		CC3 (5組)	
		個数	平均値/6	個数	平均値/5
直接的断り	不可	1	0.17	5	1
	直接的断り合計	1	0.17	5	1
間接的断り	理由	5	0.83	4	0.80
	詫び	2	0.33	0	0
	願望	1	0.17	2	0.40
	関係維持	1	0.17	1	0.20
	言いさし	0	0	1	0.20
	相手を思い止まらせる試み	0	0	3	0.60
	間接的断り合計	9	1.50	11	2.20
意味公式合計		10	1.67	16	3.20

表 6-6 で示したように、全体的な意味公式合計と意味公式のカテゴリーをみれば、JJ3 と CC3 共に、3 回目の断りにおいては、「付随表現」が使用されなかった。また、3 回目の断りにおける各意味公式の使用数が少なかったため、JJ3 と CC3 両者間の差があまりなかった。

上記の 1 回目から 3 回目にかかる勧誘・断り話段を合わせると、JJ3 と CC3 双方共に「間接的断り」を中心に使用した。また、依頼話段に比べると、JJ3 と CC3 双方共に勧誘・断り話段においては、「付随表現」の使用数が著しく減少した。そして、各意味公式の使用回数及び平均値をみると、JJ3 と CC3 双方共に多用された意味公式の上位 2 項目は {理由}、{不可} であったという共通点が見られた。一方、勧誘・断り話段のどの段階においても、CC3 のほうが JJ3 より {不可} を多用したのに対して、JJ3 のほうが CC3 より {詫び} を多く使用した。ただし、社会人の勧誘に対する断り言語行動に比べると、文化を問わず、学生の勧誘に対する断り言語行動に見られた意味公式の使用数がそもそも少なかったため、JJ3 と CC3 両者間の差が現れても、顕著ではなかった。

### 6.1.1.3 終了部

学生を対象とする勧誘に対する断り会話の終了部においては、断り手が言語表現を發したのは、半分以上を占めている。そのうち、JJ3 では、「はい」、「うん」のような {返事・応答}、「ごめんね」のような {詫び}、「ありがとうございます」のような {感謝}、「よろしくお伝えください」のような {関係維持}、「バイバイ」のような {挨拶} などの意味公式が見られた。一方、CC3 では「好」(うん) のような {返事・応答}、「再见」(バイバイ) のような {挨拶}、「谢谢」(ありがとうございます) のような {感謝} などが頻繁に使用さ

れた。3.3.1で提示したように、上記の表現の提示によって、会話を終わらせようとする役割を果たしているため、会話の終了部と見なす。

### 6.1.1.3.1 終了部における断り手の言語表現の有無について

JJ3CC3の終了部における断り手の言語表現の有無に関しては、表6-7に示す。

表6-7 JJ3とCC3の終了部における断り手の言語表現の有無

	終了部言語表現あり	終了部言語表現なし	合計
JJ3 合計	37	3	40 組
JJ3 割合	92.5%	7.5%	100%
CC3 合計	31	9	40 組
CC3 割合	77.5%	22.5%	100%

表6-7によると、学生の勧誘に対する断り会話の終了部において、断り手が言語表現を発した会話数が社会人ほど多くなかったが、CC3とJJ3ともに、77%以上の会話において、断り手の言語表現が見られた。

### 6.1.1.3.2 終了部における意味公式の使用数

終了部の断り発話における意味公式の使用数及び平均値などを表6-8に示す。

表6-8 JJ3とCC3の終了部における意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ3 (37 組)		CC3 (31 組)	
		個数	平均値/37	個数	平均値/31
直接的断り	不可	1	0.03	1	0.03
	直接的断り合計	1	0.03	1	0.03
間接的断り	詫び	21	0.57	4	0.13
	理由	2	0.05	2	0.06
	関係維持	11	0.30	3	0.10
	条件提示	1	0.03	0	0
	願望	1	0.03	0	0
	保留	1	0.03	0	0
	間接的断り合計	37	1	9	0.29
付随表現	あいづち	1	0.03	0	0

	挨拶	8	0.22	5	0.16
	呼びかけ	0	0	4	0.13
	依頼遂行	4	0.11	0	0
	感謝	5	0.14	6	0.19
	付随表現合計	18	0.49	15	0.48
意味公式合計		56	1.51	25	0.81

表 6-8 に示したように、JJ3 と CC3 の「直接的断り」の使用数と平均値が同じであった。JJ3 のほうが CC3 より「付随表現」を多く使用したが、その使用平均値の差がごく小さかった。また、各意味公式の使用数と平均値からすれば、{詫び}を除き、ほかの意味公式の差があまり大きくなかったといった共通点がわかった。一方、CC3 より JJ3 のほうで {詫び} が多く使用されたので、JJ3 のほうが CC3 より {詫び} と {関係維持} などを含む「間接的断り」も顕著に多用した。従って、全体的に JJ3 のほうが CC3 より意味公式総数が多かったという相違点が見られた。

#### 6.1.1.4 まとめ

JJ3 と CC3 の各話段における意味公式の使用数及び平均値をまとめた結果、以下の特徴がわかった。勧誘話段においては、JJ3 と CC3 とともに「直接的断り」と「間接的断り」のいずれも、ゼロまたはわずかな数値として現れた。一方、JJ3 で使用された意味公式の数は CC3 より相当に多かった。それは、CC3 より JJ3 のほうでは、{あいづち} などを含む「付随表現」が相当に多く用いられたからであった。勧誘・断り話段においては、JJ3 と CC3 双方ともに、使用された意味公式の数が社会人より少なかったので、1 回目の断りから 3 回目の断りにかけて、いずれの話段においても、JJ3 と CC3 両者間の差があまり見られなかった。最後の終了部においては、社会人と同様に、JJ3 が CC3 より {詫び}、{関係維持} を多用した。とりわけ、JJ3 と CC3 両者間の {詫び} の使用数の差が顕著であった。

さらに、各話段における意味公式の使用平均値の高い順に並ぶと、学生の勧誘を断る言語行動の連鎖は表 6-9 の通りである。

表 6-9 JJ3 と CC3 の断り言語行動の連鎖構造

	勧誘話段	1 回目の断り	2 回目の断り	3 回目の断り	終了部
JJ3	あいづち (2.82)	理由 (0.95)	理由 (1.08)	理由 (0.83)	詫び (0.57)
CC3	情報確認・要求 (0.75)	理由 (1)	不可 (0.69)	理由 (0.8)	感謝 (0.19)

各話段における意味公式の連鎖構造によると、勧誘話段において、JJ3 では {あいづち}、CC3 では {情報確認・要求} がそれぞれ最も多用され、終了部において、JJ3 では {詫び}、CC3 では {感謝} がそれぞれ最も多用されたという相違点がわかった1回目の断りから3回目の断りにかけて、JJ3 と CC3 のいずれにおいても {理由} を中心に断り言語行動を行った。ただし、2回目の断りにおいて、JJ3 では {理由}、CC3 では {不可} がそれぞれ多く見られた。

## 6.1.2 断りの展開パターンの日中対照

本節において、全体的に学生を対象とする勧誘に対する断り会話における意味公式の категорияと各意味公式の展開パターンを考察する。

### 6.1.2.1 意味公式の category の展開パターン

まず、マクロ的に意味公式の category の展開パターンを考察する。

JJ3 の勧誘話段から勧誘・断り話段を経て、終了部に至るまでの意味公式の category の使用数及び1組の会話の平均値を表 6-10 に示す。

表 6-10 JJ3 の意味公式の category の使用数及び平均値

意味公式の category	勧誘話段		1回目の断り		2回目の断り		3回目の断り		終了部	
	JJ3(24組)	JJ3 平均値 /24	JJ3(40組)	JJ3 平均値 /40	JJ3 (13組)	JJ3 平均値 /13	JJ3 (6組)	JJ3 平均値 /6	JJ3 (30組)	JJ3 平均値 /30
直接的断り	0	0	24	0.60	6	0.46	1	0.17	1	0.03
間接的断り	1	0.04	68	1.70	19	1.46	9	1.50	37	1.23
付随表現	105	4.38	28	0.70	2	0.15	0	0	18	0.60

なお、JJ3 の各話段の意味公式の category の平均値を図 6-1 に示す。

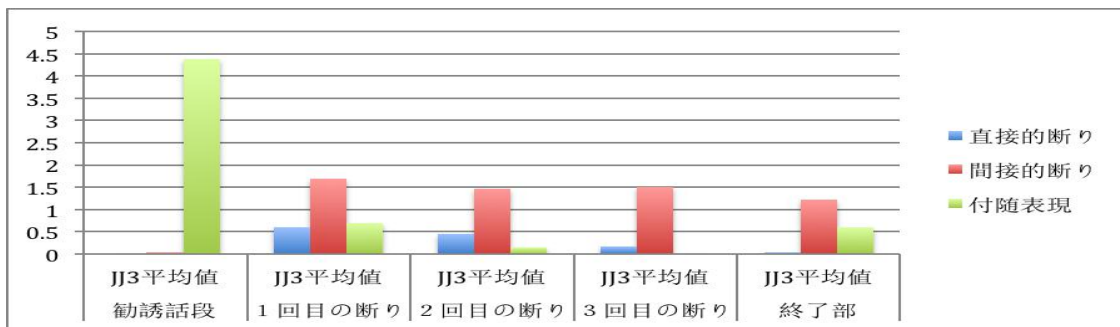


図 6-1 JJ3 の各話段の意味公式のカテゴリーの平均値

表 6-10 と図 6-1 を合わせると、まず、勧誘話段においては、{あいづち} などを含む「付随表現」が多用された。次、勧誘・断り話段においては、「直接的断り+間接的断り」というパターンがどの話段においても見られた。そのうち、「間接的断り」が中心に多用された。「付随表現」が 3 回目の断りで現れなかった。最後の終了部においても、JJ3 では「間接的断り+付随表現」というパターンが使用された。そのうち、「間接的断り」が最も多かった。

つづいて、CC3 の勧誘話段から勧誘・断り話段を経て、終了部に至るまでの意味公式のカテゴリーの使用回数及び 1 組の会話の平均値は表 6-11 に示す。

表 6-11 CC3 の意味公式のカテゴリーの使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	勧誘話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
	CC3 (25 組)	CC3 平 均值 /25	CC3 (40 組)	CC3 平 均值 /40	CC3 (16 組)	CC3 平 均值 /16	CC3 (5 組)	CC3 平 均值/5	CC3 (17 組)	CC3 平 均值 /17
直接的断り	0	0	35	0.88	11	0.69	5	1	1	0.06
間接的断り	1	0.04	67	1.68	16	1	11	2.20	9	0.53
付随表現	41	1.64	33	0.83	6	0.38	0	0	15	0.88

なお、CC3 の各話段の意味公式のカテゴリーの平均値を図 6-2 に示す。

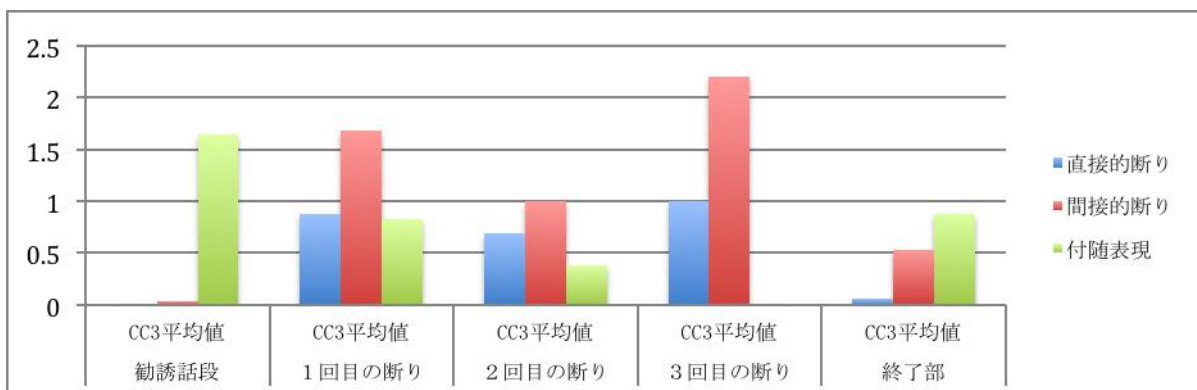


図 6-2 CC3 の各話段の意味公式のカテゴリーの平均値

表 6-11 と図 6-2 によると、勧誘話段においては、CC3 では「付随表現」が中心に使用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」の出現回数がわずかまたはゼロであった。次に、勧誘・断り話段のどの話段においても、「直接的断り＋間接的断り」のパターンがどの話段においても使用された。そのうち、「間接的断り」が主に使用された。「付随表現」が 3 回目の断りでは見られなかった。最後の終了部においては、「直接的断り＋間接的断り＋付随表現」というパターンが使用された。そのうち、「付随表現」が最も多用されたのに対して、「直接的断り」が最も少なかった。

上記の JJ3 と CC3 の意味公式のカテゴリーの話段ごとにおける使用平均値を対照すれば、図 6-3 に示す。

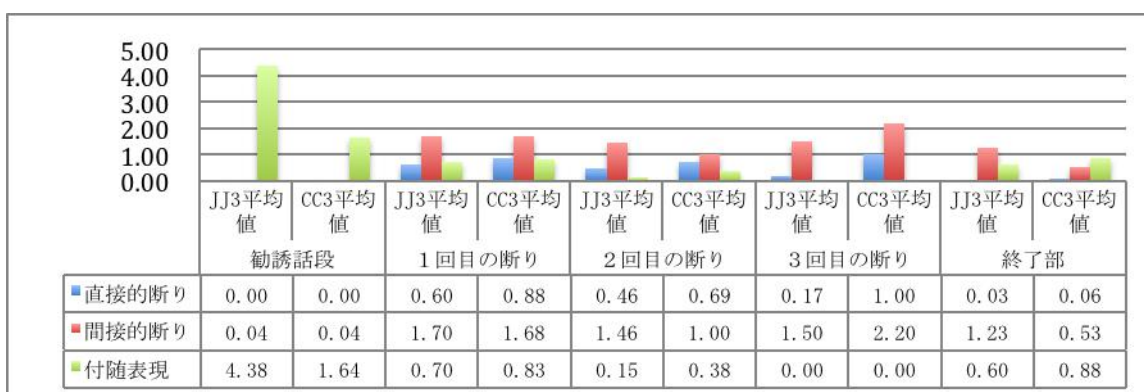


図 6-3 JJ3 と CC3 の意味公式のカテゴリーの話段ごとにおける使用平均値

JJ3 と CC3 の各意味公式のカテゴリーの展開パターンがほぼ同じであったことがわかった。双方ともに勧誘話段においては、「付随表現」が圧倒的に多用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」はゼロまたはごくわずかな数値として現れた。勧誘・断りの交渉話段においては、JJ3 と CC3 はいずれも、1 回目から 3 回めの断りにかけて、「直接的断り＋間接的断り」の展開パターンが使用された。なお、どの話段においても、「間接的断り」が主に使用された。最後の終了部においては、JJ3 と CC3 とともに「付随表現＋間接的断り」



というパターンが主に使用された。

また、JJ3 と CC3 の意味公式のカテゴリ展開パターンの相違点も観察された。勧誘話段において、JJ3 のほうが CC3 より「付随表現」を相当に多用したのに対して、勧誘・断り話段から終了部にかけて、JJ3 より CC3 のほうでは「直接的断り」が多く見られた。

### 6.1.2.2 各意味公式の展開パターン

JJ3 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値を表 6-12 と図 6-4 に示す。

表 6-12 JJ3 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	意味公式	勧誘話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		JJ3 (24 組)	JJ3 平 均值 /24	JJ3 (40 組)	JJ3 平 均值 /40	JJ3 (13 組)	JJ3 平 均值 /13	JJ3 (6 組)	JJ3 平 均值 /6	JJ3 (30 組)	JJ3 平 均值 /30
直接的断り	不可	0	0	24	0.60	6	0.46	1	0.17	1	0.03
間接的断り	理由	0	0	38	0.95	14	1.08	5	0.83	2	0.07
	詫び	0	0	18	0.45	3	0.23	2	0.33	21	0.70
	願望	0	0	3	0.08	0	0	1	0.17	1	0.03
	関係維持	0	0	4	0.10	1	0.08	1	0.17	11	0.37
	条件提示	1	0.04	2	0.05	1	0.08	0	0	1	0.03
	相手を思 い止まら せる試み	0	0	2	0.05	0	0	0	0	0	0
	保留	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.03
	言いさし	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0

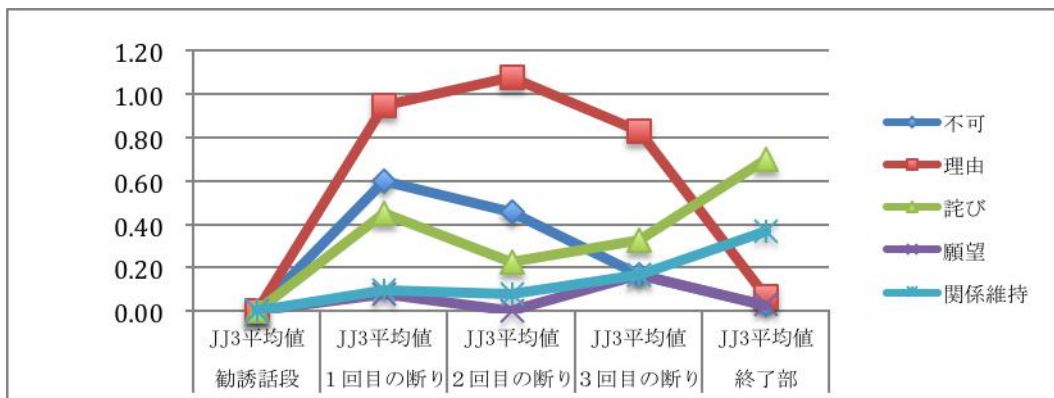


図 6-4 JJ3 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の平均値<sup>32</sup>

上記の表 6-12 と図 6-4 から、JJ3 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する各意味公式の展開パターンは 2 種類に分類できる。①中高型：{不可}、{理由}、{願望} のように、勧誘話段においては、ゼロの数値として現れ、真ん中の勧誘・断り話段においては、最も高い使用平均値として見られ、最後の終了部においては、ごくわずかな使用平均値に減少したという展開パターンを「中高型」と言う。②尾高型：{詫び} と {関係維持} のように、勧誘話段においては 1 つも見られず、勧誘・断り話段においては見られたが、最後の終了部においては、最も高い使用平均値として現れたという展開パターンを「尾高型」とも言える。

JJ3 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び 1 組の会話の使用回数 の平均値を表 6-13 と図 6-5 に示す。

表 6-13 JJ3 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式 のカテゴリー	意味公式	勧誘話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		JJ3 (24 組)	JJ3 平 均値 /24	JJ3 (40 組)	JJ3 平 均値 /40	JJ3 (13 組)	JJ3 平 均値 /13	JJ3 (6 組)	JJ3 平 均値 /6	JJ3 (30 組)	JJ3 平均 値/30
付随 表現	あいづち	79	3.29	1	0.03	0	0	0	0	1	0.03
	情報確認 ・要求	16	0.67	2	0.05	0	0	0	0	0	0
	ためらい	1	0.04	13	0.33	1	0.08	0	0	0	0
	驚き	6	0.25	4	0.10	1	0.08	0	0	0	0
	困惑	2	0.08	5	0.13	0	0	0	0	0	0
	感謝	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0.17
	挨拶	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0.27

その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0.13
ヘッジ	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0	0
肯定的表現	1	0.04	0	0	0	0	0	0	0	0	0
否定の前置き	0	0	2	0.05	0	0	0	0	0	0	0

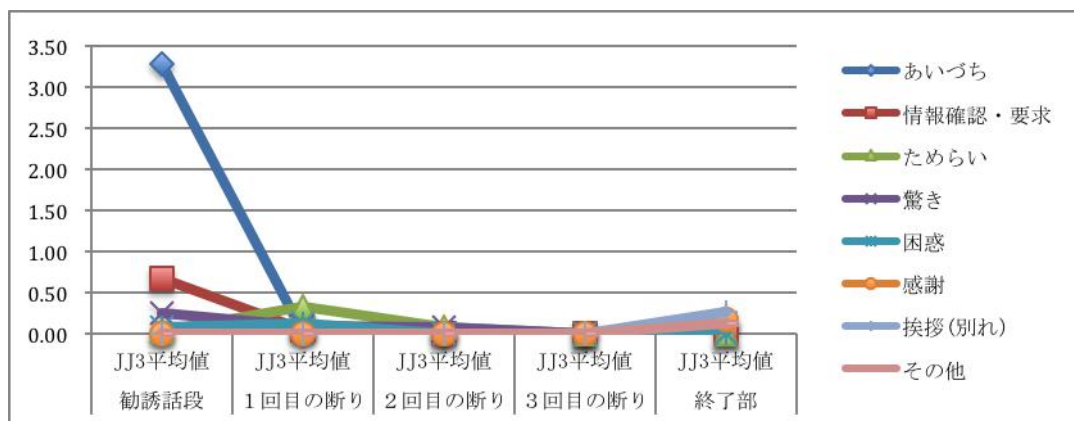


図 6-5 JJ3 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の平均値<sup>33</sup>

表 6-13 と図 6-5 に示した通り、「付随表現」に属する各意味公式の展開パターンには 3 種類があった。①頭高型：{あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き} のように、最初の勧誘話段において、最も多用された展開パターンを「頭高型」と言えるだろう。そのうち、{あいづち} の展開パターンが最も顕著であった。②中高型：{ためらい} と {困惑} のように、勧誘・断りの 1 回目の断りにおいては最高の使用平均数値として現れ、終了部においてはゼロになったという展開パターンを「中高型」と言える。③「尾高型」：{感謝}、{挨拶} のような展開パターンはこの型に属する。この 3 つの意味公式はいずれも終了部のみで見られた。

上記の JJ3 の意味公式のカテゴリーの展開パターンと意味公式に属する各意味公式の使用展開パターンを合わせると、以下の 3 種類の展開パターンがわかった。1 つ目は「付随表現」に属する {あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き} のような頭高型である。2 つ目は「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{願望}、「付随表現」に属する {ためらい}、{困惑} のような中高型である。3 つ目は「間接的断り」に属する {詫び}、{関係維持}、「付随表現」に属する {感謝}、{挨拶}、{その他} のような尾高型である。従って、JJ3 の勧誘に対する断り会話構造を図 6-6 にまとめる。そのうち、JJ3 では、{詫び}、{関係維持} の展開パターンが尾高型であったが、勧誘・断り話段においても 0.10 以上の使用平均値として現れたため、勧誘・断り話段にも {詫び} を取り入れた

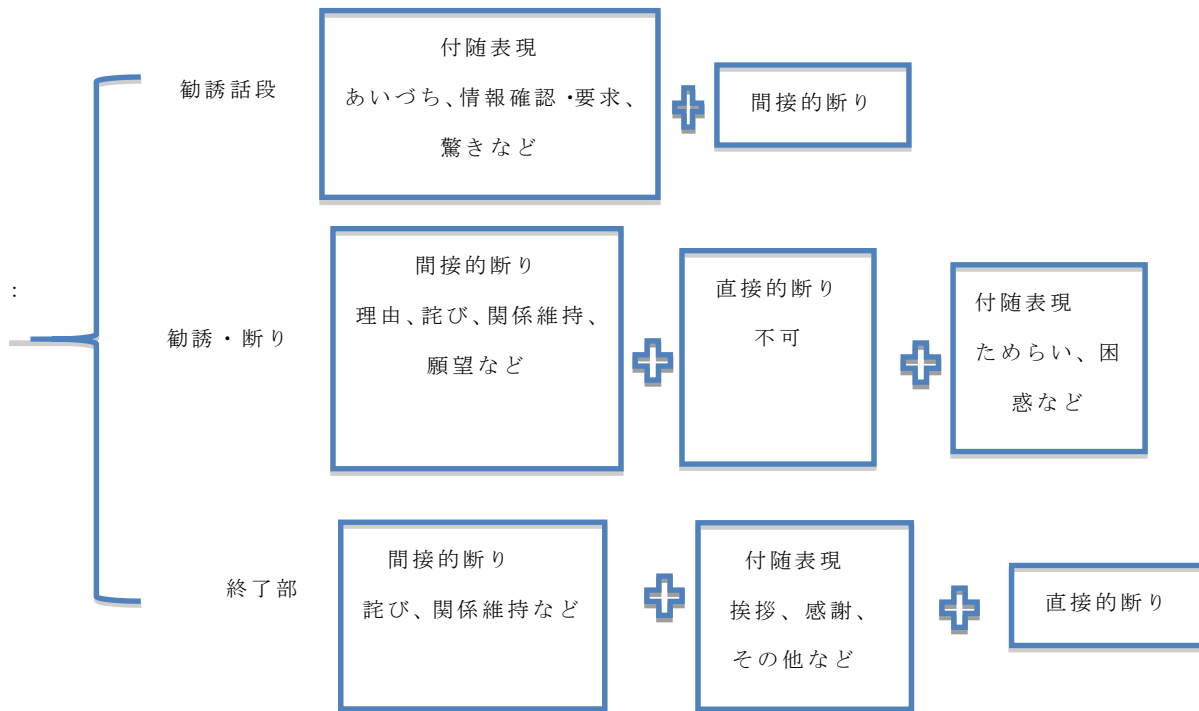


図 6-6 JJ3 の「勧誘」に対する断り会話構造

CC3 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用回数及び平均値を表 6-14 と図 6-7 に示す。

表 6-14 CC3 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	意味公式	勧誘話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		CC3 (25 組)	CC3 平 均值 /25	CC3 (40 組)	CC3 平 均值 /40	CC3 (16 組)	CC3 平 均值 /16	CC3 (5 組)	CC3 平 均值 /5	CC3 (17 組)	CC3 平 均值 /17
直接的断り	不可	0	0	35	0.88	11	0.69	5	1	1	0.06
間接的断り	理由	0	0	40	1	10	0.63	4	0.80	2	0.12
	詫び	0	0	13	0.33	0	0	0	0	4	0.24
	相手を思 い止まら せる試み	1	0.04	2	0.05	3	0.19	3	0.60	0	0
	言いさし	0	0	1	0.03	1	0.06	1	0.20	0	0
	関係維持	0	0	5	0.13	0	0	1	0.20	3	0.18
	願望	0	0	2	0.05	1	0.06	2	0.40	0	0

条件提示	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0
保留	0	0	3	0.08	0	0	0	0	0	0
代案	0	0	0	0	1	0.06	0	0	0	0

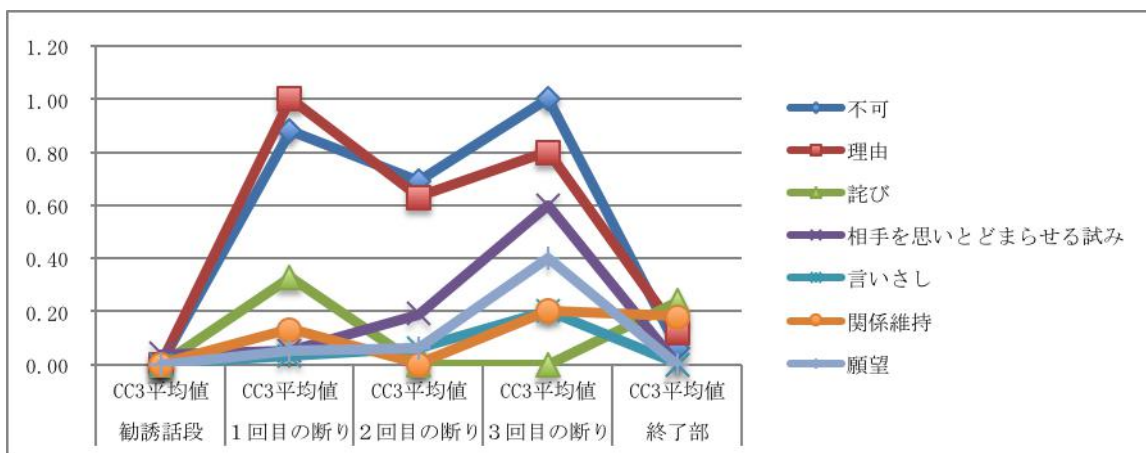


図 6-7 CC3 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の平均値<sup>34</sup>

表 6-14 と図 6-7 を合わせてみると、CC3 の「直接的断り」、「間接的断り」に属する {不可}、{理由}、{詫び}、{相手を思い止まらせる試み}、{言いさし}、{関係維持}、{願望} の展開パターンはいずれも中高型であった。其の内、{不可} と {理由} の展開パターンが最も著しかった。

CC3 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用回数及び平均値を表 6-15 と図 6-8 に示す。

表 6-15 CC3 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式 のカタゴ リー	意味公式	勧誘話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		CC3 (25 組)	CC3 平 均値 /25	CC3 (40 組)	CC3 平 均値 /40	CC3 (16 組)	CC3 平 均値 /16	CC3 (5 組)	CC3 平 均値 /5	CC3 (17 組)	CC3 平均 値/17
付随表現	あいづち	4	0.16	1	0.03	0	0	0	0	0	0
	情報確認・要 求	24	0.96	0	0	1	0.06	0	0	0	0
	ためらい	3	0.12	16	0.40	1	0.06	0	0	0	0
	驚き	2	0.08	4	0.10	0	0	0	0	0	0
	困惑	0	0	4	0.10	0	0	0	0	0	0
	呼びかけ	6	0.24	4	0.10	1	0.06	0	0	4	0.24
	感謝	0	0	1	0.03	0	0	0	0	6	0.35

挨拶	2	0.08	0	0	0	0	0	0	0	5	0.29
その他	0	0	1	0.03	3	0.19	0	0	0	0	0
肯定的表現	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0	0
否定の前置き	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0	0

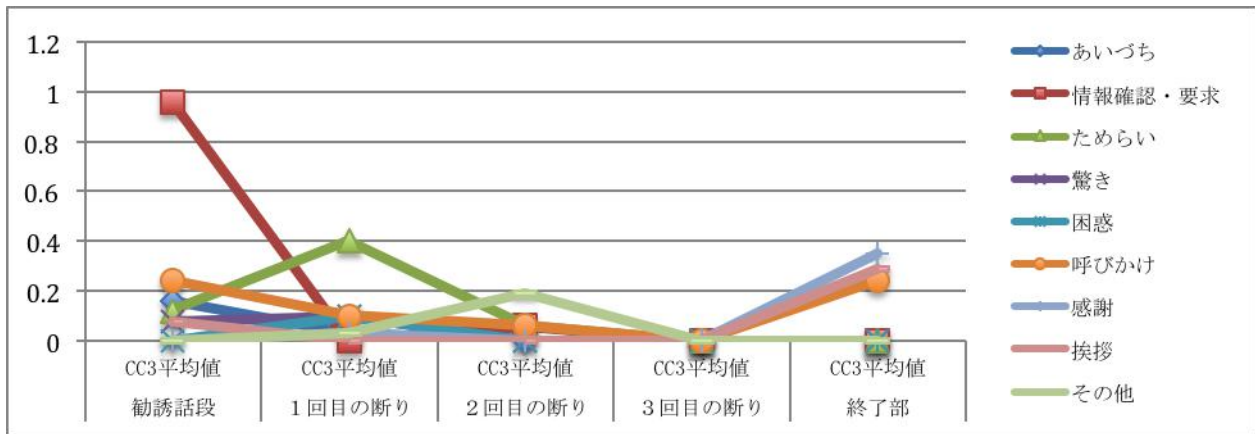


図 6-8 CC3 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の平均値<sup>35</sup>

表 6-15 と図 6-8 を合わせてみると、CC3 の「付随表現」における意味公式の展開パターンが 4 種類あった。①頭高型：{あいづち}、{情報確認・要求} のような展開パターンを「頭高型」と言う。即ち、勧誘話段において最も多用された展開パターンである。そのうち、{情報確認・要求} が勧誘話段では最も高い使用平均値として現れたので、その変化が最も目立っている。②中高型：{ためらい}、{驚き}、{困惑} のように、勧誘・断り話段においては最も高い数値として現れたので、「中高型」とは言える。そのうち、{ためらい} の展開パターンが最も顕著であった。③尾高型：CC3 で見られた {挨拶} と {感謝} の展開パターンはこのタイプであった。即ち、終了部においては、{挨拶} と {感謝} の使用平均値が最も多かった。④頭高型並び中高型：勧誘話段と終了部のいずれにおいても、{呼びかけ} の使用平均値が同じであったため、頭高型とも尾高型とも言える。

上記の CC3 の各意味公式の展開パターンを以下の 4 種類にまとめる。まず、「付随表現」に属する {あいづち}、{情報確認・要求} の展開パターンは頭高型であった。次に、「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{詫び}、{相手を思い止まらせる試み}、{言いさし}、{関係維持}、{願望} と、「付随表現」に属する {ためらい}、{驚き}、{困惑} の展開パターンは中高型であった。また、{挨拶}、{感謝} の展開パターンは尾高型であった。

従って、CC3 の「勧誘」に対する断り会話構造を図 6-9 に示す。そのうち、{呼びかけ} の展開パターンは「尾高型」であったが、勧誘・断り話段と終了部においても、使用平均値が 0.10 以上であったので、勧誘・断り話段と終了部にも取り入れた。また、{詫び}、{関

係維持}、{理由} は中高型の展開パターンであったが、終了部における使用平均値が 0.10 以上であったので、終了部にも取り入れた。

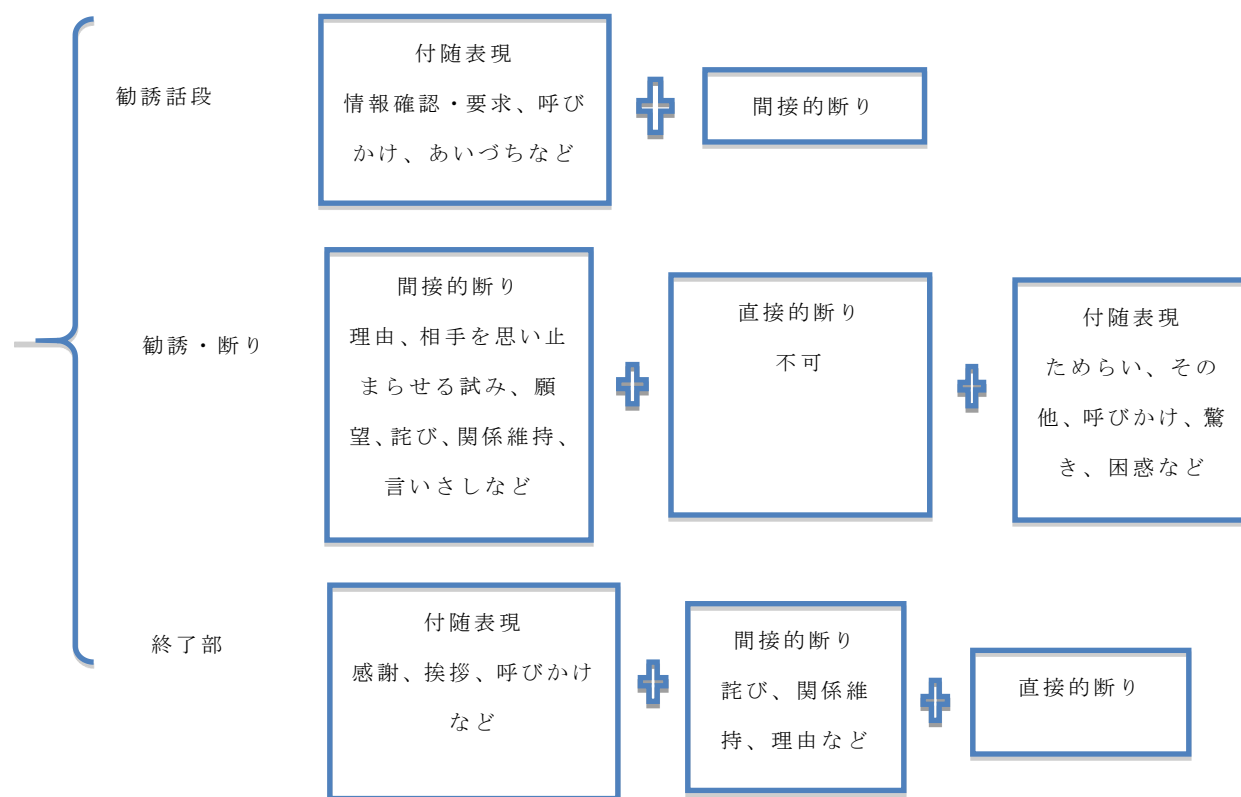


図 6-9 CC3 の「勧誘」に対する断り会話構造

JJ3 と CC3 の各意味公式の展開パターンをまとめた結果、次の共通点がわかった。① JJ3 と CC3 双方ともに、「付随表現」に属する {あいづち}、{情報確認・要求} は「頭高型」の展開パターンであった。② 双方共に、「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{願望}、「付随表現」に属する {ためらい}、{困惑} の展開パターンは「中高型」であった。ただし、JJ3 より CC3 のほうでは、{不可} が顕著に多く見られた。③ JJ3 と CC3 のいずれの「付随表現」に属する {感謝} と {挨拶} は「尾高型」の展開パターンであった。

一方、以下の相違点も見られた。第 1 に、JJ3 で見られた {驚き} の展開パターンは頭高型であったのに対して、CC3 で使用された {驚き} の展開パターンは中高型であった。第 2 に、{詫び} と {関係維持} の展開パターンは、JJ3 では「尾高型」であったのに対して、CC3 では「中高型」であった。第 3 に、CC3 の「中高型」で見られた {相手を思い止まらせる試み} と {言いさし} は、JJ3 のどの話段においても、ゼロまたはごく低い数値で出現したため、その展開パターンを考察しないことにした。最後に、CC3 の勧誘話段と終了部のいずれにおいても見られた {呼びかけ} は、JJ3 のどの話段においておも現れなかった。ただし、上記の相違点の中で、{不可}、{詫び}、{相手を思い止まらせる試み}、{呼

びかけ} を除き、ほかの意味公式の使用平均値における両者間の差があまり大きくなかった。

従って、上記の意味公式の展開パターンをまとめた結果、JJ3 と CC3 のいずれにおいても、{不可}、{詫び}、{相手を思い止まらせる試み}、{呼びかけ} を除き、ほとんど同じであったという結論が得られた。

なお、JJ3 と CC3 の「誘い」に対する断り会話構造を比較すると（上記図 6-6・図 6-9 参照）、いずれも 70%以上の場面は勧誘話段、勧誘・断り話段、終了部から構成されている。なお、次の共通点も観察された。第 1 に、勧誘話段において、JJ3 と CC3 双方に、{あいづち}、{情報確認・要求} などを含む「付随表現」が中心に使用されたのに対して、「直接的断り」が全く使用されず、「間接的断り」が使用されても、使用平均値が少なかった。第 2 に、勧誘・断り話段においては、JJ3 と CC3 はいずれも、両者の 3 回目の断りを除き、「間接的断り+直接的断り+付随表現」のパターンを使用した。そして、双方ともに、{理由}、{詫び}、{願望}、{関係維持} などを含む「間接的断り」を中心に多用したのにつづき、{不可} を含む「直接的断り」と {ためらい}、{困惑} を含む「付随表現」を使用したことが観察された。最後の終了部においても、JJ3 と CC3 双方共に、「間接的断り+付随表現」のパターンを主に使用した。両者ともに、「間接的断り」に属する {詫び}、{関係維持} と、「付随表現」に属する {感謝}、{挨拶} を終了部において多く用いた。

一方、JJ3 のほうでは {詫び} が多用されたのに対して、CC3 のほうでは {不可} が多用された相違点も伺われた。なお、社会人の勧誘に対する断り言語行動と逆に、CC3 の意味公式の種類が JJ3 より豊かであった。例えば、CC3 のどの話段においても見られた {呼びかけ}、CC3 の勧誘・断り話段で使用された {相手を思い止まらせる試み}、{言いさし} などは、JJ3 のいずれの話段においても、ゼロまたはごく低い数値で現れたという相違も観察された。

### 6.1.3 会話構造による分析のまとめ

本節において、学生の誘いに対する断り言語行動の話段ごとにおける意味公式のカテゴリー及び各意味公式の使用数、意味公式のカテゴリー及び各意味公式の展開パターンの考察に基づき、全体的な構造が抽出された。その結果が以下の通りである。

第 1 に、話段ごとにおける意味公式のカテゴリー及び各意味公式の使用回数及び平均値の考察によると、勧誘話段において、JJ3 と CC3 両方共に、{あいづち}、{情報確認・要求} などを含む「付随表現」が中心に使われた。勧誘・断り話段においては、両者ともに {理由}、{願望} などを含む「間接的断り」が主に使用された。また、{不可} を含む「直接的断り」と {ためらい}、{困惑} を含む「付随表現」が勧誘・断り話段においても用いられた。最後の終了部においては、JJ3 と CC3 のいずれでも {感謝} と {挨拶} を含む「付随



表現」が見られたという共通点がわかった。一方、勧誘話段においては、CC3よりJJ3のほうでは、{あいづち}を始めとする「付随表現」が顕著に多く見られた。なお、勧誘・断り話段のどの段階においても、CC3のほうがJJ3より{不可}を多用したのに対して、JJ3のほうがCC3より{詫び}を多く使用した。ただその差が顕著でなかった。特に、社会人の勧誘を断る場面に比べると、勧誘・断り話段におけるJJ3とCC3両者間の差があまり見られなかった。

第2に、意味公式の展開パターンをまとめると、JJ3とCC3の各意味公式のカテゴリー展開パターンがほぼ同じであったことがわかった。双方ともに勧誘話段においては、「付随表現」が圧倒的に多用された。勧誘・断りの交渉話段においては、JJ3とCC3はいずれも、1回目から3回めの断りにかけて、「直接的断り+間接的断り」の展開パターンが使用された。なお、どの話段においても、「間接的断り」が主に使用された。最後の終了部においては、JJ3とCC3ともに「付随表現+間接的断り」というパターンが主に使用された。一方、勧誘話段において、JJ3のほうがCC3より「付随表現」を相当に多用したのに対して、勧誘・断り話段から終了部にかけて、JJ3よりCC3のほうでは「直接的断り」が多く見られたという相違点もわかった。

第3に、各意味公式の展開パターンを対照すると、以下の共通している3種類の展開パターンが見られた。①JJ3とCC3のいずれでも、「付随表現」に属する{あいづち}、{情報確認・要求}の展開パターンは「頭高型」であった。②双方ともに、「直接的断り」に属する{不可}、「間接的断り」に属する{理由}、{願望}と、「付随表現」の意味公式である{ためらい}と{困惑}は、「中高型」の展開パターンであった。③双方共に「付随表現」に属する{感謝}と{挨拶}の展開パターンは「尾高型」であった。一方、JJ3で見られた{詫び}の展開パターンが「尾高型」であったのに対して、CC3では「中高型」であったという相違点も観察された。

第4に、誘いに対する断り会話構造を比較すると、JJ3とCC3のいずれも、少なくとも70%以上の場面は勧誘話段、勧誘・断り話段、終了部からなっていることが明らかになった。なお、以下の共通点も挙げられた。①勧誘話段において、JJ3とCC3双方に、{あいづち}、{情報確認・要求}などを含む「付随表現」が中心に使用されたのに対して、「直接的断り」、「間接的断り」がゼロまたはごくわずかな数値として出現した。②勧誘・断り話段においては、JJ3とCC3はいずれも、両者の3回目の断りを除き、「間接的断り+直接的断り+付随表現」のパターンを使用した。そして、双方ともに、{理由}、{詫び}、{願望}、{関係維持}などを含む「間接的断り」を中心に多用したのにつづき、{不可}を含む「直接的断り」と{ためらい}、{困惑}を含む「付随表現」を使用した。③終了部においても、JJ3とCC3双方共に、「間接的断り+付随表現」のパターンが主に使用された。両者ともに、{詫び}、{関係維持}、{感謝}、{挨拶}が終了部において中心に用いられた。一方、JJ3のほうでは{あいづち}、{詫び}などが多用されたのに対して、CC3のほうでは{不可}が多用された相違点も伺われた。ただし、社会人に比べると、上記の学生のJJ3とCC3両者間の差

が、社会人ほど著しくなかった。

上記の結果をまとめると、学生を対象とする誘いに対する断り言語行動の調査3においては、JJ3とCC3の会話構造がほぼ同じであった。具体的に言えば、両者ともに最初に、{あいづち}、{情報確認・要求}などを含む「付随表現」で、相手からの誘いに関心を見せたり、会話を進めた。勧誘・断りの交渉話段においては、{理由}と{不可}、{詫び}、{ためらい}、{困惑}などを用いて、相手を断った。最後の終了部においては、双方ともに、{感謝}、{挨拶}などによって、相手との関係を維持しようとするというプロセスが観察された。無論、CC3で見られた{呼びかけ}、{相手を思い止まらせる試み}、{言いさし}などは、JJ3のいずれの話段においても、ゼロまたはわずかであった。なお、JJ3のほうでは{あいづち}、{詫び}などが多用されたのに対して、CC3のほうでは{不可}が多用された相違点も伺われた。ところで、社会人に比べると、学生のJJ3とCC3は、いずれも使用した意味公式の数も種類も少なかったため、JJ3とCC3の間の差が出てきても、社会人ほど顕著でなかった。

## 6.2 意味公式の量的分析

本節において、学生の誘いを断る場面に見られた各意味公式の使用回数、人による意味公式の使用平均値の有意差があるか否か、社会的変数が意味公式の使用回数に及ぼした影響を考察していく。

### 6.2.1 意味公式の全体的な使用回数

まず、JJ3とCC3の全体的に各意味公式の使用回数及び割合を表6-16に示す。

表 6-16 JJ3 と CC3 の全体的な意味公式の使用数

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ3 使用数	JJ3 割合%	CC3 使用数	CC3 割合%
直接的断り	不可	37	11.01	53	20.46
	直接的断り合計	37	11.01	53	20.46
間接的断り	理由	66	19.64	58	22.39
	条件提示	6	1.79	1	0.39
	詫び	45	13.39	17	6.56
	願望	6	1.79	5	1.93
	言いさし	1	0.30	3	1.16
	関係維持	17	5.06	8	3.09

	相手を思い止まらせる試み	2	0.60	9	3.47
	代案	1	0.30	1	0.39
	保留	1	0.30	3	1.16
	間接的断り合計	145	43.15	105	40.54
付随表現	肯定的表現	1	0.30	1	0.39
	あいづち	81	24.11	6	2.32
	困惑	6	1.79	4	1.54
	ためらい	15	4.46	25	9.65
	驚き	11	3.27	6	2.32
	情報確認・要求	19	5.65	25	9.65
	否定の前置き	2	0.60	0	0
	感謝	5	1.49	7	2.70
	呼び掛け	0	0	15	5.79
	挨拶	8	2.38	7	2.70
	ヘッジ	2	0.60	0	0
	その他	4	1.19	5	1.93
		付随合計	154	45.83	101
意味公式合計		336	100	259	100

表 6-16 に示したように、まず、CC3 より JJ3 のほうで、全体的な意味公式の数が多く見られた（JJ3-336, CC3-259）が、その差は社会人ほど大きくなかった。次に、意味公式のカテゴリからすれば、社会人と同様に、JJ3 では、「付随表現」が最も多用されたのに対して、CC3 では「間接的断り」が最も多く見られた。なお、社会人と同様に JJ3 より CC3 のほうで「直接的断り」が多用されたのに対して、CC3 より JJ3 のほうで「付随表現」と「間接的断り」が多く使用された。しかし、その差は社会人ほど顕著でなかった。各意味公式の使用回数の割合をみれば、各意味公式の使用率が最高でも、JJ3 の {あいづち} の使用率が 24.11% であった。即ち、各意味公式の使用率が少なかったので、JJ3 と CC3 の意味公式の使用割合の有意差を統計的に表すことができないという結果になった。その原因は 4.2.1 を参考にする。各意味公式の使用率をみれば、JJ3 では多く使用された意味公式の上位 6 位が① {あいづち} (24.11%)、② {理由} (19.64%)、③ {詫び} (13.39%)、④ {不可} (11.01%)、⑤ {情報確認・要求} (5.65%)、⑥ {関係維持} (5.06%) という順であったのに対して、CC3 では① {理由} (22.39%)、② {不可} (20.46%)、③ {ためらい} (9.65%)、④ {情報確認・要求} (9.65%)、⑤ {詫び} (6.56%)、⑥ {呼びかけ} (5.79%) という上位 6 位が見られた。そのうち、JJ3 と CC3 双方共に、{理由}、{詫び}、{不可}、{情報確認・要求} という 4 つの意味公式を多用したという共通点が挙げられる。とりわけ、{理由} と {情

報確認・要求}の使用率においては、JJ3とCC3はほぼ同様であった。一方、CC3よりJJ3のほうで{詫び}と{あいづち}が多く見られたのに対して、JJ3よりCC3のほうで{不可}、{ためらい}、{呼びかけ}が多く使用された。

## 6.2.2 被験者による意味公式の使用平均値の有意差

本節において、JJ3とCC3の各被験者が各意味公式の使用平均値に及ぼした影響をt検定で対照する。

表 6-17 JJ3 と CC3 の「直接的断り」における人による各意味公式の平均使用数

	JJ3(n=10)		CC3(n=10)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	3.70	1.889	5.30	2.263	-1.835	0.100
直接的断り合計	3.70	1.889	5.30	2.263	-1.835	0.100

表 6-18 JJ3 と CC3 の「間接的断り」における人による各意味公式の平均使用数

	JJ3(n=10)		CC3(n=10)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	6.60	4.377	5.80	2.251	0.540	0.602
条件提示	0.60	1.075	0.10	0.316	1.342	0.213
詫び	4.50	2.759	1.70	2.058	2.232	0.053
願望	0.60	0.516	0.50	1.080	0.246	0.811
言いさし	0.10	0.316	0.30	0.483	-1.000	0.343
関係維持	1.70	1.567	0.80	1.135	1.536	0.159
遺憾	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
相手を思い止まらせる試み	0.20	0.422	0.90	2.234	-0.978	0.354
代案	0.10	0.316	0.10	0.316	0.000	1.000
保留	0.10	0.316	0.30	0.675	-0.802	0.443
原則的陳述	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
間接的断り合計	14.50	6.948	10.50	4.790	1.874	0.094

表 6-19 JJ3 と CC3 の「付随表現」における人による各意味公式の平均使用数

	JJ3(n=10)		CC3(n=10)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.10	0.316	0.10	0.316	0.000	1.000
あいづち	8.10	9.279	0.60	0.966	2.505	0.034
困惑	0.60	0.966	0.40	0.966	0.480	0.642
ためらい	1.50	1.650	2.50	1.509	-1.246	0.244
驚き	1.10	1.524	0.60	0.699	0.832	0.427
情報確認・要求	1.90	2.726	2.50	1.650	-0.574	0.580
否定の前置き	0.20	0.422	0.00	0.000	1.500	0.168
感謝	0.50	1.269	0.70	1.059	-0.338	0.743
呼びかけ	0.00	0.000	1.50	3.064	-1.548	0.156
挨拶	0.80	1.033	0.70	1.252	0.183	0.859
ヘッジ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
共感	0.20	0.422	0.00	0.000	1.500	0.168
その他	0.40	0.699	0.50	0.527	-0.429	0.678
附加表达总和	15.40	13.401	10.10	5.280	1.022	0.333

JJ3 と CC3 の間に、「直接的断り」、「間接的断り」の意味公式の使用平均値の有意差が見られなかった。「付随表現」の中で、CC3 より JJ3 のほうでは、{あいづち} が有意に多かったが、ほかの意味公式の有意差がなかった。

### 6.2.3 社会的関係が意味公式の使用平均値に与えた影響

まず、JJ3 と CC3 の親・疎関係による意味公式の使用平均値の有意差があるか否かを考察する。

表 6-20 JJ3 親と疎（直接的断り）

	JJ3親 (n=20)		JJ3疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	1.25	1.293	0.60	0.598	2.292	0.033
直接的断り合計	1.25	1.293	0.60	0.598	2.292	0.033

表6-21 JJ3親と疎（間接的断り）

	JJ3親 (n=20)		JJ3疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.95	1.468	1.35	1.226	2.042	0.055
条件提示	0.15	0.489	0.15	0.366	0.000	1.000
詫び	1.25	1.372	1.00	0.562	0.815	0.425
願望	0.15	0.366	0.15	0.366	0.000	1.000
言いさし	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
関係維持	0.50	0.607	0.35	0.587	0.767	0.453
遺憾	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
相手を思い止まらせる試み	0.05	0.224	0.05	0.224	0.000	1.000
代案	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
保留	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
原則的陳述	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
間接的断り合計	4.20	2.687	3.05	1.761	1.852	0.080

表 6-22 JJ3 親と疎 (付随表現)

	JJ3親 (n=20)		JJ3疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
あいづち	1.75	2.197	2.30	3.213	-0.937	0.361
困惑	0.15	0.366	0.15	0.366	0.000	1.000
ためらい	0.25	0.444	0.50	1.000	-0.960	0.349
驚き	0.35	0.813	0.20	0.410	0.900	0.379
情報確認・要求	0.60	1.142	0.35	0.587	1.000	0.330
否定の前置き	0.10	0.308	0.00	0.000	1.453	0.163
感謝	0.15	0.489	0.10	0.308	0.438	0.666
呼びかけ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
挨拶	0.20	0.410	0.20	0.410	0.000	1.000
ヘッジ	0.10	0.308	0.00	0.000	1.453	0.163
その他	0.15	0.366	0.05	0.224	1.453	0.163
付随表現合計	3.85	3.675	3.85	3.937	0.000	1.000

「直接的断り」においては、JJ3 では親しくない人より親しい人のほうに対して、{不可} が有意に多く使用された。JJ3 の親・疎関係による「間接的断り」及び「付随表現」における各意味公式の使用平均値の有意差がなかった。

表 6-23 CC3 親と疎 (直接的断り)

	CC3親 (n=20)		CC3疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	1.60	1.095	1.05	0.686	2.065	0.053
直接的断り合計	1.60	1.095	1.05	0.686	2.065	0.053

表6-24 CC3親と疎（間接的断り）

	CC3親 (n=20)		CC3疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.55	1.099	1.35	0.745	0.721	0.479
条件提示	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
詫び	0.35	0.933	0.50	0.688	-0.616	0.545
願望	0.15	0.489	0.10	0.308	0.370	0.716
言いさし	0.10	0.308	0.05	0.224	0.567	0.577
関係維持	0.30	0.657	0.10	0.308	1.165	0.258
遺憾	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
相手を思い止まらせる試み	0.45	1.395	0.00	0.000	1.443	0.165
代案	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
保留	0.10	0.447	0.05	0.224	0.438	0.666
原則的陳述	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
間接的断り合計	3.10	2.024	2.15	1.226	1.921	0.070

表 6-25 CC3 親と疎（付随表現）

	CC3親 (n=20)		CC3疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
あいつち	0.15	0.366	0.15	0.489	0.000	1.000
困惑	0.10	0.308	0.10	0.308	0.000	1.000
ためらい	0.45	0.510	0.80	0.696	-1.926	0.069
驚き	0.25	0.444	0.05	0.224	1.710	0.104
情報確認・要求	0.30	0.733	0.95	0.686	-2.795	0.012
否定の前置き	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
感謝	0.15	0.366	0.20	0.523	-0.370	0.716
呼びかけ	0.35	1.137	0.40	1.142	-0.567	0.577
挨拶	0.20	0.523	0.15	0.366	0.438	0.666
ヘッジ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
その他	0.20	0.410	0.05	0.224	1.371	0.186
付随表現合計	2.15	2.007	2.90	1.774	-2.032	0.056

CC3の親・疎関係による意味公式の有意差は、「付随表現」に属する {情報確認・要求} のみに見られた。ほかの意味公式の有意差はなかった。

次に、JJ3とCC3の上・同関係による意味公式の使用平均値の有意差があるか否かを考察する。

表 6-26 JJ3 上と同 (直接的断り)

	JJ3上 (n=20)		JJ3同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	0.70	0.733	1.15	1.268	-1.308	0.206
直接的断り合計	0.70	0.733	1.15	1.268	-1.308	0.206

表 6-27 JJ3 上と同 (間接的断り)



	JJ3上 (n=20)		JJ3同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.60	1.046	1.70	1.658	-0.317	0.755
条件提示	0.15	0.366	0.15	0.489	0.000	1.000
詫び	1.45	1.146	0.80	0.834	2.292	0.033
願望	0.20	0.410	0.10	0.308	0.809	0.428
言いさし	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
関係維持	0.40	0.503	0.45	0.686	-0.370	0.716
遺憾	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
相手を思い止まらせる	0.05	0.224	0.05	0.224	0.000	1.000
試み						
代案	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
保留	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
原則的陳述	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
間接的断り合計	3.90	2.292	3.35	2.368	1.137	0.270

表 6-28 JJ3 上と同 (付随表現)

	JJ3上 (n=20)		JJ3同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
あいづち	1.95	2.704	2.10	2.827	-0.264	0.795
困惑	0.15	0.366	0.15	0.366	0.000	1.000
ためらい	0.40	0.940	0.35	0.587	0.252	0.804
驚き	0.05	0.224	0.50	0.827	-2.438	0.025
情報確認・要求	0.50	0.889	0.45	0.945	0.203	0.841
否定の前置き	0.05	0.224	0.05	0.224	0.000	1.000
感謝	0.15	0.366	0.10	0.447	0.567	0.577
呼びかけ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
挨拶	0.05	0.224	0.35	0.489	-2.854	0.010
ヘッジ	0.00	0.000	0.10	0.308	-1.453	0.163
その他	0.20	0.410	0.00	0.000	2.179	0.042
付随表現合計	3.50	3.777	4.20	3.806	-0.903	0.378

JJ3 では、同の人より上の人の方に対して、{詫び} が有意に多かったのに対して、上の人より同の人の方に対して、{驚き} と {挨拶} が有意に多く見られた。その他の意味公式の有意差が見られなかった。

表 6-29 CC3 上と同 (直接的断り)

	CC3上 (n=20)		CC3同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	1.30	1.129	1.35	0.745	-0.195	0.847
直接的断り合計	1.30	1.129	1.35	0.745	-0.195	0.847

表6-30 CC3上と同（間接的断り）

	CC3上 (n=20)		CC3同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.20	0.834	1.70	0.979	-1.949	0.066
条件提示	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
詫び	0.65	0.988	0.20	0.523	1.831	0.083
願望	0.15	0.489	0.10	0.308	0.370	0.716
言いさし	0.10	0.308	0.05	0.224	0.567	0.577
関係維持	0.20	0.523	0.20	0.523	0.000	1.000
遺憾	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
相手を思い止まらせる試み	0.05	0.224	0.40	1.392	-1.324	0.201
代案	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
保留	0.05	0.224	0.10	0.447	-0.438	0.666
原則的陳述	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
間接的断り合計	2.45	2.012	2.80	1.399	-0.824	0.420

表 6-31 CC3 上と同（付随表現）

	CC3上 (n=20)		CC3同 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
あいづち	0.15	0.489	0.15	0.366	0.000	1.000
困惑	0.10	0.308	0.10	0.308	0.000	1.000
ためらい	0.50	0.607	0.75	0.639	-1.751	0.096
驚き	0.10	0.308	0.20	0.410	-1.000	0.330
情報確認・要求	0.70	0.801	0.55	0.759	0.616	0.545
否定の前置き	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
感謝	0.20	0.410	0.15	0.489	0.326	0.748
呼びかけ	0.75	1.517	0.00	0.000	2.210	0.040
挨拶	0.25	0.550	0.10	0.308	1.371	0.186
ヘッジ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
その他	0.15	0.366	0.10	0.308	0.438	0.666
付随表現合計	2.90	2.532	2.15	0.875	1.314	0.204

CC3 の各意味公式の中で、「付随表現」に属する {呼びかけ} の有意差が見られた。即ち、CC3 は上の人に対して {呼びかけ} を多用したが、同の人に対して1つも使用しなかった。その他の意味公式の有意差が見られなかった。

JJ3 と CC3 の社会的関係による各意味公式の使用回数の差をまとめると、JJ3 では親・疎関係による {不可}、上・同関係による {詫び}、{驚き}、{挨拶} の有意差が見られたのに対して、CC3 では親・疎関係による {情報確認・要求}、上・同関係による {呼びかけ} の有意差が伺われた。

## 6.2.4 本節のまとめ

まず、各意味公式の使用数及び割合の対照によると、JJ3 と CC3 双方共に、{理由}、「詫び」、{不可}、{情報確認・要求} という4つの意味公式を多用したという共通点が挙げられた。一方、CC3 より JJ3 のほうで {詫び} と {あいづち} が多く見られたのに対して、JJ3 より CC3 のほうで {不可}、{ためらい}、{呼びかけ} が多く使用された。

つぎに、上記の JJ3 と CC3 の相違点の中で、{あいづち} のみが、人による各意味公式の使用回数の平均値の有意差の考察では検証された。即ち、CC3 より JJ3 のほうでは、{あいづち} が有意に多かった。

JJ3 と CC3 の社会的関係による各意味公式の使用平均値の有意差をまとめると、JJ3 では親の人のほうに対して {不可} が多用され、同の人に対して {驚き}、{挨拶} が有意に多く見られたのに対して、CC3 では疎の人のほうに対して {情報確認・要求} が多く見られ、上の人に対して {呼びかけ} の多く使用されたことがわかった。

## 6.3 意味公式の内容と表現形式の分析

6.2 で前述したとおり、JJ3 と CC3 ともに {理由}、{詫び}、{不可}、{情報要求} が主に使用されたことがわかった。そのうち、JJ3 で最も多用された意味公式は {あいづち} であったが、CC3 では6回しか出現しなかった。{情報確認・要求} は、ロールプレイの仕掛け人が情報を完全に提供できるか否かの次第であるため、本節においては、考察対象外とする。なお、第4章における社会人の勧誘を断る言語行動と対照できるように、本節においては、{不可}、{理由}、{詫び}、{あいづち} を取り上げ、意味公式の内容を分析する。ただし、なお、CC3 で見られた {あいづち} の数が少なかったため、CC3 の社会的関係が {あいづち} の表現形式の使い分けに与えた影響を考察できない。

### 6.3.1 {不可} の内容分析

第4章と同様に、{不可}の内容を分析するに先立って、誘い手のフェイスを脅かす度合い（FT度）の大きさ、会話のコンテキストなどに基づき、{不可}を①能力・状況、②緩和的結論、③意志、④本音、⑤否定の5つに分類した。

学生を対象とする調査3においても、JJ3の{不可}表現の中で、同じ「無理」という表現であるが、「緩和的結論」に分類する場合もあれば、「能力・状況の不可」に分類する場合もある。それは「無理」の前後に「ちょっと」、「かもしれない」などのような緩和的表現があるか否かによって判断する。即ち、「ちょっと無理」、「むりかもしれない」などの表現を「緩和的結論」とするのに対して、「明日無理」のような表現を「能力・状況」の{不可}とする。

下記の表6-32はJJ3とCC3の{不可}の内容分類及びそれにふさわしい例である。

表6-32 JJ3とCC3の{不可}の内容分類及び例

不可の内容	JJ3	CC3
能力・状況	15(40.54%)	14(26.42%)
	出られないんですよ。/行けません。/明日は無理/きつい	可是我去不了, /然后可能没有时间。/可能不行,(行けません。/時間もありません。/ためか。)
緩和的結論	10(27.03%)	0
	ちょっと難しいかもしれないです。/明日はちょっと無理/いやちょっときつい	
意志	3(8.11%)	10(18.87%)
	行かないです。	我还是不去了,(やっぱり行かない)
本音	7(18.92%)	27(50.94%)
	行きたくないんだよねー/絶対ヤダ/多分気が向かないけど	明天我不太想去。/所以就算了吧。/我就不用了。/可不可以不去,(明日行きたくない。/だからいいです。/行かなくても大丈夫でしょう。/行かなくてもいい?)
否定	2(5.41%)	2(3.78%)
	いやいやいやいやいや、	不不不不不不。(いやいやいやいやいや)
合計	37(100%)	53(100%)

表6-32に示した使用回数及び割合からみれば、JJ3で「能力・状況」が最も多用されたのにつづき、「緩和的結論」、「本音」も多く見られた。それに対して、CC3では「本音」が最も多く使用されたのにつづき、「能力・状況」、「意志」の使用数も少なくなかった。また、

JJ3 で 2 番目に多く使用された「緩和的結論」は、CC3 では 1 つも見られなかったのに対して、CC3 で多く見られた「本音」と「意志」の使用数及び割合は JJ3 より多かった。まとめた結果、JJ3 では相手のフェイスを脅かす度合いが小さい「能力・状況」または「緩和的結論」が多用されたのに対して、CC3 では「能力・状況」のほかに、相手の FT 度が大きい「本音」または「意志」も好まれたという結果が観察された。この結果によって、CC3 のほうが JJ3 より直接的な表現を好んだとは言えるだろう。

次に、親・疎関係と力関係が {不可} の内容に及ぼした影響を考察する。表 6-33 は親・疎関係による JJ3 と CC3 の {不可} の各内容の使い分けの詳細である。

表 6-33 JJ3 と CC3 の親・疎関係による {不可} の各内容の使い分け

	能力・状況	緩和的結論	意志	本音	否定	合計
JJ3 親合計	10	5	1	7	2	25
JJ3 親割合/37	27.03%	13.51%	2.7%	18.92%	5.41%	67.57%
JJ3 疎合計	5	5	2	0	0	12
JJ3 疎割合/37	13.51%	13.51%	5.41%	0	0	32.43%
CC3 親合計	5	0	4	21	2	32
CC3 親割合/53	9.43%	0	7.55%	39.62%	3.77%	60.38%
CC3 疎合計	9	0	6	6	0	21
CC3 疎割合/53	16.98%	0	11.32%	11.32%	0	39.62%

表 6-33 によると、JJ3 と CC3 双方共に、親・疎関係が {不可} の各内容の使用回数及び使用率に与えた影響は、主に相手の FT 度が小さい「能力・状況」と相手の FT 度が大きい「本音」に集中した。まず、親・疎による「本音」の使い分けが最も際立っていた。即ち、JJ3 で見られた「本音」の使用回数は CC3 ほど多くなかったが、全て親しい人のみに対して使用された。また、CC3 でも、疎の人より親の人のほうに対して、「本音」が圧倒的に多用されたので、CC3 の親・疎による「本音」の差が最も顕著であった。次に、JJ3 では疎の人より親の人のほうに対して、「能力・状況」が多用されたのに対して、CC3 では親の人より疎の人のほうに対して、「能力・状況」が多く用いられたという興味深い結果になった。この結果に関しては、学生を対象に、フォローアップ・インタビューを行った。JJ3 では親しい人のほうに対して、できるだけ詳しい情報を提供するの失礼ではないという答えが得られたのに対して、CC3 では親しい人のほうに対して、詳しい情報を提供するほど、自分の理由が嘘だったとばれる危険性が高いので、具体的な情報を避けようとするという答えもあった。

力関係による JJ3 と CC3 の {不可} の各内容の使い分けを表 6-34 に示す。

表 6-34 JJ3 と CC3 の上・同関係による {不可} の各内容の使い分け

	能力・状況	緩和的結論	意志	本音	否定	合計
JJ3 上合計	9	2	1	2	0	14
JJ3 上割合/37	24.32%	5.41%	2.7%	5.41%	0	37.84%
JJ3 同合計	6	8	2	5	2	23
JJ3 同割合/37	16.22%	21.62%	5.41%	13.51%	5.41%	62.16%
CC3 上合計	7	0	3	16	0	26
CC3 上割合/53	13.21%	0	5.66%	30.19%	0	49.06%
CC3 同合計	7	0	7	11	2	27
CC3 同割合/53	13.21%	0	13.21%	20.75%	3.77%	50.94%

表 6-34 によると、JJ3 では、力関係が {不可} の内容に与えた影響は主に「緩和的結論」に集中した。つまり、JJ3 では上の人より同の人のほうに対して、「緩和的結論」が好まれたという傾向が観察された。一方、CC3 では、同の人より上の人に対して、「本音」が多用されたことも伺われた。

社会的関係が JJ3 と CC3 の {不可} の内容の使い分けに与えた影響をまとめると、まず、JJ3 と CC3 双方共に、疎の人より親の人のほうに対して、相手の FT 度が大きい「本音」が多用されたという共通点がわかったが、JJ3 では親の人のほうに対して「能力・状況」が多用されたのに対して、CC3 では疎の人のほうに対して「能力・状況」が多く用いられたという相違点も見られた。上・同関係が {不可} の内容に与えた影響に関しては、JJ3 では同の人のほうに対して「緩和的結論」が好まれたのに対して、CC3 では上の人に対して「本音」が多用された傾向が見られた。

### 6.3.2 {理由} の内容分析

本節においても、4.3.2、4.3.2 と同様に、西村（2007）、池田（2009）のような具体的内容による分類を参考に、相手の FT の大きさに基づき、そして {理由} の曖昧さと具体的内容を合わせて、学生を対象とする勧誘に対する断りにおける「理由」を①「明日の予定詳細」、②「アルバイトのため」、③「大学の部活動などのため」、④「勉強や授業のため」、⑤「体調不良」、⑥「金銭不足」、⑦、「明日の予定概略」、⑧「明日の不都合の概略」、⑨「気持の表明」の 9 つに分類される。そのうち、①、②、③、④、⑤、⑥は「具体的な理由」に分類できる。⑦と⑧は「情報不足の理由」に分類できる。「具体的な理由」が相手の FT 度が最も小さい断り言語行動であるのに対して、「気持の表明」が相手の FT 度が最も大きい断り言語行動だと見なす。

{理由} 内容を分類する基準は {理由} 表現のほかに、1 つの断り会話で現れたいくつか

の {理由} の繋がりによることもある。下記の会話例のように、2度目に現れた「時間が空いてないんで」という理由表現をそもそも「情報不足の理由」とすべきであるが、1度目の「バイトが入ってて」という「具体的な理由」の後ろにきて、「具体的な情報」を補う役割を果たすので、この会話例では「具体的な理由」の中の「アルバイトのため」に分類した。

1 回目の断り

- 6B 明日ー…。でも明日だとちょっと夜中になっちゃいますね。  
 7A というと？何か予定あるの？明日は  
 8B バイトが入ってて。  
 9A あー、そっか。バイトね。  
 10B もうちょっと早く言ってくれば行けたかもしれないんですけど  
 11A あー、そうだ、急に言っちゃったからごめんね。  
 12B すいません。〇〇さんにはお世話になってるから行きたいんですけど、いやーちょっと。時間が空いてないんで、(あーダメだよ) 個人的に話しますね。  
 13A わかった、ごめんね急に誘って。ありがとう。  
 14B ありがとうございます。  
 15A はい。(JJ3M4 疎・上)

上記の分類基準に基づき、JJ3 と CC3 の勧誘に対する断りにおける {理由} の内容を表 6-35 のように分類する。

表 6-35 JJ3 と CC3 の {理由} の内容分類及び例

理由内容の上位分類	理由内容の下位分類	JJ3	CC3
具体的な理由	明日の予定詳細	5(7.58%)	9(15.52%)
		明日は、身内に不幸があつて葬式に行かなきゃいけなくて/4. でもその友達、昨日地元から東京に遊びに来てて、私がいないと遊ぶ相手がいらないんですよ。	但是明天我有体侧，体测完了之后我要去洗个澡，完全没有时间去啊。/我去，明天要把自行车买了，要不然其它没有时间，我明天下午还有会议。/但是我那个，就是舍友约好了一起去聚餐。(明日体育テストがある。その後浴場に行く予定があるから、行ける時間がぜんぜんない。/行くよ

		う。明日自転車を買うつもりです。ほかに余裕がなさそうです。明日の午後にまだ会議がある。／だけど、私さ、ルームメイトといっしょに食事する約束がある。)
	17 (25.76%)	0
アルバイトのため	明日はバイトが入ってて、/2. 明日バイトバイト。/4. 時間決まっちゃってるんで、その時間にバイト入っちゃってるから、	
	1 (1.52%)	4 (6.90%)
大学の部活動などのため	明日はサークルの集まりがあつて	但你知道咱们部门有个那个…东西要交啊，那个计划、那个安排表，我还没做好呢，/明天晚上，我还要，还有活动，就是团日活动，对。（うちの部である…提出するものがあるよ。あの計画、あのスケジュール、まだできていないですよ。／明日の夜、なら、私まだ、活動があつて、部活などあて、うん。）
	6 (9.09%)	5 (8.62%)
勉強や授業のため	用事あるもん、明後日課題提出しなきゃいけないからさ/自分ちょっと、来月に検定試験があつて、そのために勉強で忙しいので	然后明天我课全满。/明天…我那个后天的话，有考试，所以我明天…明天的话，想复习一下。（それで明日授業がいっぱいです。／明日か…明後日試験がある。だから、明日…明日なら、復習したい。）
	2 (3.03%)	0
体調不良	ちょっと体調が悪いので、もうちょっと休みたいので	
	1 (1.52%)	0
金銭不足	今月やばくてお金ないんだよ。	
具体的な理由合計	32 (48.48%)	18 (31.03%)
情報不	明日の予定概略	17 (29.31%)



足の理由		明日ちょっと用事があるんですよ/なんか他のことの手配がまだちょっとあって、行けるかわからないので/明日、空いてないです	明天的话可能还真的没时间。/然后我那天我正好是有点事，我家里有点急事。/我晚上有点事。/但我这几天都挺忙的，所以我，也不知道明天能不能行啊。（明日なら本当に時間がない。/それであの日ちょうど用事があって、うちの急用だ。/夜にちょっと用事がある。/このうち、忙しそうです。だからこそ、明日行けるかどうか知らない。）
	明日の不都合の概略	5(7.58%) でも明日ほんとにちょっと、急すぎて/ちょっと急だし、	0
	情報不足の理由合計	23(34.85%)	17(29.31%)
気持の表明	気持の表明	11(16.67%)	23(39.66%)
		え、ちょっとめんどくさいから、/だるい！/私そんなに好きじゃないあの人。/あれ交換留学じゃん？あれ一人しか行けなくて、俺服部に負けてさ、俺服部よりも成績もいいし TOEIC も通ってるのに、ちょっと…。	我觉得吧，聚会这事儿挺无聊的。/见过几面嘛，也不是很熟。/就是明天有点儿不想去。/我不喜欢这种交际。（この集まりって結構つまらないと思う。/何回会ったこともあるけど、まだよく知らない。/明日行きたくない。/このような付き合いってよく好きじゃない。）
合計		66(100%)	58(100%)

表 6-35 によると、JJ3 では、相手の FT 度が小さい「具体的な理由」の使用率が 50%で、最も多用されたのにつづき、相手の FT 度がより大きい「情報不足の理由」が 2 番目に多く使用された。相手の FT 度が最も大きい「気持の表明」の使用率が最も少なかった。一方、CC3 では、「気持の表明」の使用率が最も多かったのにつづき、「具体的な理由」が 2 番目に多く用いられて、「情報不足の理由」の使用率が最も低かった。まとめると、JJ3 では最小値で現れた相手の FT 度が大きい「気持の表明」は、CC3 では最高値として表れたという相違点がわかった。

なお、「具体的な理由」の下位分類をみれば、JJ3 で見られた「具体的な理由」は上記のように 6 つに分類されるが、ほとんど「アルバイトのため」に集中した。それに対して、

CC3 で現れた「具体的な理由」は「明日の予定詳細」、「勉強や授業のため」、「大学の部活動のため」の3つに集中した。ほかの「アルバイトのため」、「体調不良」、「金銭不足」の3つの具体的な理由は、CC3 では1度も使用されなかった。とりわけ、JJ3 で最も多用された「アルバイトのため」は、CC3 では1つも見られなかった。JJ3 と CC3 の「具体的な理由」の内容の相違点によって、日中の大学生の生活スタイルの相違点も伺われた。即ち、日本人の大学生にとっては、ごく普通のアルバイトは中国人の大学生の生活ではまだ普及していないことがわかった。

つづいては、親・疎関係と力関係が {理由} の内容の使い分けに及ぼした影響を考察する。まず、親・疎関係が {理由} の内容の使い分けに与えた影響を表 6-36 に示す。

表 6-36 JJ3 と CC3 の親・疎関係による {理由} の各内容の使い分け

	具体的な理由						具体的 な理由 合計	情報不足な 理由		情報不 足の理 由合計	気持 の 表明	合計
	明日 の予 定詳 細	アル バイ トの ため	大学 の活 動な どの ため	勉強 や授 業の ため	体調 不良	金銭 不足		明日 の不 都合 の概 略	明日 の予 定概 略			
JJ3 親合計	2	8	1	6	1	1	19	5	7	12	8	39
JJ3 親割合 /66	3.03%	12.12%	1.52%	9.1%	1.52%	1.52%	28.79%	7.58%	10.61%	18.18%	12.12%	59.09%
JJ3 疎合計	3	9	0	0	1	0	13	0	11	11	3	27
JJ3 疎割合 /66	4.55%	13.64%	0	0	1.52%	0	19.7%	0	16.67%	16.67%	4.55%	40.91%
CC3 親合計	4	0	0	3	0	0	7	0	6	6	18	31
CC3 親割合 /58	6.9%	0	0	5.17%	0	0	12.07%	0	10.34%	10.34%	31.03%	53.45%
CC3 疎合計	5	0	4	2	0	0	11	0	11	11	5	27
CC3 疎割合 /58	8.62%	0	6.90%	3.45%	0	0	18.97%	0	18.97%	18.97%	8.62%	46.55%

表 6-36 によると、親・疎関係が {理由} の内容の使い分けに与えた影響は、CC3 の「気持の表明」に最も目立っていた。即ち、CC3 では、疎の人より親の人のほうに対して、「気持の表明」が相当に多用された（親-31%, 疎-8.6%）。CC3 と同様に、JJ3 でも、疎の人より親の人のほうに対して、「気持の表明」が多く使用されたが、その差は CC3 ほど目立ってい

なかった。つづいて、JJ3 では、親しい人に対しては、「授業や勉強のため」が6回現れたが、疎の人に対しては、いずれも1度も使用されなかった。一方、CC3 では、「気持の表明」のほかに、親の人より疎の人のほうに対しては、「明日の予定概略」が多く用いられた。その他、親・疎関係がほかの {理由} の内容に及ぼした影響が観察されなかった。

次に、力関係が JJ3 と CC3 の {理由} の使い分けに及ぼした影響を表 6-37 にまとめる。

表 6-37 JJ3 と CC3 の上・同関係による {理由} の各内容の使い分け

	具体的な理由						具体的 な理由 合計	情報 不足な理由		情報不 足の理 由	気持の 表明	合計
	明日 の予 定詳 細	アル バイ トの ため	大学 の活 動な どの ため	勉強 や授 業の ため	体調 不良	金銭 不足		明日の 不都合 の概略	明日の 予定概 略			
JJ3 上合計	5	10	0	4	2	0	21	2	8	10	1	32
JJ3 上割合 /66	7.58%	15.15%	0	6.06%	3.03%	0	31.82%	3.03%	12.12%	15.15%	1.52%	48.50%
JJ3 同合計	0	7	1	2	0	1	11	3	10	13	10	34
JJ3 同割合 /66	0	10.61%	1.52%	3.03%	0	1.52%	16.67%	4.55%	15.15%	19.70%	15.15%	51.52%
CC3 上合計	3	0	4	4	0	0	11	0	4	4	9	24
CC3 上割合 /58	5.17%	0	6.90%	6.90%	0	0	18.97%	0	6.9%	6.9%	15.52%	41.38%
CC3 同合計	6	0	0	1	0	0	7	0	13	13	14	34
CC3 同割合 /58	10.34%	0	0	1.72%	0	0	12.07%	0	22.41%	22.41%	24.14%	58.62%

{理由} の内容のカテゴリーを見ると、JJ3 と CC3 共に上より上の人のほうに対して、「具体的な理由」を多く使用したのに対して、上より同の人のほうに対して、「情報不足の理由」と「気持の表明」を多く用いた。{理由} の内容の下位分類を見ると、力関係が {理由} に与えた影響は、主に JJ3 の「明日の予定詳細」、「気持の表明」と CC3 の「明日の予定概略」と「気持の表明」に集中した。具体的に言えば、JJ3 では、上の人に対して、「明日の予定詳細」が5回使用されたが、同の人のほうに対しては、1度も見られなかった。また、同の人のほうに対して、「気持の表明」が10回も多用されたが、上の人に対しては、1度しかなかった。一方、CC3 では、上の人より同の人のほうに対して、「明日の予定概略」が多

く使用された。また、JJ3と同様に、上の人より同の人のほうに対して、「気持の表明」が多用された。

上記の親・疎関係と力関係が{理由}の内容に及ぼした影響をまとめると、JJ3とCC3ともに、親・疎関係と力関係が「気持の表明」に影響を及ぼしたことがわかった。JJ3とCC3のいずれも、親の人と同の人のほうに対して、「気持の表明」を多用した。そのうち、CC3の親・疎関係が「気持の表明」に与えた影響は最も顕著であった。つづいて、JJ3とCC3を問わず、社会的変数が「明日の予定概略」に与えた影響も伺われた。JJ3とCC3ともに、疎の人と同の人に対して、「明日の予定概略」を多く使用した。即ち、両者共に、疎の人と同の人のほうに対して、「明日の予定概略」が好まれた。そのうち、力関係がCC3の「明日の予定概略」に及ぼした影響が著しく見られた。

最後に、{理由}内容のカテゴリーの分類によって、{理由}のカテゴリーの展開パターンから、日中対照を行う。JJ3とCC3の{理由}内容のカテゴリーの展開を表6-38に示す。

表 6-38 JJ3 と CC3 の {理由} の内容カテゴリーの分類による展開パターン<sup>36</sup>

理由の展開パターン	JJ3 場面数 (割合%)	CC3 場面数(割合%)
具体的な理由のみ	17 (45.9%)	11 (31.4%)
情報不足の理由のみ	11 (29.7%)	7 (20%)
気持の表明のみ	4 (10.8%)	11 (31.4%)
情報不足の理由+具体的な理由	3 (8.1%)	0
具体的な理由+気持の表明	0	2 (5.7%)
情報不足の理由+気持の表明	1 (2.7%)	4 (11.4%)
具体的な理由+情報不足の理由+気持の表明	1 (2.7%)	0
合計	37 (100%)	35 (100%)

表 6-38 に示したとおり、JJ3 では「具体的な理由のみ」が主に使用されたのに対して、CC3 では「具体的な理由のみ」と「気持の表明のみ」が同じ使用率として中心に使用された。また、JJ3 より CC3 のほうでは「気持の表明のみ」が顕著に多く用いられたのに対して、CC3 より JJ3 のほうでは「具体的な理由のみ」と「情報不足の理由のみ」が多く見られたという相違点が挙げられた。

### 6.3.3 {あいづち} の表現形式の分析

6.2 で述べたように、JJ3 では {あいづち} の使用率が最も多かった (24.11%) が、CC3 で見られた {あいづち} の使用回数が 6 回 (2.32%) のみで、ごく少なかった。従って、本節では、JJ3 の {あいづち} の表現形式を分類した上で、さらに、親・疎関係と力関係が

JJ3の{あいづち}の表現形式に与えた影響を考察するが、CC3で現れた{あいづち}の数がごく少なかったため、CC3の{あいづち}の表現形式を本節においては考察しないことにする。

JJ3で見られた{あいづち}の表現形式は、「うん／うーん／うんうん」、「はい／はいはい」、「んー」、「あ、そうなの」、「そうなんですか」、「あー」、「繰り返し」がある。

本節においても、メイナード(1993)と堀口(1997)の分類を参考に、調査3に現れた{あいづち}の機能を①「聞いている」、②「同意・支持」、③「感情の表出」、④「了解」の4つに分類する。

JJ3の{あいづち}機能の使い分けの詳細を、表6-39にまとめる。

表6-39 JJ3の{あいづち}の機能分類

あいづちの機能	あいづちの表現形式	回数	割合%
聞いている	うん／うーん／うんうん	34	41.98
	はい／はいはい	32	39.51
	んー	1	1.23
	あー	1	1.23
	聞いている合計	68	83.95
同意・支持	繰り返し	2	2.47
	同意・支持合計	2	2.47
感情の表出	そうなんですか	2	2.47
	繰り返し	1	1.23
	感情の表出合計	3	3.70
了解	あ、そうなの	1	1.23
	あー	7	8.64
	了解合計	8	9.88
合計		81	100

表6-39によると、JJ3の{あいづち}の機能分類による使い分けの中で、「聞いている」という機能を果たしている{あいづち}が最も多く使用されたことがわかった(68回/83.95%)。そのうち、「聞いている」を表す「うん／うーん／うんうん」という表現形式が最も多用された(34/41.98%)。つづいて「聞いている」を表す「はい／はいはい」という表現形式の使用数及び割合も数多かった(32/39.51%)。その他の「同意・支持」、「感情の表出」、「了解」の機能を表す{あいづち}の使用率は、いずれも10%以下で、数が少なかった。

次に、親・疎関係と力関係がJJ3の{あいづち}の使い分けに与えた影響を考察する。

JJ3の親・疎による {あいづち} の使い分けを表 6-40 に示す。

表 6-40 JJ3の親・疎関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	親(回数)	親割合/81	疎(回数)	疎割合/81
聞いている	うん／うーん／うんうん	14	17.28%	20	24.69%
	はい／はいはい	12	14.81%	20	24.69%
	んー	0	0	1	1.23%
	あー	1	1.23%	0	0
	聞いている合計	27	33.33%	41	50.62%
同意・支持	繰り返し	1	1.23%	1	1.23%
	同意・支持合計	1	1.23%	1	1.23%
感情の表出	そうなんですか	2	2.47%	0	0
	繰り返し	0	0	1	1.23%
	感情の表出合計	2	2.47%	1	1.23%
了解	あ、そうなの？	1	1.23%	0	0
	あー	4	4.94%	3	3.70%
	了解合計	5	6.17%	3	3.70%
合計		35	43.21%	46	56.79%

親・疎による {あいづち} の各表現形式の割合からみれば、親の人より疎の人のほうに対して、 {あいづち} が全体的に多く使用された (親-43.21%, 疎-56.79%)。それは JJ3 では親の人より疎の人のほうに対して、「聞いている」という機能を表す「うん／うんうん／うーん」 (親-17.28%, 疎-24.69%)、「はい／はいはい」 (親-14.81%, 疎-24.69%) が多用されたためである。ほかの {あいづち} の表現形式の使用回数は、親・疎関係を問わず、いずれも少なかったため、親・疎関係が {あいづち} の表現形式に与えた影響が観察されなかった。

なお、JJ3の同・下による {あいづち} の使い分けを表 6-41 にまとめる。

表 6-41 JJ3の同・下関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	上(回数)	上割合/81	同(回数)	同割合/81
聞いている	うん／うーん／うんうん	0	0	34	41.98%
	はい／はいはい	31	38.27%	1	1.23%
	んー	0	0	1	1.23%
	あー	1	1.23%	0	0

	聞いている合計	32	39.51%	36	44.44%
同意・支持	繰り返し	0	0	2	2.47%
	同意・支持合計	0	0	2	2.47%
感情の表出	そうなんですか	2	2.47%	0	0
	繰り返し	0	0	1	1.23%
	感情の表出合計	2	2.47%	1	1.23%
了解	あ、そうなの？	0	0	1	1.23%
	あー	5	6.17%	2	2.47%
	了解合計	5	6.17%	3	3.70%
合計		39	48.15%	42	51.85%

表 6-41 に示したように、「聞いている」という機能を表す「うん／うーん／うんうん」と「はい／はいはい」に、力関係が与えた影響が顕著に見られた。具体的に言えば、上の人のほうに対して、「うん／うーん／うんうん」の使用率がゼロであったのに対して、同の人のほうに対して、「うん／うーん／うんうん」の使用率が 41.98%で、{あいづち}の各表現形式の使用率で最も高かった。なお、上の人のほうに対して、「聞いている」という機能を表す「はい／はいはい」の使用率は 38.27%であったのに対して、同のほうに対して、「はい／はいはい」の使用率はわずか 1.23%であった。

上記の親・疎関係と力関係が JJ3 の {あいづち} の内容に与えた影響をまとめると、主に「聞いている」という機能を表す「うん／うーん／うんうん」と「はい／はいはい」に集中した。そのうち、親・疎関係が与えた影響が見られたが、親・疎による差がそれほど大きくなかったのに対して、力関係による影響が際立っていた。即ち、JJ3 では上の人のほうに対して、「うん／うーん／うんうん」が多く見られたのに対して、同の人のほうに対して、「はい／はいはい」が多用された。

### 6.3.4 {詫び} の表現形式の分析

6.2 で述べたように、JJ3 では {詫び} が 3 番目に多く見られたが (JJ3-45/13.39%)、CC3 では {詫び} が 5 番目に多かった (CC3-17/6.56%)。しかし、人による使用平均値の有意差の考察によると、JJ3 と CC3 の間に、{詫び} の有意差が見られなかった。本節において、{詫び} の表現形式の分類に基づき、JJ3 と CC3 の {詫び} の表現形式の異同、さらに親・疎関係と力関係が {詫び} の表現形式に与えた影響、そして {詫び} の連続使用回数のパターンを比較しようとする。

まず、JJ3 の {詫び} は「申し訳ないです」、「すいません」、「ごめんなさい」、「ごめん」の表現形式がある。各表現形式の使用数及び割合を表 6-42 に示す。

表 6-42 JJ3 の {詫び} の表現形式の分類

	申し訳ないです	すいません	ごめんなさい	ごめん	合計
JJ3 合計	5	26	1	13	45
JJ3 割合%	11.11	57.78	2.22	28.89	100

JJ3 では「すいません」が最も多く使用された（26 回/57.78%）。そのつづき、「ごめんなさい」が 2 番目に多用された（13 回/28.89%）。

つづいては、JJ3 の親・疎と上・同関係による {詫び} の表現形式の使い分けの詳細を表 6-43 に示す。

表 6-43 JJ3 の社会的関係による {詫び} の表現形式の使い分け

	申し訳ないです	すいません	ごめんなさい	ごめん	合計
JJ3 親合計	4	15	1	5	25
JJ3 親割合/45	8.89%	33.33%	2.22%	11.11%	55.56%
JJ3 疎合計	1	11	0	8	20
JJ3 疎割合/45	2.22%	24.44%	0	17.78%	44.44%
JJ3 上合計	4	23	0	2	29
JJ3 上割合/45	8.89%	51.11%	0	4.44%	64.44%
JJ3 同合計	1	3	1	11	16
JJ3 同割合/45	2.22%	6.67%	2.22%	24.44%	35.56%

表 6-43 に示したように、親・疎関係が JJ3 の {詫び} の表現形式に与えた影響が顕著に見られなかった。一方、力関係が「すいません」、「ごめん」に与えた影響が際立っていた。即ち、JJ3 で上の人に対して「すいません」が最も多く見られたのに対して、同の人に対して「ごめん」が多用された。そのうち、力関係が「すいません」に及ぼした影響が最も顕著であった（上-51.1%, 同-6.7%）。

CC3 の {詫び} を「对不起」（duibuqi すみません）、「不好意思」（buhaoyisi ごめんなさい）2 つの表現形式に分けた。その表現形式の使い分けを表 6-44 に示す。

表 6-44 CC3 の {詫び} の表現形式の分類

	对不起（すみません）	不好意思（ごめんなさい）	合計
CC3 合計	1	16	17
CC3 割合%	5.88	94.12	100



表 6-44 によると、CC3 では、「不好意思」(buhaoyisi ごめんなさい) (16 回/94.12%) が圧倒的に多用された一方で、「对不起」(duibuqi すみません) は 1 度しか見られなかった。

つぎに、CC3 の親・疎と上・同による {あいづち} の内容の使い分けを 6-45 表に示す。

表 6-45 CC3 の社会的関係による {詫び} の表現形式の分類

	对不起 (すみません)	不好意思 (ごめんなさい)	合計
CC3 親合計	0	7	7
CC3 親割合/17	0	41.18%	41.18%
CC3 疎合計	1	9	10
CC3 疎割合/17	5.88%	52.94%	58.82%
CC3 上合計	1	12	13
CC3 上割合/17	5.88%	70.59%	76.47%
CC3 同合計	0	4	4
CC3 同割合/17	0	23.53%	23.53%

親・疎関係が CC3 の {詫び} の表現形式の使い分けに与えたは顕著に見られなかったのに対して、同の人より上の人の方に対して、「不好意思」(buhaoyisi ごめんなさい) が多用されたという力関係による待遇性が観察された。

上記の結果をまとめると、JJ3 と CC3 とともに、親・疎関係より力関係のほうが {詫び} の表現形式に影響を著しく及ぼしたという共通点が見られた。即ち、JJ3 では上の人の方に対して、「すみません」が著しく多く使用されたのに対して、CC3 では上の人の方に対して、「不好意思」(buhaoyisi ごめんなさい) が多く見られた。

また、同じ場面において、{詫び} の連続使用回数のパターンも考察する。表 6-46 は JJ3 と CC3 の 1 つの場面における {詫び} の使用回数による場面数及び割合である。

表 6-46 JJ3 と CC3 の 1 つの場面における {詫び} の使用回数による場面数及び割合

詫びの使用回数	JJ3 合計(割合%)	CC3 合計(割合%)
詫び 5 回	1(2.5%)	0
詫び 4 回	0	1(2.5%)
詫び 3 回	2(5%)	0
詫び 2 回	8(20%)	2(5%)
詫び 1 回	18(45%)	9(22.5%)
詫びなし	11(27.5%)	28(70%)
合計	40(100%)	40(100%)

表 6-46 によると、JJ3 と CC3 の {詫び} の展開パターンは、いずれも「詫びの使用なし」、「詫びの 1 回使用」、「詫びの 2 回使用」の 3 つのパターンに集中した。しかし、JJ3 では「詫びの 1 回使用」のパターンが最も多く見られたのに対して、CC3 では「詫びの使用なし」のパターンが最も多用された。また、上記の 2 つのパターンの使用率をみると、JJ3 と CC3 両者間の差も目立っていた。とりわけ、JJ3 より CC3 のほうでは、「詫びの使用なし」の出現回数がずいぶん多かった。

### 6.3.5 本節のまとめ

本節においては、JJ3 と CC3 とともに多く見られた意味公式である {不可}、{理由} の内容分析、{あいづち} と {詫び} の表現形式の分析を行ってきた。

まず、JJ3 では相手の FT 度が小さい「能力・状況」または「緩和的結論」が多用されたのに対して、CC3 では「能力・状況」のほかに、相手の FT 度が大きい「本音」または「意志」も好まれたといった結果が観察された。この結果によって、CC3 のほうが JJ3 より直接的な表現を好んだとは言える。社会的関係が JJ3 と CC3 の {不可} の内容の使い分けに与えた影響をまとめると、まず、JJ3 と CC3 双方共に、疎の人より親の人のほうに対して、相手の FT 度が大きい「本音」が多用されたという共通点が挙げられたが、JJ3 では親の人のほうに対して「能力・状況」が多用されたのに対して、CC3 では疎の人のほうに対して「能力・状況」が多く用いられたという相違点もわかった。一方、力関係が {不可} の内容に与えた影響に関しては、JJ3 では同の人のほうに対して「緩和的結論」が好まれたのに対して、CC3 では上の人のほうに対して、「本音」が多用された傾向が伺われた。

次に、{理由} の内容分析によると、JJ3 では「具体的な理由」が最も多用されたのに対して、CC3 では「気持の表明」が最も多く見られたという相違点がわかった。また、CC3 では親しい人のほうに対して「気持の表明」が顕著に多く見られた。{理由} の内容のカテゴリーの展開パターンをみると、JJ3 では「具体的な理由のみ」の展開パターンが主に使用されたのに対して、CC3 では「具体的な理由のみ」と「気持の表明のみ」の 2 つの展開パターンが同じ使用率として中心に使用された。

また、JJ3 の {あいづち} の表現形式の分析によると、「聞いている」という機能を表す {あいづち} が JJ3 で最も多く見られた。そのうち、「うん／うーん／うんうん」という表現形式が最も多用されたのにつづき、「はい／はいはい」という表現形式も多く見られた。また、社会的関係が JJ3 の {あいづち} の表現形式に与えた影響をまとめると、親・疎関係より力関係が「聞いている」という機能を表す「うん／うーん／うんうん」と「はい／はいはい」に与えた影響が顕著に見られた。

最後に、{詫び} の表現形式の分析による結果をまとめると、JJ3 では「すみません」が

最も多用されたのに対して、CC3 では「不好意思」(buhayisi ごめんなさい) の出現回数が最も多かった。さらに、JJ3 と CC3 とともに、親・疎関係より力関係のほうが {詫び} の表現形式に影響を著しく及ぼしたという共通点が見られた。そして、1 会話ごとに {詫び} の連続使用回数のパターンの対照によると、JJ3 では「詫びの 1 回使用」が最も好まれたのに対して、CC3 では「詫びなし」が最も多用された傾向もわかった。

## 6.4 本章のまとめ

6.1 における会話の構造分析によると、JJ3 と CC3 の会話構造がほぼ同じであったという結論を導き出した。具体的に言えば、両者ともに最初に、{あいづち}、{情報確認・要求} などを含む「付随表現」で、相手からの誘いに関心を見せたり、会話を進めた。勧誘・断りの交渉話段においては、{理由} と {不可}、{詫び}、{ためらい}、{困惑} のような「間接的断り」、「直接的断り」、「付随表現」を同時に用いて、相手を断った。最後の終了部においては、双方ともに、{感謝}、{挨拶} などによって、相手との関係を維持しようとする特徴が観察された。一方、JJ3 のほうでは {あいづち}、{詫び} などが多用されたのに対して、CC3 のほうでは {不可} が多用されたという相違も伺われた。ところで、社会人に比べると、学生の JJ3 と CC3 は、いずれも意味公式の数も種類も少なかったので、JJ3 と CC3 の間の差が出てきても、社会人ほど顕著ではなかった。

6.2 において、各意味公式の使用数及び割合の対照によると、JJ3 と CC3 双方共に、{理由}、「詫び」、{不可}、{情報確認・要求} という 4 つの意味公式を多用したという共通点が挙げられた。一方、CC3 より JJ3 のほうで {詫び} と {あいづち} が多く見られたのに対して、JJ3 より CC3 のほうで {不可}、{ためらい}、{呼びかけ} が多く使用された。そのうち、人による各意味公式の使用回数の平均値の有意差の考察によると、{あいづち} のみに JJ3 と CC3 の間に有意差が検証された。即ち、社会人と同様に、CC3 より JJ3 のほうでは、{あいづち} が有意に多かった。また、社会的関係による各意味公式の使用平均値の有意差を見ると、JJ3 では親の人のほうに対して、{不可} が多用され、同の人に対して、{驚き}、{挨拶} が有意に多く見られたのに対して、CC3 では疎の人のほうに対して、{情報確認・要求} が多く見られ、上の人に対して {呼びかけ} が多く使用されたという相違点も観察された。

6.3 においては、{不可} と {理由} の内容と {あいづち} と {詫び} の表現形式を分析した。{不可} の内容分析を見ると、JJ3 では「能力・状況」または「緩和的結論」が多用されたのに対して、CC3 では「能力・状況」のほかに、相手の FT 度が大きい「本音」または「意志」も好まれたという結果になった。また、{理由} の内容分析によると、JJ3 では「具体的な理由」が最も多用されたのに対して、CC3 では「気持の表明」が最も多く見られたという相違点がわかった。また、CC3 では親しい人のほうに対して「気持の表明」

が顕著に多く見られた。{不可}と{理由}の分析を合わせて、社会人と同様に、勧誘を断る場面においては、JJ3よりCC3のほうでは直接的表現が好まれた傾向が観察された。この結果について、中国語の母語話者を対象に、フォローアップ・インタビューを行った。社会人と学生のいずれにおいても、実際に具体的な理由が提示できなければ、親しい人に対して、「緩和的結論」や「情報不足の理由」より「意志」や「気持の表明」で相手を断れば、相手から遠ざかることが避けられる。そして、親しい相手もちゃんと自分の気持を理解してくれると確信している。一方、「情報不足の理由」で相手を断れば、相手から遠ざかると思われる心配がある。ゆえに、中国語の母語話者、とりわけ社会経験が欠けている学生では、「具体的な理由」が見つからなければ、むしろ「気持の表明」をそのまま親友に伝えるという断るパターンが多く見られた。

JJ3の{あいづち}の表現形式の分析によると、「聞いている」という機能を表す{あいづち}が最も多かった。そのうち、「うん／うーん／うんうん」と「はい／はいはい」の表現形式が最も多く見られた。なお、{詫び}の表現形式の分析によると、JJ3では「すみません」が最も多用されたのに対して、CC3では「不好意思」(buhayisi ごめんなさい)の出現回数が最も多かった。{あいづち}と{詫び}の表現形式の分析を合わせると、CC3よりJJ3のほうでは、{あいづち}と{詫び}のいずれも、数も、表現形式の種類も多かった。さらに、JJ3では社会的関係による{あいづち}と{詫び}の表現形式の待遇性も顕著に見られたが、CC3では数がそもそも少なかったので、社会的関係による{あいづち}と{詫び}の表現形式の使い分けの差があまり見られなかった。

# 第7章 調査4—学生対象の依頼に対する

## 断り言語行動

本章において、日中の母語話者である学生を対象に、依頼に対する断り言語行動に関する調査の結果を述べた。その分析は会話の構造による分析、意味公式の量的分析、意味公式の内容分析及び表現形式の分析からなっている。

### 7.1 依頼を断る言語行動の会話構造

勧誘と依頼を問わず、学生の断り言語行動は社会人より意味公式の使用数が相当に少なかったが、社会人の断り言語行動と同様に、「開始部」、「断り行動の談話」（「依頼話段」、「依頼・断り話段」を含む）、「終了部」という3つの談話からなっていることが本章においても検証された。ゆえに、本節においても、「依頼話段」、「依頼・断り話段」、「終了部」に着目して、話段ごとにおける意味公式のカテゴリー及び各意味公式の使用数、意味公式のカテゴリー及び各意味公式の展開パターンの考察を行って、JJ4とCC4の断り会話構造を抽出しようとする。

#### 7.1.1 話段ごとの断り言語行動の日中対照

4.1.1と同様に、会話の構造による分析で、学生を対象とする断り会話を「依頼話段」、「依頼・断りの交渉」、「終了部」の3つに分けられる。本節において、各話段の意味公式の使用数及び平均値の日中対照を行う。

##### 7.1.1.1 依頼話段

学生の断り手も「依頼話段」においては、{あいづち}、{情報確認・要求}などの「付随表現」で、誘い手の勧誘言語行動に参加して、会話を進める特徴が観察された。「依頼話段」の考察は①依頼話段の開始から1回目の断りに至るまでの言語表現の有無、②依頼話段における意味公式の使用数及び平均値の2つに分かれる。

### 7.1.1.1.1 依頼話段の開始から1回目の断りに至るまでの言語表現の有無

依頼話段の開始から1回目の断りに至るまでの段階においては、断り手の言語表現の有無を表7-1に示す。

表7-1 JJ4とCC4の依頼話段における断り手の言語表現の有無

	1回目の断りに至るまでの 言語表現あり	1回目の断りに至るまでの 言語表現なし	合計
JJ4 合計	40	0	40 組
JJ4 割合	100%	0	100%
CC4 合計	23	17	40 組
CC4 割合	57.50%	42.50%	100%

表7-1に示したように、JJ4では、頼み手が依頼発話を展開する間に、40組の断り手(100%)が言語表現を発した。一方、CC4では、23組のみの断り手(57.5%)が言語表現を発したのに対して、17組の断り手(42.5%)が言語表現を発していなかった。即ち、CC4よりJJ4のほうが、1回目の断りに至るまでの言語表現の「あり」会話場面が顕著に多かったことがわかった。

### 7.1.1.1.2 依頼話段における意味公式の使用数

また、依頼話段における意味公式の使用数及び平均値を表7-2に示す。

表7-2 JJ4とCC4の依頼話段における意味公式の使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	意味公式	JJ4 (40 組)		CC4 (22 組)	
		個数	平均値/40	個数	平均値/22
直接的断り	不可	1	0.03	0	0
	直接的断り合計	1	0.03	0	0
間接的断り	相手を思い止まらせる試み	2	0.05	0	0
	代案	0	0	1	0.05
	間接的断り合計	2	0.05	1	0.05
付随表現	あいづち	104	2.60	9	0.41
	情報確認・要求	54	1.35	33	1.50

	驚き	12	0.30	4	0.18
	ためらい	4	0.10	7	0.32
	共感	0	0	1	0.05
	呼びかけ	0	0	2	0.09
	その他	0	0	1	0.05
	付随表現合計	174	4.35	57	2.59
意味公式合計		177	4.43	58	2.64

まず表7-2の意味公式のカテゴリーの使用回数及び平均値を見ると、JJ4とCC4両方共に、「直接的断り」と「間接的断り」が依頼話段ではわずかな数値として現れたのに対して、「付随表現」が依頼話段では中心に使用されたという共通点が見られた。一方、CC4よりJJ4のほうでは「付随表現」が顕著に多く使用されたので（JJ4-174/4.35, CC4-57/2.59）、全体的にJJ4のほうがCC4より意味公式の使用総数も多かった（JJ4-177/4.43, CC4-58/2.64）。次に、各意味公式の使用回数及び平均値から見ると、CC4よりJJ4のほうが、「付随表現」を顕著に多用したのは、CC4よりJJ4のほうで{あいづち}が相当に多く使用されたからであった（JJ4-104/2.60, CC4-9/0.41）。他のJJ4とCC4両者の意味公式の使用回数及び平均値はほぼ同じであった。なお、JJ4の依頼話段においては、{あいづち}が最も多く見られたのに対して、CC4では{情報確認・要求}が最も多用されたという相違点も観察された。前述の調査1、調査2と調査3を合わせると、日本人の言語行動においては、勧誘と依頼の場面差も問わず、社会的属性も問わず、{あいづち}が最も多用されたことが分かった。ところで、CC4の依頼話段においては、なぜ{情報確認・要求}が多用されたのかについて、会話例をあげながら分析を行う。

以下の会話例においては、「依頼話段」におけるCC4の典型的な特徴が見られる。

進行部

1A: 0 (姓), 0 0 (姓名)。就是……

2B: 啊, 怎么了?

3A: 你知道……, 就是我想跟你说个事儿……

4B: 说吧。

5A: 就是你知道我家条件不是很好嘛, 然后最近……, 因为我赶上了一些事情, 然后……, 就是开学嘛, 然后我学费还没交呢。

6B: 哦—这样啊。

7A: 然后, 而且现在学校催得特别紧, 我都拖了几个月了, 他说我再不交的话, 就那啥那啥, 你懂的。

8B: 哦—你这两天还好吧, 就是出了这种事情。就是家里面, 还行吧?

9A: 家里面还好, 我是小孩子嘛, 然后……, 他们, 又不可能管他们大人干什么……

10B: 哦一

11A: 就这样，然后…

12B: 你就多帮一下他们嘛，家里面有各种地方…

13A: 对，主要是现在还差学费呢，

14B: 哦，还差多少啊？

15A: 差，差两千五。(CC4F7 依頼親・同)

訳

進行部

1A: O (姓)、O O (姓名)、あの…

2B: ① ああ、どうしたの？

3A: 知ってるかな…、ちょっと言いたいことがあるんですけど。

4B: いいよ。

5A: うちあまり余裕がないこと知ってるだろう。それで最近…、いろんなことあったから、そして…、学校も始まったし、学費も払ってなかったです。

6B: うんー、そっか。

7A: それで、学校から早めに払ってくれって、何ヶ月も遅れていたから、もう払わないと、そんなことになるかな、わかるでしょう。

8B: うんうんー、② この間大丈夫でしたか、こんなことあったし。おうちのことはまだ大丈夫？

9A: うちはまだ大丈夫ですけど、子供なんだから、それで…、彼たち、大人たちのこと知らない。

10B: うんー。

11A: そう。それで…

12B: できるだけ手伝ってあげてね。おうちにいろんなことあるから。

13A: そうだね、まだ学費足りない。

14B: うん、③ どれぐらい足りないの？

15A: 2500 元足りない。

例 (CC4F7 依頼親・同) のように、学生の頼み手が学費を払えなくて、友達にお金の貸し借りを依頼する際に、「言いさし」、「言語の不流暢」などによって、依頼発話を発した一方で、断り手が相手の発話を促したり、友達への関心を示したりするために、{情報確認・要求} を 4 回も使用した。また、フォローアップ・インタビューによると、中国人の依頼に対する断り言語行動においては、頼み手がお金の貸し借りを依頼する負担度が大きくて、相手に言いづらく、1 回に情報を完全に提供することができないので、断り手から頼む内容、金額などの情報を聞き返して、即ち主に {情報確認・要求} で相手への関心を見せたり、あとの断り言語行動が表出されるまでに時間を稼いだりする役割も働いているという会話のスタイルも伺われた。



### 7.1.1.2 依頼・断り話段

調査1、2、3と同様に、学生の「依頼・断り話段」も「1度目の断り」、「2度目の断り」、「3度目の断り」などからなっている。ただし、JJ4とCC4の断り発話数が4つの調査で最も少なかった。本節においては、「依頼・断り話段」における断り発話の数を日中対照した上で、各話段における意味公式の使用数及び平均値を考察していく。

#### 7.1.1.2.1 断り発話数

依頼・断り話段は、頼み手が何回目の依頼発話を発するかによって、さらに「1回目の断りのみで収束」、「2回目の断りで収束」、「3回目の断りで収束」などからなっている。各断り発話の回数及び割合を表7-3に示す。

表7-3 JJ4とCC4の断り発話の回数及び割合

	1回目の断りのみ で収束	2回目の断りで 収束	3回目の断りで 収束	4回目の断り で収束	合計
JJ4 合計	26	9	3	2	40組
JJ4 割合	65%	22.5%	7.5%	5%	100%
CC4 合計	21	15	4	0	40組
CC4 割合	52.5%	37.5%	10%	0	100%

表7-3に示したように、JJ4とCC4共に、「1回目の断りのみで収束」の断り発話数が最も多かった（JJ4-26/65%, CC4-21/52.5%）。それにつづき、両者共に「2回目の断りで収束」、「3回目の断りで収束」、「4回目の断りで収束」という順で見られた。従って、学生の依頼に対する「依頼・断り話段」における断り発話の回数のパターンはほぼ同じであった。

#### 7.1.1.2.2 1回目の断りにおける意味公式の使用数

1回目の断りに現れた意味公式の使用数及び平均値は表7-4の通りである。

表7-4 JJ4とCC4の1回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ4 (40組)		CC4 (40組)	
		個数	平均値/40	個数	平均値/40

直接的断り	不可	21	0.53	10	0.25
	直接的断り合計	21	0.53	10	0.25
間接的断り	理由	36	0.90	41	1.03
	詫び	7	0.18	2	0.05
	願望	10	0.25	4	0.10
	条件提示	1	0.03	14	0.35
	相手を思い止まらせる試み	1	0.03	4	0.10
	保留	1	0.03	0	0
	言いさし	1	0.03	2	0.05
	原則的陳述	3	0.08	1	0.03
	代案	20	0.50	19	0.48
	間接的断り合計	80	2	87	2.18
付随表現	あいづち	8	0.20	1	0.03
	情報確認・要求	13	0.33	0	0
	ためらい	12	0.30	22	0.55
	驚き	1	0.03	2	0.05
	困惑	4	0.10	0	0
	ヘッジ	2	0.05	0	0
	否定の前置き	3	0.08	0	0
	共感	0	0	1	0.03
	挨拶	1	0.03	0	00
	呼びかけ	0	0	4	0.10
	その他	0	0	6	0.15
	付随表現合計	44	1.10	36	0.90
意味公式合計		145	3.63	133	3.33

まず、意味公式のカテゴリーの使用数及び平均値からすれば、JJ4 と CC4 共に 1 回目の断り話段においては、「間接的断り」が中心に使用されたという共通点が見られた。なお、各意味公式の使用数及び平均値をみると、{不可}、{条件提示}、{情報確認・要求}などを除き、ほかの意味公式における JJ4 と CC4 両者間の差があまり大きくなかった。また、JJ4 と CC4 共に {理由}、{不可}、{代案}、{ためらい} を主に使用した。そのうち、{理由}、{代案} の使用平均値における JJ4 と CC4 両者間の差がわずかであった。

一方、CC4 より JJ4 のほうでは {不可} (JJ4-21/0.53, CC4-10/0.25)、{情報確認・要求} (JJ4-13/0.33, CC4-0) などが多く使用されたのに対して、JJ4 より CC4 のほうでは {条件提

示} (JJ4-1/0.03, CC4-14/0.35)、{ためらい} (JJ4-12/0.30, CC4-22/0.55)などが多く見られたという相違点も観察された。

依頼話段に比べると、CC4では依頼話段において「情報確認・要求」が多用されたのに対して、JJ4では1回目の断り話段において「情報確認・要求」が多用されたこともわかった。7.1.1.1.2であげた例(CC4F7 依頼親・同)と以下のJJ4の例を対照すると、JJ4とCC4の{情報確認・要求}の使用スタイルの相違も伺われるだろう。

#### 1回目の断り

- 6B 3万?3万…(ええ)。①どうして俺のところに来たの?あんまり親しくないよね?他にいなかったの?
- 7A 他はみんなどっか行っちゃったから…
- 8B みんなどっか行った。貸してくれなさそーな感じの雰囲気出しながらどっか行っちゃった。②何で3万も足りなくなっちゃったの?
- 9A それは、無くなってしまって
- 10B ③勝手に消えるわけないでしょ?
- 11A まあ、遊びすぎて無くなってしまったので、どうか貸してはくれませんか?(JJ4M7 疎・下)

#### 1回目の断り

- 8B あー、そういうことね。あー。ただね、今俺もそんなにお金をポンって貸せる状況じゃないし、いくらだったっけ?
- 13A だいたい3万くらい。
- 9B 3万じゃちょっと結構アレだな、だから…(JJ4M8 疎・下)

会話例(JJSM7 疎・下)のように、断り手はお金の貸し借りを依頼されてから、まず「どうして俺のところに来たの?あんまり親しくないよね?他にいなかったの?」のような{情報確認・要求} + {理由} + {代案}という3つの意味公式を併用して、親しくない人からの依頼を断った。次に「何で3万も足りなくなっちゃったの?」、「勝手に消えるわけないでしょ?」の2つの「情報確認・要求」で、相手を責めたりして断った。会話例(JJ4M8 疎・下)においては、断り手は断る{理由}を1度述べた後で、「いくらだったっけ?」という{情報確認・要求}を使用することによって、後の2度目の断る{理由}を正当化させるという役割も伺われた。それに対して、7.1.1.1.2で述べたように、CC4は依頼話段において、頼み手が依頼の負担度が大きいので、依頼内容に関する情報を完全に提供することができないので、断り手が{情報確認・要求}で会話を進ませたり、相手への関心を示したり、または自分の断り表出までに考える時間を稼いだりする役割も働いているという特徴が見られた。

### 7.1.1.2.3 2回目の断りにおける意味公式の使用数

1回目の断り発話に比べると、2回目の断り発話においては、JJ4とCC4双方共に会話数が減少した。JJ4で見られた会話数が14組であるのに対して、CC4で現れた会話数が20組であった。JJ4とCC4の2回目の断り発話における意味公式の使用数及び平均値を表7-5にまとめる。

表7-5 JJ4とCC4の2回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ4 (14組)		CC4 (20組)	
		個数	平均値/14	個数	平均値/20
直接的断り	不可	4	0.29	11	0.55
	直接的断り合計	4	0.29	11	0.55
間接的断り	理由	11	0.79	17	0.85
	詫び	1	0.07	0	0
	願望	1	0.07	1	0.05
	条件提示	4	0.29	6	0.30
	相手を思い止まらせる試み	1	0.07	0	0
	保留	0	0	1	0.05
	言いさし	1	0.07	0	0
	原則的陳述	1	0.07	0	0
	代案	10	0.71	10	0.50
	間接的断り合計	30	2.14	35	1.75
付随表現	あいづち	7	0.50	0	0
	情報確認・要求	3	0.21	0	0
	ためらい	5	0.36	4	0.20
	共感	0	0	2	0.10
	呼びかけ	0	0	1	0.05
	付随表現合計	15	1.07	7	0.35
意味公式合計		49	3.50	53	2.65

表7-5の意味公式のカテゴリーの使用数及び平均値を見ると、JJ4とCC4共に2回目の断り話段においても、「間接的断り」を中心に多用した。各意味公式の使用数及び平均値からすれば、JJ4とCC4共に{理由}、{代案}を主に使用したという共通点が挙げられた。

とりわけ、双方共に、{理由}の使用数が最も多かった。

一方、JJ4のほうで{あいづち}が多用されたのに対して、CC4のほうで{不可}が多く用いられたという相違点もわかった。ただし、JJ4とCC4共に2回目の断りに見られた意味公式の数が少なかったため、使用数の差が出て、大きくなかった。

#### 7.1.1.2.4 3回目の断りにおける意味公式の使用数

1回目の断りと2回目の断り発話に比べると、JJ4とCC4双方共に3回目の断りにおいては、会話数がさらに減少した。双方共に3回目の断りにおいては、4組の会話が見られた。JJ4とCC4の3回目の断り発話における意味公式の使用数及び平均値などを表にまとめる。

表 7-6 JJ4 と CC4 の 3 回目の断りにおける意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ4 (4組)		CC4 (4組)	
		個数	平均値/4	個数	平均値/4
直接的断り	不可	0	0	0	0
	直接的断り合計	0	0	0	0
間接的断り	理由	4	1	4	1
	詫び	1	0.25	0	0
	願望	0	0	1	0.25
	原則的陳述	0	0	1	0.25
	代案	2	0.50	3	0.75
	間接的断り合計	7	1.75	9	2.25
付随表現	情報確認・要求	1	0.25	0	0
	ためらい	0	0	1	0.25
	ヘッジ	1	0.25	0	0
	否定の前置き	1	0.25	0	0
	呼びかけ	0	0	1	0.25
	挨拶	1	0.25	0	0
	その他	0	0	1	0.25
	付随表現合計	4	1	3	0.75
意味公式合計		11	2.75	12	3

JJ4とCC4双方共に3回目の断り話段の発話数が少なく、各意味公式の使用数も減少したため、JJ4とCC4両者間の各意味公式の使用数及び使用平均値の差が見られなかった。

なお、1回目の断りから3回目の断りにかけての依頼・断り話段を合わせると、JJ4と

CC4 の意味公式のカテゴリーの使用数及び平均値を対照すると、両者間の差があまり見られなかった。各意味公式の使用回数及び平均値をみると、JJ4 で主に使用された意味公式は、{理由}、{代案}、{不可}、{ためらい}、{情報確認・要求}、{あいづち} であったのに対して、CC4 で数多く見られた意味公式は {理由}、{代案}、{ためらい}、{不可}、{条件提示} であった。従って、双方ともに、依頼・断り話段において {理由}、{代案}、{不可}、{ためらい} を中心に使用したという共通点がわかった。そのうち、JJ4 と CC4 ともに多く見られた {代案} の使用数が同じであった。JJ4 のほうでは {あいづち} と {情報確認・要求} が顕著に多く見られたのに対して、CC4 のほうでは {条件提示}、{ためらい} が際立って多かったという相違点も見られた。

### 7.1.1.3 終了部

学生を対象とする依頼に対する断り会話の終了部においては、JJ4 では、「そのほうがいいよ」のような {代案}、「ごめんね」のような {詫び}、「頑張ってる」のような励ましを表す {挨拶}、「うん」のような {返事・応答}、「バイバイ」のような別れの {挨拶} などの意味公式が見られた。一方、CC4 では「实在没办法」のような {不可}、「找你导师」（チューターに当たってみたら）のような {代案}、「不好意思」（ごめんなさい）のような {詫び} 「没事，不客气」（いや、どういたしまして）のような {返事・応答}、「拜拜」（バイバイ）のような別れの {挨拶} などが多く見られた。3.3.1 で提示したように、上記の表現の提示によって、会話を終わらせようとする役割を果たしているため、会話の終了部と見なす。

#### 7.1.1.3.1 終了部における断り手の言語表現の有無について

終了部における断り手の言語表現の有無を表 7-7 にまとめる。

表 7-7 JJ4 と CC4 の終了部における断り手の言語表現の有無

	終了部言語表現あり	終了部言語表現なし	合計
JJ4 合計	19	21	40 組
JJ4 割合	47.5%	52.5%	100%
CC4 合計	31	9	40 組
CC4 割合	77.5%	22.5%	100%

終了部においては、JJ4 では断り手の「言語表現あり」会話数が 19 組（47.5%）であったのに対して、「言語表現なし」の会話数が 21 組（52.5%）も多く見られた。一方、CC4 では断り手の「言語表現あり」会話数が 31 組であり、圧倒的に半分以上の割合を占めているの

に対して、「言語表現なし」の会話数が9組しかなかった。換言すれば、JJ4の断り手は、依頼に対する断り言語行動の終了部においては、半分以上で何も言語表現を発していなかったのに対して、CC4の断り手は終了部においては、圧倒的に半分以上で言語表現を発していたという結果になった。

### 7.1.1.3.2 終了部における意味公式の使用数

JJ4とCC4の終了部における意味公式の使用数及び平均値を表7-8に示す。

表7-8 JJ4とCC4の終了部における意味公式の使用数及び平均値

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ4 (18組)		CC4 (20組)	
		個数	平均値/18	個数	平均値/20
直接的断り	不可	1	0.06	5	0.25
	直接的断り合計	1	0.06	5	0.25
間接的断り	詫び	8	0.44	9	0.45
	理由	0	0	1	0.05
	代案	3	0.17	9	0.45
	条件提示	1	0.06	2	0.10
	願望	0	0	1	0.05
	言いさし	0	0	1	0.05
	間接的断り合計	12	0.67	23	1.15
付随表現	あいづち	2	0.11	0	0
	ためらい	1	0.06	1	0.05
	挨拶	7	0.39	6	0.30
	共感	0	0	1	0.05
	呼びかけ	0	0	1	0.05
	その他	1	0.06	0	0
	付随表現合計	11	0.61	9	0.45
意味公式合計		24	1.33	37	1.85

表7-8に示したように、JJ4とCC4双方共に、終了部において使用した意味公式が減少したため、JJ4とCC4両者間の各意味公式の使用平均値の差がわずかであった。即ち、JJ4とCC4の間では、各意味公式の使用数の差があまり観察されなかった。

意味公式のカテゴリーの使用数及び平均値を見ると、JJ4とCC4双方共に終了部におい

では、「間接的断り」を主に使用した。なお、各意味公式の使用数及び平均値をみると、JJ4とCC4双方共に、{詫び}と{挨拶}を主に用いたことがわかったが、CC4では{詫び}と{挨拶}のほかに、{代案}と{不可}も多用された。

#### 7.1.1.4 まとめ

上記の各話段における意味公式のカテゴリーと各意味公式の使用数及び平均値をまとめた結果、JJ4とCC4両者間の異同点は以下の通りである。

共通点：①JJ4とCC4双方共に、依頼話段においては、「付随表現」が主に使用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」の使用数のごく少なかった。②依頼・断り話段と終了部においては、「間接的断り」が中心に用いられた。③依頼・断り話段においては、双方ともに、{理由}、{代案}、{不可}、{ためらい}を中心に使用した。④最後の終了部においては、JJ4とCC4双方共に、{詫び}と{挨拶}を主に用いた。

相違点：③依頼話段においては、CC4よりJJ4のほうで{あいづち}が多用されたのに対して、CC4のほうで{情報確認・要求}が多く使用された。④依頼・断り話段においては、JJ4のほうでは{あいづち}と{情報確認・要求}が顕著に多く見られたのに対して、CC4のほうでは{条件提示}、{ためらい}の使用数が多かった。⑤終了部においては、CC4では{詫び}と{挨拶}のほかに、{代案}と{不可}も多用された。

さらに、各話段における意味公式の使用平均値の高い順に並ぶと、学生の依頼を断る言語行動の連鎖を表7-9に示す。

表 7-9 JJ2 と CC2 の断り言語行動の連鎖構造

	依頼話段	1 回目の断り	2 回目の断り	3 回目の断り	終了部
JJ4	あいづち (2.6)	理由 (0.9)	理由 (0.79)	代案 (0.5)	詫び (0.44)
CC4	情報確認・要求 (1.5)	理由 (1.03)	理由 (0.85)	代案 (0.75)	詫び (0.45)

各話段における意味公式の連鎖構造によると、依頼話段を除き、JJ4とCC4の意味公式の連鎖構造がほぼ同一であった。依頼話段において、JJ4では{あいづち}、CC4では{情報確認・要求}がそれぞれ最も多用された。1回目の断りから3回目の断りにかけて、JJ4とCC4共に①{理由}、②{理由}、③{代案}といった使用平均値の最も高い意味公式が現れた。終了部において、双方共に{詫び}の使用平均値が最も多かった。



## 7.1.2 断りの展開パターンの日中対照

本節において、学生を対象とする依頼に対する断り会話における意味公式の категорияーと各意味公式の展開パターンを全体的に考察する。

### 7.1.2.1 意味公式の categoriaーの展開パターン

JJ4 の依頼話段から依頼・断り話段（1 回目の断り、2 回目の断り、3 回目の断りを含む）を経て、終了部に至るまでの意味公式の categoriaーの使用数及び1 組の会話における平均値を表 7-10 に示す。

表 7-10 JJ4 の意味公式の categoriaーの使用数及び平均値

意味公式の categoriaー	依頼話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
	JJ4(40 組)	JJ4 平均値 /40	JJ4(40 組)	JJ4 平均値 /40	JJ4(14 組)	JJ4 平均値 /14	JJ4(4 組)	JJ4 平均値 /4	JJ4(18 組)	JJ4 平均値 /18
直接的断り	1	0.03	21	0.53	4	0.29	0	0	1	0.06
間接的断り	2	0.05	80	2	30	2.14	7	1.75	12	0.67
付随表現	174	4.35	44	1.10	15	1.07	4	1	11	0.61

なお、JJ4 の各話段の意味公式の categoriaーの平均値を図 7-1 に示す。

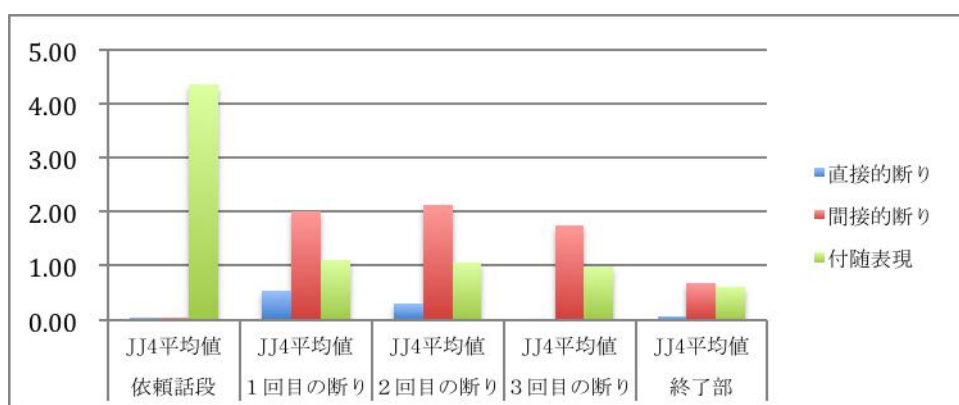


図 7-1 JJ4 の各話段の意味公式の categoriaーの平均値

表 7-10 と図 7-1 を合わせると、JJ4 の話段ごとに各意味公式の categoriaーの展開パターン

を観察することができる。まず、依頼話段においては、「直接的断り」と「間接的断り」はごくわずかな数値として現れたのに対して、{あいづち} (174/4.35) を含む「付随表現」が多用された。次の依頼・断り話段においては、「直接的断り+間接的断り+付随表現」のパターンを使用した。最後の終了部においては、依頼・断り話段と同様に、「間接的断り」が主に使用されたが、2番目に多く見られた「付随表現」との差が小さかった。

つづいて、CC4の依頼話段から依頼・断り話段（1回目の断り、2回目の断り、3回目の断り）を経て、終了部に至るまでの意味公式の категорииの使用数及び平均値は表7-11に示す。

表 7-11 CC4 の意味公式の category の使用数及び平均値

意味公式の category	依頼話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
	CC4 (22 組)	CC4 平 均値 /22	CC4 (40 組)	CC4 平 均値 /40	CC4 (20 組)	CC4 平 均値 /20	CC4 (4 組)	CC4 平 均値 /4	CC4 (20 組)	CC4 平 均値 /20
直接的断り	0	0	10	0.25	11	0.55	0	0	5	0.25
間接的断り	1	0.05	87	2.18	35	1.75	9	2.25	23	1.15
付随表現	57	2.59	36	0.90	7	0.35	3	0.75	9	0.45

なお、CC4の各話段の意味公式の category の平均値を図7-2に示す。

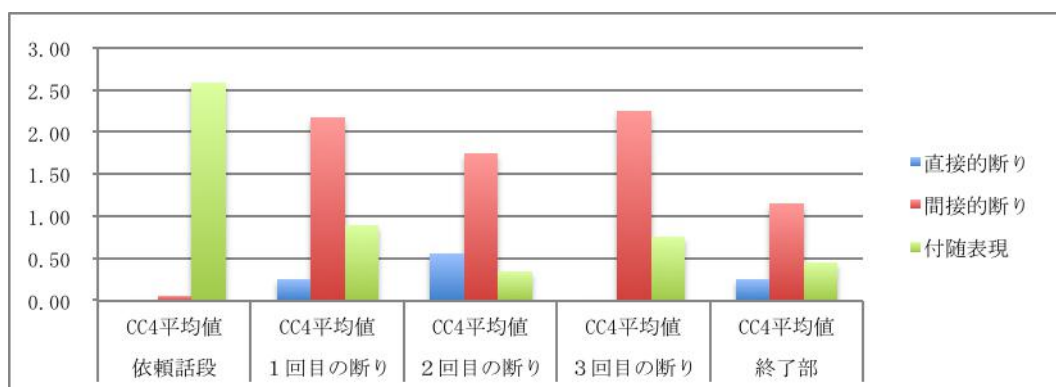


図 7-2 CC4 の各話段の意味公式の category の平均値

表7-11と図7-2を合わると、CC4の各意味公式の category の展開パターンが観察できる。まず、依頼話段においては、CC4では「付随表現」が中心に使用された。次に、依頼・断り話段においては、「間接的断り」が中心に用いられたのに対して、「直接的断り」と「付随表現」が1以下の使用平均値で出現した。最後の終了部においては、依頼・断り話段と

同様に、「間接的断り」が最も多用されたのに対して、「直接的断り」と「付随表現」が少なかった。

上記の JJ4 と CC4 の話段ごとにおける意味公式のカテゴリーの使用平均値を対照すれば、図 7-3 のとおりである。

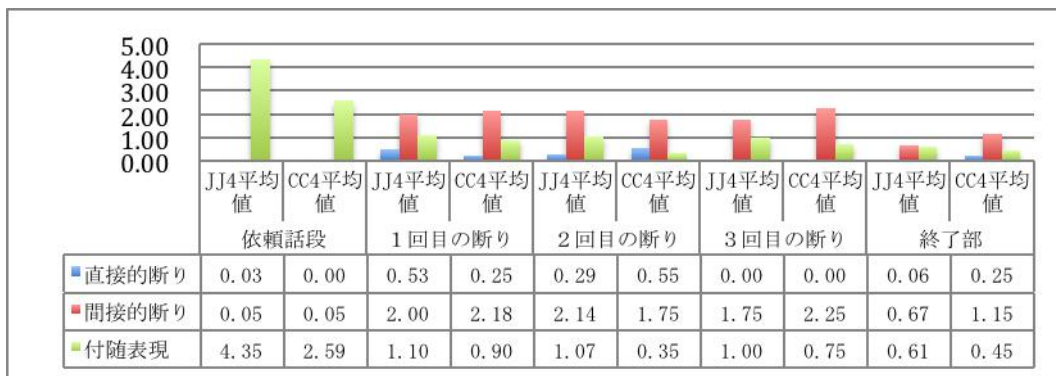


図 7-3 JJ4 と CC4 の意味公式のカテゴリーの話段ごとにおける使用平均値

図 7-3 に示したように、JJ4 と CC4 双方ともに、依頼話段においては、「付随表現」は圧倒的に多用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」はゼロまたはごくわずかな数値として現れた。ただし、使用平均値によると、JJ4 のほうが CC4 より「付随表現」(JJ4-4.35, CC4-2.59) を顕著に多用したこともわかった。依頼・断りの交渉話段においては、JJ4 と CC4 はいずれも「間接的断り+付随表現+直接的断り」の3つの意味公式カテゴリーを併用した。そのうち、「間接的断り」は依頼・断りの交渉話段のどの段階においても中心に使用された。最後の終了部においては、JJ4 と CC4 のいずれも「付随表現+間接的断り+直接的断り」というパターンが見られた。

### 7.1.2.2 各意味公式の展開パターン

JJ4 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び1組の会話の使用回数の平均値を表 7-12 と図 7-4 に表す。

表 7-12 JJ4 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式 のカテ ゴ リ	意味公式	依頼話段		1回目の断り		2回目の断り		3回目の断り		終了部	
		JJ4 (40 組)	JJ4 平均 値/40	JJ4 (40 組)	JJ4平 均値 /40	JJ4 (14 組)	JJ4平 均値 /14	JJ4 (4組)	JJ4平 均値 /4	JJ4 (18 組)	JJ4平 均値 /18

直接的断り	不可	1	0.03	21	0.53	4	0.29	0	0	1	0.06
間接的断り	理由	0	0	36	0.90	11	0.79	4	1	0	0
	詫び	0	0	7	0.18	1	0.07	1	0.25	8	0.44
	願望	0	0	10	0.25	1	0.07	0	0	0	0
	条件提示	0	0	1	0.03	4	0.29	0	0	1	0.06
	代案	0	0	20	0.50	10	0.71	2	0.50	3	0.17
	相手を思い止 まらせる試み	2	0.05	1	0.03	1	0.07	0	0	0	0
	保留	0	0	1	0.03	0	0	0	0	0	0
	言いさし	0	0	1	0.03	1	0.07	0	0	0	0
	原則的陳述	0	0	3	0.08	1	0.07	0	0	0	0

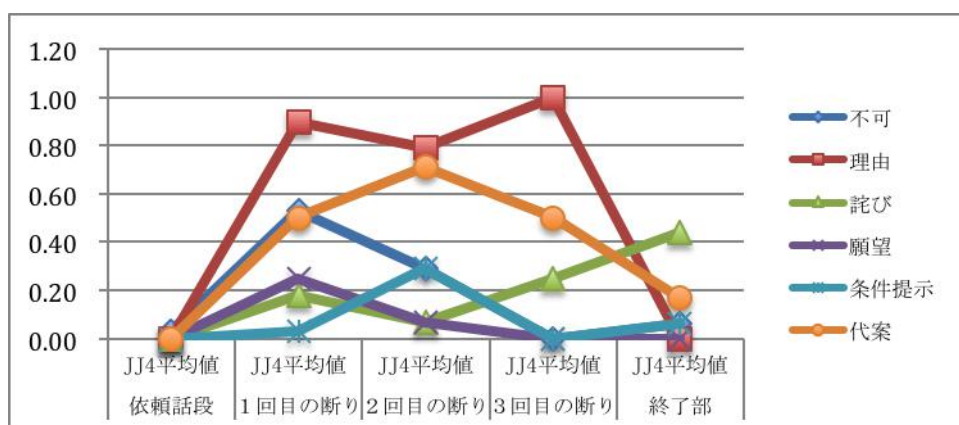


図 7-4 JJ4 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の平均値<sup>37</sup>

上記の表 7-12 と図 7-4 から、JJ4 の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する各意味公式の展開パターンは 2 種類に分類できる。①中高校型：{不可}、{理由}、{願望}、{条件提示}、{代案} のように、依頼話段においては、ゼロまたはごくわずかな数値として現れ、真ん中の依頼・断り話段においては、最も高い使用平均値として見られ、最後の終了部においては、再びゼロまたはわずかな使用平均値に減少したという展開パターンを「中高校型」と言う。そのうち、{理由} の使用変化が最も目立っていた。②尾高型：{詫び} のような、依頼話段に出現せず、依頼・断り話段においては見られたが、使用平均値が低くて、終了部においては、最も多用されたという展開パターンを「尾高型」とも言える。

JJ4 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値を表 7-13 と図 7-5 に表す。

表 7-13 JJ4 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式 のカテゴリ	意味公式	依頼話段		1 回目の断り		2 回目の断り		3 回目の断り		終了部	
		JJ4 (40 組)	JJ4 平均 値/40	JJ4 (40 組)	JJ4 平 均値 /40	JJ4 (14 組)	JJ4 平 均値 /14	JJ4 (4 組)	JJ4 平 均値 /4	JJ4 (18 組)	JJ4 平 均値 /18
付随表現	あいづち	104	2.60	8	0.20	7	0.50	0	0	2	0.11
	情報確認・要求	54	1.35	13	0.33	3	0.21	1	0.25	0	0
	ためらい	4	0.10	12	0.30	5	0.36	0	0	1	0.06
	驚き	12	0.30	1	0.03	0	0	0	0	0	0
	ヘッジ	0	0	2	0.05	0	0	1	0.25	0	0
	否定の前置き	0	0	3	0.08	0	0	1	0.25	0	0
	挨拶	0	0	1	0.03	0	0	1	0.25	7	0.39
	困惑	0	0	4	0.10	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.06

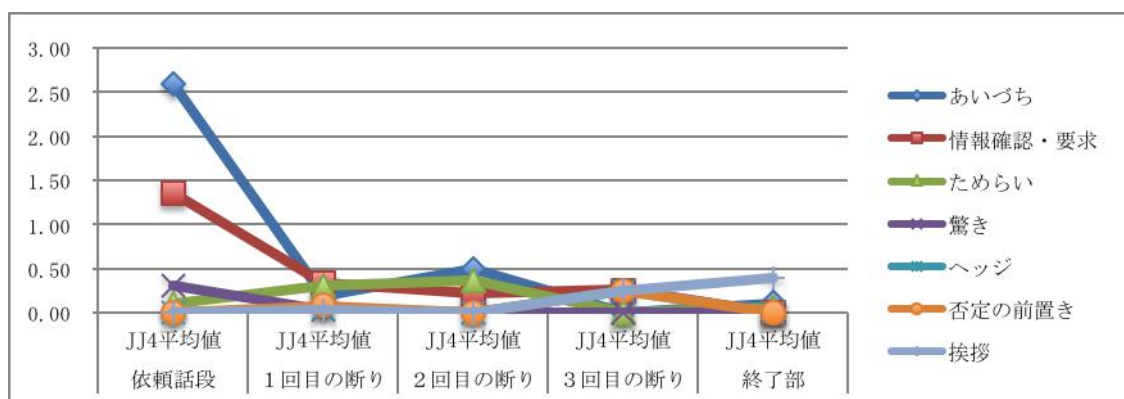


図 7-5 JJ4 の各話段における「付随表現」に属する意味公式の平均値<sup>38</sup>

表 7-13 と図 7-5 に示した通り、「付随表現」に属する各意味公式の展開パターンには 3 種類があった。①頭高型：{あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き} のように、最初の依頼話段において、最も多用されたという展開パターンを「頭高型」とは言えるだろう。そのうち、{あいづち} の使用変化が最も顕著であった。②中高型：{否定の前置き}、{ためらい}、{ヘッジ} のように、依頼話段においてはゼロまたはわずかな平均数値で現れ、依頼・断り話段においては使用平均数値が最も高く、終了部においてはゼロまたはごく低い数値に減少したという展開パターンを「中高型」と言える。③「尾高型」：{挨拶} のような展開パターンはこのタイプである。JJ4 で見られた {挨拶} は「別れの挨拶」（例えば「バイバイ」、「じゃ、ね」など）と「励ましの挨拶」（例えば、「がんばってね。」）の 2 つに分類できる。このような {挨拶} はいずれも会話の最後に現れるはずであるので、前の

依頼話段と依頼・断り話段においては、使用されても、ごくわずかな数値として見られたのに対して、終了部においては、7回も使用された。そのため、{挨拶}のような展開パターンを「尾高型」と言える。

JJ4の意味公式のカテゴリーの展開パターンと各意味公式の展開パターンを合わせると、以下の3種類の展開パターンが見られた。1つ目は「付随表現」に属する{あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き}のような頭高型である。2つ目は「直接的断り」に属する{不可}、「間接的断り」に属する{理由}、{代案}、{願望}、{条件提示}、「付随表現」に属する{否定の前置き}、{ためらい}、{ヘッジ}のよう中高型である。3つ目は「間接的断り」に属する{詫び}と、「付随表現」に属する{挨拶}のような尾高型である。従って、JJ4の「依頼」に対する断り会話構造を図7-6に示す。そのうち、{あいづち}展開パターンが「頭高型」であったが、依頼話段のほかに、依頼・断り話段と終了部のいずれにおいても、0.10以上の使用平均値で現れたので、依頼・断り話段と終了部の「付随表現」にも取り入れた。また、JJ4で使用された{詫び}の展開パターンが「尾高型」であったが、依頼・断り話段においても0.10以上の使用平均値で出現したため、依頼・断り話段の「間接的断り」にも取り入れた。最後に、JJ4で見られた{代案}の展開パターンが「中高型」であったが、終了部においても、0.10以上の使用平均値で現れたので、終了部の「間接的断り」にも取り入れた。

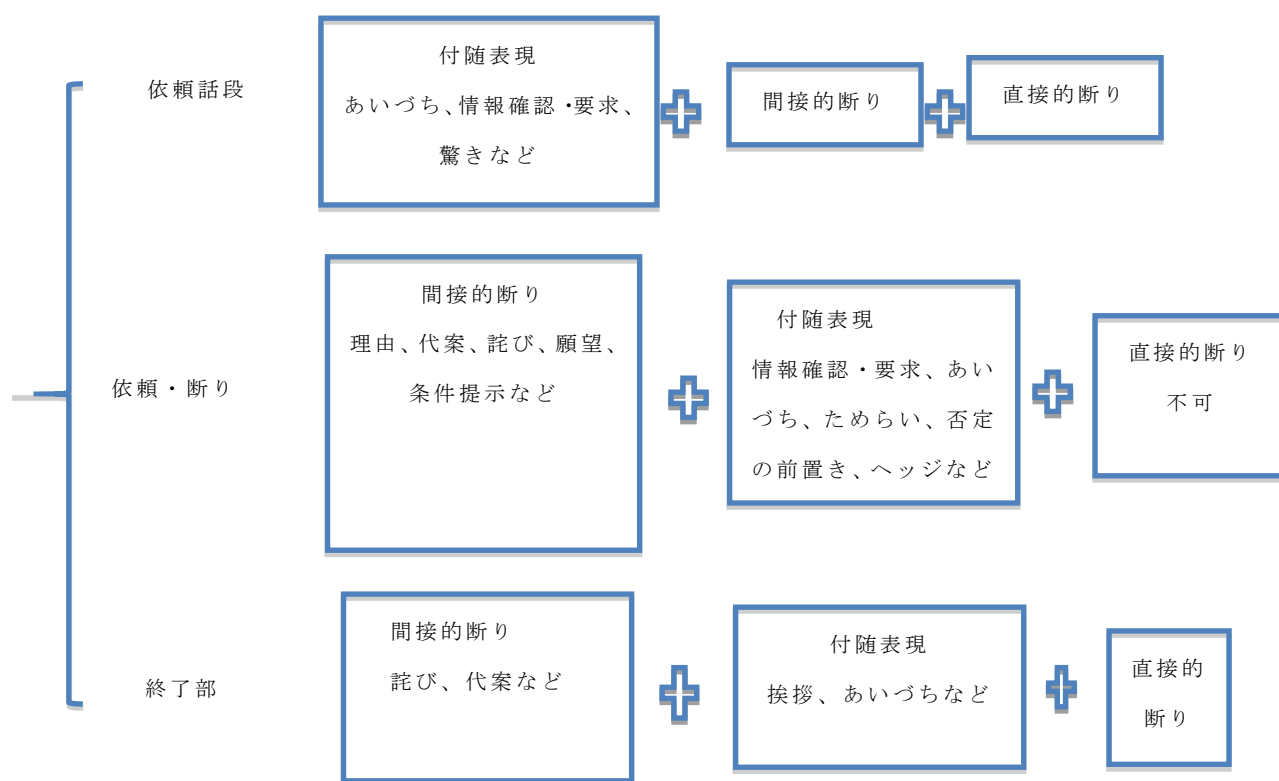


図 7-6 JJ4 の「依頼」に対する断り会話構造

CC4の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値を表7-14と図7-7に示す。

表7-14 CC4の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式 の カテ ゴ リ	意味公式	依頼話段		1回目の断り		2回目の断り		3回目の断り		終了部	
		CC4 (22 組)	CC4 平均 値/22	CC4 (40 組)	CC4平 均値 /40	CC4 (20 組)	CC4平 均値 /20	CC4 (4組)	CC4 平均 値/4	CC4 (20 組)	CC4 平均 値/20
直接的断り	不可	0	0	10	0.25	11	0.55	0	0	5	0.25
間接的 断り	理由	0	0	41	1.03	17	0.85	4	1	1	0.05
	詫び	0	0	<b>2</b>	<b>0.05</b>	0	0	0	0	9	0.45
	願望	0	0	4	0.10	1	0.05	1	0.25	1	0.05
	条件提示	0	0	14	0.35	6	0.30	0	0	2	0.10
	原則的陳述	0	0	1	0.03	0	0	1	0.25	0	0
	代案	1	0.05	19	0.48	10	0.50	3	0.75	9	0.45
	相手を思い 止まらせる 試み	0	0	4	0.10	0	0	0	0	0	0
	保留	0	0	0	0	1	0.05	0	0	0	0
	言いさし	0	0	2	0.05	0	0	0	0	1	0.05

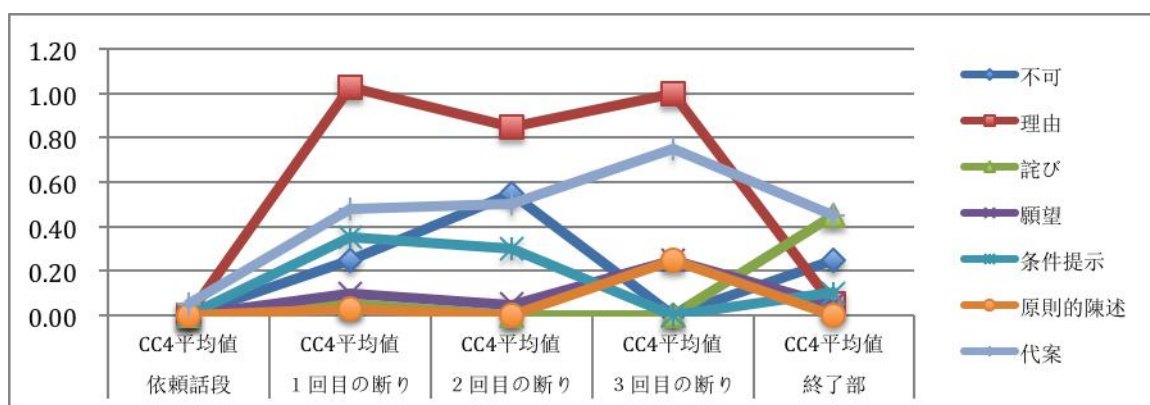


図7-7 CC4の各話段における「直接的断り」、「間接的断り」に属する意味公式の平均値<sup>39</sup>

表7-14と図7-7を合わせると、CC4の「直接的断り」、「間接的断り」に属する各意味公



式の展開パターンを2種類に分けられる。①中高型：{不可}、{理由}、{代案}、{願望}、{条件提示}、{原則的陳述}のような展開パターンは中高型である。そのうち、{理由}の展開パターンが最も顕著であった。②尾高型：CC4で見られた{詫び}の展開パターンはこのタイプである。

CC4の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値を表7-15と図7-8に示す。

表7-15 CC4の各話段における「付随表現」に属する意味公式の使用数及び平均値

意味公式 のカタ ゴ リ	意味公式	依頼話段		1回目の断り		2回目の断り		3回目の断り		終了部	
		CC4 (22 組)	CC4平 均値 /22	CC4 (40 組)	CC4平 均値 /40	CC4 (20 組)	CC4平 均値 /20	CC4 (4組)	CC4 平均 値/4	CC4 (20 組)	CC4平 均値 /20
付随表現	あいづち	9	0.41	1	0.03	0	0	0	0	0	0
	情報確認 ・要求	33	1.50	0	0	0	0	0	0	0	0
	ためらい	7	0.32	22	0.55	4	0.20	1	0.25	1	0.05
	驚き	4	0.18	2	0.05	0	0	0	0	0	0
	挨拶	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0.30
	呼びかけ	2	0.09	4	0.10	1	0.05	1	0.25	1	0.05
	共感	1	0.05	1	0.03	2	0.10	0	0	1	0.05

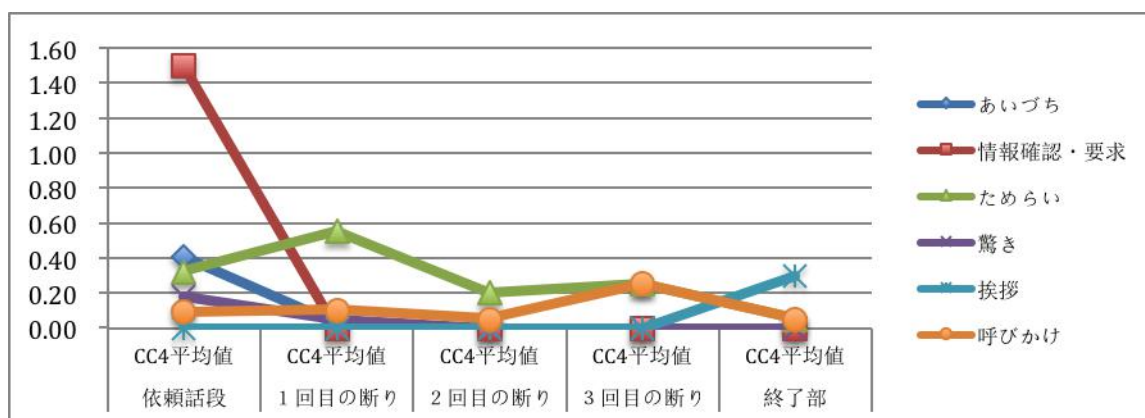


図7-8 CC4の各話段における「付随表現」に属する意味公式の平均値<sup>40</sup>

表7-15と図7-8を合わせると、CC4の「付随表現」では意味公式の展開パターンが3種類あった。①頭高型：{情報確認・要求}、{あいづち}、{驚き}のような展開パターンを「頭高型」と言う。即ち、最初の依頼話段において最も多用された展開パターンである。その



うち、{情報確認・要求}が依頼話段では最も高い使用平均値として現れたので、その変化が最も目立っていた。②中高型：{ためらい}、{呼びかけ}のような、真ん中の依頼・断り話段においては最も高い数値として現れたので、「中高型」とは言える。③尾高型：CC4で見られた{挨拶}は「別れの挨拶」として用いられたので、終了部以外の段階で使用されるはずがない。そのため、{挨拶}の展開パターンは「尾高型」であった。

上記のCC4の意味公式のカテゴリーの展開パターンと各意味公式の展開パターンをまとめると、以下の3種類の展開パターンがわかった。1つ目は「付随表現」に属する{あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き}のような頭高型である。2つ目は「直接的断り」に属する{不可}、「間接的断り」に属する{理由}、{代案}、{願望}、{条件提示}、{原則的陳述}、「付随表現」に属する{ためらい}、{呼びかけ}のような中高型である。3つ目は「間接的断り」に属する{詫び}と「付随表現」に属する{挨拶}のような尾高型である。従って、CC4の「依頼」に対する断り会話構造を図7-9にまとめる。そのうち、CC4で見られた{代案}と{不可}の展開パターンは「中高型」であったが、終了部においても、0.20以上の使用平均値で出現したため、それぞれ終了部の「間接的断り」と「直接的断り」にも取り入れた。

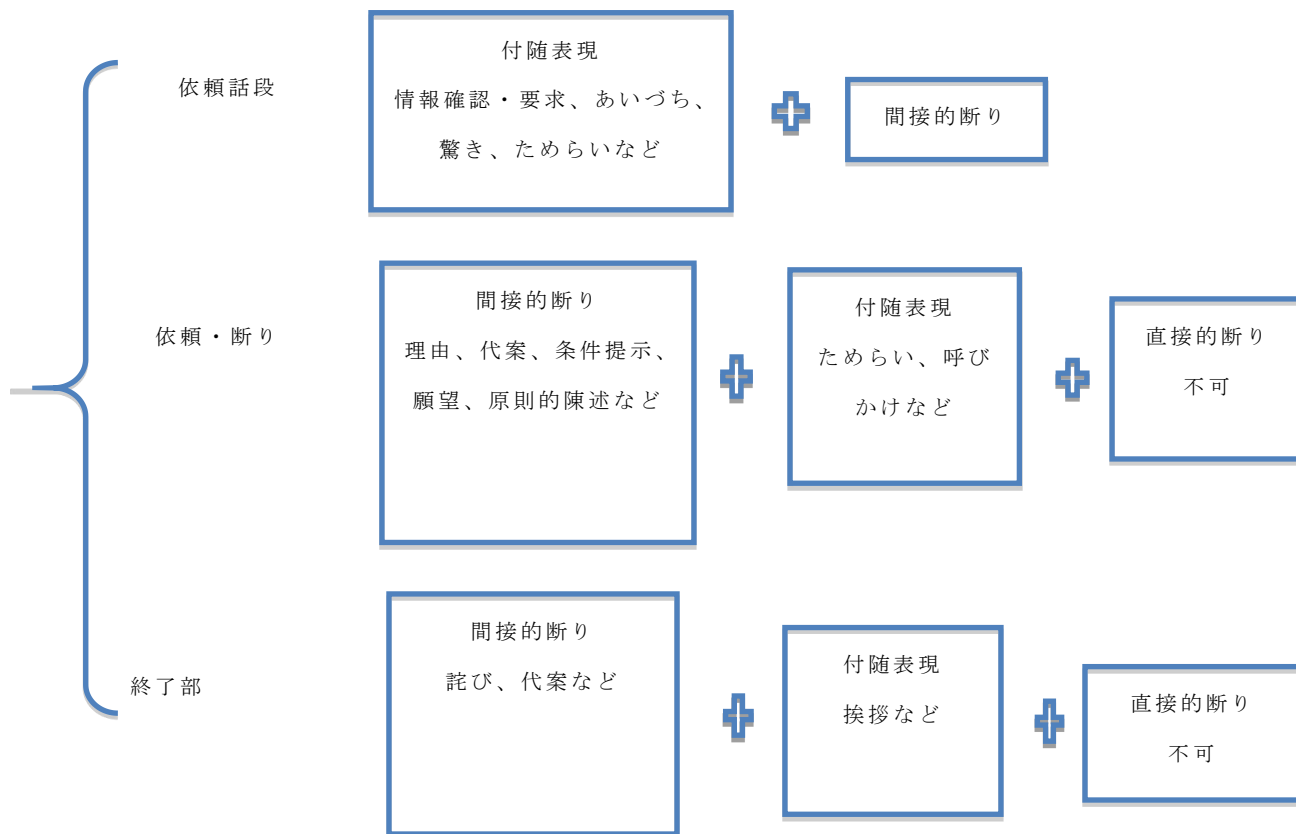


図 7-9 CC4 の「依頼」に対する断り会話構造

上記の JJ4 と CC4 の「依頼」に対する断り言語行動における意味公式の展開パターンを

対照すると、以下の共通点が挙げられる。JJ4 と CC4 双方ともに頭高型、中高型、尾高型の3つの展開パターンが見られた。さらに、双方ともに、「付随表現」に属する {情報確認・要求}、{あいづち}、{驚き} の展開パターンが頭高型であった。「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{代案}、{願望}、{条件提示} と、「付随表現」に属する {ためらい} の展開パターンが中高型であった。「間接的断り」に属する {詫び} と、「付随表現」に属する {挨拶} の展開パターンが尾高型であった。ただし、JJ4 で観察された中高型であった {否定の前置き} と {ヘッジ} は、CC4 のいずれの話段においても1つも出現しなかったのに対して、CC4 で見られた中高型であった {呼びかけ} は、JJ4 のどの話段においても1つも現れなかったといった相違点が見られたが、{否定の前置き}、{ヘッジ}、{呼びかけ} の使用平均値がそもそも小さかったので、JJ4 と CC4 両者間の差があまり現れなかった。

なお、上記の JJ4 と CC4 の「依頼」に対する断り言語行動の会話構造を対照すると、両者の構造もほぼ同じであったといった共通点が見られた。JJ4 と CC4 はいずれも主に依頼話段、依頼・断り話段、終了部からなっていることが調査4においても検証された。依頼話段においては、JJ4 と CC4 ともに「付随表現」が中心に使用されたのに対して、「間接的断り」と「直接的断り」がゼロまたはごく低い数値で現れた。さらに、「付随表現」も主に {あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き} などから構成されている。依頼・断り話段においては、双方ともに、{間接的断り} が中心に用いられた。「間接的断り」が主に {理由}、{代案}、{願望}、{条件提示} などからなっているが、JJ4 の「間接的断り」で3番目に多く使用された {詫び} は、CC4 の依頼・断り話段においては、0.05 の使用平均値で1回目の断りのみで現れたという相違点もわかった。また、JJ4 の「付随表現」で最も多く見られた {情報確認・要求} と {あいづち} は、CC4 の依頼・断り話段においてはゼロまたはごく低い使用平均値で出現した。終了部においては、JJ4 と CC4 双方ともに「間接的断り」を主に使用したのにつづき、「付随表現」、「直接的断り」も併用した。さらに、両者の終了部における「間接的断り」が主に {詫び}、{代案} などから構成されている。従って、{詫び}、{情報確認・要求}、{あいづち} などを除き、JJ4 と CC4 の依頼に対する断り言語行動の会話構造はおおざっぱに同じであったと言えるだろう。

### 7.1.3 会話構造による分析のまとめ

本節において、学生を対象とする依頼に対する断り言語行動の話段ごとにおける意味公式のカテゴリーと各意味公式の使用数及び平均値、意味公式のカテゴリーと各意味公式の展開パターンの考察によって、全体的な断り会話の構造を分析してきた。上記の分析によって、以下の結果が得られた。

まず、話段ごとにおける意味公式のカテゴリー及各意味公式の使用回数と平均値の考察

によると、JJ4 と CC4 双方共に、依頼話段においては、「付随表現」が主に使用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」の使用数及び平均値がごく少なかった。次に、依頼・断り話段と終了部においては、「間接的断り」が中心に用いられた。意味公式の使用数を見ると、依頼・断り話段においては、双方ともに、{理由}、{代案}、{不可}、{ためらい}を中心に使用した。最後の終了部においては、JJ4 と CC4 双方共に、{詫び} と {挨拶} を主に用いた。

一方、依頼話段においては、CC4 より JJ4 のほうで {あいづち} が多用されたのに対して、CC4 のほうで {情報確認・要求} が多く使用された。また、依頼・断り話段においては、JJ4 のほうでは {あいづち} と {情報確認・要求} が顕著に多く見られたのに対して、CC4 のほうでは {条件提示}、{ためらい} の使用数が多かった。なお、終了部においては、CC4 では {詫び} と {挨拶} のほかに、{代案} と {不可} も多用されたという相違点も伺われた。

次に、意味公式のカテゴリ展開パターンをまとめると、双方ともに、依頼話段においては、「付随表現」が中心に多用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」はゼロまたはごくわずかな数値として現れた。ただし、使用平均値によると、JJ4 のほうが CC4 より「付随表現」を顕著に多用したこともわかった。依頼・断りの交渉話段においては、JJ4 と CC4 はいずれも「間接的断り+付随表現+直接的断り」の3つの意味公式カテゴリーを併用した。そのうち、「間接的断り」が主に使用された。最後の終了部においても、「間接的断り」が中心に用いられた。

また、各意味公式の展開パターンを対照すると、以下の共通している3種類の展開パターンが見られた。双方ともに、「付随表現」に属する {情報確認・要求}、{あいづち}、{驚き} の展開パターンが頭高型であった。「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{代案}、{願望}、{条件提示} と、「付随表現」に属する {ためらい} の展開パターンが中高型であった。「間接的断り」に属する {詫び} と、「付随表現」に属する {挨拶} の展開パターンが尾高型であった。

最後に、両者の依頼に対する断り会話構造をまとめた結果、両者のいずれも主に依頼話段、依頼・断り話段、終了部からなっていることが再び検証された。ただし、JJ4 の50%以上会話場面では、断り手が終了部において言語表現を1つも発していなかった。社会人に比べると、学生のほうに依頼話段と終了部において何も言語表現を発していなかった断りのスタイルが多かった。依頼話段においては、JJ4 と CC4 ともに {あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き} を含む「付随表現」が中心に使用された。依頼・断り話段においては、双方ともに、{理由}、{代案}、{願望}、{条件提示} などを含む {間接的断り} が中心に用いられた。終了部においては、JJ4 と CC4 双方ともに、{詫び}、{代案} を含む「間接的断り」を主に使用したのにつづき、{挨拶} を含む「付随表現」と「直接的断り」も併用した。一方、依頼話段においては、JJ4 のほうで {あいづち}、{情報確認・要求} が顕著に多く見られた。依頼・断り話段においては、JJ4 のほうで {詫び}、{あいづち}、{情報確認・

要求}が多く用いられたのに対して、CC4のほうでは{条件提示}、{理由}、{ためらい}などの使用数が多かったという相違点も見られた。しかし、上記の意味公式の使用数及び使用平均値を除き、JJ4とCC4の会話構造がほぼ同じであったという結論が導き出されるだろう。

## 7.2 意味公式の量的分析

本節では「誘い」を断る場面に見られた各意味公式の使用回数及び親・疎関係、上・同関係を含む社会的変数が意味公式の使用回数に及ぼした影響を考察する。

### 7.2.1 意味公式の全体的な使用回数

まず、JJ4とCC4の各意味公式の使用回数を全体的に表7-16に示す。

表7-16 JJ4とCC4の全体的な各意味公式の使用回数

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ4 使用数	JJ4 割合%	CC4 使用数	CC4 割合%
直接的断り	不可	30	7.26	26	8.84
	直接的断り合計	30	7.26	26	8.84
間接的断り	理由	53	12.83	63	21.43
	条件提示	6	1.45	24	8.16
	詫び	17	4.12	11	3.74
	願望	11	2.66	7	2.38
	言いさし	2	0.48	3	1.02
	関係維持	0	0	0	0
	遺憾	0	0	0	0
	相手を思い止まらせる試み	4	0.97	4	1.36
	代案	34	8.23	42	14.29
	保留	1	0.24	1	0.34
	原則的陳述	4	0.97	2	0.68
	間接的断り合計	132	31.96	157	53.40
付随表現	肯定的表現	1	0.24	0	0
	あいづち	122	29.54	10	3.40
	困惑	4	0.97	0	0
	ためらい	22	5.33	34	11.56

	驚き	13	3.15	6	2.04
	情報確認・要求	71	17.19	33	11.22
	否定の前置き	4	0.97	0	0
	感謝	0	0	0	0
	呼び掛け	0	0	9	3.06
	挨拶	9	2.18	6	2.04
	ヘッジ	4	0.97	0	0
	共感	0	0	5	1.70
	その他	1	0.24	8	2.72
	付随表現合計	251	60.77	111	37.76
意味公式合計		413	100	294	100

表 7-16 のとおり、まず、CC4 より JJ4 のほうで全体的に意味公式が多く見られた(JJ4-413 回, CC2-294 回)。次に、意味公式のカテゴリーを見ると、CC4 より JJ4 のほうで「付随表現」が顕著に多用された(JJ4-251/60.77%, CC4-111/37.76%)。それに対して、JJ4 より CC4 のほうで「間接的断り」が多く使用された(JJ4-132/31.96%, CC4-157/53.4%)。「直接的断り」における JJ4 と CC4 両者間の差があまり見られなかった(JJ4-30/7.26%, CC4-26/8.84%)。

また、各意味公式の使用回数の割合をみれば、JJ4 では多く使用された意味公式の上位 7 位が① {あいづち} (29.54%)、② {情報確認・要求} (17.19%)、③ {理由} (12.83%)、④ {代案} (8.23%)、⑤ {不可} (7.26%)、⑥ {ためらい} (5.33%)、⑦ {詫び} (4.12%) という順であったのに対して、CC4 では① {理由} (21.43%)、② {代案} (14.29%)、③ {ためらい} (11.56%)、④ {情報確認・要求} (11.22%)、⑤ {不可} (8.84%)、⑥ {条件提示} (8.16%)、⑦ {詫び} (3.74%) という上位 7 位が見られた。そのうち、JJ4 と CC4 双方共に {理由}、{情報確認・要求}、{代案}、{ためらい}、{不可}、{詫び} という 6 つの意味公式を多用したという共通点が見られた。そのうち、{不可}、{詫び} の使用率においては、JJ4 と CC4 はほぼ同様であった。社会人の JJ2 にくらべると、学生の JJ4 で使用された {詫び} の使用率が随分減少したことがわかった。また、依頼に対する断り言語行動においては、文化差を問わず、学生より社会人のほうでは {不可} が多く用いられた。

一方、CC4 より JJ4 のほうで {あいづち}、{情報確認・要求} が多用されたのに対して、JJ4 より CC4 のほうで {理由}、{条件提示}、{代案}、{ためらい} が多く用いられた相違点が伺われた。とりわけ、{あいづち} の使用率で見られた JJ4 と CC4 両者間の差が最も大きかった(JJ4-29.54%, CC4-3.40%)。

## 7.2.2 被験者による意味公式の使用平均値の有意差

本節において、JJ4 と CC4 の各被験者による各意味公式の使用平均値に及ぼした影響を t 検定で対照する。

表 7-17 JJ4 と CC4 の「直接的断り」における人による意味公式の平均使用数

	JJ4(n=10)		CC4(n=10)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	3.00	1.333	2.60	2.271	0.612	0.555
直接的断り合計	3.00	1.333	2.60	2.271	0.612	0.555

表7-18 JJ4とCC4の「間接的断り」における人による意味公式の平均使用数

	JJ4(n=10)		CC4(n=10)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	5.30	1.947	6.30	1.160	-1.225	0.252
条件提示	0.60	1.578	2.40	1.430	-2.290	0.048
詫び	1.70	2.111	1.10	1.197	0.745	0.475
願望	1.10	1.370	0.70	0.823	0.647	0.534
言いさし	0.20	0.422	0.30	0.675	-0.361	0.726
関係維持	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
遺憾	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
相手を思い止まらせる	0.40	0.843	0.40	0.966	0.000	1.000
試み						
代案	3.40	1.955	4.20	3.259	-0.621	0.550
保留	0.10	0.316	0.10	0.316	0.000	1.000
原則的陳述	0.40	0.966	0.20	0.632	0.514	0.619
間接的断り合計	13.20	6.179	15.70	5.697	-0.732	0.483

「間接的断り」においては、JJ4 より CC4 のほうでは、{条件提示} が有意に多用されたことがわかった。

表 7-19 JJ4 と CC4 の「付随表現」における人による意味公式の平均使用数

	JJ4(n=10)		CC4(n=10)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.10	0.316	0.00	0.000	1.000	0.343
あいづち	12.20	10.174	1.00	1.633	3.289	0.009
困惑	0.40	0.966	0.00	0.000	1.309	0.223
ためらい	2.20	2.044	3.40	4.248	-0.678	0.515
驚き	1.30	1.059	0.60	0.843	1.655	0.132
情報確認・要求	7.10	2.601	3.30	3.498	2.433	0.038
否定の前置き	0.40	0.699	0.00	0.000	1.809	0.104
感謝	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
呼びかけ	0.00	0.000	0.90	1.449	-1.964	0.081
挨拶	0.90	1.287	0.60	0.843	0.709	0.496
ヘッジ	0.40	0.966	0.00	0.000	1.309	0.223
共感	0.00	0.000	0.50	0.707	-2.236	0.052
その他	0.10	0.316	0.80	1.619	-1.300	0.226
付随表現合計	25.10	12.974	11.10	10.775	2.088	0.066

「付随表現」においては、CC4よりJJ4のほうでは、{あいづち}と{情報確認・要求}が有意に多用された。その他の意味公式の有意差が見られなかった。

意味公式のカテゴリの使用平均値を対照すると、JJ4とCC4の間に有意差が見られなかった。各意味公式の平均値の有意差を見ると、CC4よりJJ4のほうでは、{あいづち}と{情報確認・要求}が有意に多用されたのに対して、JJ4よりCC4のほうでは{条件提示}が有意に多く見られたことがわかった。また、上記の意味公式を除き、7.2.1で述べたCC4よりJJ4のほうでは{詫び}の使用数が多かったのに対して、JJ4よりCC4のほうでは{理由}、{ためらい}が多く使用されたのは、本節の人による意味公式の使用平均値の有意差に関する考察では検証されなかった。

### 7.2.3 社会的関係が意味公式の使用平均値に与えた影響

本節において、親・疎関係と同・下関係を含む社会的関係がJJ4とCC4の各意味公式の使用平均値に与えた影響を考察していく。まず、親・疎関係によるJJ4の意味公式の使用平均値の有意差があるか否かを考察する。

表 7-20 JJ4 親と疎（直接的断り）

	JJ4親 (n=20)		JJ4疎 (n=20)		t	p
	平均 値	標準偏差	平均 値	標準偏差		
不可	0.75	0.639	0.75	0.550	0.000	1.000
直接的断り合計	0.75	0.639	0.75	0.550	0.000	1.000

表 7-21 JJ4 親と疎（間接的断り）

	JJ4親 (n=20)		JJ4疎 (n=20)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.10	0.718	1.55	1.099	-1.484	0.154
条件提示	0.10	0.308	0.20	0.696	-0.809	0.428
詫び	0.40	0.681	0.45	0.686	-0.295	0.772
願望	0.40	0.821	0.15	0.366	1.422	0.171
言いさし	0.05	0.224	0.05	0.224	0.000	1.000
関係維持	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
遺憾	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
相手を思い止まら せる試み	0.15	0.366	0.05	0.224	1.453	0.163
代案	0.85	0.745	0.85	0.933	0.000	1.000
保留	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
原則的陳述	0.10	0.308	0.10	0.447	0.000	1.000
間接的断り合計	3.20	1.936	3.40	2.280	-0.366	0.718

表 7-22 JJ4 親と疎（付随表現）



	JJ4親 (n=20)		JJ4疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
あいづち	2.55	2.685	3.55	3.069	-1.859	0.079
困惑	0.10	0.308	0.10	0.308	0.000	1.000
ためらい	0.50	0.688	0.60	0.821	-0.462	0.649
驚き	0.45	0.510	0.20	0.410	2.517	0.021
情報確認・要求	1.95	0.945	1.60	1.501	0.877	0.392
否定の前置き	0.10	0.308	0.10	0.308	0.000	1.000
感謝	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
呼びかけ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
挨拶	0.25	0.444	0.20	0.410	0.567	0.577
ヘッジ	0.10	0.308	0.10	0.447	0.000	1.000
共感	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
その他	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
付随表現合計	6.05	3.486	6.50	3.927	-0.590	0.562

JJ4 では、疎の人より親の人のほうに対して、{驚き} が有意に多かった。ほかの意味公式の有意差がなかった。

次に、CC4 の親・疎関係が各意味公式の使用平均値に及ぼした影響を考察する。

表 7-23 CC4 親と疎 (直接的断り)

	CC4親 (n=20)		CC4疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	0.55	0.759	0.75	0.851	-0.890	0.385
直接的断り	0.55	0.759	0.75	0.851	-0.890	0.385
合計						

表 7-24 CC4 親と疎 (間接的断り)

	CC4親 (n=20)		CC4疎 (n=20)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.20	0.616	1.95	0.887	-3.290	0.004
条件提示	0.85	0.813	0.35	0.587	2.127	0.047
詫び	0.10	0.308	0.45	0.686	-2.101	0.049
願望	0.25	0.444	0.10	0.308	1.143	0.267
言いさし	0.05	0.224	0.10	0.308	-0.567	0.577
関係維持	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
遺憾	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
相手を思い止まらせる	0.15	0.489	0.05	0.224	1.453	0.163
試み						
代案	1.05	1.146	1.05	0.945	0.000	1.000
保留	0.05	0.224	0.00	0.000	1.000	0.330
原則的陳述	0.10	0.447	0.00	0.000	1.000	0.330
間接的断り合計	3.80	1.735	4.05	1.731	-0.691	0.498

表 7-25 CC4 親と疎 (付随表現)

	CC4親 (n=20)		CC4疎 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
あいづち	0.35	0.671	0.15	0.366	1.285	0.214
困惑	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
ためらい	0.95	1.234	0.75	1.164	0.940	0.359
驚き	0.20	0.410	0.10	0.308	1.453	0.163
情報確認・要求	1.00	1.124	0.65	0.875	1.789	0.090
否定の前置き	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
感謝	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
呼びかけ	0.20	0.523	0.25	0.716	-0.370	0.716
挨拶	0.10	0.308	0.20	0.523	-0.809	0.428
ヘッジ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
共感	0.05	0.224	0.20	0.410	-1.371	0.186
その他	0.35	0.745	0.05	0.224	2.042	0.055
付随表現合計	3.20	3.222	2.35	2.498	1.973	0.063

CC4 では、親・疎関係による意味公式の使用平均値の有意差は、「間接的断り」における {理由}、{条件提示}、{詫び} に見られた。即ち、親の人より疎の人のほうに対して、{理由} と {詫び} が有意に多用された。それに対して、親の人のほうに対して、{条件提示} が有意に多く用いられた。その他の意味公式の有意差が見られなかった。

つづいては、JJ4 の同・下関係による各意味公式の使用平均値の有意差を検定する。

表 7-26 JJ4 同と下（直接的断り）

	JJ4同 (n=20)		JJ4下 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	0.70	0.657	0.80	0.523	-0.490	0.629
直接的断り合計	0.70	0.657	0.80	0.523	-0.490	0.629

表 7-27 JJ4 同と下（間接的断り）

	JJ4同 (n=20)		JJ4下 (n=20)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.20	0.834	1.45	1.050	-0.893	0.383
条件提示	0.10	0.308	0.20	0.696	-0.809	0.428
詫び	0.45	0.686	0.40	0.681	0.326	0.748
願望	0.30	0.733	0.25	0.550	0.237	0.815
言いさし	0.00	0.000	0.10	0.308	-1.453	0.163
関係維持	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
遺憾	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
相手を思い止ま らせる試み	0.05	0.224	0.15	0.366	-1.453	0.163
代案	0.85	0.813	0.85	0.875	0.000	1.000
保留	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
原則的陳述	0.00	0.000	0.20	0.523	-1.710	0.104
間接的断り合計	2.95	1.849	3.65	2.300	-1.178	0.253

表 7-28 JJ4 同と下（付随表現）

	JJ4同 (n=20)		JJ4下 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
あいづち	3.20	2.668	2.90	3.161	0.584	0.566
困惑	0.10	0.308	0.10	0.308	0.000	1.000
ためらい	0.65	0.875	0.45	0.605	1.000	0.330
驚き	0.35	0.489	0.30	0.470	0.326	0.748
情報確認・要求	1.60	0.940	1.95	1.504	-0.892	0.384
否定の前置き	0.05	0.224	0.15	0.366	-1.000	0.330
感謝	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
呼びかけ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
挨拶	0.10	0.308	0.35	0.489	-2.517	0.021
ヘッジ	0.00	0.000	0.20	0.523	-1.710	0.104
共感	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
その他	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
付随表現合計	6.05	3.154	6.50	4.199	-0.645	0.527

JJ4 では、{挨拶} のみの有意差が見られた。即ち、同の人より下の人の方に対して、{挨拶} が有意に多く見られた。その他の意味公式の使用回数の有意差がなかった。最後に、CC4 の同・下関係による各意味公式の使用平均値の有意差を考察する。

表 7-29 CC4 同と下（直接的断り）

	CC4同 (n=20)		CC4下 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不可	0.65	0.875	0.65	0.745	0.000	1.000
直接的断り合計	0.65	0.875	0.65	0.745	0.000	1.000

表 7-30 CC4 同と下（間接的断り）

	CC4同 (n=20)		CC4下 (n=20)		t	P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
理由	1.80	0.768	1.35	0.875	1.917	0.070
条件提示	0.65	0.745	0.55	0.759	0.525	0.606
詫び	0.40	0.681	0.15	0.366	1.561	0.135
願望	0.15	0.366	0.20	0.410	-0.438	0.666
言いさし	0.10	0.308	0.05	0.224	1.000	0.330
関係維持	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
遺憾	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
相手を思い止まらせる 試み	0.00	0.000	0.20	0.523	-1.710	0.104
代案	1.15	1.182	0.95	0.887	0.721	0.479
保留	0.00	0.000	0.05	0.224	-1.000	0.330
原則的陳述	0.10	0.447	0.00	0.000	1.000	0.330
間接的断り合計	4.35	1.565	3.50	1.792	3.101	0.006

表 7-31 CC4 同と下 (付随表現)

	CC4同 (n=20)		CC4下 (n=20)		t	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
肯定的表現	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
あいづち	0.20	0.523	0.30	0.571	-0.809	0.428
困惑	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
ためらい	0.90	1.334	0.80	1.056	0.438	0.666
驚き	0.15	0.366	0.15	0.366	0.000	1.000
情報確認・要求	0.90	1.210	0.75	0.786	0.767	0.453
否定の前置き	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
感謝	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
呼びかけ	0.15	0.489	0.30	0.733	-0.719	0.481
挨拶	0.00	0.000	0.30	0.571	-2.349	0.030
ヘッジ	0.00	0.000	0.00	0.000	0.000	1.000
共感	0.10	0.308	0.15	0.366	-0.567	0.577
その他	0.25	0.639	0.15	0.489	0.809	0.428
付随表現合計	2.65	2.889	2.90	2.936	-0.721	0.480

CC4 では、下の人より同の人のほうに対して、全体的に「間接的断り」が有意に多かった。なお、「付随表現」に属する {挨拶} の有意差も見られた。その他の意味公式の有意差がなかった。

上記の JJ4 と CC4 の社会的変数による各意味公式の有意差をまとめると、JJ4 の親・疎関係による意味公式の有意差は、{驚き} のみに見られたのに対して、CC4 の親・疎関係によって、{理由}、{条件提示}、{詫び} の有意差が見られた。なお、JJ4 と CC4 双

方ともに、同・下関係による {挨拶} の有意差があった。そして、いずれも下の人のほうに対して、 {挨拶} が有意に多かった。ほかの意味公式の有意差は、JJ4 と CC4 のいずれにおいても見られなかった。

## 7.2.4 本節のまとめ

本節において、JJ4 と CC4 の意味公式の使用数及び割合、人による意味公式の使用平均値の有意差と、親・疎関係と同・下関係を含む社会的関係が意味公式の使用平均値に与えた影響を考察した。以下の結果が得られた。

まず、意味公式の使用数及び割合に関する考察の結果をまとめると、JJ4 と CC4 双方共に {理由}、{情報確認・要求}、{代案}、{ためらい}、{不可}、{詫び} という6つの意味公式を多用したという共通点が挙げられた。一方、CC4 より JJ4 のほうで {あいづち}、{情報確認・要求} が多用されたのに対して、JJ4 より CC4 のほうで {理由}、{条件提示}、{代案}、{ためらい} が多く用いられた相違点が見られた。

次に、人による意味公式の使用平均値の有意差に関する考察では、上記の意味公式の中で、JJ4 のほうで {あいづち}、{情報確認・要求} が有意に多用されたのに対して、CC4 のほうで {条件提示} が有意に多く使用されたのは、検証されたが、JJ4 より CC4 のほうで {理由}、{代案}、{ためらい} が有意に多く用いられたのは、検証されなかった。

最後に、親・疎関係と同・下関係を含む社会的関係が JJ4 と CC4 の意味公式の使用平均値に及ぼした影響をまとめると、親・疎関係が CC4 の意味公式に与えた影響が最も顕著であった。即ち、CC4 では親の人のほうに対して、 {条件提示} が有意に多用されたのに対して、疎の人のほうに対して、 {理由} と {詫び} が有意に多く使用されたことが伺われた。それに対して、JJ4 では親の人のほうに対して {驚き} が有意に多用された。一方、JJ4 と CC4 とともに、下の人のほうに対して、 {挨拶} を有意に多用したという同・下関係による差も観察された。

## 7.3 意味公式の内容と表現形式の分析

7.2 では、JJ4 で意味公式の使用回数が上位5位は {あいづち}、{情報確認・要求}、{理由}、{代案}、{不可} であった。一方、CC4 では意味公式の使用回数が上位5位は {理由}、{代案}、{ためらい}、{情報確認・要求}、{不可} であったが、社会人の依頼に対する断り言語行動と対照できるように、本節においても、JJ4 と CC4 の {あいづち}、{理由}、{不可} を取り上げ、そのうち内容及び表現形式を考察する。さらに、親・疎関係と力関係を含む社会的関係が意味公式の内容及び表現形式の使い分けに与えた影響も考察する。ただし、CC4 で見られた {あいづち} の使用回数がわずかであったので、社会的関係が CC4 の {あ

いづち} に与えた影響を考察できないので、考察対象外とする。

### 7.3.1 {不可} の内容分析

7.2 で述べたように、JJ4 と CC4 両者間の {不可} の使用数の差はほぼ同じであった (JJ4-30/7.26%, CC4-26/8.84%) が、本節では、内容からすれば、JJ4 と CC4 の間に異同があるか否かを分析する。それに先立ち、頼み手のフェイスを脅かす度合い (FT 度) の大きさによって、{不可} を①「能力・状況」、②「緩和的結論」、③「意志」、④「本音」4つに分類した。そのうち、①「能力・状況」の {不可} は、相手の FT 度合いが最も小さい。③と④は、相手の FT 度が大きい言語行動と見なす。

{不可} の内容分類間の境目が明確ではないこともあった。即ち、同じ表現であったが、異なる {不可} の下位分類に属することもある。ゆえに、{不可} の内容を分類する際に、相手の FT 度の大きさのほかに、以下の基準も挙げられる

まず、同じ「貸せない」表現であるが、「能力・状況」に分類する場合もあれば、「意志」に分類する場合もある。それは断り手の {理由} の内容によって判断する。以下の2つの例をあげて説明する。

#### 1 回目の断り

2B 三万円 (うん)、今、今持って (うん) なくて (うん)、貸せないかな (うん)。(ごめんね、そうだよね)  
家族とかには言った?

3A まだ言っていないだよね。

4B じゃあ聞いてみて、きっと… (JJ4F9 疎・同)

会話例 (JJ4F9 疎・同) の1回目の断りにおいては、断り手が「三万円、今、持ってなくて」という {理由} を提供したあとで、「貸せないかな」という {不可} を述べたので、このような {不可} を「能力・状況の不可」に分類する。

#### 1 回目の断り

4B じゃあ (はい)、後輩と同年の (はい)、知り合いの後輩がいるから (はい) そっちに頼んでみるから。  
まあ俺は貸せないかな。

#### 終結部

5A あー、そうなんですか、わかりました。(JJ4M10 親・下)

会話例 (JJ4M10 親・下) の断り手は、1回目の断りから最後の終了部まで、{理由} を1つも述べず、ただ {代案} + {不可} というパターンで相手を断ったので、このような {不

可}を「意志」に分類する。

次に、同じ「無理」という表現であるが、「緩和的結論」に分類する場合もあれば、「能力・状況」または「意志」に分類する場合もある。それは「無理」の前後に「ちょっと」のような緩和的表現があるか否かによって判断する。即ち、「ちょっと無理」、「ちょっと難しい」などの表現を「緩和的結論」としたのに対して、その前後に緩和的表現がついていない「無理」を「能力・状況」または「意志」に分類したこともある。

さらに、「無理」、「だめ」のような表現を「能力・状況」と「意志」のどちらに分類するかに関しては、その前後に{理由}が1度も現れなかったら、「意志」に分類する。その前後に{理由}が現れたら、「能力・状況」に分類することにする。例えば、以下の例では、「3万円もってないから」の後ろに来た「無理」という不可表現は、「能力・状況」の不可に分類した。

1 回目の断り

4B 3万円。3万円…持ってないから無理【聞き取れない】ごめんなさい。大丈夫？頑張って。(JJ4F8 疎・下)

それに対して、以下の例では、「だめ」表現の前後に「理由」が1つも見られなかったので、「だめ」を「意志」に分類した。

1 回目の断り

5B あの、ダメ。

6A ダメ？

7B うん

8A まあダメだよ、いきなりだよ。あんまり親しくないし。

9B そうだね。

終結部

10A そっか、わかった。いきなり変なこと言ってごめん、ありがとう。

従って、相手の FT 度の大きさのほかに、{不可}と{理由}の繋がり、{不可}の前後に「緩和的表現」が来るか否かなどの基準も合わせて、JJ4とCC4の{不可}の内容を表7-32のように分類した。

表 7-32 JJ4 と CC4 の {不可} の内容分類及び例

不可の内容	JJ4	CC4
	<b>11 (36.67%)</b>	23 (88.46%)
能力・状況	貸せないかな。／貸してあげられないかなー。 ／ちょっと貸せる状況じゃ無いから、／無理	我们也帮不上什么。／然后借不了你。／我肯定是拿不出来的。／实在没办法。(うち



		らも何も役にならない。／貸してあげられない。／絶対無理です。／仕方ない。)
緩和的結論	10(33.33%)	3(11.54%)
	ちょっと無理だな、/ちょっと今すぐはちょっと難しいかな。	不太方便啊/不太好弄(ちょっと難しい/困りますね)
意志	7(23.33%)	0
	自業自得だと思うので貸しません。/いやです/まあ俺は貸せないかな。(能力じゃない理由: お金ないような理由は1度も述べていない/だめ	
本音	2(6.67%)	0
	俺は貸したくないよ。/心配ついてくる人にさすがに貸したくはない。	
合計	30(100%)	26(100%)

表 7-32 に示した {不可} の各内容の使用回数及び割合からみれば、JJ4 と CC4 とともに、「能力・状況」の不可表現 (JJ4-11/36.67%, CC4-23/88.46%) が最も多用されたが、JJ4 より CC4 のほうでは「能力・状況」が相当に多く見られた。また、JJ4 では「能力・状況」のつづき、「緩和的結論」(10/33.33%) も多用された。それに対して、CC4 での「緩和的結論」が 3 回 (11.54%) しか見られなかった。換言すれば、JJ4 では相手の FT 度が小さい「緩和的結論」と「能力・状況」のいずれも好まれたのに対して、CC4 では同様に、相手の FT 度が小さい「能力・状況」も好まれたが、「緩和的結論」があまり使用されなかった。しかし、JJ4 で見られた相手の FT 度が大きい「意志」と「本音」は CC4 では 1 つも見られなかった。即ち、JJ4 のほうが CC4 より直接的なパターンで相手を断った場合もあった。まとめると、同じ依頼に対する断り場面においても、JJ4 は相手のフェイスを守るための「緩和的結論」を多用したこともあれば、相手のフェイスを脅かす度合いが大きい「意志」と「本音」を使用したこともある。

次に、親・疎関係と力関係が {不可} の内容に及ぼした影響を考察する。表 7-33 は親・疎関係による JJ4 と CC4 の {不可} の各内容の使い分けの詳細である。

表 7-33 JJ4 と CC4 の親・疎関係による {不可} の各内容の使い分け

	能力・状況	緩和的結論	意志	本音	合計
JJ4 親合計	7	4	3	1	15
JJ4 親割合/30	23.33%	13.33%	10%	3.33%	50%
JJ4 疎合計	4	6	4	1	15

JJ4 疎割合/30	13.33%	20%	13.33%	3.33%	50%
CC4 親合計	10	1	0	0	11
CC4 親割合/26	38.46%	3.85%	0	0	42.31%
CC4 疎合計	13	2	0	0	15
CC4 疎割合/26	50%	7.69%	0	0	57.69%

表 7-33 によると、JJ4 では、親の人のほうに対して、「能力・状況」が最も多用されたのに対して、疎の人のほうに対して、「緩和的結論」が最も多く見られた。一方、CC4 では、親・疎を問わず、「能力・状況」の使用数が最も多かった。ただし、CC4 では親の人より疎の人のほうにに対して「能力・状況」がやや多く使用されたという結果も伺われた。フォローアップ・インタビューによると、JJ4 では親しい人に対して、お金を貸してあげない理由を詳しく説明したのは、相手のポジティブフェイスを維持できる答えもあった。一方、CC4 では、親しい人に対して、お金を貸してあげないのを前提としたら、詳しい理由を提供するより、詳しい {代案} や {条件提示} などの表出は、相手との関係が修復できるという答えも得られた。

表 7-34 JJ4 と CC4 同・下関係による {不可} の各内容の使い分け

	能力・状況	緩和的結論	意志	本音	合計
JJ4 同合計	5	6	3	0	14
JJ4 同割合/30	16.67%	20%	10%	0	46.67%
JJ4 下合計	6	4	4	2	16
JJ4 下割合/30	20%	13.33%	13.33%	6.67%	53.33%
CC4 同合計	11	2	0	0	13
CC4 同割合/26	42.31%	7.69%	0	0	50%
CC4 下合計	12	1	0	0	13
CC4 下割合/26	46.15%	3.85%	0	0	50%

表 7-34 の同・下関係による {不可} の使用回数合計及び使用率から見ると、JJ4 と CC4 共に、力関係による差が少なかった。

上記の親・疎関係と力関係を含む社会的関係が {不可} の内容の使い分けに及ぼした影響をまとめると、JJ4 と CC4 のいずれも、社会的関係が {不可} の内容に与えた影響はあまり顕著でなかった。ただし、JJ4 では親の人のほうに対して、相手の FT 度が小さい「能力・状況」が多用されたのに対して、CC4 では疎の人のほうに対して、「能力・状況」が多く見られたという結果になった。

### 7.3.2 {理由} の内容分析

本節においても、西村（2007）、池田（2009）のような具体的内容による分類を参考に、相手の FT 度の大きさに基づき、{理由} の曖昧さと具体的内容、1 会話ごとに 2 度目または 2 度目以上現れた理由の繋がりを合わせて、学生を対象とする依頼に対する断りで現れた「理由」を①「自分の生活もきつい」、②「消費のため」、③「他人に金銭を貸している」、④「第 3 者による理由」、⑤「情報不足の理由」、⑥「気持の表明」の 6 つに分類した。①、②、③、④は「具体的な理由」に分類できて、相手の FT 度が最も小さい言語行動であるのに対して、⑥「気持の表明」が相手の FT 度が最も大きい言語行動であると見なす。「具体的な理由」の中で、②「消費のため」というのは、学費、部活動、就職、インターンシップなどに金銭使用という意味であった。また、「第 3 者による理由」というのは、ご両親などに「お金を貸し出してはいけない」と言われたという理由であった。

学生の依頼に対する断り言語行動においては、「情報不足の理由」と「具体的な理由」を分別する基準の設定は困難であった。同じ大金の貸し借りを依頼されても、大人は少しでも金銭の余裕があるのに対して、学生はそもそも金銭の余裕がないので、ただ「お金がない」のみで堂々と相手を断ることができると思われる。ただし、学生の依頼に対する断り言語行動では、「お金がない」、「額がでかい」のような不十分な情報の {理由} もあれば、「俺も生活かかっているわけだし、3 万も出すとちょっとキチンなことで…」、「我父母每个月就给我 1000 块钱，实在没有多余的」（1 ヶ月に両親から 1000 元ずつもらうので、お金の余裕がない）のようなより詳しい情報を提供する {理由} もある。本節において、前者の 2 例を「情報不足の理由」とするのに対して、後者の 2 例を「具体的な理由」とする。もう 1 つの例を見よう。

#### 1 回目の断り

- 2B 3 万円、貸してあげたいけども
- 3A じゃあいいじゃん
- 4B でもあのね、①俺も今ちょっとね結構デカイ出費しちゃったばかりで、仕事で使うおっきい機材自分用に買っちゃって、結構今月やばいんだよね。

#### 2 回目の断り

- 5A でも、貯金あるよね？すごいいっぱい。
- 6B 貯金…
- 7A でもわたしは貯金ゼロなの、もうね、あと百円しかないの。
- 8B じゃああの、親とかに借りられない？
- 9A 親、いない
- 10B ホントオ？うーん何処から来たんだろう。

11A 親は、小さい頃に交通事故で亡くなったの。

12B えーでもなあ、②だって。本当にないんだよ今月。(JJ4M11 親・同)

JJ4M11 親・同の例では、1回目の断りにおいて、「でもあのね、俺も今ちょっとね結構デカイ出費しちゃったばかりで、仕事で使うおっきい機材自分用を買っちゃって、結構今月やばいんだよね。」のような詳しい理由が現れたあとで、2回目の断りの最後に、「だって。本当にないんだよ今月。」のような表現を「具体的な理由」に分類した。

上記の分類基準に基づき、JJ4 と CC4 で使用された {理由} の内容を表 7-35 に分類する。

表 7-35 JJ4 と CC4 の {理由} の内容分類及び例

理由内容 の上位分 類	理由内容の 下位分類	JJ4	CC4
具体的な理由	自分の生活もきつい	6(11.32%)	15(23.81%)
		俺も生活かかっているわけだし、3万も出すとちょっとキチンなことだ…。	我这每个月都是我妈打钱给我，你平常也在一起都知道嘛，然后现在我妈这个月刚开始，一个月，月初刚打了八百块钱给我。（每月母から仕送りをしてもらっている。いつも一緒だから知っているだろうし、それで今月が始まったばかりで、一ヶ月、初めに800元をもらったばかりです。）
	消費のため	4(7.55%)	18(28.57%)
		あの妹が入学式あるから、高校の。俺がその制服を買ってあげるっていう話になって、どうしてもそのお金使えないから、（2回目断り）	我也有那个学费，是补学的那种，就是一个英语补习的那种，也是需要交钱，然后刚把钱交上。（学费も出さないと、塾料金のようなもので、英語塾のようなもので、料金も必要です。払ったばかりです。）
	他人に金銭を貸している	0	1(1.59%)
			我前几天刚把，刚把钱借给我一个同学，所以我现在生活费也很紧凑的，刚刚凑，凑，凑的生活费。（この間同級生に貸してあげたばかりです。だからうちも結構厳しくなった。生活費も集めたばかりです。）
第3者のこ	1(1.89%)	3(4.76%)	

	とによる理由	俺親に言われてるんだよ。絶対人におっきいお金を貸すときは信じられる人くらいってのじゃないとダメだし、俺絶対保証人ならないもん。	我这儿，家里还管的严呢。现在，就是每个月都得查账。（うちも結構厳しい。今、毎月チェックされてる。）
	具体的な理由合計	11 (20.75%)	37 (58.73%)
情報不足の理由	大金またはお金ないのみ	25 (47.17%)	22 (34.92%)
		金ないです/えー、でも、3万はでかいから/俺もお金使うから、	但是我这手头也不太多呀/有点多（手元にあまり（現金）を持ってない／（額）多すぎる）
気持の表明		17 (32.08%)	4 (6.35%)
		すぐ返すって言われて返された覚えが一度もないですし、貸してしまったのは自業自得だと思うので/あんまり親しくないと余計にあんまり。ちゃんと帰ってくるかもわからないわけだから	关键咱都不熟，我连你名字都不知道，贸然借给你钱，我也不太好，那，家里边儿这么多钱哪去了我咋回答啊。（私たちよく知らないから、名前まで知らないし、貸してあげたら、よくないち思う。あの、家に大金の行方について、どう答えるかわからない。）
合計		53 (100%)	63 (100%)

まず、{理由}の内容のカテゴリーを見ると、JJ4とCC4両者の間に、「情報不足の理由」の使用数及び割合がほぼ同じであった。一方、JJ4のほうでは「情報不足の理由」が最も多用されたのに対して、CC4のほうでは「具体的な理由」が最も多く見られたという相違点も伺われた。なお、CC4よりJJ4のほうでは相手のFT度が大きい「気持の表明」も多く用いられたのに対して、JJ4よりCC4のほうでは、相手のFT度が最も小さい「具体的な理由」が著しく多用された。

さらに、「具体的な理由」の下位分類のいずれも、JJ4よりCC4のほうでは「具体的な理由」の使用数及び割合が多かった。そのうち、CC4では「具体的な理由」の内容は主に「自分の生活もきつい」と「消費のため」に集中した。

つづいては、親・疎関係と力関係が{理由}の内容の使い分けに及ぼした影響を考察する。まず、親・疎関係が{理由}の内容の使い分けに与えた影響を表7-36に示す。

表7-36 JJ4とCC4の親・疎関係による{理由}の各内容の使い分け

	具体的な理由				具体的な理由 合計	情報不足の理由 大金またはお金のみ	気持の 表明	合計
	自分の生活もきつい	消費のため	他人に金を貸している	第三者の理由				
JJ4 親合計	6	4	0	0	10	11	1	22
JJ4 親割合/53	11.32%	7.55%	0	0	18.87%	20.75%	1.89%	41.51%
JJ4 疎合計	0	0	0	1	1	14	16	31
JJ4 疎割合/53	0	0	0	1.89%	1.89%	26.42%	30.19%	58.49%
CC4 親合計	9	4	1	2	16	8	0	24
CC4 親割合/63	14.29%	6.35%	1.59%	3.17%	25.40%	12.70%		38.10%
CC4 疎合計	6	14	0	1	21	14	4	39
CC4 疎割合/63	9.52%	22.22%	0	1.59%	33.33%	22.22%	6.35%	61.90%

表 7-36 によると、JJ4 では、親・疎関係による {理由} の内容の差が最も大きかったのは、「気持の表明」に見られた。即ち、親の人より疎の人のほうに対して、「気持の表明」が相当に多く見られた（親-1/1.89%, 疎-16/30.19%）。それにつづき、疎の人より親の人のほうに対して、「自分の生活もきつい」と「消費のため」が多く使用されたので、「具体的な理由」も親の人に対して多く見られた。その他、親・疎関係がその他の {理由} の内容に与えた影響があまり見られなかった。

一方、CC4 では、親・疎関係が {理由} の内容に与えた影響が最も顕著であったのは、「消費のため」に集中した。即ち、親の人より疎の人のほうに対して、「消費のため」が多用された（親-4/6.35%, 疎-14/22.22%）。従って、CC4 では疎の人のほうに対して、「消費のため」を含む「具体的な理由」も多く使用された。つづいては、疎の人のほうに対して、「情報不足の理由」が多く見られたが、その差が大きくなかった。

なお、JJ4 と CC4 の {理由} の内容のカテゴリーを見ると、JJ4 と CC4 双方ともに、親の人より疎の人のほうに対して、「情報不足の理由」と「気持の表明」が多かった。一方、JJ4 では親しい人のほうに対して、相手の FT 度が小さい「具体的な理由」が好まれたのに対して、CC4 では親しくない人のほうに対して「具体的な理由」が多く見られたという相違点もあった。このような結果は、中国人の学生を対象とする誘いを断る調査においても見られた。そして、フォローアップ・インタビューでは、中国人の学生にとっては、親しい人からの誘いまたは依頼を断る際に、具体的な理由も見つかりにくい場合<sup>41</sup>、本音で相手に誠意を見せたという会話のスタイルが観察された。換言すれば、中国人の学生の親・疎関係による断り言語行動のスタイルの特徴から、親しい人に対して、距離がより近いという対人関係が伺われた。それに対して、中国人の社会人を対象とする依頼を断る調査にお

いては、親しい人のほうに対して、「具体的な理由」が多用された結果になった。その原因を以下のように分析する。1つ目は、学生より社会人の生活スタイルがより豊かであるため、具体的な理由が見つかりやすいと考える。2つ目は、誘い場面と異なって、借金の依頼を断る場面では、社会人が2万元を持っているのは普通であるので、具体的な理由を提供しなければ、親しい人との関係が修復できないという答えもあった。一方、日本人を対象とする調査においては、親しくない人のほうに対して「情報不足の理由」が多く見られた原因に関しては、日本人にとっては、親しくない人に対して、自分のプライバシー、つまりネガティブ・フェイスを守る権力をもっているため、具体的な理由を述べずに済んだという距離を置く対人関係も観察された。

次に、力関係が JJ4 と CC4 の {理由} の使い分けに及ぼした影響を表 7-37 に示す。

表 7-37 JJ4 と CC4 の同・下関係による {理由} の各内容の使い分け

	具体的な理由				具体的な理由合計	情報不足の理由	気持の表明	合計
	自分の生活もきつい	消費のため	他人に金銭を貸している	第三者の理由		大金またはお金ののみ		
JJ4 同合計	1	4	0	1	6	12	6	24
JJ4 同割合/53	1.89%	7.55%	0	1.89%	11.32%	22.64%	11.32%	45.28%
JJ4 下合計	5	0	0	0	5	13	11	29
JJ4 下割合/53	9.43%	0	0	0	9.43%	24.53%	20.75%	54.72%
CC4 同合計	11	7	0	2	20	15	1	36
CC4 同割合/63	17.46%	11.11%	0	3.17%	31.75%	23.81%	1.59%	57.14%
CC4 下合計	4	11	1	1	17	7	3	27
CC4 下割合/63	6.35%	17.46%	1.59%	1.59%	26.98%	11.11%	4.76%	42.86%

表 7-37 に示したように、JJ4 では、力関係が {理由} の内容に与えた影響は主に「気持の表明」に見られた。即ち、同の人より下の人に対して、「気持の表明」が多用された。一方、CC4 では、力関係が {理由} の内容に及ぼした影響は主に「情報不足の理由」に集中した。つまり、下の人より同の人に対して、「情報不足の理由」が多く見られた。

上記の親・疎関係と力関係が {理由} の内容に及ぼした影響をまとめると、JJ4 と CC4 とともに、力関係より親・疎関係が {理由} の内容に与えた影響が顕著であった。とりわけ、JJ4 では親・疎関係が「気持の表明」に与えた影響が最も際立っていた。即ち、JJ4 では疎

の人のほうに対して、相手の FT 度が大きい「気持の表明」が顕著に多用された。なお、CC4 では疎の人のほうに対して、「消費のため」が際立って多用された。

最後に、{理由} を相手の FT 度の大きさによって、「具体的な理由」、「情報不足の理由」、「気持の表明」の 3 つのカテゴリーに分けて、{理由} のカテゴリーの展開パターンから、日中対照を行う。JJ4 と CC4 の {理由} の内容カテゴリーの展開パターンを表 7-38 に示す。

表 7-38 JJ4 と CC4 の {理由} の内容カテゴリーの分類による展開パターン

理由の展開パターン	JJ4 場面数 (割合%)	CC4 場面数 (割合%)
具体的な理由のみ	6(17.14%)	21(53.85%)
情報不足の理由のみ	18(51.43%)	13(33.33%)
気持の表明のみ	8(22.86%)	0
具体的な理由+情報不足の理由	1(2.86%)	2(5.13%)
具体的な理由+気持の表明	1(2.86%)	2(5.13%)
情報不足の理由+気持の表明	1(2.86%)	0
具体的な理由+情報不足の理由+気持の表明	0	1(2.56%)
合計	35(100%)	39(100%)

表 7-38 に示したとおり、JJ4 では「具体的な理由のみ」、「情報不足の理由のみ」、「気持の表明のみ」が中心に使用されたのに対して、CC4 では「具体的な理由のみ」と「情報不足の理由のみ」が主に用いられた。上記の 3 つのパターンでは、JJ4 と CC4 両者間の相違点は主に「具体的な理由のみ」と「気持の表明のみ」の展開パターンに集中した。具体的に言えば、JJ4 より CC4 のほうでは、「具体的な理由のみ」が多く見られた (JJ4-6/17.14%, CC4-21/53.85%)。つづいて、JJ4 で「気持の表明のみ」が 8 回見られたが、CC4 では 1 度も使用されなかった。換言すれば、CC4 では、「気持の表明」が単独に用いられたパターンがなかったが、ほかの「具体的な理由」または「情報不足の理由」と同時に使われたパターンが見られた。また、CC4 より JJ4 のほうでは「情報不足の理由のみ」の使用回数が多く見られたが、その差が大きくなかった。

### 7.3.3 {あいづち} の表現形式の分析

7.2 で述べたように、JJ4 では {あいづち} の使用率が最も多かった (29.54%) が、CC3 で見られた {あいづち} の割合が 3.4% で、ごく少なかったため、本節では、CC4 の {あいづち} の表現形式を考察しないことにする。

JJ4 で見られた {あいづち} の表現形式は、「うん／うんうん」、「はい／はいはい」、「ふっ」、「ああ／あ」、「おう」、「そうだね」、「えっ」、「そっかー／そっかそっか／そう／あ



一、そういうことね」、「繰り返し」、「先取り」、「言い換え」などがある。

本研究ではメイナード(1993)と堀口(1997)の分類を参考にし、本調査のデータに現れたあいづちの機能を①「聞いている」、②「同意・支持」、③「感情の表出」、④「了解」、⑤「会話への共同参加」の5つに分類する。

JJ4の{あいづち}に関する機能使い分けの詳細を表7-39にまとめる。

表7-39 JJ4とCC4の{あいづち}の機能分類

あいづちの機能	あいづちの表現形式	回数	割合%
聞いている	うん／うんうん	95	77.87
	はい／はいはい	5	4.10
	ふふっ	1	0.82
	ああ／あー	1	0.82
	おう	1	0.82
	繰り返し	5	4.10
	聞いている合計	108	88.52
同意・支持	うん／うんうん	2	1.64
	そうだね	2	1.64
	同意・支持合計	4	3.28
感情の表出	えっ	1	0.82
	繰り返し	1	0.82
	感情の表出合計	2	1.64
了解	そっかー／そっかそっか／そう／あー、そういうことね	6	4.92
会話への共同参加	先取り	1	0.82
	言い換え	1	0.82
	会話への共同参加合計	2	1.64
合計		122	100

JJ4の{あいづち}の機能による表現形式の分類の中で、「聞いている」という機能を果たしている{あいづち}が最も多く使用された。そのうち、JJ4では「聞いている」を表す「うん／うんうん」という表現形式が最も多用された(95/77.87%)。

次に、親・疎関係と力関係がJJ4の{あいづち}の使い分けに与えた影響を考察する。JJ4の親・疎関係による{あいづち}の表現形式の使い分けを表7-40に示す。

表7-40 JJ4の親・疎関係による{あいづち}の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	親(回数)	親割合/122	疎(回数)	疎割合/122

聞いている	うん／うんうん	35	28.69%	60	49.18%
	はい／はいはい	4	3.28%	1	0.82%
	ふふっ	1	0.82%	0	0
	ああ／あー	1	0.82%	0	0
	おう	1	0.82%	0	0
	繰り返し	4	3.28%	1	0.82%
	聞いている合計	46	37.70%	62	50.82%
同意・支持	うん／うんうん	1	0.82%	1	0.82%
	そうだね	0	0	2	1.64%
	同意・支持合計	1	0.82%	3	2.46%
感情の表出	えっ	0	0	1	0.82%
	繰り返し	1	0.82%	0	0
	感情の表出合計	1	0.82%	1	0.82%
会話への共同参加	先取り	1	0.82%	0	0
	言い換え	1	0.82%	0	0
	会話への共同参加合計	2	1.64%	0	0
了解	そっかー／そっかそっか／そう／あー、そういうことね	1	0.82%	5	4.10%
合計		51	41.80%	71	58.20%

表 7-40 によると、JJ4 では親の人より疎の人のほうに対して、「聞いている」という機能を表す「うん／うんうん」という表現形式が相当に多く用いられたので、「聞いている」を果たしている {あいづち} も、疎の人からの依頼に対する断り言語行動では多く見られたわけであった。

なお、JJ4 の同・下による {あいづち} の使い分けの詳細を表 7-41 に示す。

表 7-41 JJ4 の同・下関係による {あいづち} の表現形式の使い分け

あいづちの機能	あいづちの表現形式	同(回数)	同割合/122	下(回数)	下割合/122
聞いている	うん／うんうん	51	41.80%	44	36.07%
	はい／はいはい	5	4.10%	0	0
	ふふっ	1	0.82%	0	0
	ああ／あー	0	0	1	0.82%
	おう	0	0	1	0.82%
	繰り返し	2	1.64%	3	2.46%

	聞いている合計	59	48.36%	49	40.16%
同意・支持	うん／うんうん	1	0.82%	1	0.82%
	そうだね	1	0.82%	1	0.82%
	同意・支持合計	2	1.64%	2	1.64%
感情の表出	えっ	0	0	1	0.82%
	繰り返し	0	0	1	0.82%
	感情の表出合計	0	0	2	1.64%
会話への 共同参加	先取り	0	0	1	0.82%
	言い換え	0	0	1	0.82%
	会話への共同参加合計	0	0	2	1.64%
了解	そっかー／そっかそっか／そ う／あー、そういうことね	3	2.46%	3	2.46%
合計		64	52.46%	58	47.54%

表 7-41 に示したように、JJ4 では、下の人より同の人のほうに対して、「聞いている」を表す「うん／うんうん」と「はい／はいはい」がやや多く見られたが、その差は大きくなかった。従って、力関係が {あいづち} の表現形式の使い分けに与えた影響があまり顕著に見られなかった。

JJ4 の親・疎関係と力関係が {あいづち} の表現形式に与えた影響は主に「聞いている」の機能を表す「うん／うんうん」に集中した。そのうち、力関係より親・疎関係による「うん／うんうん」の使い分けの差が顕著に大きかったという結果になった。

### 7.3.4 本節のまとめ

本節においては、JJ4 と CC4 とともに多く見られた意味公式である {不可}、{理由} の内容分析、JJ4 の {あいづち} の表現形式の分析を F 行ってきた。

まず、{不可} の内容分析を見ると、JJ4 では相手の FT 度が小さい「緩和的結論」と「能力・状況」のいずれも好まれたのに対して、CC4 では同様に、相手の FT 度が小さい「能力・状況」も好まれたが、「緩和的結論」があまり使用されなかった。また、JJ4 で見られた相手の FT 度が大きい「意志」と「本音」は CC4 では 1 つも見られなかった。

次に、{理由} の内容分析によると、JJ4 では「情報不足の理由」が最も好まれたのにつづき、相手の FT 度が大きい「気持の表明」も多く使用されたのに対して、CC4 では「具体的な理由」につづき、「情報不足の理由」も多用されたが、「気持の表明」があまり使用されなかったという相違点が観察された。JJ4 と CC4 とともに、力関係より親・疎関係が {理由} の内容に与えた影響が顕著であった。JJ4 では親・疎関係が「気持の表明」に与えた

影響は最も顕著であった。即ち、JJ4 では疎の人のほうに対して、相手の FT 度が大きい「気持の表明」が著しく多用された。{理由} の内容によるカテゴリーの展開パターンに関する考察によると、JJ4 では「情報不足の理由のみ」のパターンが最も多かったのに対して、CC4 では「具体的な理由のみ」のパターンが最も多く見られた。

最後に、JJ4 の {あいづち} の表現形式の分析によると、「聞いている」の機能を果たしている {あいづち} が最も多く使用された。そのうち、「聞いている」を表す「うん／うんうん」という表現形式が最も多用された。また、社会的関係が JJ4 の {あいづち} の表現形式に与えた影響に関しては、JJ4 では力関係より親・疎関係による「うん／うんうん」の使い分けの差が顕著に大きかったという結果になった。

## 7.4 本章のまとめ

7.1 においては、話段ごとにおける各意味公式とそのカテゴリーの使用数及び平均値、意味公式のカテゴリー及び各意味公式の展開パターンの考察に基づき、学生を対象とする依頼に対する断り言語行動においても、JJ4 と CC4 のいずれも主に依頼話段、依頼・断り話段、終了部からなっていることが再び検証された。さらに、両者ともに {あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き} などを含む「付随表現」で、相手の発話に協力したり、相手の発話に関心を示したり、自分のネガティブ・フェイスを守るための前置きを提示したりする会話のスタイルが観察された。勧誘・断りの交渉話段においては、{理由}、{不可}、{代案}、{願望}、{条件提示} などの意味公式を用いて、相手を断った。最後の終了部においては、双方ともに、{詫び}、{代案}、{挨拶} などによって、会話を終わらせようとするマークを提示したり、相手との関係を維持したりしようとする終了部における特徴も観察された。無論、JJ4 のほうでは {あいづち}、{情報確認・要求} などが多用されたのに対して、CC4 で {条件提示}、{ためらい} などが多く見られたという相違点も伺われた。

また、各意味公式の展開パターンの考察によると、JJ4 と CC4 のいずれも、ほとんどの意味公式の展開パターンがほぼ同様であったこともわかった。即ち、「付随表現」に属する {情報確認・要求}、{あいづち}、{驚き} の展開パターンが頭高型であった。「直接的断り」に属する {不可}、「間接的断り」に属する {理由}、{代案}、{願望}、{条件提示} と、「付随表現」に属する {ためらい} の展開パターンが中高型であった。「間接的断り」に属する {詫び} と、「付随表現」に属する {挨拶} の展開パターンが尾高型であった。社会人を対象に、依頼を断る調査 2 に比べると、ほぼ同じ結果が得られたが、ただ学生では尾高型として現れた {挨拶} は、社会人のほうでは見られなかった。なお、社会人と同様に、先行研究で提示された「詫び先行型」は、本調査では検証されなかった。

7.2 では全体的に意味公式の量的分析を行った。意味公式の使用数及び割合に関する考察の結果をまとめると、JJ4 と CC4 双方共に {理由}、{情報確認・要求}、{代案}、{ため

らい}、{不可}、{詫び} という 6 つの意味公式を多用したという共通点が見られた。一方、JJ4 のほうで {あいづち}、{情報確認・要求} が多用されたのに対して、CC4 のほうで {理由}、{条件提示}、{代案}、{ためらい} が多く用いられた相違点が見られた。さらに、人による意味公式の使用平均値の有意差に関する考察によると、上記の意味公式の中で、JJ4 のほうで {あいづち}、{情報確認・要求} が有意に多用されたのに対して、CC4 のほうで {条件提示} が有意に多く使用された。社会的関係が意味公式の使用平均値に及ぼした影響をまとめると、親・疎関係が CC4 の意味公式に与えた影響が最も顕著であった。即ち、CC4 では親の人のほうに対して、{条件提示} が有意に多用されたのに対して、疎の人のほうに対して、{理由} と {詫び} が有意に多く使用された。一方、親・疎関係によって JJ4 では {驚き} を有意に使い分けられることも見られたが、CC4 ほど顕著でなかった。社会人と同様に、C2 と CC4 の双方ともに {条件提示} が多く見られ、特に親の人に対する断りに多用されたという結果を見ると、親しい人から大金を依頼される場面においては、具体的 {理由}、{わび} の代わりに、「500 元なら貸せるんですけど」のような {条件提示} を用いて、困っている親友をできるだけ助けようと姿勢を示して、相手との関係を維持しながら、断り手のネガティブ・フェイスも守るという特徴が観察された。

7.3 においては、{不可} の内容分析によると、JJ4 では相手の FT 度が小さい「緩和的結論」と「能力・状況」のいずれも好まれたのに対して、CC4 でも「能力・状況」も好まれたが、「緩和的結論」があまり見られなかった。なお、JJ4 で見られた相手の FT 度が大きい「意志」と「本音」は CC4 では 1 つも見られなかった。

{理由} の内容分析を見ると、JJ4 では「情報不足の理由」が最も好まれたのにつづき、相手の FT 度が大きい「気持の表明」も多く使用されたのに対して、CC4 では「具体的な理由」につづき、「情報不足の理由」も多用されたが、「気持の表明」があまり使用されなかったという相違点が見られた。JJ4 と CC4 とともに、力関係より親・疎関係が {理由} の内容に与えた影響が顕著であった。JJ4 では親・疎関係が「気持の表明」に与えた影響は最も顕著であった。即ち、JJ4 では疎の人のほうに対して、相手の FT 度が大きい「気持の表明」を顕著に多用した。

JJ4 の {あいづち} の表現形式の分析によると、「聞いている」の機能を果たしている {あいづち} が最も多く使用された。そのうち、「うん／うんうん」という表現形式が最も多用された。また、JJ4 では力関係より親・疎関係による「うん／うんうん」の使い分けの差が顕著に大きかったという結果になった。

## 第8章 社会的属性による異同の考察

第4章から第7章にかけて、文化的属性による断る言語行動における異同を考察した。本章においては、被験者の社会的属性によって、勧誘を断る場面における社会人と学生(JJ1とJJ3、CC1とCC3)、依頼を断る場面における社会人と学生(JJ2とJJ4、CC2とCC4)をそれぞれ比較することによって、社会人と学生の間に断り言語行動の異同を考察しようとする。

### 8.1 勧誘を断る場面

本節において、第4章と第6章を合わせて、勧誘を断る会話の構造分析、全体的に意味公式の量的分析、{不可}、{理由}の内容分析及び{あいづち}、{詫び}の表現形式の分析によって、社会人と学生であるJJ1とJJ3、CC1とCC3の断り言語行動をそれぞれ比較する。

#### 8.1.1 会話構造の比較

話段ごとに意味公式のカテゴリーと各意味公式の使用数及び平均値、勧誘に対する断り会話構造における社会人と学生の異同を考察していく。

##### 8.1.1.1 勧誘話段

前述したように、文化的属性、社会的属性を問わず、勧誘話段においては、いずれのグループでも{あいづち}を始めとする「付随表現」が中心に使用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」がゼロまたは低い数値として出現したため、本節において、「付随表現」に多く見られた意味公式のみ取り上げ比較していく。

表 8-1 勧誘話段における意味公式の使用数及び平均値

意味公式	JJ1 (34組)		CC1 (27組)		JJ3 (28組)		CC3 (32組)	
	個数	平均値/34	個数	平均値/27	個数	平均値/28	個数	平均値/32
あいづち	168	4.94	26	0.96	79	2.82	4	0.13
困惑	12	0.35	0	0	2	0.07	0	0
ためらい	9	0.26	10	0.37	1	0.04	3	0.09
驚き	12	0.35	0	0	6	0.21	2	0.06

肯定的表現	10	0.29	1	0.04	1	0.04	0	0
情報確認・要求	17	0.50	29	1.07	16	0.57	24	0.75
呼びかけ	0	0	1	0.04	0	0	6	0.19
挨拶	0	0	0	0	0	0	2	0.06
付随表現合計	228	6.71	67	2.48	105	3.75	41	1.28
意味公式合計	232	6.82	71	2.63	106	3.79	42	1.31

表 8-1 によると、日本語母語話者の JJ1 と JJ3 共に {あいづち} を中心に用いたのに対して、中国語母語話者の CC1 と CC3 共に {情報確認・要求} を主に使用したという文化的属性による差異が観察された。一方、勧誘話段において、JJ3 より JJ1 のほうでは {あいづち} が著しく多用されたため、全体的に JJ1 のほうでは「付随表現」の使用数も顕著に多かった。それに対して、CC1 と CC3 の間に、意味公式の使用数が少なかったため、その差が顕著に見られなかった。

JJ3 より JJ1 のほうでは {あいづち} が著しく多く使用されたという結果について、大学生の被験者を対象とするフォローアップ・インタビューを行った。そこから「あいづち」が相手の話しの邪魔になって、相手には失礼だと思った」という答えが日中両方からともに得られた。この答えは、稲井（2004：223）の学部学生を対象とするあいづちの心的効果に関するインタビューにおいても見られた。即ち、社会的属性によって、{あいづち} の効果及び役割に対する考えも異なることがわかった。

### 8.1.1.2 勧誘・断り話段

社会人と学生の勧誘・断り話段における意味公式の使用数及び平均を表にまとめる

表 8-2 勧誘・断り話段における意味公式の使用数及び平均値

意味公式カテゴリー	意味公式	JJ1	JJ1	CC1	CC1	JJ3	JJ3	CC3	CC3
		平均値	平均値	平均値	平均値				
直接的断り	不可	42	1.58	54	2.23	31	1.23	51	2.57
	遂行	0	0	1	0.03	0	0	0	0
	直接的断り合計	42	1.58	55	2.26	31	1.23	51	2.57
間接的断り	理由	91	3.06	82	3.35	57	2.86	54	2.43
	詫び	46	1.80	20	0.66	23	1.01	13	0.33
	願望	27	1.01	9	0.23	4	0.25	5	0.51
	関係維持	20	0.63	6	0.21	6	0.35	6	0.33
	保留	5	0.23	5	0.85	0	0	3	0.08

	代案	3	0.11	3	0.08	0	0	1	0.06
	条件提示	9	0.25	5	0.18	3	0.13	1	0.03
	遺憾	7	0.21	3	0.08	0	0	0	0
	言いさし	7	0.26	1	0.03	1	0.03	3	0.29
	相手を思い止まらせる試み	3	0.10	1	0.03	2	0.05	8	0.84
	原則的陳述	0	0	5	0.18	0	0	0	0
	間接的断り合計	218	7.66	140	5.88	96	4.68	94	4.90
付随表現	あいづち	47	1.72	4	0.10	1	0.03	1	0.03
	ためらい	50	1.51	22	0.61	14	0.41	17	0.46
	驚き	1	0.03	0	0	5	0.18	4	0.10
	情報確認・要求	15	0.43	3	0.08	2	0.05	1	0.06
	感謝	0	0	2	0.05	0	0	1	0.03
	その他	5	0.14	11	0.38	0	0	3	0.22
	呼びかけ	1	0.04	4	0.10	0	0	5	0.16
	困惑	34	0.99	1	0.03	5	0.13	4	0.10
	否定の前置き	11	0.36	0	0	2	0.05	1	0.03
	肯定的表現	1	0.03	2	0.05	0	0	1	0.03
	ヘッジ	4	0.12	0	0	1	0.03	0	0
	付随表現合計	169	5.40	49	1.40	30	0.88	38	1.22
意味公式 合計		429	14.64	244	9.54	157	6.79	183	8.69

社会人と学生の勧誘・断り話段を比較すると、JJ1とJJ3の間に相違点が顕著に見られた。まず、JJ1で見られた意味公式合計がJJ3より2倍も多かった。次に、JJ1で使用された「間接的断り」と「付随表現」のいずれの使用数がJJ3より3倍も多く見られた。また、JJ1で見られた{理由}、{詫び}、{願望}、{関係維持}、{あいづち}、{ためらい}、{困惑}の使用数がJJ3より著しく多かった。なお、JJ1で見られた{保留}、{代案}、{遺憾}、{肯定的表現}の使用数が少なかったが、学生のJJ3では1度も見られなかった。

一方、中国人の母語話者であるCC1とCC3の間に、{理由}を除き、ほかの意味公式における社会人と学生の差が顕著に見られなかった。

### 8.1.1.3 終了部

終了部において、いずれのグループにおいても、「間接的断り」または「付随表現」が中心に使用されたので、本節において、終了部における多く見られた「間接的断り」に属



する {詫び}、{関係維持} と、「付随表現」に属する {あいづち}、{感謝} を取り上げ、社会人と学生の終了部における異同を考察しようとする。

表 8-3 終了部における意味公式の使用数及び平均値（勧誘を断る場面）

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ1 (33 組)		CC1 (32 組)		JJ3 (37 組)		CC3 (31 組)	
		個数	平均 値/33	個数	平均 値/32	個数	平均 値/37	個数	平均 値/31
間接的断り	詫び	40	1.21	12	0.38	21	0.57	4	0.13
	関係維持	19	0.58	14	0.44	11	0.30	3	0.10
	間接的断り合計	66	2	28	0.88	37	1	9	0.29
付随表現	あいづち	14	0.42	8	0.25	1	0.03	0	0
	感謝	6	0.18	11	0.34	5	0.14	6	0.19
	付随表現合計	24	0.73	21	0.66	18	0.49	15	0.48
意味公式合計		90	2.73	52	1.63	56	1.51	25	0.81

表 8-3 によると、社会人の JJ1 の終了部で見られた {詫び}、{あいづち} の使用数が学生の JJ3 より顕著に多かったため、終了部における意味公式の全体的な使用数も学生より多く見られた。一方、CC1 の終了部で使用された {詫び}、{関係維持}、{あいづち}、{感謝} のいずれも学生の CC3 より多用されたが、その差が日本人ほど顕著ではなかった。

上記の勧誘話段、勧誘・断り話段、終了部における意味公式の使用数による対照を合わせると、日本語母語話者である社会人の JJ1 は学生の JJ3 より意味公式を著しく数が多く、種類も豊かに使用したことが伺われた。JJ3 より JJ1 のほうで {あいづち}、{理由}、{詫び}、{願望}、{関係維持}、{ためらい}、{困惑}、{保留} などの使用数が JJ3 より著しく多かった。一方、中国語母語話者である社会人 (CC1) と学生 (CC3) の間に、意味公式の使用数に見られた差が日本語ほど大きくなかった。

#### 8.1.1.4 勧誘に対する断り会話の構造

社会人と学生の意味公式誘いに対する断り言語行動を合わせると、JJ1、CC1、JJ3 と CC3 のいずれも、少なくとも 65% 以上の会話は、勧誘話段、勧誘・断りの交渉話段、終了部からなっていることが検証された。4 つのグループはともに、勧誘話段において、{あいづち}、{情報確認・要求} を含む「付随表現」が中心に使用されたのに対して、「直接的断り」と「間接的断り」がゼロまたはわずかな数値として出現した。勧誘・断り話段においては、1 回目から 2 回目の断りにかけて、いずれも「間接的断り + 直接的断り + 付随表現」のパターンが見られた。そのうち、{理由}、{不可}、{詫び}、{情報確認・要求}、{あいづち}

などが主に使用された。最後の終了部においては、4つのグループのいずれも、{詫び}、{関係維持}を含む「間接的断り」と{感謝}を含む「付随表現」が多く見られた。従って、社会的属性も文化差も問わず、誘いに対する断り言語行動の構造はほぼ同じであるという結論が得られた。

無論、社会的属性によって、とりわけ、JJ1とJJ3の間に相違点も観察された（cf. 図4-6、図6-6）。まず、勧誘話段においては、JJ1で見られた「付随表現」がJJ3より著しく多かった。「付随表現」に属する意味公式の種類も数も最も多かったためである。次に、勧誘・断りの交渉話段においては、いずれのグループでも中心に使用された「間接的断り」につづき、JJ1では{あいづち}、{ためらい}、{困惑}、{情報確認・要求}などを含む「付随表現」が2番目に多用されたのに対して、JJ3では「直接的断り」の意味公式である{不可}が2番目に多用されたこともわかった。終了部においては、JJ1では「間接的断り」+「付随表現」を併用したのに対して、JJ3では「間接的断り」、「付随表現」のほかに、「直接的断り」も終了部において見られた。一方、CC1とCC3の間に、勧誘を断る会話構造における相違が際立っていなかった。

## 8.1.2 意味公式全体の量的分析の比較

表 8-4 全体的に意味公式の使用数及び平均値（勧誘を断る場面）

意味公式のカテゴリー	意味公式	JJ1 使用数	JJ1 比率 (%)	CC1 使用数	CC1 比率 (%)	JJ3 使用数	JJ3 比率 (%)	CC3 使用数	CC3 比率 (%)
直接的断り	不可	48	6.13	58	15.80	37	11.01	53	20.46
	遂行	0	0	1	0.27	0	0	0	0
	直接的合計	48	6.13	59	16.08	37	11.01	53	20.46
間接的断り	理由	95	12.13	85	23.16	66	19.64	58	22.39
	条件提示	10	1.28	6	1.63	6	1.79	1	0.39
	詫び	90	11.49	32	8.72	45	13.39	17	6.56
	願望	32	4.09	10	2.72	6	1.79	5	1.93
	言いさし	8	1.02	1	0.27	1	0.3	3	1.16
	関係維持	40	5.11	21	5.72	17	5.06	8	3.09
	遺憾	10	1.28	3	0.82	0	0	0	0
	相手を思い止 まらせる試み	3	0.38	1	0.27	2	0.6	9	3.47
	代案	5	0.64	5	1.36	1	0.3	1	0.39
	保留	15	1.92	7	1.91	1	0.3	3	1.16
	原則的陳述	0	0	5	1.36	0	0	0	0

	間接的合計	308	39.34	176	47.96	145	43.15	105	40.54
付随表現	肯定的表現	12	1.53	3	0.82	1	0.3	1	0.39
	あいづち	235	30.01	37	10.08	81	24.11	6	2.32
	困惑	45	5.75	1	0.27	6	1.79	4	1.54
	ためらい	61	7.79	33	8.99	15	4.46	25	9.65
	驚き	12	1.53	0	0	11	3.27	6	2.32
	情報確認・要求	31	3.96	31	8.45	19	5.65	25	9.65
	否定の前置き	12	1.53	0	0	2	0.6	0	0
	感謝	6	0.77	13	3.54	5	1.49	7	2.70
	呼び掛け	1	0.13	5	1.36	0	0	15	5.79
	挨拶	2	0.26	0	0	8	2.38	7	2.70
	ヘッジ	4	0.51	0	0	2	0.6	0	0
	その他	6	0.77	9	2.45	4	1.19	5	1.93
	付随合計	427	54.53	132	35.97	154	45.83	101	39
意味公式合計		783	100	367	100	336	100	259	100

社会人と学生の誘いに対する断り言語行動における意味公式の使用数と、人による各意味公式の使用平均値の有意差の考察を合わせると、4つのグループでは、社会的属性も文化的属性も問わず、{理由}、{詫び}、{不可}が中心に使用されたという共通点があった。

一方、8.1.1.2の勧誘・断り話段と同様に、断り会話を全体的に見ても、JJ1で見られた{理由}、{詫び}、{願望}、{関係維持}、{あいづち}、{ためらい}、{困惑}、{保留}などの使用数がJJ3より著しく多かった。それに対して、CC1がCC3より多く使用した意味公式は{理由}、{詫び}、{関係維持}、{あいづち}の4つに集中した。

### 8.1.3 意味公式の内容と表現形式の分析の比較

本節においても、勧誘を断る場面における{理由}、{不可}の内容分析と{あいづち}、{詫び}の表現分析から、社会人と学生の異同を比較する。

#### 8.1.3.1 {不可}の内容分析

表 8-5 勧誘を断る場面における{不可}の内容分類

不可の内容	JJ1	CC1	JJ3	CC3

能力・状況	19(39.58%)	26(44.83%)	15(40.54%)	14(26.42%)
緩和的結論	20(41.67%)	5(8.62%)	10(27.03%)	0
意志	7(14.58%)	15(25.86%)	3(8.11%)	10(18.87%)
本音	1(2.08%)	12(20.69%)	7(18.92%)	27(50.94%)
否定	1(2.08%)	0	2(5.41%)	2(3.78%)
合計	48(100%)	58(100%)	37(100%)	53(100%)

JJ1 と JJ3 の間に顕著に見られた差が「緩和的結論」に集中した。即ち、JJ3 より JJ1 のほうでは「緩和的結論」が多く見られたが、両者ともに相手の FT 度が小さい「能力・状況」、「緩和的結論」を中心に使用した共通点も挙げられる。それに対して、CC1 と CC3 の間に見られた相違が「能力・状況」、「緩和的結論」と「本音」に集中した。即ち、CC1 のほうでは相手の FT 度が小さい「能力・状況」が最も多用されたのに対して、CC3 のほうでは相手の FT 度が大きい「本音」が 50%以上の割合で最も著しく多用された。従って、{不可} の内容分析からすれば、日本語母語話者の社会人と学生との差が中国語ほど大きくなかった。換言すれば、4つの被験者のグループの中で、CC3 の特徴が最も目立っていた。具体的に言えば、JJ1、JJ3、CC1 のいずれでも、相手の FT 度が小さい「能力・状況」及び「緩和的結論」の {不可} が最も多用されたのに対して、CC3 では、相手の FT 度が大きい「本音」が 50%以上の使用回数として現れた。また、JJ1、JJ3、CC1 のいずれでも見られた相手の FT 度が小さい「緩和的結論」は、CC3 では1つも見られなかった。

また、社会的属性を問わず、中国人の CC1、CC3 のいずれも見られた「本音」の使用は、親しい人に対する断り言語行動に集中した。

### 8.1.3.2 {理由} の内容分析

表 8-6 勧誘を断る場面における {理由} の内容分類

理由の内容	JJ1	CC1	JJ3	CC3
具体的な理由	53(55.79%)	54(63.53%)	32(48.48%)	18(31.03%)
情報不足の理由	30(31.58%)	12(14.12%)	23(34.85%)	17(29.31%)
気持の表明	12(12.63%)	19(22.35%)	11(16.67%)	23(39.66%)
合計	<b>95(100%)</b>	85(100%)	66(100%)	58(100%)

勧誘を断る言語行動における {理由} の各内容カテゴリーの使用割合からすれば、JJ1 と JJ3 双方ともに「具体的な理由」が最も多用されたのにつづき、「情報不足の理由」が2番目に多く見られた。また、「気持の表明」の使用率が最も少なかった。一方、CC1 と CC3 の間に際立っていた相違が観察された。具体的に言えば、社会人の CC1 のほうで「具体的

な理由」が顕著に多く用いられたのに対して、学生の CC3 のほうでは「気持の表明」の使用割合が最も多かったという相違点がわかった。

なお、社会人と学生の社会的関係が {理由} の内容に与えた影響を合わせると、CC1、JJ3 と CC3 の 3 つのグループのいずれにおいても、親しい人と同の人のほうに対して、相手の FT 度が大きい「気持の表明」が多く見られた。

### 8.1.3.3 {あいづち} の表現形式の分析

日本人の JJ1 と JJ3 を比べると、日本人は年齢を問わず、JJ1 と JJ3 共に「聞いている」という機能を表す {あいづち} の使用率が 60%以上で、数が最も高かった。ただし、{あいづち} の各表現形式からすれば、JJ1 の {あいづち} の使用数が JJ3 よりずっと多くて、表現形式の種類も JJ3 より豊かであった。JJ1 では「うん／うんうん／うーん」、「はい／はいはい」、「ええ／ええええ」などの表現形式の使用数が少なくなかったが、JJ3 では {あいづち} は主に「うん／うんうん／うーん」、「はい／はいはい」の 2 つのみに集中したという相違点が伺われた。一方、中国人の CC1 と CC3 を対照すると、CC1 では {あいづち} の表現形式の数も種類も CC3 より多かったが、中国語で現れた {あいづち} の使用数がそもそも少なかったため、その差が日本人ほど大きくなかった。

### 8.1.3.4 {詫び} の表現形式の分析

社会人と学生の {詫び} の表現形式の対照を合わせると、日本人を対象とする調査においては、社会人の JJ1 では「申し訳ないです」が最も多用されたのに対して、学生の JJ3 では「すみません」が最も多かった。JJ1 と比べると、JJ3 より JJ1 のほうでは、{詫び} の表現形式の種類が豊かであった。即ち、JJ1 で使用された「申し訳ございません／申し訳ありません」と「すみません」の表現形式は、JJ3 では 1 つも見られなかった。一方、中国人を対象とする調査においては、社会的属性を問わず、CC1 と CC3 のいずれも、「不好意思」(buhayisi ごめんなさい) が最も多く使用された。次に、社会的関係が {詫び} の表現形式に与えた影響に関しては、JJ1 と JJ3 とともに上の人に対して、「すみません」が顕著に多く見られた。それに対して、CC1 と CC3 とともに上の人に対して、「不好意思」(buhayisi ごめんなさい) が多く用いられた。まとめた結果、日本語における「すみません」と中国語における「不好意思」(buhayisi ごめんなさい) には、力関係が与えた影響が顕著に見られた。

## 8.2 依頼を断る場面

本節において、第5章と第7章を合わせて、依頼を断る会話の構造分析、全体的に意味公式の量的分析、{不可}、{理由}の内容分析及び{あいづち}の表現形式の分析によって、社会人と学生である JJ2 と JJ4、CC2 と CC4 の断り言語行動をそれぞれ対照する。

### 8.2.1 会話構造の比較

話段ごとに意味公式のカテゴリーと各意味公式の使用数及び平均値、依頼に対する断り会話構造における社会人と学生の異同を考察していく。

#### 8.2.1.1 依頼話段

勧誘話段と同様に、依頼話段においても、いずれのグループでも{あいづち}を始めとする「付随表現」が中心に使用された。従って、本節においても「付随表現」に多く見られた{あいづち}、{情報確認・要求}、{驚き}のみ取り上げて社会人と学生を比較していく。

表 8-7 依頼話段における意味公式の使用数及び平均値

意味公式	JJ2 (25組)		CC2 (26組)		JJ4 (40組)		CC4 (22組)	
	個数	平均値/25	個数	平均値/26	個数	平均値/40	個数	平均値/22
あいづち	58	2.32	17	0.65	104	2.60	9	0.41
情報確認・要求	16	0.64	36	1.38	54	1.35	33	1.50
驚き	11	0.44	1	0.04	12	0.30	4	0.18
付随表現合計	102	4.08	60	2.31	174	4.35	57	2.59
意味公式合計	105	4.20	62	2.38	177	4.43	58	2.64

表 8-7 によると、勧誘を断る場面と逆に、日本語母語話者である JJ2 より JJ4 のほうでは、「付随表現」が全体的に多用された。それは学生の JJ4 のほうでは{あいづち}が著しく多く使用されたためである。しかし、依頼を断る場面における JJ2 と JJ4 の両者間の差が勧誘を断る場面における JJ1 と JJ3 の間の差ほど大きくなかった。一方、中国語母語話者である CC2 と CC4 の間に相違が見られなかった。

## 8.2.1.2 依頼・断り話段

社会人と学生の1回目の断りから3回目の断りにかける依頼・断り話段における意味公式の使用数と平均値を合わせて、表にまとめる。

表 8-7 依頼・断り話段における意味公式の使用数及び平均値

意味公式の カテゴリー	意味公式	JJ2合 計	JJ2平 均值	CC2合 計	CC2平 均值	JJ4合 計	JJ4平 均值	CC4合 計	CC4平 均值
直接的断り	不可	58	1.89	22	1.52	25	0.82	21	0.80
	直接的断り合計	58	1.89	22	1.52	25	0.82	21	0.80
間接的断り	理由	55	1.69	68	2.35	51	2.69	62	2.88
	詫び	43	1.45	7	0.24	9	0.50	2	0.05
	代案	39	1.24	18	0.86	32	1.71	32	1.73
	願望	14	0.42	8	0.26	11	0.32	6	0.40
	条件提示	8	0.21	25	1.42	5	0.32	20	0.65
	相手を思い止まらせる 試み	7	0.19	11	0.43	2	0.10	4	0.10
	保留	8	0.38	10	0.70	1	0.03	1	0.05
	原則的陳述	11	0.39	0	0	4	0.15	2	0.28
	遺憾	3	0.08	6	0.15	0	0	0	0
	言いさし	4	0.11	4	0.14	2	0.10	2	0.05
	間接的断り合計	192	6.16	157	6.55	117	5.92	131	6.19
付随表現	あいづち	33	1.31	7	0.27	15	0.70	1	0.03
	困惑	9	0.29	0	0	4	0.10	0	0
	ためらい	39	1.11	9	0.61	17	0.66	27	1
	驚き	6	0.22	0	0	1	0.03	2	0.05
	情報確認・要求	7	0.25	2	0.11	17	0.79	0	0
	ヘッジ	9	0.29	0	0	3	0.30	0	0
	付随表現否定の前置 き	5	0.13	3	0.14	4	0.33	0	0
	共感	7	0.20	0	0	0	0	3	0.13
	挨拶	1	0.03	0	0	2	0.28	0	0
	その他	5	0.14	9	0.70	0	0	7	0.40
	呼びかけ	0	0	4	0.10	0	0	6	0.40

	肯定的表現	0	0	1	0.03	0	0	0	0
	付随表現合計	121	3.97	35	1.96	63	3.19	46	2.01
意味公式 合計		371	12.02	214	10.03	205	9.93	198	9

表 8-7 に示したとおり、まず、意味公式のカテゴリーをみると、日本語母語話者を対象とする調査においては、全体的 JJ4 より JJ2 のほうでは意味公式が多用された。それは社会人の JJ2 のほうでは「直接的断り」、「間接的断り」、「付随表現」のいずれも多く使用されたためである。各意味公式の使用数を見ると、JJ4 より JJ2 のほうでは {不可}、{詫び}、{あいづち}、{ためらい} が顕著に多く用いられた。一方、中国語母語話者である CC2 と CC4 の間に相違がほぼ見られなかった。

また、日本語母語話者の勧誘を断る場面に比べて、依頼を断る場面において、社会人の JJ2 のほうでは {不可} の使用数が増加したのに対して、学生の JJ4 で見られた {詫び} の使用数が著しく減少したため、JJ2 と JJ4 の間に、{不可}、{詫び} の使用数の差も大きくなった。そのほかの意味公式に見られた JJ2 と JJ4 の間の差が勧誘を断る場面ほど大きくなかった。

### 8.2.1.3 終了部

依頼を断る場面における終了部では、いずれのグループでも「間接的断り」が主に使用されたので、終了部に多用された「間接的断り」に属してる {詫び}、{代案} を取り上げて社会人と学生の比較を行う。

表 8-8 終了部における意味公式の使用数及び平均値（依頼を断る場面）

意味公式	JJ2 (22 組)		CC2 (20 組)		JJ4 (18 組)		CC4 (20 組)	
	個数	平均値/22	個数	平均値/20	個数	平均値/18	個数	平均値/20
詫び	24	1.09	10	0.50	8	0.44	9	0.45
代案	3	0.14	6	0.30	3	0.17	9	0.45
間接的断り合計	33	1.50	20	1	12	0.67	23	1.15
意味公式合計	46	2.09	29	1.45	24	1.33	37	1.85

社会人と学生の終了部における意味公式の使用数と平均値を合わせると、JJ4 より JJ2 のほうでは {詫び} の使用数が多かったという相違点のみが見られた。一方、CC2 と CC4 の間に意味公式の使用数の差が見られなかった。

上記の依頼話段、依頼・断り話段、終了部における意味公式の使用数による比較を合わ



せると、日本語母語話者である JJ2 と JJ4 の間に差が大きく見られたが、中国語母語話者である CC2 と CC4 の間における差がほぼ見られなかった。即ち、学生の JJ4 より社会人の JJ2 のほうでは {不可}、{詫び}、{ためらい} などが顕著に多く見られた。ただし、勧誘を断る場面に比べると、依頼を断る場面における社会人と学生の間における差が勧誘を断る場面ほど大きくなかった。

### 8.2.1.4 依頼に対する断り会話の構造

社会人と学生の依頼に対する断り言語行動の会話構造を比較すると、4つのグループのいずれも、主に依頼話段、依頼・断り話段、終了部からなっていることが検証された。ただし、JJ4 の 21 組 (52.5%) の断り手が終了部において何も言語表現を発していなかった。さらに、依頼話段、依頼・断り話段、終了部からなっている会話の構造を分析すると、以下の共通点が見られた。まず、依頼話段においては、4つのグループのいずれにおいても、{あいづち}、{情報確認・要求} を含む「付随表現」が中心に使用された。次に、依頼・断りの交渉話段においては、{理由}、{代案} を含む「間接的断り」が主に多用されたという特徴は、いずれのグループにおいても観察された。最後に、終了部においては、4つのグループともに、{詫び} を含む「間接的断り」が多用された。従って、文化も年齢も問わず、依頼に対する断り言語行動の会話構造を全体的に分析すると、ほぼ同じであったという結果になった。

## 8.2.2 全体的に意味公式の量的分析の比較

表 8-9 全体的に意味公式の使用数及び平均値 (依頼を断る場面)

意味公式 のカテゴリー	意味公式	JJ2 使	JJ2 割	CC2 使	CC2 割	JJ4 使	JJ4 割	CC4 使	CC4 割
		用数	合 (%)	用数	合 (%)	用数	合 (%)	用数	合 (%)
直接的断り	不可	61	11.34	28	9.03	30	7.26	26	8.84
	遂行	2	0.37	0	0	0	0	0	0
	直接的断り合計	63	11.71	28	9.03	30	7.26	26	8.84
間接的断り	理由	55	10.22	68	21.94	53	12.83	63	21.43
	条件提示	11	2.04	26	8.39	6	1.45	24	8.16
	詫び	67	12.45	17	5.48	17	4.12	11	3.74
	願望	14	2.60	10	3.23	11	2.66	7	2.38
	言いさし	4	0.74	4	1.29	2	0.48	3	1.02
	関係維持	1	0.19	0	0	0	0	0	0

	遺憾	3	0.56	6	1.94	0	0	0	0
	相手を思い止ま らせる試み	10	1.86	11	3.55	4	0.97	4	1.36
	代案	43	7.99	24	7.74	34	8.23	42	14.29
	保留	11	2.04	13	4.19	1	0.24	1	0.34
	原則的陳述	14	2.60	0	0	4	0.97	2	0.68
	間接的断り合計	233	43.31	179	57.74	132	31.96	157	53.40
付随表現	肯定的表現	0	0	2	0.65	1	0.24	0	0
	あいづち	102	18.96	26	8.39	122	29.54	10	3.40
	困惑	16	2.97	0	0	4	0.97	0	0
	ためらい	47	8.74	12	3.87	22	5.33	34	11.56
	驚き	17	3.16	1	0.32	13	3.15	6	2.04
	情報確認・要求	23	4.28	38	12.26	71	17.19	33	11.22
	否定の前置き	6	1.12	6	1.94	4	0.97	0	0
	感謝	0	0	0	0	0	0	0	0
	呼び掛け	0	0	4	1.29	0	0	9	3.06
	挨拶	3	0.56	1	0.32	9	2.18	6	2.04
	ヘッジ	11	2.04	1	0.32	4	0.97	0	0
	共感	11	2.04	2	0.65	0	0	5	1.70
	その他	6	1.12	10	3.23	1	0.24	8	2.72
	付随表現合計	242	44.98	103	33.23	251	60.77	111	37.76
合計		538	100	310	100	413	100	294	100

表 8-9 によると、4つのグループのいずれも、{理由}、{不可}、{代案}、{詫び} が多用された共通点が挙げられた。日本語母語話者である社会人と学生の意味公式の量的分析を比較すると、以下の特徴が見られた。まず、各意味公式のカテゴリーをみると、JJ4 より JJ2 のほうでは「直接的断り」、「間接的断り」の使用数が多かったので、全体的に社会人の JJ2 のほうでは意味公式が全体的に多く見られた。そのうち、8.2.1.2 で依頼・断り話段と同様に、{不可} と {詫び} が JJ2 のほうでは顕著に多用されたほかに、{代案}、{保留}、{原則的陳述}、{困惑}、{ためらい} の使用数も学生の JJ4 より多く見られた。それに対して、JJ2 より JJ4 のほうでは {あいづち} の使用数が多かったという結果は、勧誘を断る場面と逆であった。一方、中国語母語話者である CC2 と CC4 の意味公式のカテゴリーの対照によると、CC2 と CC4 の間に差がほぼ見られなかった。

まとめた結果、JJ2 で現れた意味公式の数も種類も JJ4 より際立って多用されたのに対して、CC2 と CC4 の間に意味公式の相違が多少的に見られたが、日本語母語話者ほど大き

くなかった。

## 8.2.3 意味公式の内容と表現形式の分析の比較

本節において、依頼を断る場面における {理由}、{不可} の内容分析と {あいづち} 表現分析から、社会人と学生の異同を比較する。

### 8.2.3.1 {不可} の内容分析

表 8-10 依頼を断る場面における {不可} の内容分類

不可の内容	JJ2	CC2	JJ4	CC4
能力・状況	23(37.70%)	19(67.86%)	<b>11(36.67%)</b>	23(88.46%)
緩和的結論	23(37.70%)	9(32.14%)	10(33.33%)	3(11.54%)
意志	15(24.59%)	0	7(23.33%)	0
本音	0	0	2(6.67%)	0
合計	61(100%)	28(100%)	30(100%)	26(100%)

依頼を断る場面においては、JJ2 と JJ4 共に「能力・状況」、「緩和的結論」が主に使用されたのに対して、CC2 と CC4 共に「能力・状況」の {不可} が圧倒的に多用された。なお、日本語母語話者である JJ2 と JJ4 共に見られた相手の FT 度が大きい「意志」または「本音」は、中国語母語話者である CC2 と CC4 のいずれにおいても 1 度も見られなかった。従って、依頼を断る場面における {不可} の内容分析からすれば、社会人と学生より文化的属性による相違が顕著に観察された。ただし、社会的関係が {不可} の内容の使い分けに及ぼした影響によると、社会人の CC2 では日本人と同様に、親の人のほうに対して、「能力・状況」が好まれたのに対して、学生の CC4 では疎の人のほうに対して「能力・状況」が多用されたという社会的属性による相違点も観察された。

### 8.2.3.2 {理由} の内容分析

表 8-11 依頼を断る場面における {理由} の内容分類

理由の内容	JJ2	CC2	JJ4	CC4
具体的な理由	44(80%)	57(83.82%)	11(20.75%)	37(58.73%)
情報不足の理由	9(16.36%)	11(16.18%)	25(47.17%)	22(34.92%)
気持の表明	2(3.64%)	0	17(32.08%)	4(6.35%)

合計	55(100%)	68(100%)	53(100%)	63(100%)
----	----------	----------	----------	----------

大人と学生の依頼に対する断り言語行動における{理由}の内容を対照すると、JJ2とJJ4の間に大きな相違が観察された。即ち、社会人のJJ2のほうでは「具体的な理由」が80%の割合で多用されたのに対して、学生のJJ4のほうでは「情報不足の理由」が最も多く見られた。また、JJ2よりJJ4のほうでは相手のFT度が大きい「気持の表明」が顕著に多く用いられた。一方、CC2とCC4両者共に、「具体的な理由」が最も多用されたが、CC2のほうでは「具体的な理由」の使用率がCC4より多かったのに対して、CC4のほうでは「情報不足の理由」が多めに使用されたという相違点も伺われた。依頼を断る場面における{理由}の内容分析をまとめると、文化的属性を問わず、社会人のほうで「具体的な理由」が多く用いられたのに対して、学生のほうでは「情報不足の理由」が多めに使用された傾向が伺われた。それは、社会人に比べると、学生のほうでは経験不足で、金銭の貸し出しを断るための「具体的な理由」が即座に見つかりにくいからであろうと分析する。

なお、社会人と学生の依頼に対する断り言語行動に見られた社会的関係による{理由}の使い分けを対照すると、JJ4では親人のほうに対して、相手のFT度が大きい「気持の表明」を多用したという特徴も観察された。

### 8.2.3.3 {あいづち}の表現形式の分析

社会人と学生の{あいづち}の表現形式による分析を対照すると、JJ2とJJ4ともに、「うん／うんうん」の表現形式が最も多く見られた。JJ2では、親の人のほうに対して、「聞いている」を表す「うん／うんうん／うーん」が著しく多く見られたのに対して、JJ4では疎の人のほうに対して、「うん／うんうん」が顕著に多かったという年齢による相違点が観察された。

## 8.3 本章のまとめ及び考察

以上で、被験者の社会的属性によって、勧誘を断る場面と依頼を断る場面における社会人と学生の間に断り言語行動の異同を考察ししてきた。まず、断り会話の構造分析によると、場面も社会的属性も問わず、いずれのグループにおいても、断り会話の構造がほぼ同様であった。次に、意味公式の量的分析によると、場面と社会的属性を問わず、いずれのグループにおいては、{不可}、{理由}、{詫び}の共通している意味公式を使用したことがわかった。李(1999)、文(2007)、肖・陳(2008)では、場面、調査対象、調査方法を問わず、{理由}、{不可}、{詫び}の意味公式が共通して多く見られると言った結論が本研究でも検証された。

一方、社会的属性によると、いずれの場面においても、日本語母語話者の学生より、社会人のほうでは{詫び}、{保留}などを含む「間接的断り」と、{あいづち}、{ためらい}、{困惑}などを含む「付随表現」の使用数が多かった。とりわけ、勧誘を断る場面において、社会人で用いられた{あいづち}の使用数が学生より2倍あまり著しく多かった(JJ1-235, JJ3-81)。それに対して、中国語母語話者の社会人と学生の間における差が顕著ではなかった。日本語母語話者を対象にするフォローアップ・インタビューでは、社会人から日本語のあいづちは円滑なコミュニケーションを行うために欠かせない要素であり、学生からあいづちが会話の邪魔になるという{あいづち}の機能に対する相反する意識が其々得られた。この結果を見ると、日本のコミュニケーション・スタイルは変化しつつあるのだろうか。また、古くはポケベル時代から始まり、携帯電話を経てスマホ全盛期になった日本では、とくに若者の間ではことばによるコミュニケーションが明らかに減少したという答えも得られた。ゆえに、若者の間でメールによる通信では{あいづち}は働きようがなく、活躍の場を失ったのである。また、メールを書くときは「まあ、なんていうか」「そんなようなもの」といった無くてよい表現はどんどん省かれる。その代わり絵文字が台頭した。いままで付随表現が担っていた機能は絵文字が担うようになった。このような環境では口頭の会話においても、{あいづち}を打つという行為が、いままでの「会話を助ける」機能から「会話の邪魔になる」機能にと変化するのは自然のなりゆきである。

最後に、意味公式の内容分析によると、勧誘を断る場面において、中国語母語話者の社会人と学生の差が顕著であった。即ち、社会人では相手のフェイスを脅かす度合い(FT度)が小さい「能力・状況」の{不可}と「具体的な理由」が最も多かったのに対して、学生のほうではFT度が大きい「本音」を表す{不可}と「気持の表明」を表す{理由}が最も多く見られたという相違点が観察された。依頼を断る場面において、文化差を問わず、社会人のほうでは「具体的な理由」が多用されたのに対して、学生のほうでは「情報不足の理由」が多く使用された傾向が示唆された。この傾向の原因を分析すると、一つ目は相手を断る際に、即時に具体的な理由を述べるのは、社会経験が足りない学生には難しいからであろうと考える。二つ目は、学生を被験者にするフォローアップ・インタビューによると、社会人のように相手のフェイスを潰さないために嘘を使うストラテジーは、学生から見れば、誠意が欠けている面倒臭い言語行動と見なされるため、嘘より気持をストレートに表明するストラテジーが採用されたからである。

## 第9章 結論と今後の課題

本章では、文化的属性、社会的属性による比較を合わせて、本研究の結論をまとめ、さらに本研究の発見を明確にした上で、今後の研究課題について述べる。

### 9.1 結論

本節において、前述の文化的属性による対照と、社会的属性による比較を合わせて、総合的考察を行う。

第4章から第8章にかけて、断り会話の構造分析、意味公式の量的分析と、内容分析及び表現形式の分析の4つの分析アプローチから、文化的な異同と社会的な異同を比較したが、そのうち、文化的属性、社会的属性を問わず、いずれのグループにおいても、断り会話の構造がほぼ同一であった。また、中国語母語話者、とりわけ学生に見られた{あいづち}と{詫び}の使用数が少なかったため、日本語母語話者と比較するとき、対等性が見られなかった。従って、本節において、文化的属性、社会的属性による異同を抽出するために、意味公式の量的分析と内容分析の2つのアプローチから、結論を導き出す。換言すれば、断り会話の構造分析、意味公式の表現分析を総合的考察から除外した。

#### 9.1.1 文化的属性による異同

まず、勧誘を断る場面において意味公式の量的分析、{不可}と{理由}の内容分析から、日中両言語の異同を表9-1にまとめる。

表 9-1 勧誘を断る場面における日中の異同

分析アプローチ	共通点	相違点
意味公式の量的分析	日中ともに、{不可}、{理由}、{詫び}を中心に用いて、勧誘を断ったという共通点が挙げられる。	日本語母語話者（以下は JJ と略す）のほうでは、{あいづち}、{詫び}、{驚き}、{困惑}、{ためらい}などが多用されたのに対して、中国語母語話者（以下は CC と略す）のほうでは {不可}、{感謝}、{呼びかけ}などがやや多く見られた。そのうち、{あいづち}に見られた日中両言語の相違点が最も著しかった。
{不可}	CC3を除き、日中共に、「能力・状況」	CCで見られた相手の FT 度が大きい「意志」や「本音」の

の内容分析	または「緩和的結論」が多用された。	使用数が JJ より顕著に多かった。そして、CC で用いられた「意志」や「本音」がほぼ親しい人に対する断りに集中した。
{理由}の内容分析	CC3 を除き、他のグループのいずれにおいても、「具体的な理由」が最も多用された。	JJ より CC のほうでは相手の FT 度が大きい「気持の表明」が多く見られた。とりわけ、学生の CC3 のほうでは「気持の表明」が最も多用された。また、JJ で見られた「情報不足の理由」の使用数が CC より多かった。

表 9-1 に述べたように、意味公式の量的分析によると、{不可}、{感謝}、{呼びかけ} を除き、全体的に中国語母語話者より日本語母語話者のほうでは意味公式の使用数が多かったという結果になった。文 (2007)、肖・陳 (2008)、吉田 (2015) で得られた日本語母語話者が {理由}、{詫び}、{不可} に集中したのに対して、日本語非母語話者が {理由}、{詫び}、{不可} のほかに、{情報要求}、{代案}、{関係維持} なども多用したという結論が本研究では支持されなかった。本研究では、日本語母語話者とくに社会人のほうでは、{理由}、{詫び}、{不可} のほかに、{あいづち}、{驚き}、{困惑}、{ためらい}、{関係維持} なども多用された。その原因は 2 つにあると分析した。1 つは、学生より人間関係の維持を重んじる社会人も考察の対象に入れ、ロールプレイ調査方法を採用し、話し手と聞き手との勧誘・断りの交渉行動が何度も繰り返されるようなダイナミックなプロセスの観察が可能であるため、意味公式の種類も使用数も多かった。もう 1 つは、送別会の日時を「明日」に設定して、日本語母語話者にとって急すぎであるため、{詫び}、{驚き}、{困惑}、{ためらい} などの多用により、相手に察してもらい、断りを伝達している方略が用いられた。

さらに、{不可} と {理由} の内容分析によると、日本語母語話者より中国語母語話者のほうでは直接的表現が好まれた傾向が顕著に観察された。しかも、中国語母語話者で見られた相手のフェイスを脅かす度合いが大きい「本音」、「意志」、「気持の表明」は、主に親しい人に集中した。

文 (2007) は、勧誘を断る場面、話し手と聞き手の間における利益の不均衡が殆ど発せせず、あるといっても依頼を断る場面ほどではないため、勧誘を断る場面の負担度が依頼を断る場面ほど大きくないと指摘している。ゆえに、勧誘を断る場面の負担度が大きくないことを前提とすると、日本語母語話者が親友に対しても礼儀正しく断りを伝達しているのに対して、中国語母語話者が親友との距離を近づけるための「本音」、「意志」、「気持の表明」を好んだ傾向が示唆された。

次に、依頼を断る場面において、意味公式の量的分析、内容分析の 2 つのアプローチから、文化的属性による日中両言語の異同を表 9-2 に示す。

表 9-2 依頼を断る場面における日中の異同

分析アプローチ	共通点	相違点
意味公式の量的分析	日中ともに、{不可}、{理由}、{詫び}、{代案}を中心に、依頼を断った。	JJのほうでは、{あいづち}、{不可}、{詫び}、などが多用されたのに対して、CCのほうでは{理由}、{条件提示}が多く見られた。
{不可}の内容分析	日中ともに、「能力・状況」、「緩和的結論」が多用された。	JJで見られた相手のFT度が大きい「意志」や「本音」がCCでは1つも見られなかった。
{理由}の内容分析	日中双方ともに、「具体的な理由」または「情報不足の理由」が主に使用された。	CCよりJJのほうでは相手のFT度が大きい「気持の表明」が多く見られた。とりわけ、学生のJJ4のほうでは「気持の表明」がほぼ疎の人に対する断りに集中した。

表 9-2 において、依頼を断る場面における {不可} と {理由} の内容分析によると、勧誘を断る場面において中国語母語話者のほうで率直な表現が多用されたのに対して、依頼を断る場面において、日本語母語話者のほうで率直な表現が好まれた傾向が伺われた。とりわけ、中国語を母語とする筆者自身でも、日本語母語話者を対象に調査を実施する際に、以下の2つの断り表現に気づき、社会人を対象とする調査2に見られた「あんまり親しい人でもそんなにお金の貸し借りっていうのをしないので」のような{原則的陳述}、また学生を対象とする調査4に現れた「あんまり親しくないよね」のような断る理由が多く見られた。それに対して、中国人とくに社会人が借金の依頼を断る場面では、ほぼすべてが「お金は家を購入してしまったから無い」「投資してしまったから今は無い」のように、元来はあるのだけれど、ちょうど今は時期が悪い」という理由で断った。また、日本人は曖昧な表現を好んで用いるという、外国人からよく指摘される言語行動と相反する傾向も本研究で見られた。

さらに、上記の日本語母語話者で見られた{原則的陳述}、「気持の表明」を表す{理由}が中国語母語話者では1度も見られなかったため、中国語母語話者の被験者に評価を求めた。中国語母語話者には上記の表現のいずれでも、相手との関係が修復できるかどうかという心配もあり、修復が必要でない場合いでも相手の面子も自分の面子も潰される危険性を持っているので、口に出せない不思議な表現だと思われた。

こうした考察は、今後研究を重ねて解答を見ださねばならないが、その予備的考察として、中国と日本では借金を断る場面において優先されているものがいくら違うのではないかと、ということが考えられる。山口(1997)は、「依頼」とは、話し手が自分の利益のために聞き手に働きかけることにより、両者間の平衡状態を崩しれかける危険性をもつ発話行為であると述べている。山口(1997)の指摘に基づき、文(2007)は、依頼を断る場面においては、話し手と聞き手の間における利益の不均衡が生じやすいため、依頼に対する断



り言語行動の負担度が大きいと指摘している。借金の依頼を断る場面の負担度が大きいのを前提とすると、日本語母語話者では、「原則」が優先されているため、{原則的陳述}、「気持の表明」を表す{理由}が顕著に浮かび出た。それに対して、中国語母語話者では「人情」や「面子」が優先されているため、日本語のような{原則的陳述}、「気持の表明」を表す{理由}があまり口にしない。

## 9.1.2 社会的属性による異同

社会的属性による社会人と学生の勧誘を断る場面における異同を表 9-3 に示す。

表 9-3 勧誘を断る場面における社会人と学生の異同

分析アプローチ	日本語	中国語
意味公式の量的分析	JJ1 と JJ3 の間に大きな相違が見られた。JJ3 より JJ1 のほうでは {あいづち} をはじめ、{理由}、{詫び}、{関係維持}、{ためらい}、{困惑} などの意味公式の使用数も種類も著しく多かった。	CC1 と CC3 の間に相違点がほぼ見られなかった。
{不可}の内容分析	JJ1 と JJ3 とともに {不可} の内容は、相手の FT 度が小さい「能力・状況」または「緩和的結論」に集中した。	CC1 と CC3 の間に相違が顕著に現れた。即ち、CC1 では「能力・状況」が最も多用されたのに対して、CC3 では「本音」の使用数が半分以上を占めている。
{理由}の内容分析	JJ1 と JJ3 の間に差がほぼ見られなかった。	CC1 と CC3 の間に見られた差が JJ より顕著であった。CC1 のほうでは「具体的な理由」が多く見られたのに対して、CC3 のほうでは「情報不足の理由」も「気持の表明」も数多かった。

表 9-3 に述べたとおり、意味公式の量的分析によると、中国語母語話者より日本語母語話者の社会人と学生の間には大きな相違が伺われたが、意味公式の内容分析によると、日本語母語話者より中国語母語話者の社会人と学生の間には {不可}、{理由} の内容構成が著しく異なっている。ゆえに、分析方法によって、異なった結論が得られるということが本研究において検証された。

次に、社会人と学生の依頼を断る場面における異同を表 8-15 に示す。

表 9-4 依頼を断る場面における社会人と学生の異同

分析アプローチ	日本語	中国語
---------	-----	-----

ローチ		
意味公式の量的分析	JJ2 のほうでは {不可}、{理由}、{詫び}、{代案}、{原則的陳述}、{ためらい}、{困惑} などの使用数が多かったという相違点が観察されたが、勧誘を断る場面における JJ1 と JJ3 の間の差ほど顕著ではなかった。	CC2 と CC4 の間に相違点がほぼ見られなかった。
{不可} の内容分析	JJ2 と JJ4 ともに「能力・状況」または「緩和的結論」が最も多く用いられた。そして、「能力・状況」と「緩和的結論」の使用率もほぼ同じであった。	CC2 と CC4 ともに「能力・状況」が圧倒的に多用された。また JJ で見られた「本音」または「意志」が CC2 と CC4 のいずれにおいても 1 度も使用されなかった。
{理由} の内容分析	JJ2 では「具体的な理由」が最も好まれたのに対して、JJ4 では「情報不足の理由」が最も多用されたのにつづき、「気持の表明」の使用数も多かった。	CC2 と CC4 ともに「具体的な理由」が最も多用されたが、CC2 より CC4 のほうでは「情報不足の理由」がやや多く見られた。

表 9-4 のように、意味公式の量的分析によると、勧誘を断る場面と同様に、日本語母語話者の社会人と学生の間には相違が観察されたが、中国語母語話者の社会人と学生の間には相違点があまり見られなかった。{不可} の内容分析によると、文化差を問わず、社会人と学生の間における相違が現れなかった。即ち、{不可} の内容構成からすれば、社会的属性より文化的属性による相違が顕著に現れた。{理由} の内容分析によると、日本語母語話者の学生で相手の FT 度が大きい「気持の表明」が最も多用されたので、社会人と学生両者間の差が著しかった。中国語母語話者の社会人と学生の間には相違点も多少は見られたが、日本語母語話者ほど大きくなかった。従って、内容分析、分析内容を問わず、全体的に日本語母語話者のほうでは社会人と学生の間には異なりがより顕著であった。

### 9.1.3 本研究の発見

本研究では、被験者の文化的属性によって、各断る場面における JJ1 と CC1、JJ2 と CC2、JJ3 と CC3、JJ4 と CC4 の断り言語行動をそれぞれ比較した。さらに、被験者の社会的属性による社会人と学生の断り言語行動も比較した。主に断り会話の構造分析、意味公式の量的分析と、内容分析及び表現形式の分析に基づき考察を行ってきた。本節において、本研究をマクロ的視点から見た結果を 4 点にまとめる。

#### 第 1 に、会話構造の類似性

文化的属性、社会的属性を問わず、いずれの調査被験者のグループにおいても、断り会話の構造がほぼ同一であった。具体的に言えば、断り会話の構造は「勧誘（依頼）話段」、「勧誘（依頼）・断りの交渉話段」、「終了部」からなっていることが本研究で検証された。

さらに、勧誘（依頼）話段において、「付随表現」が中心に使用され、勧誘・断り話段において、「間接的断り」が主に用いられ、最後の終了部において、「間接的断り」または「付随表現」が多く見られた。ゆえに、日中両言語行動を対照する際に、相違点のみならず、共通点にも目を向けることによって、新たな知見が得られる。

### 第2に、文化的属性による断り言語行動の差異

中国人と日本人とどちらが率直な話し方をするかと問われれば、中国人のほうが率直であると考えられる。しかし、本調査の結果によると、勧誘を断る場面では、中国語母語話者のほうが率直であった一方で、依頼を断る場面では、日本語母語話者のほうが、量的分析にしても、内容分析にしても、直接的な表現を多く使用した。場面によって、相反する言語行動のスタイルが本研究で観察された。換言すれば、場面の違いを考慮に入れないと、日本人のほうが曖昧であるのに対して、中国人のほうが率直であるというステレオタイプに陥りやすい。

### 第3に、社会的属性による断り言語行動の差異

意味公式の量的分析からすれば、中国語母語話者のほうでは社会人と学生の差がそれほど出なかったのに対して、日本語母語話者のほうでは社会的属性による差が顕著に見られた。とりわけ勧誘を断る場面では、学生のほうでは意味公式の数も種類も少なかったのに対して、社会人のほうでは{あいづち}をはじめとする「付随表現」、{詫び}などを含む「間接的断り」が、著しく多かった。そして、日本語母語話者の社会人と学生の{あいづち}の役割に対する意識が異なったという発見も得られた（cf. 8.1.1.1）。しかし、意味公式の内容分析からすれば、勧誘を断る場面において、中国語母語話者の社会人より学生のほうで「本音」を表す{不可}、「気持の表明」を表す{理由}が顕著に多用された。ゆえに、分析方法によって、異なった結論が導き出されたため、量的分析と内容分析を統合して、日中の断り言語行動をより包括的に比較できる。

## 9.2 今後の課題

本研究において、日中両言語の母語話者である社会人と学生を対象に、勧誘または依頼を断る言語行動を其々考察してきた。研究理論、研究方法、分析方法のいずれにおいても、残された課題を以下にまとめる。

第1に、本研究はBrown & Levinson (1987) ポライトネス理論を理論的枠組みとして、研究を進めてきたが、2.3.2.3の先行研究の概観で提示した龚萍(2005、2006)は、熊学亮(2003)の認知語用論の理論に基づき、文化、場面などのパラメータを問わず、中米双方の断り言語行為における認知モデルを探り出そうとする。龚萍(2005、2006)では、学生のみを対象とするDCTの調査方法を用いて、提出された認知モデルも不完全であるが、認知語用論に基づいた実証的研究は、新しい道を開いたという意味も認めざるを得ない。ゆえ

に、認知語用論に基づき、断り言語行動におけるプロトタイプを抽出しようとするのは、今後の大きな課題である。

第2に、本調査において、断り手のみに焦点を当て分析を行ってきたが、誘い手または頼み手と断り手の相互的評価を考察していない。宇佐美（2002⑦）は、B&Lのポライトネス理論の話し手のみに焦点を絞るという問題を解決するために、関連性における聞き手の立場にも立って、断り言語行動に見られる話し手と聞き手の相互的交渉を動的に、かつ実証的に考察すると提唱した。吉田（2010）の断りの指導の報告においても、授業後の感想に関するアンケートの中で、断り手だけでなく、勧誘者のほうに着目した意見やコメントが見られた。ちなみに、学習者が誘い側に立ち、相手の断りをどのように受け止めるかという考えも伺える（吉田 2010：9）。ゆえに、聞き手の談話に対する評価と話し手の自己評価が一致しているか否か、さらにコミュニケーションの効果も今後の課題の一つとする。

第3に、本研究では、性別による断り言語行動の異同を考察しなかったが、4.3.1の社会人の{不可}の内容分析で提示したように、社会人の日本語母語話者と日本語母語話者のいずれにおいても、「本音」を表す{不可}は全て女性の被験者に集中したという結果が見られた。ゆえに、今後、男女による断り言語行動に及ぼした影響も考察したいと考える。

第4に、本調査において、被験者は場面と被験者の属性によって、8つのグループに分かれて、合計80名であるが、各グループにおける被験者は10名のみであった。従って、本調査に基づいた結論を一般化としにくい。従って、今後調査対象の人数をさらに拡大する必要があると考える。

第5に、本研究においては、学習者を考察対象から除外したが、学習者を対象とする断り言語行動に関する先行研究が多く見られた。学習者に与えた影響では、L1がL2への「マイナス・トランスファー」(Beebe 他(1990)、生駒・志村(1993)、藤森(1994)、伊藤(2002a)、ルンティエラ(2004)など)と「プラス・トランスファー」(加納・梅(2002)など)、そしてL2のL1への逆行転移(蒙(2010b)、鈴木(2011)など)を含む転移、学習時間、目標言語の環境に滞在する時間((蒙(2010b)、鈴木(2011)など))、教科書(カノックワ(1995)と小野・劉(1997)など)などの要因が絡み合っている。ゆえに、今後学習者における断り言語行動も考察したい。ただし、岡崎(1995)、藤原(2004)のように、学習者の主体性を重んじて、学習者に情報を提示する研究立場を明確にする必要があると考える。

## 注

<sup>1</sup> 「意味公式」とは、自分の意思を表明するために用いる言語表現を、その意味内容によって分類したものである。いわゆる発話行為を分析する際の単位であるという任の説明は簡にして要を得ている（任 2004：16）。

<sup>2</sup> Austin(1962)は Locutionary act と Illocutionary act を区別しているが、Searle(1969)は Austin (1962) が述べた Locutionary act と Illocutionary act の区別を認めていないので、Illocutionary act のみを用いることにする。

<sup>3</sup> **speech acts** の **speech** は「言語」「発話」の両方を意味するため、どちらも使用可能で、意味的には同じである。

<sup>4</sup> 「非字義的言語行為」とは、話し手によって意図されたその発話の「第一義的発話内行為」(primary illocutionary act)が、その発話の文脈において、話し手が使用する文によって表現する字義通りの発話内行為と同じ出ない場合である。言い換えると、非字義的言語行為の遂行においては、その発話の字義通りの発話内行為のもつ発話内的力とは異なった発話内的力をもつ発話内行為が遂行されるのである（小泉 2001：96）。

<sup>5</sup> 山岡（2010：81）によると、日本語は敬語の体系が発達しており、英語におけるポライトネスに対応する日本語の言語現象は敬語だと誤解されたことである。Leech(1983)のポライトネスの原理（the politeness principle）が邦訳（池上・河上訳（1987））では「丁寧さの原理」と訳されたことも、そうした誤解を助長することとなった。

<sup>6</sup> 「ディスコース・ポライトネス」(DP と略す)とは、一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である（宇佐美 2002<sup>⑩</sup>：107）。

<sup>7</sup> 「なわ張り」という概念を言語学に取り入れる代表者は神尾（1990）である。神尾（1990）によると、情報のなわ張りに属する情報とは、話し手または聞き手が自分に帰属するものとみなす情報、即ち自分のものとみなす情報であると定義される（神尾 1990：41）。神尾（1990）はなわ張りの理論をもちいて、構文論を語用論的に検討した。

<sup>8</sup> Hill et al.（1986）で、次のように「わきまえ」を定義した。「社会的にこれはこういうものだとして認められているルールにほとんど自動的に従うことを意味し、それは言語行動についても非言語行動についても言えることであって、これを一言で言い直すと、期待されている基準に従うということである」。Hill 他（1986）は、「わきまえ」に対峙するポライトネスのタイプを「働きかけ」とした（井出 2006：115）。

<sup>9</sup> 断りの場合、例えば、依頼内容について、正直に嫌だと答えるか、適当な嘘を言うかという選択は、「並列的選択的な関係」にあたる。一方、断る際に依頼内容に対する態度表明とは別に、謝り方略は、ほかの方略と共に採用するという選択は、「統合的共起可能的な関係」である（森山 1990：60）。

<sup>10</sup> 尾崎（2006）は、断りの発話において、自分は断りを言っているのだということを相手に端的に示す部分は、「いりません」「結構です」「お断りします」「いいよ」「できません」「いやだよ」などの断りの述部であろうと述べている（尾崎 2006：101）。更に、断りの述部を①断りを明示的に伝える「断ワル型」、②可能性を否定する「不可能ダ型」、③拒絶的気分を示す「嫌ダ型」3つに分類している（p. 103）。

<sup>11</sup> 先行研究によると、言い訳、弁明、原因、説明などの言い方もある。本研究で、{理由}にする。

<sup>12</sup> 「話段」とは、従来の言語単位、つまり音素・形態素・文等の単位がただ単に組み合わせられたものではなく、コミュニケーションの過程を含む動的な単位である。ザトラウスキー（1993）では「段階」とも呼ばれる（ザトラウスキー 1993：85）。

<sup>13</sup> 「再勧誘」は、相手を一度誘ったが、その誘いを相手に躊躇されてもう一度誘ったり働きかけたりするなど何らかの行動を起こすことを指す（鄭 2013：29）

<sup>14</sup> 中国語で年齢を問わず、親しい男性の仲間の呼び方

<sup>15</sup> 勧誘話段における1回目の断りに至るまでの言語行動の有無をカウントするとき、{応答・返事}、{自己確認}、{婉曲的表現}など受身的表現と言語形式も「言語行動あり」にカウントする。

<sup>16</sup> 断り手が言語表現を発していない2組の内、1組の会話においては、断り手が言語表現を発してはいなかったが、誘い手の勧誘発話を聞きながら、ずっと頷きであいづちを打っている協力的な言語行動が見られた。ただし、勧誘発話の始めから最後まで終始頷きをしているため、カウントしにくい。

<sup>17</sup> 各話段における断り手の意味公式使用数及び平均値をカウントするとき、「応答・返事」、「自己確認」、「婉曲的表現」など受身的表現と言語形式を意味公式にカウントしない

<sup>18</sup> 本研究で平均値と割合の数値は、すべて小数点第3位を四捨五入して第2位まで記した。

<sup>19</sup> 日中の母語話者の被験者に対するフォローアップ・インタビューにおいては、送別会の日付を「明日」に設定することについて、不自然なことがあるかどうかについて、被験者に確認を求めた。日本側から「急すぎて、日常生活でありえない」と、中国側から「とくに不自然だと思わない」という2つの答えがそれぞれ得られた。

<sup>20</sup> 勧誘話段における1回目の断りに至るまでの言語行動の有無をカウントするとき、応答・返事、「自己確認」、「婉曲的表現」など受身的表現と言語形式も「言語表現あり」にカウントする

<sup>21</sup> {言いさし}、{相手を思い止まらせる試み}、{遺憾}、{保留}、{代案}の使用平均値が最も高くても、0.11以下であるため、考察対象外として、図4には示していない。

<sup>22</sup> {呼びかけ}、{ヘッジ}、{その他}の使用平均値が最も高くても、0.10以下であるため、考察対象外として、図5には示していない。

<sup>23</sup> {代案}、{条件提示}、{遺憾}、{言いさし}、{相手を思い止まらせる試み}、{原則的陳述}の使用平均値が高くても、0.10または0.10以下であるため、考察対象外として、図7には示していない。

<sup>24</sup> {肯定的表現}、{呼び掛け}の使用平均値が最も高くても、0.10以下であるため、考察対象外として、図7には示していない。

<sup>25</sup> 被験者のCC1女性が5名であり、被験者の50%を占める。

<sup>26</sup> JJ2の1回目の断りいたるまでの段階においては、断り手が言語行動を発していない13組のうち、9組の会話においては、断り手が言語表現を発してはいなかったが、頼み手の依頼発話を聞きながら、頷きであいづちを打っている協力的な言語行動が見られた。ただし、依頼発話の始めから最後までずっと頷きをしている被験者もいたため、断り言語行動の意味公式としてカウントしないことにした。

<sup>27</sup> {遺憾}、{言いさし}、{関係維持}、の使用平均値が最も高くても、0.1以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>28</sup> {励まし}、{その他}の使用平均値が最も高くても、0.1以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>29</sup> {言いさし}の使用平均値が高くても、0.10以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>30</sup> {肯定的表現}、{驚き}、{ヘッジ}、{共感}、{別れの挨拶}、の使用平均値が最も高くても、0.10以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>31</sup> 「具体的な理由+気持の表明」、「情報不足の理由+気持の表明」、「具体的な理由+情報不足の理由+気持の表明」の3つの展開パターンはJJ2とCC2いずれにおいても見られなかったため、表5-37にまとめない

<sup>32</sup> {条件提示}、{相手を思い止まらせる試み}、{保留}、{言いさし}の使用平均値が最も高くても、0.10以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>33</sup> {ヘッジ}、{肯定的表現}、{否定の前置き}の使用平均値が最も高くても、0.10以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

---

<sup>34</sup> {条件提示}、{保留}、{代案}の使用平均値が高くても、いずれの話段においても0.10以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>35</sup> {肯定的表現}、{否定の前置き}の使用平均値が最も高くても、0.10以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>36</sup> JJ3の3組みでは理由が1つも使用されなく、CC3の5組では理由が1つも使用されなかったため、理由の展開パターンを考察する際に、JJ3合計37組で、CC3で合計35組であった。

<sup>37</sup> {相手を思い止まらせる試み}、{保留}、{言いさし}、{原則的陳述}、の使用平均値が最も高くても、0.10以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>38</sup> {挨拶}（本節では、{困惑}と「その他」の使用平均値が最も高くても、0.10または0.10以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>39</sup> {相手を思い止まらせる試み}、{保留}、{言いさし}、の使用平均値が高くても、いずれの話段においても0.10または0.10以下であるため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>40</sup> {共感}の使用平均値が最も高くても、0.1であったため、考察対象外として、図には示していない。

<sup>41</sup> 本調査のロールプレイの設定の影響で嘘をついた理由の可能性が高い。

---

## 参考文献

### 和文文献

- 荒卷朋子 (1999) 「アメリカ人と日本人の断り表現の比較」『長崎大学留学生センター紀要』 7 pp. 105-137
- 池田優子 (2008) 「中級の口頭表現能力を伸ばす指導を考えるー「申し出」に対する学習者の断り表現と日本語母語話者の評価ー」『日本語と日本語教育』慶応義塾大学 日本語・日本文化教育センター紀要 36 pp. 115-151
- 池田優子 (2009) 「中級の口頭表現能力を伸ばす指導を考えるー学習者の断り表現における「理由」をめぐってー」『日本語と日本語教育』慶応義塾大学 日本語・日本文化教育センター紀要 37 pp. 155-175
- 池田優子 (2010) 「中級の口頭表現能力を伸ばす指導を考えるー学習者の断り表現における「理由」をめぐって (2)ー」『日本語と日本語教育』慶応義塾大学 日本語・日本文化教育センター紀要 pp. 55-71
- 生駒智子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー「断り」という発話行為について」『日本語教育』79 日本語教育学会 pp. 41-52.
- 井出祥子 (2006) 『わかまへの語用論』 大修館書店
- 稲井文 (2005) 「あいづちの心的効果について」『京都大学大学院教育学研科紀要』 51 pp. 218-231
- 稲垣 桂 (2005) 「ロールプレー対話及びメールにおける断り表現ー大学生の理由の述べ方を中心にー」 修士論文
- 宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論の展開①ー⑫」『月刊言語』 31 大修館書店
- 宇佐美まゆみ (2005) 「改訂版 : 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」 [www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/mojika.pdf](http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/mojika.pdf)
- 王先哲 (2013) 「日本語母語場面における非依頼者の断り行動に対する予測とその手がかりー中国人日本語学習者と日本語母語話者の認知の比較ー」『日本語教育』 155 日本語教



- 
- 育学会 pp. 142-158
- 大倉美和子 (2002) 「語用論研究と日本語教育—メキシコ人と日本人の「誘いを断る発話」—」 『対照研究と日本語教育 (日本語と外国語との対照研究)』 10 国立国語研究所 pp. 109-127
- 岡崎眸 (1995) 「日本語学習者における語用論上の転移再考」 『東京外国語大学論集』 50 pp. 97-109
- 岡田安代・杉本和子 (2001) 「外国人の断り行動と日本人の評価」 『愛知教育大学研究報告』 50 愛知教育大学 pp. 153-160
- 尾崎喜光 (2006) 「依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現」 『言語行動における「配慮」の諸相』 国立国語研究所 pp. 89-114
- 小野由美子・劉玉琴 (1997) 「日本語教科書における断り表現の取り扱い」 鳴門教育大学言語系 (国語) 教育講座 pp. 75-79
- 小野由美子・劉玉琴 (1998) 「異文化間のミスコミュニケーションに関する一考察—日・中母語話者の断り表現をめぐって」 『鳴門教育大学紀要』 13 鳴門教育大学 pp. 105-113
- 加納陸人・梅暁蓮 (2002) 「日中両国語におけるコミュニケーション・ギャップについての考察—断り表現を中心に—」 『言語と文化』 15 文教大学大学院言語文化研究科附属言語文化研究所 pp. 19-41.
- カノックワン・ラオハブラナキット (1995) 「日本語における『断り』—日本語教科書と実際の会話との比較—」 『日本語教育』 87 日本語教育学会 pp. 25-39
- カノックワン・ラオハブラナキット (1997) 「日本語学習者に見られる「断り」の表現—日本語母語話者と比べて—」 『日本語教育論集 世界の日本語教育』 7 国際交流基金日本語国際センター pp. 97-112.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』 大修館書店
- 元智恩 (2003) 「断わりとして用いられた「ノダ」—ポライトネスの観点から—」 『計量国語学』 24(1) 計量国語学会 pp. 1-18
- 元智恩 (2005) 「断りとして用いられた日韓両言語の「中途終了文」—ポライトネスの観点から—」 『日本語科学』 18 国立国語研究所『日本語科学』編集委員会 pp. 47-70
- 北尾健治・北尾 S キヤスリーン (1988) 「ポライトネス—人間関係を維持するコミュニケーション手段」 『日本語学』 7-3 明治書院 pp. 52-63
- 熊井浩子 (1992) 「外国人の待遇行動の分析 (2) —断りを中心に—」 『静岡大学教養部研究報告人文・社会科学部』 28 (2) 静岡大学教養部 pp. 1-40
- 倉本美喜子・大浜るい子 (2008) 「もう一つの勧誘行動—日本人学生による2次会への勧誘行為について—」 『日本語教育研究』 18 広島大学大学院教育学研究科 pp. 57-63
- 黒崎良昭 (1987) 「電話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」 『国語学』 日本語学会 150 pp. 109-122

- 
- 権英秀 (2009) 「日・韓両言語における「フェイス複合現象」—大学生の「断り」表現を中心に—」新潟大学 博士論文
- 小泉保編 (2001) 『入門語用論研究—理論と応用—』研究社 明治書院
- 小宮千鶴子 (1986) 「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『言語教育研究論叢』3 大東文化大学語学教育研究所 pp. 43-62
- 黄明淑 (2016) 「「誘い」談話における再勧誘の言語行動の特徴—中国語母語話者と日本語母語話者の比較—」『日本語教育』164 日本語教育学会 pp. 64-78
- 鮫島重喜 (1998) 「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程—中国語話者の「依頼」「断り」「謝罪」の場合—」『日本語教育』98 日本語教育学会 pp. 73-84.
- 施信余 (2007) 「「待遇コミュニケーション」における「依頼」に対する「断り」の研究：日台の言語行動の比較を中心に」早稲田大学 博士論文
- 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育—』スリーエーネットワーク
- 熊紅芝 (2008) 「日本語と中国語のあいづち表現形式についての比較—待遇性の観点からの一考察—」『中言語研究と日本語教育』創刊号 pp. 55-66
- 周升干 (2013) 「断る場面における詫び表現について—中国の日本語学習者と日本語母語話者を比較して—」『言語文化学研究』大阪府立大学 pp. 71-86
- 肖志、陳月吾 (2008) 「依頼に対する断り表現についての中日対照研究」『福井工業大学研究紀要』38 (第2部) 福井工業大学 pp. 133-140
- 新屋映子 (2003) 「配慮表現からみた日本語—縄張りを避けよう」『月刊日本語』16(7) アルク pp. 73-75
- 崔平 (2002) 「中国人と日本人の「断り表現」の相違について—依頼される場面をめぐって—」『日本語教育と異文化理解』1 愛知教育大学 pp. 10-18
- 杉戸清樹 (1987) 「発話の受けつぎ」『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相—座談資料の分析—』三省堂 pp. 68-106
- 鈴木恵理子 (2011) 「中国人日本語学習者の断りのストラテジー—ポライトネス理論の視点から—」東北大学 博士論文
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
- 鄭在恩 (2010) 「日韓母語話者と韓国人日本語学習者における再勧誘の「切り出し」の分析「躊躇の受け止め方と関連付けて—」『言語文化学会論集』35 pp. 3-22.
- 鄭在恩 (2013) 「日韓母語話者及び韓国人日本語学習者における「再勧誘」行動に関する語用論的研究」名古屋大学 博士論文
- 寺田裕子 (1993) 「「中間言語」とは何か—先行文献からの再考—」『日本語教育』81 日本語教育学会 pp. 31-42.

- 
- 長友和彦(1993)「日本語の中間言語研究」『日本語教育』 pp. 1-18
- 生駒智子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー「断り」という発話行為について」『日本語教育』 79 日本語教育学会 pp. 41-52.
- 西村史子(2007)「断りに用いられる言い訳の日英対照分析」『世界の日本語教育』 17 独立行政法人国際交流基金 pp. 93-112
- 任炫樹(2004)「日韓断り行動における言語・非言語ストラテジー」名古屋大学 博士論文
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子(1996)「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較—」『日本語教育』 88 pp. 128-139
- 馬場俊臣・禹永愛(1994)「日中両語の断り表現をめぐって」『北海道教育大学紀要(第1部 A)』 45 (1) 北海道教育大学 pp. 43-54
- 林宅男(2008)『談話分析のアプローチ—理論と実践—』 研究社
- 深田博己・宗近真裕子(2016)「承諾抵抗方略の使用に及ぼす間接的要求の効果」『対人コミュニケーション研究』 4 「対人コミュニケーション研究」編集委員会 pp. 19-34
- 藤森弘子(1994)「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー—『断り』行為の場合—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』 1 pp. 1-19.
- 藤森弘子(1995)「日本語学習者に見られる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—」『日本語教育』 87 日本語教育学会 pp. 79-90.
- 藤森弘子(1996)「関係修復の観点からみた「断り」の意味内容—日本語母語話者と中国人日本語母語話者の比較—」『大阪大学言語文化学』 5 pp. 5-17
- 藤原智栄美(2004)「日本語話者とインドネシア語話者の「断り」に関する研究」大阪大学 博士論文
- 藤原安佐、阿部仁美、大井裕子、椿原博子、吉田則子(2009)「日本語教育における配慮に関わる表現の指導」 108 北海道大学大学院教育学研究員紀要 pp. 85-98
- 文鐘蓮(2004)「断り表現における中日両言語の対照研究—意味公式の発現頻度をを中心に—」7 人間文化論叢 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 pp. 123-133
- 文鐘蓮(2007)「断り表現における日中対照研究」お茶の水女子大学 博士論文
- 彭飛(2004)『日本語の配慮表現に関する研究—中国語との比較研究における諸問題—』和泉書院
- 堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』 64 日本語教育学会 pp. 13-26.
- 堀口純子(1990)「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行」『日本語教育』 71 日本語教育学会 pp. 16-32.
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- ポリー・ザトラウスキー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』

---

くろしお出版

- 村山卷子 (1998) 「「断り」行為の日独比較-詫び表現、共感表現を中心に-」『筑波大学 地域研究』16 筑波大学 pp. 199-226.
- 水野康一 (2003) 「英語学習者の依頼表現の認知次元に関する考察」『教育学研究紀要』49 中国四国教育学会 pp. 621-627
- 水野義道 (1988) 「中国語のあいづち」『日本語学』明治書院 7(13) pp. 18-23
- メイナード・K・小泉 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 目黒秋子 (1996) 「「日本語の談話における間接的断り理解の課程-母語話者の認知の視点から-」」『東北大学文学部日本語学科論集』6 東北大学 pp. 105-116
- 蒙韞 (2010a) 「日中断りににおけるポライトネス・ストラテジーの一考察-日本人会社員と中国人会社員の比較を通して-」『異文化コミュニケーション研究』22 神田外語大学 pp. 1-27
- 蒙韞 (2010b) 「中国人日本語上級学習者の語用論的能力の習得について-依頼に対する「断り」行為において-」名古屋大学 博士論文
- 森山卓郎 (1990) 「「断り」の方略-対人関係調整とコミュニケーション」『月刊言語』19(8) 大修館書店 pp. 59-66.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹著 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現-日本語語用論入門-』明治書院
- 山口和代 (1997) 「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因-中国人及び台湾人留学生を対象として-」『日本語教育』93 日本語教育学会 pp. 38-60
- 横山杉子 (1993) 「日本語における、「日本人の日本人に対する断り」と「日本人のアメリカ人に対する断り」の比較-社会言語学のレベルのフォリナートーク-」『日本語教育』81 日本語教育学会 pp. 141-151
- 楊晶 (2001) 「電話会話で使用される中国人学習者の日本語の相づちについて-機能に着目した日本人との比較-」『日本語教育』111 pp. 46-55
- 楊恵芳 (2008) 「依頼表現のプロトタイプと語用論的な制約」『別府大学国語国文学』50 別府大学国語国文学会 pp. 1-26
- 吉井千明 (2009) 「断り表現-親しさの度合いに注目して-」『東京女子大学 言語文化研究』18 東京女子大学言語文化研究会 pp. 70-86
- 吉田好美 (2010) 「言い訳を使用した断り指導の実践報告」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』 pp. 1-10
- 吉田好美 (2015) 「勧誘に対する断りの研究 -日本語母語話者とマナト語母語話者の比較-」御茶ノ水大学 博士論文
- 李威 (1999) 「日・中・韓母語話者の『断り』行為の対照研究」日本語教育学会秋季大会：予稿集 日本語教育学会 pp. 181-186.

- 
- 李海燕 (2013) 『断り』表現の日中対照研究」東北大学 博士論文
- 劉玉琴・小野由美子(1996) 「中日母語話者の『断り』発話行為に見られる相違について」  
『教育学研究紀要』42(2) 中国四国教育学会 pp. 540-545
- 王書睿 (2015) 「断り」研究の概観と課題—日本語教育の視点から—『日本語文化研究』  
4 城西国際大学大学院紀要 pp. 81-95
- ワンウィモン・ルンティエラ (2004) 「タイ人日本語学習者の『提案に対する断り』表現に  
おける語用論的転移—タイ語と日本語の発話パターンの比較から」『日本語教育』121  
日本語教育学会 pp. 46-55

## 中文文献

- 龚萍 (2005) 拒绝语的 CX→Rr 认知模式分析 《国外外语教学》4 pp. 1-6
- 龚萍 (2006) 跨文化语境下拒绝语的 CX→Rr 认知模式 复旦大学 硕士论文
- 胡健、徐宏亮 (2007) 反馈语的特征与功能 《安徽大学学报哲学社会科学版》31(2) pp. 58-62
- 黄衍 (1987) 话轮替换系统 《外语教学与研究》69 pp. 16-23
- 匡小荣 (2000) 交谈中的附和现象 《修辞学习》99 pp. 18-20
- 马月兰 (1999) 从语篇表层谈中美拒绝策略 《齐齐哈尔大学学报》4 pp. 74-77
- 唐玲 (2004) 汉语间接拒绝言语行为的表层策略分析 《广西社会科学》10 pp. 117-119
- 王爱华 (2001) 英汉拒绝言语行为表达模式调查 《外语教学与研究》5 pp. 178-185
- 王静 (2012) 汉日拒绝策略理论与实证对比研究—以“请求—拒绝”会话结构位研究中心 《日  
语学习与研究》5 pp. 71-77
- 吴建设 (2003) 拒绝语的表达法 《四川外语学院学报》19(4) pp. 106-109
- 吴平 (2001) 汉语会话中的反馈信号 《当代语言学》3(2) pp. 119-126
- 熊学亮 (2003) 《语言学新解》上海:复旦大学出版社
- 于国栋 (2003) 支持性言语反馈的会话分析 《外国语》147 pp. 23-29

## 英文文献

- Austin, J.L. (1962) *How to do thing with words*. Cambridge: Harvard University Press (坂本  
百大訳 『言語と行為』大修館書店 1978)
- Beebe, L. M., Takahashi, T. & Uliss-Welts, R. (1990) Pragmatic Transfer in ESL Refusals. In  
Scarcella, R.C., & Anderson, E.S., & Krashen (Eds.) S.D., *Developing Communicative  
Competence in a Second Language*. New York: Newbury House. pp.55-73.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge:  
University Press. (田中典子監訳 『ポライトネス: 言語使用における、ある普遍現象』

---

研究社 2011)

Grice, H.P. (1975) Logic and conversation. In Cole, P., & Morgan(eds), J., *Syntax and semantics*. 3, Speech Acts. New York: Academic Press. pp.41-58.

Gu, Yueguo (1990) Politeness phenomena in modern Chinese, *Journal of Pragmatics* 14. pp237-257

Selinker, L. (1972) Interlanguage, *International Review of Applied Linguistics*, 10(3). pp.209-231.

Thomas, J (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London: Longman. (浅羽亮一監修 田中典子他訳『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味—』研究社 1998)

Matsumoto, Yoshiko (1988) Reexamination of the university of face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12. pp403-426

Leech, G.N. (1983) *Principles of pragmatics*. London: Longman.

## 謝辞

本研究を行うことにあたり、多くの方々からご指導、ご協力をいただきました。こころより感謝申し上げます。

まず、博士課程の5年間に渡って、研究においても生活においても、指導教官としてご指導、ご支援を賜りました城西国際大学人文科学研究科の綾部裕子教授に心より深く御礼申し上げます。語用論の理論をゼロから詳しく教えていただいたことに基づき、Brown and Levison (1987) のポライトネス理論に非常に関心を持ち、研究の方向性を決定づけました。データ収集の際に、ご支援、ご協力をいただきました。データを分析するにあたり、意味公式のコーディングを2回もチェックしていただきました。そして、研究に悩み苦しんだ時も、激励の言葉もいただきました。博士論文完成まで常に温かく見守るようなご支援と励ましをくださった綾部裕子教授には、本当にありがとうございます。

また、副査指導教官として非常に貴重なご意見をくださいました城西国際大学人文科学研究科の岡崎眸教授、大連外国語大学の陳岩教授にも感謝の意を表したいと思います。岡崎眸教授の持続可能性日本語教育のゼミを聴講させていただきましたことは大変な幸運でした。研究の立場、方法論などの面において、このゼミから示唆を大いにいただきました。プロスペクティクス試験と博士論文の審査を通じて、岡崎眸教授、陳岩教授から、先行研究、調査方法、論文の構成、結論の書き方などの面において、詳しいコメントをいただきまし

---

た。心より感謝したいと思います。

そして、博士課程への進学及び研究を大いに支援して下さった東北大学日本語学科の王秋菊教授、研究に関するご意見をくださった大連理工大学の杜鳳剛教授にも深く御礼を申し上げたいと思います。

調査を行うことにあたり、ご協力くださいました被験者にも、特にロールプレイ調査、アンケート調査とフォローアップ・インタビューを同時に受けた日中両言語母語話者であり、時間を割いていただきました80名の被験者に、深く感謝の意を捧げたいと思います。

パイロット調査の際に、城西国際大学人文科学研究科の原安江准教授から貴重なご意見もいただきました。データ収集にあたり、綾部裕子教授を始め、城西国際大学メディア学科の袁福芝教授、後楽寮の事務を担当されたさんなどの先生方は、被験者にご協力を呼びかけてくださいました。文字起こしにあたり、城西国際大学の卒業生である右田君、東北大学日本語言語学を専攻している大学院生方から、ご協力をいただきました。データ分析の際に、袁福芝教授から統計方法を熱心に教えていただきました。心より感謝を申し上げます。

研究を支えてくださった皆さんのおかげさまで、論文を完成させることに辿り着きました。

最後に、博士課程の進学に支持し、励ましてパワーをつけてくれました夫、いつも心の支えになってくれました家族に、感謝したいです。

## 付録資料

### 資料1 予備調査1の調査票

#### 断る場面の設定に関する予アンケート調査（社会人日本語版）

私は中国、東北大学で日本語教員をしています。私たちは生活している中で、人にものを頼んで、断られることがあります。私は、その断り方について、研究しています。論文の執筆に努めています。日常生活で最も遭遇しやすい断る場面を明らかにするために、日本の社会人の方々にご協力をお願いしています。このデータは論文以外には使用しませんので、どうぞよろしくお願いいたします。

王 書睿

年齢 \_\_\_\_\_ 性別 男 女

出身地 \_\_\_\_\_ 県（都・府・道）

---

職業          会社員      自営業      専門職      主婦      その他  
最終学歴   高卒      大卒      大卒以上

1. あなたが日常生活で最も遭遇しやすい断る場面を次の選択肢から、3つから5つまで選んでください。

- A 食事(飲み会)またはパーティーに誘われたが、断る。
- B 町内の祭りなどのイベントの手伝い、準備を頼まれたが、断る
- C 勤め先(アルバイト先)で上司からの残業を頼まれたが、断る。
- D 勤め先(アルバイト先)で同僚から仕事の手伝いを頼まれたが、断る。
- E 翻訳を頼まれたが、断る。
- F お金を貸してくれるよう頼まれたが、断る。
- G アンケート調査を依頼されたが、断る。
- H 友達から引越しの手伝いを頼まれたが、断る。
- I 友人から、子供の面倒を一日中見てくれるよう頼まれたが、断る
- J 旅行に出かける時に、現地での買い物を頼まれたが、断る。
- K 友人から、車を貸してほしいと頼まれたが、断る。

2. 上記の断る場面のほかに、遭遇しやすい断る場面があったら、下線部に書いてください。

---

---

### 断る場面の設定に関する予アンケート調査(学生日本語版)

私たちは生活している中で、人にものを頼んで、断られることがあります。私は、その断り方について、研究しています。論文の執筆に努めています。日常生活で最も遭遇しやすい断る場面を明らかにするために、日本の学生の方々にご協力をお願いしています。このデータは論文以外には使用しませんので、どうぞよろしく願いいたします。

王 書睿

年齢 \_\_\_\_\_ 性別    男    女  
出身地 \_\_\_\_\_ 県(都・府・道)    学年 \_\_\_\_\_ 年生



---

1. あなたが日常生活でよく出会う断る場面を次の選択肢から、3つから5つまで選んでください。

- A 食事(飲み会)またはパーティーに誘われたが、断る。
- B 学園祭の手伝いの準備を頼まれたが、断る。
- C アルバイト先で上司からの残業を頼まれたが、断る。
- D アルバイト先で同僚から仕事の手伝いを頼まれたが、断る。
- E クラスメイトからレポート(宿題)の手伝いを頼まれたが、断る。
- F 翻訳を頼まれたが、断る。
- G お金を貸してくれるよう頼まれたが、断る。
- H アンケート調査を依頼されたが、断る。
- I 友達から引越しの手伝いを頼まれたが、断る。
- J 旅行に出かける時に、現地での買い物を頼まれたが、断る。
- K 買い物に付き合っしてほしいと頼まれたが、断る。
- L パソコン、ビデオカメラなどを貸してくれるように頼まれたが、断る。

2. 上記の断る場面のほかに、最も遭遇しやすい断る場面があったら、下線部に書いてください。

---

---

### 关于“拒绝”场景设置的问卷调查 (社会人中国語版)

您好!我是中国东北大学的一名日语教师。这次以“拒绝”场面为题材,对中日两国语言进行对照研究,为明确日常生活中经常遇到的“拒绝”场景,现对30-70岁的中国社会人进行问卷调查。调查结果仅作为学术资料,不会外泄您的个人信息。谢谢各位合作!

王书睿

年齢 \_\_\_\_\_ 岁                      性别 男    女  
出生地 \_\_\_\_\_ 省(自治区/直辖市) \_\_\_\_\_ 市(区)  
职业 \_\_\_\_\_                      最终学历 \_\_\_\_\_



---

时最常见的“拒绝”场景。

- A 有人邀请你去吃饭（喝酒）或参加晚会，但你不想去。
- B 老师希望你帮忙学校组织的迎接新生工作或者其他学校、学院组织的活动，但你不帮忙。
- C 在打工（实习）时，上级要求你在休息日加班，但你不加班。
- D 在打工（实习）时，同事（同学）拜托你帮他（她）完成某一项工作，但你不帮忙。
- E 某同学拜托你帮他（她）完成作业（报告），但你不帮忙。
- F 有人拜托你在近期内帮忙翻译外国产品说明书或公司简介或申请留学资料等，但你不帮忙。
- G 朋友向你借钱，但你不借给他（她）。
- H 有人请你帮忙做问卷调查，但你不做。
- I 朋友要搬家，拜托你去帮忙，但你不帮。
- J 朋友拜托你在海外旅游或研修时帮他（她）买东西，你不帮。
- K 朋友请你陪他（她）逛街买东西，但你不陪。
- L 某同学向你借电脑或手机、相机等，由于里面存有重要资料，因此不想借给同学。

2. 除了上述场景，如果您在日常生活中还会经常遇到其他“拒绝”场景，请将其场景写下来。

---

---

## 資料2 本調査のロールプレイカード

社会人の誘いを断る場面のロールプレイカード（日本語版）

働きかける者のカード(Aさん)	インフォーマントのカード(Bさん)
-----------------	-------------------

<p>一週間後、友人が外国へ留学に行くことになったので、明日送別会をすることにしました。あなたは明らかに年齢が年下の（または世話をした／幼馴染の）親友 B さんを、その送別会に誘ってください。</p>	<p>あなたはお世話になったり、何か教えてもらった（または非常に高齢かつ／活動的な／在職時代社会的地位が高かったなど）親友 A さんに送別会に誘われます。あなたは、時間も空いていて、行ける状況にあるが、その送別会に行きたくありませんので、その誘いを断りたいと思います。これから A さんからの送別会の勧誘を断ってください。</p>
<p>一週間後、友人が外国へ留学に行くことになったので、明日送別会をすることにしました。あなたは明らかに年齢が年下（または世話をした／幼馴染の）、親しくない B さんを、その送別会に誘ってください。</p>	<p>あなたはお世話になったり、何か教えてもらった（または非常に高齢かつ／活動的な／在職時代社会的地位が高かったなど）、親しくない人 A さんに送別会に誘われます。あなたは、時間も空いていて、行ける状況にあるが、その送別会に行きたくありませんので、その誘いを断りたいと思います。これから A さんからの送別会の勧誘を断ってください。</p>
<p>一週間後、友人が外国へ留学に行くことになったので、明日送別会をすることにしました。あなたは親しい同年配（仲間意識を感じる人たち）の親友 B さんを、その送別会に誘ってください。</p>	<p>あなたは親しい同年配（仲間意識を感じる人たち）の親友 A さんに送別会に誘われます。あなたは、時間も空いていて、行ける状況にあるが、その送別会に行きたくありませんので、その誘いを断りたいと思います。これから A さんからの送別会の勧誘を断ってください。</p>
<p>一週間後、友人が外国へ留学に行くことになったので、明日送別会をすることにしました。あなたは親しくない同年配の B さんを、明日の送別会に誘ってください。</p>	<p>あなたは親しくない同年配 A さんに送別会に誘われます。あなたは、時間も空いていて、行ける状況にあるが、その送別会に行きたくありませんので、その誘いを断りたいと思います。これから A さんからの送別会の勧誘を断ってください。</p>

社会人の依頼を断る場面のロールプレイカード（日本語版）

働きかける者のカード(A さん)	インフォーマントのカード(B さん)
------------------	--------------------

<p>あなたは先週友達にお金を貸してしまったので、自分の来月の家賃を払えないことになった。家賃の払い期限を3日後に迫っている。親しい同年配（仲間意識を感じる人たち）のBさんにお金を貸してほしいと依頼します（その金額は30万円とします）。これからBさんに依頼してください。</p>	<p>あなたは親しい同年配（仲間意識を感じる人たち）のAさんからお金を貸してほしいと依頼されます（その金額は30万円とします）。あなたは能力的にお金を貸すことが可能であるが、その依頼を引き受けたくありません。これからAさんからの借金の依頼を断ってください。</p>
<p>あなたは先週友達にお金を貸してしまったので、自分の来月の家賃を払えないことになった。家賃の払い期限を3日後に迫っている。親しくない同年配のBさんにお金を貸してほしいと依頼します（その金額は30万円とします）。これからBさんに依頼してください。</p>	<p>あなたは親しくない同年配のAさんからお金を貸してほしいと依頼されます（その金額は30万円とします）。あなたは能力的にお金を貸すことが可能であるが、その依頼を引き受けたくありません。これからAさんからの借金の依頼を断ってください。</p>
<p>あなたは先週友達にお金を貸してしまったので、自分の来月の家賃を払えないことになった。家賃の払い期限を3日後に迫っている。お世話になったり、何か教えてもらったりした（または非常に高齢かつ／活動的な／在職時代社会的地位が高かったなど）親友Bさんにお金を貸してほしいと依頼します（その金額は30万円とします）。これからBさんに依頼してください。</p>	<p>あなたは明らかに年齢が年下の（または世話をした／幼馴染の）親友Aさんからお金を貸してほしいと依頼されます（その金額は30万円とします）。あなたは能力的にお金を貸すことが可能であるが、その依頼を引き受けたくありません。これからAさんからの借金の依頼を断ってください。</p>
<p>あなたは先週友達にお金を貸してしまったので、自分の来月の家賃を払えないことになった。家賃の払い期限を3日後に迫っている。お世話になったり、何か教えてもらったりした（または非常に高齢かつ／活動的な／在職時代社会的地位が高かったなど）親しくないBさんにお金を貸してほしいと依頼します（その金額は30万円とします）。これからBさんに依頼してください。</p>	<p>あなたは明らかに年齢が年下（または世話をした／幼馴染の）親しくないAさんからお金を貸してほしいと依頼されます（その金額は30万円とします）。あなたは能力的にお金を貸すことが可能であるが、その依頼を引き受けたくありません。これからAさんからの借金の依頼を断ってください。</p>

学生の誘いを断る場面のロールプレイカード（日本語版）

働きかける者のカード(Aさん)	インフォーマントのカード(Bさん)
一週間後、友人が外国へ留学に行くことになったので、明日送別会をすることにしました。あなたは親しい後輩Bさんを、その送別会に誘ってください。	あなたは親しい先輩Aさんに送別会に誘われます。あなたは、時間も空いていて、行ける状況にあるが、その送別会に行きたくありませんので、その誘いを断りたいと思います。これからAさんからの送別会の勧誘を断ってください。
一週間後、友人が外国へ留学に行くことになったので、明日送別会をすることにしました。あなたは親しくない後輩Bさんを、その送別会に誘ってください。	あなたは親しくない先輩Aさんに送別会に誘われます。あなたは、時間も空いていて、行ける状況にあるが、その送別会に行きたくありませんので、その誘いを断りたいと思います。これからAさんからの送別会の勧誘を断ってください。
一週間後、友人が外国へ留学に行くことになったので、明日送別会をすることにしました。あなたは親しい同級生Bさんを、その送別会に誘ってください。	あなたは親しい同級生Aさんに送別会に誘われます。あなたは、時間も空いていて、行ける状況にあるが、その送別会に行きたくありませんので、その誘いを断りたいと思います。これからAさんからの送別会の勧誘を断ってください。
一週間後、友人が外国へ留学に行くことになったので、明日送別会をすることにしました。あなたは親しくない同級生Bさんを、明日の送別会に誘ってください。	あなたは親しくない同級生Aさんに送別会に誘われます。あなたは、時間も空いていて、行ける状況にあるが、その送別会に行きたくありませんので、その誘いを断りたいと思います。これからAさんからの送別会の勧誘を断ってください。

学生の依頼を断る場面のロールプレイカード（日本語版）

働きかける者のカード(Aさん)	インフォーマントのカード(Bさん)
あなたは先週友達にお金を貸してしまったので、自分の来月の家賃を払えないことになった。家賃の払い期限を3日後に迫っているので、親しい同級生Bさんにお金を貸してほしいと依頼します（その金額は3万円とします）。これからBさんに依頼してください。	あなたは親しい同級生Aさんからお金を貸してほしいと依頼されます（その金額は3万円とします）。あなたは能力的にお金を貸すことが可能であるが、その依頼を引き受けたくありません。これからAさんからの借金の依頼を断ってください。

<p>あなたは先週友達にお金を貸してしまったので、自分の来月の家賃を払えないことになった。家賃の払い期限を3日後に迫っている。親しくない同級生Bさんにお金を貸してほしいと依頼します（その金額は3万円とします）。これからBさんに依頼してください。</p>	<p>あなたは親しくない同級生Aさんからお金を貸してほしいと依頼されます（その金額は3万円とします）。あなたは能力的にお金を貸すことが可能であるが、その依頼を引き受けたくありません。これからAさんからの借金の依頼を断ってください。</p>
<p>あなたは先週友達にお金を貸してしまったので、自分の来月の家賃を払えないことになった。家賃の払い期限を3日後に迫っている。親しい先輩Bさんにお金を貸してほしいと依頼します（その金額は3万円とします）。これからBさんに依頼してください。</p>	<p>あなたは親しい先輩Aさんからお金を貸してほしいと依頼されます（その金額は3万円とします）。あなたは能力的にお金を貸すことが可能であるが、その依頼を引き受けたくありません。これからAさんからの借金の依頼を断ってください。</p>
<p>あなたは先週友達にお金を貸してしまったので、自分の来月の家賃を払えないことになった。家賃の払い期限を3日後に迫っている。親しくない先輩Bさんにお金を貸してほしいと依頼します（その金額は3万円とします）。これからBさんに依頼してください。</p>	<p>あなたは親しくない先輩Aさんからお金を貸してほしいと依頼されます（その金額は3万円とします）。あなたは能力的にお金を貸すことが可能であるが、その依頼を引き受けたくありません。これからAさんからの借金の依頼を断ってください。</p>

社会人の勧誘を断る場面のロールプレイカード（中国語版）

働きかける者のカード(Aさん)	インフォーマントのカード(Bさん)
<p>一周后朋友C将要到外地工作或生活，为此想在明天为朋友C举办一个欢送会。请你邀请和你关系较熟、比你年龄小（或者你平时经常关照过的朋友、或者职务比你低、或者晚辈）的B参加欢送会。</p>	<p>和你关系较熟、年龄比你大（或者平常经常给予你照顾、或者传授给你知识及技能、或者职务比你高、或者长辈）的朋友A邀请你参加明天为朋友C举办的欢送会。虽然你明天有时间去参加欢送会，但是你不想去，为此需要拒绝对方的邀请。请你拒绝A的邀请。</p>
<p>一周后朋友C将要到外地工作或生活，为此想在明天为朋友C举办一个欢送会。请你邀请和你关系不太熟、比你年龄小（或者你平时经常关照过的朋友、或者职务比你低、或者晚辈）的朋友B参加欢送会。</p>	<p>和你关系不太熟、年龄比你大（或者平常经常给予你照顾、或者传授给你知识及技能、或者职务比你高、或者长辈）的朋友A邀请你参加明天为朋友C举办的欢送会。虽然你明天有时间去参加欢送会，但是你不想去，为此需要拒绝对方的邀请。请你拒绝A的邀请。</p>

一周后朋友 C 将要到外地工作或生活，为此想在明天为朋友 C 举办一个欢送会。请你邀请和你关系较熟、并且年龄相仿的朋友 B 参加欢送会。	和你关系较熟、并且年龄相仿的朋友 A 邀请你参加明天晚上为朋友 C 举办的欢送会。虽然你明天有时间去参加欢送会，但是你不想去，为此需要拒绝对方的邀请。请你拒绝 A 的邀请。
一周后朋友 C 将要到外地工作或生活，为此想在明天为朋友 C 举办一个欢送会。请你邀请和你关系不太熟、但年龄相仿的朋友 B 参加欢送会。	和你关系不太熟、但年龄相仿的朋友 A 邀请你参加明天晚上为朋友 C 举办的欢送会。虽然你明天有时间去参加欢送会，但是你不想去，为此需要拒绝对方的邀请。请你拒绝 A 的邀请。

社会人の依頼を断る場面のロールプレイカード（中国語版）

働きかける者のカード(Aさん)	インフォーマントのカード(Bさん)
你在近期要贷款买一套房子，但还差 2 万元交首付，离交房款期限只剩一周时间。为此，请向 B 借钱，假设 B 和你关系较熟、并且和你年龄或者职务或者社会地位相仿。	和你关系较熟、而且年龄相仿的朋友 A 向你借钱（假设钱的金额是 2 万元）。虽然你在能力上是可以借给 A 钱的，但是你不想把钱借给他（她）。请你拒绝 A 的借钱。
你在近期要贷款买一套房子，但还差 2 万元交首付，离交房款期限只剩一周时间。为此，请向 B 借钱，假设 B 和你关系不太熟、但和你年龄或者职务或者社会地位相仿。	和你关系不太熟、但年龄相仿的 A 向你借钱（假设钱的金额是 2 万元）。虽然你在能力上是可以借给 A 钱的，但是你不想把钱借给他（她）。请你拒绝 A 的借钱。
你在近期要贷款买一套房子，但还差 2 万元交首付，离交房款期限只剩一周时间。为此，请向 B 借钱，假设 B 和你关系较熟、比你年龄大（或者平常经常给予你照顾、或者传授给你知识及技能、或者职务比你高、或者长辈）。	和你关系较熟、比你年龄小（或者你平时经常关照过的朋友、或者职务比你低、或者晚辈）的朋友 A 向你借钱（假设钱的金额是 2 万元）。虽然你在能力上是可以借给 A 钱的，但是你不想把钱借给他（她）。请你拒绝 A 的借钱。
你在近期要贷款买一套房子，但还差 2 万元交首付，离交房款期限只剩一周时间。为此，请向 B 借钱，假设 B 和你关系不太熟、比你年龄大（或者平常经常给予你照顾、或者传授给你知识及技能、或者职务比你高、或者长辈）。	和你关系较熟、比你年龄小（或者你平时经常关照过的朋友、或者职务比你低、或者晚辈）的 A 向你借钱（假设钱的金额是 2 万元）。虽然你在能力上是可以借给 A 钱的，但是你不想把钱借给他（她）。请你拒绝 A 的借钱。

学生の勧誘を断る場面のロールプレイカード（中国語版）

働きかける者のカード(Aさん)	インフォーマントのカード(Bさん)
-----------------	-------------------



一周后朋友 C 将要到外国研修一年，为此想在明天为朋友 C 举办一个欢送会。请你邀请和你关系较熟的学弟（学妹）B 参加欢送会。	和你关系较熟的学长 A 邀请你参加明天为朋友 C 举办的欢送会。虽然你明天有时间去参加欢送会，但是你不想去，为此需要拒绝对方的邀请。请你拒绝 A 的邀请。
一周后朋友 C 将要到外国研修一年，为此想在明天为朋友 C 举办一个欢送会。请你邀请和你关系不太熟的学弟（学妹）B 参加欢送会。	和你关系不太熟的学长 A 邀请你参加明天为朋友 C 举办的欢送会。虽然你明天有时间去参加欢送会，但是你不想去，为此需要拒绝对方的邀请。请你拒绝 A 的邀请。
一周后朋友 C 将要到外国研修一年，为此想在明天为朋友 C 举办一个欢送会。请你邀请和你关系较熟的同年级同学 B 参加欢送会。	和你关系较熟的同年级同学 A 邀请你参加明天为朋友 C 举办的欢送会。虽然你明天有时间去参加欢送会，但是你不想去，为此需要拒绝对方的邀请。请你拒绝 A 的邀请。
一周后朋友 C 将要到外国研修一年，为此想在明天为朋友 C 举办一个欢送会。请你邀请和你关系不太熟的同年级同学 B 参加欢送会。	和你关系不太熟的同年级同学 A 邀请你参加明天为朋友 C 举办的欢送会。虽然你明天有时间去参加欢送会，但是你不想去，为此需要拒绝对方的邀请。请你拒绝 A 的邀请。

学生の依頼を断る側のロールプレイカード（中国語版）

働きかける者のカード(Aさん)	インフォーマントのカード(Bさん)
由于你家里有事，已拖欠学费几个月。至今为止，离最后交付学费期限还有一周时间，但还差一半（金额为 2500 元）的学费尚未凑齐。为此，请你向同学 B 借钱，假设 B 是和你关系较熟的同年级同学。	和你关系较熟的同年级同学 A 由于家里有事交不上学费，并已拖欠几个月，为此向你借钱（金额为 2500 元）。虽然你在能力上是可以借给 A 钱的，但由于各种原因不想借钱给他（她）。请你拒绝 A 的借钱。
由于你家里有事，已拖欠学费几个月。至今为止，离最后交付学费期限还有一周时间，但还差一半（金额为 2500 元）的学费尚未凑齐。为此，请你向同学 B 借钱，假设 B 是和你关系不太熟的同年级同学。	和你关系不太熟的同年级同学 A 由于家里有事交不上学费，并已拖欠几个月，为此向你借钱（金额为 2500 元）。虽然你在能力上是可以借给 A 钱的，但由于各种原因不想借钱给他（她）。请你拒绝 A 的借钱。
由于你家里有事，已拖欠学费几个月。至今为止，离最后交付学费期限还有一周时间，但还差一半（金额为 2500 元）的学费尚未凑齐。为此，请你向同学 B 借钱，假设 B 是和你关系较熟的学长。	和你关系较熟的学弟（学妹）A 由于家里有事交不上学费，并已拖欠几个月，为此向你借钱（金额为 2500 元）。虽然你在能力上是可以借给 A 钱的，但由于各种原因不想借钱给他（她）。请你拒绝 A 的借钱。

---

由于你家里有事，已拖欠学费几个月。至今为止，离最后交付学费期限还有一周时间，但还差一半（金额为 2500 元）的学费尚未凑齐。为此，请你向同学 B 借钱，假设 B 是和你关系不太熟的学长。

和你关系不太熟的学弟（学妹）A 由于家里有事交不上学费，并已拖欠几个月，为此向你借钱（金额为 2500 元）。虽然你在能力上是可以借给 A 钱的，但由于各种原因不想借钱给他（她）。请你拒绝 A 的借钱。